

松原市

## 新 堂 遺 跡

松原市新堂4丁目土地区画整理事業に伴う  
新堂遺跡(E 7-1-61)発掘調査報告書

2020年6月

松 原 市 教 育 委 員 会  
公益財團法人 大阪府文化財センター



松原市

# 新 堂 遺 跡

松原市新堂4丁目土地区画整理事業に伴う  
新堂遺跡(E 7-1-61)発掘調査報告書

松 原 市 教 育 委 員 会  
公益財団法人 大阪府文化財センター





1. 新堂遺跡Ⅰ区垂直写真

卷頭写真図版 2



1. 新堂遺跡II区垂直写真



1. I-b 区竪穴建物（南から）



2. I-c 区全景（北西から）

卷頭写真図版 4



1. II-c 区流路 S0034（南東から）



2. II-d 区流路 S0034（北西から）

# 序 文

松原市は、大阪の中央部に位置し、北を大阪市、南と西は堺市に接するまちで、中高野街道・下高野街道・竹内街道・長尾街道等の古道や西名阪自動車道・近畿自動車道・阪和自動車道・阪神高速道路・国道309号・大阪中央環状線等が縦横に走り、古来より南大阪における交通の要衝として発展を続けてまいりました。

市内各所には、地域の歴史を物語る寺社や古民家、全国5番目の大きさを誇る河内大塚山古墳、反正天皇宮跡の伝承地、梵鐘づくり等を担った河内銅物師の工房跡等が所在しており、様々な歴史や文化遺産が受け継がれてきました。

本書は、国道309号に隣接する新堂地区のまちづくりの一環として行われる松原市新堂4丁目土地区画整理事業に先立つ発掘調査の成果報告書です。

新堂遺跡では、これまで弥生時代の遺物や古代の道路跡、中世の生活跡が確認されていましたが、今回の調査では、新たに弥生時代末から古墳時代初めの竪穴建物群や多数の遺物が出土する等新堂遺跡についてより一層明らかにする貴重な成果を得ることができました。

本書により、ふるさと松原の歴史について理解を深めていただければ幸甚です。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたり、事業者である松原市新堂4丁目土地区画整理組合をはじめ地権者・関係者の皆様には、ご理解と多大なご協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。また、大阪府教育庁並びに公益財団法人大阪府文化財センターには、ご指導・ご協力いただきましたことに感謝申し上げます。

令和2年6月

松原市教育長  
美濃 亮



# 序 文

新堂遺跡は、大阪府の中央部にあたる松原市の中央から南に位置する、旧石器時代から近世の遺跡です。

遺跡範囲は東西約 1.0km、南北約 0.9km で、東西に長い長方形の形です。隣接する遺跡として、北には弥生時代末から古墳時代初めの標式土器で知られる上田町遺跡、南は河内鍋物師の工房址で知られる岡遺跡があります。また、新堂遺跡の北には飛鳥時代から中世の丹比大溝が通っており、北東には大塚山古墳をはじめとする古墳群の存在が知られていることから、古くから人々が生活し栄えていた地域と考えられます。ただし、新堂遺跡はこれまでの調査では、弥生時代から古墳時代の流路等がみつかっていますが、小規模な調査が多く遺跡全体の性格は明確になっていませんでした。

ところが、新堂遺跡の西側を幹線道路である国道 309 号が通っており、利便性も高いことから近年になって沿道の新堂 4 丁目の都市的土地区画整理事業の機運が高まり、土地区画整理事業が行われることとなりました。土地区画整理事業の範囲は約 10 ヘクタールという広大な面積で、その一部は新堂遺跡の範囲に含まれていることがこれまでの発掘調査や確認試掘調査から判りました。

そこで、事業地内の大きく北と南の二箇所を発掘調査した結果、北側では弥生時代後期から古墳時代初めを主とする竪穴建物や井戸、溝、土坑等が多数発見され、南側では蛇行しながら流れる河川等がみつかりました。遺物も旧石器時代から弥生時代の石器、縄文土器、弥生時代中期から古墳時代初めの土器等が多数みつかり、この地域で遙か昔から人々が活発に生活していたことが明らかとなりました。

最後になりましたが、発掘調査にあたって、松原市新堂 4 丁目土地区画整理事業組合、大阪府教育厅、松原市教育委員会をはじめとする関係各位より多大なご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

今後とも埋蔵文化財調査へのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

令和 2 年 6 月

公益財團法人 大阪府文化財センター  
理事長 坂井 秀弥



## 例　　言

1. 本書は、松原市新堂4丁目に所在する新堂遺跡（調査名：E 7-1-61）の発掘調査報告書である。
2. 調査は、株式会社島田組の委託を受け、松原市教育委員会の指導のもと、公益財團法人大阪府文化財センターが実施した。
3. 現地調査及び遺物整理に関わる受託契約と契約期間は以下のとおりである。

委託事業契約名：松原市新堂4丁目土地区画整理事業に伴う新堂遺跡発掘調査

委託契約期間：平成30年9月3日～令和2年6月30日

現地調査期間：平成30年9月3日～令和元年6月30日

整理期間：令和元年7月1日～令和2年6月30日

4. 本調査にかかる実施体制は以下のとおりである。

松原市教育委員会

〔平成30・令和元年度〕

教育委員会事務局 教育総務部 文化財課

課長 芝田和也、係長 大矢祐司、係員 横木規秀

〔令和2年度〕

教育委員会事務局 教育総務部 文化財課

教育総務部次長兼文化財課長 田中修一朗、係長 大矢祐司、係員 横木規秀、芝田和也

公益財團法人大阪府文化財センター

〔平成30年度〕

事務局次長兼調整課長 岡本茂史、調査課長 三好孝一、

調査課長補佐 亀井聰、主査 川瀬貴子

〔令和元・2年度〕

事務局次長兼調整課長 岡本茂史、調査課長 岡戸哲紀、

調査課長補佐 佐伯博光、主査 川瀬貴子

5. 遺構写真撮影は川瀬が、遺物写真撮影は中部調査事務所写真室が行った。

6. 花粉分析は文化財調査コンサルタント株式会社に委託した。松原市教育委員会が同社に委託した珪藻分析や種実同定と合わせて第4章第2節に、松田順一郎氏（関西大学）に依頼した地形・地質に関する考察を第4章第1節に掲載した。

7. 調査の実施にあたっては、以下の諸機関並びに諸氏にご指導・ご教示・ご協力を賜った。記して感謝の意を表す（順不同・所属機関毎・敬称略）。

松原市新堂4丁目土地区画整理組合、大阪府教育庁、戸田建設株式会社大阪支店、

岩手大学 佐藤由紀男、兵庫県立考古博物館 上田健太郎

8. 本書の執筆・編集は川瀬が行った。

9. 出土遺物並びに実測図、写真等の各種資料は、松原市教育委員会において保管している。

## 凡　　例

1. 遺構図及び断面図に示した標高は、東京湾平均海面（T.P.）を使用している。
2. 座標値は世界測地系（測地成果 2011）による平面直角座標系第VI系に基づき表示し、単位はすべてmである。
3. 全体図及び遺構実測図の方位は、いずれも座標北を示す。なお、座標北を基準とした場合、磁北は西に $7^{\circ}3'26''$ 、真北は東に $0^{\circ}15'34''$ 振っている。
4. 現地調査及び遺物整理に関しては、『松原市教育委員会 発掘調査取扱い基準』及び『(財)大阪府文化財センター 遺跡調査基本マニュアル』2010に準拠した。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2008年度版 農林水産省農林水産技術会議事務所監修・財団法人日本色彩研究所色票監修 日本色研事業株式会社発行を用い、記号、土色、土質の順に記載した。
6. 遺構番号は、遺構の種類に関わらずS0001からの通しで付した。表記方法は「遺構種類-遺構番号」とした（表記例：流路S0034）。ただし、複数の遺構の集合体である掘立柱建物や竪穴建物等はそれとは別に遺構番号を付し、表記方法は「遺構名-遺構番号」とした。整理作業では基本的に現地調査時の遺構番号をそのまま使用したが、複数の調査区で検出された遺構については、一部整理、統一した。（表記例：竪穴建物1）
7. 遺構図における断面位置は、図面上に「←」で示した。なお、遺構が密集している箇所では図面が煩雑になるため「←」は示さず断面図に方位を記入している。
8. 遺構図の縮尺については、全体図を200分の1・250分の1・300分の1・400分の1とした。遺構については竪穴建物や掘立柱建物は40分の1・50分の1・60分の1、その他小振りの遺構図・断面図については10分の1・20分の1・40分の1として掲載したが、一部遺構の規模に即した縮尺とした。また、遺物実測図の縮尺については、土器が4分の1、石器が3分の2もしくは2分の1を原則とするが、石製品等で小形のものは2分の1で掲載する等、遺物の大きさに即した縮尺とした。各図面にスケールを付しているので参照されたい。また、写真図版の遺物は縮尺を統一していない。
9. 遺物実測図のうち、須恵器は断面を黒塗りで表現した。それ以外の遺物は断面白抜きである。
10. 本書に掲載した遺物には通し番号を付しており、これは本文・挿図・写真図版とも一致する。

# 目 次

卷頭図版

序 文

例 言

凡 例

目 次

第1章 調査の経緯と方法	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査・整理の方法	4
第2章 遺跡の位置と環境	9
第1節 地理的環境	9
第2節 歴史的環境	9
第3章 調査成果	13
第1節 基本層序	13
第2節 I区の遺構と遺物	19
(1) 概要	19
(2) I区の遺構	19
(3) I区の遺物	57
第3節 II区の遺構と遺物	66
(1) 概要	66
(2) II区の遺構	69
(3) II区の遺物	90
第4章 自然科学分析	97
第1節 新堂遺跡の地形・地質条件の検討	97
第2節 新堂遺跡の自然科学分析	103
第5章 総括	117
第1節 新堂遺跡の遺構について	117
第2節 新堂遺跡の遺物について	119
遺物観察表	121 ~ 128
写真図版	
抄 錄	
奥 付	

## 挿図目次

図 1 遺跡位置図	1	図 31 土坑 S0620・S0627・S0629 平・断面図	51
図 2 調査区位置図	3	図 32 I-c 区用水路以東部遺構断面図(1)	52
図 3 地区割図(1)	4	図 33 I-c 区用水路以東部遺構断面図(2)	53
図 4 地区割図(2)	5	図 34 I-c 区用水路以東部遺構断面図(3)	54
図 5 周辺遺跡図	10	図 35 I-c 区用水路以西部遺構断面図(1)	55
図 6 I 区基本層序模式図	15	図 36 I-c 区用水路以西部遺構断面図(2)	56
図 7 II 区基本層序模式図	16	図 37 I-a・I-b 区出土遺物実測図	58
図 8 I 区全体平面図	20	図 38 I-c 区出土遺物実測図(1)	60
図 9 I-a・b 区平面図	21・22	図 39 I-c 区出土遺物実測図(2)	61
図 10 I-a 区遺構断面図	23	図 40 I-b・I-c 区包含層出土遺物実測図	62
図 11 竪穴建物 1 平・断面図	24	図 41 I 区出土石器・石製品実測図(1)	63
図 12 竪穴建物 2 平・断面図	26	図 42 I 区出土石器・石製品実測図(2)	64
図 13 竪穴建物 2 内遺構断面図	27	図 43 I 区出土石器・石製品実測図(3)	65
図 14 竪穴建物 3 平・断面図	28	図 44 II 区全体平面図	67・68
図 15 掘立柱建物 1 平・断面図	29	図 45 流路 S0034 断面図(1)	70
図 16 井戸 S0155・S0368・S0447 平・断面図	30	図 46 流路 S0034 断面図(2)	71
図 17 溝 S0455・土坑 S0369 遺物出土状況図	32	図 47 溝 S0030 断面図	72
図 18 I-b 区用水路以東部遺構断面図	33	図 48 II-a 区平面図	73
図 19 I-b 区用水路以西部遺構断面図(1)	34	図 49 集石遺構 S0063 平・断面図	74
図 20 I-b 区用水路以西部遺構断面図(2)	35	図 50 II-a 区遺構断面図	75
図 21 I-b 区用水路以西部遺構断面図(3)	36	図 51 II-b 区平面図	76
図 22 I-c 区平面図	39・40	図 52 II-b 区遺構断面図	78
図 23 竪穴建物 4 平・断面図	41	図 53 II-b 区深掘トレンチ平面図	79
図 24 竪穴建物 4 内遺構断面図	42	図 54 II-b 区土器群 A 出土状況図	80
図 25 竪穴建物 5 平・断面図、竪穴建物 5 内遺構 断面図	43	図 55 II-b 区土器群 B 出土状況図	80
図 26 竪穴建物 6 平・断面図	45	図 56 II-b 区土器群 C 出土状況図	81
図 27 竪穴建物 6 内遺構断面図	46	図 57 II-c 区平面図	83
図 28 井戸 S0637・土坑 S0638・井戸 S0674 平・断面図	47	出土状況図	84
図 29 土坑 S0490・S0756 遺物出土状況図	48		
図 30 土坑 S0591・S0584・S0580・S0590 ・S0608 平・断面図	50		

図 59 II-c 区遺構断面図	85	図 75 調査区の配置 (試料採取地点)	103
図 60 II-d 区平面図	86	図 76 I-b 区拡張部平面図	103
図 61 建物状遺構 S0908 平・断面図	87	図 77 S0455 断面図 (試料採取位置)	103
図 62 挖立柱建物 2 平・断面図	88	図 78 I-c 区平面図 (試料採取地点)	104
図 63 II-d 区遺構断面図	89	図 79 S0674 断面図 (試料採取位置)	104
図 64 流路 S0034 出土遺物実測図	91	図 80 S0677 断面図 (試料採取位置)	104
図 65 II-a 区出土遺物実測図	92	図 81 II-b 区平面図 (試料採取位置)	104
図 66 II-b・II-c 区出土遺物実測図	93	図 82 II-b 区西壁断面サンプル採取地点	104
図 67 II-d 区出土遺物実測図	94	図 83 II-b 区拡張トレンチ C 模式柱状図	105
図 68 II 区出土石器物実測図	95	図 84 I-b 区拡張部 S0455 の花粉ダイアグラム	106
図 69 新堂遺跡とその周辺の地形分類図	98		
図 70 新堂遺跡周辺の西除川をはさむ地形面の横 断高度分布図	99	図 85 I-c 区 S0674 の花粉ダイアグラム	106
図 71 新堂遺跡調査地周辺の数値地図標高データ に基づくグレーマップ	100	図 86 I-c 区 S0677 の花粉ダイアグラム	106
図 72 II 区拡張トレンチの柱状断面図と新堂遺 跡調査地のボーリング柱状図	101	図 87 II-b 区西壁断面の花粉ダイアグラム	106
図 73 新堂遺跡調査 II 区拡張トレンチ北壁断面 の合成写真	102	図 88 II-b 区拡張トレンチ C の花粉ダイアグラム	107
図 74 新堂遺跡調査区 I 区西断面下層調査トレン チに見られる座屈・衝上とせん断帶	102	図 89 松原市内花粉分析地点	110
		図 90 植珪ダイアグラム (西壁断面)	112
		図 91 植珪ダイアグラム (拡張トレンチ C)	112

## 写 真 目 次

写真 1 花粉分析顕微鏡写真	116
----------------	-----

## 表 目 次

表 1 微化石概査結果	105	表 4 葉 (種実) 同定結果	112
表 2 花粉組成表 (1)	107	表 5 土器・土製品観察表	121 ~ 127
表 3 花粉組成表 (2)	108・109	表 6 石器・石製品観察表	128

# 写 真 図 版 目 次

## 卷頭写真図版 1

1. 新堂遺跡 I 区垂直写真

## 卷頭写真図版 2

1. 新堂遺跡 II 区垂直写真

## 卷頭写真図版 3

1. I - b 区竪穴建物（南から）

2. I - c 区全景（北西から）

## 卷頭写真図版 4

1. II - c 区流路 S0034（南東から）

2. II - d 区流路 S0034（北西から）

## 写真図版 1 遺構 1

1. I - a 区全景及び I 区調査前風景（東南から）

2. I - a 区全景（俯瞰）

3. I - a 区全景（南から）

## 写真図版 2 遺構 2

1. I - b 区用水路以東部全景（北西から）

2. I - b 区用水路以西部全景（北から）

## 写真図版 3 遺構 3

1. I - b 区竪穴建物 1・2・3 全景（北東から）

2. I - b 区竪穴建物 1・2・3 全景（南から）

## 写真図版 4 遺構 4

1. 竪穴建物 2 検出状況（北東から）

2. 竪穴建物 2 検出状況（南東から）

3. 竪穴建物 2（南東から）

## 写真図版 5 遺構 5

1. 竪穴建物 3 検出状況（南西から）

2. 竪穴建物 3 検出状況（北東から）

3. 竪穴建物 3（南から）

## 写真図版 6 遺構 6

1. 竪穴建物 1 断面（北から）

2. 竪穴建物 1 全掘状況（西から）

3. 挖立柱建物 1（北から）

## 写真図版 7 遺構 7

1. 井戸 S0155 断面（西から）

2. 挖立柱建物 1 柱穴 S0161 断面（東から）

3. 土器 S0409 出土状況（東から）

4. 土坑 S0369 内土器出土状況（南から）

5. 溝 S0455 内土器出土状況（南西から）

6. 竪穴建物 3 内炉 S0470（北から）

7. 井戸 S0447 断面（北東から）

8. 落ち込み S0153 断面（北西から）

## 写真図版 8 遺構 8

1. I - c 区用水路以西部全景（北から）

2. I - c 区用水路以西部全景（南から）

## 写真図版 9 遺構 9

1. I - c 区用水路以東部全景（北東から）

2. I - c 区用水路以東部全景（南西から）

## 写真図版 10 遺構 10

1. 竪穴建物 5（北から）

2. 竪穴建物 5 アゼ断面（南東から）

3. 竪穴建物 6 検出状況（西から）

## 写真図版 11 遺構 11

1. 竪穴建物 4 と土坑 S0756（北から）

2. 竪穴建物 4 アゼ断面（北から）

3. 竪穴建物 6（俯瞰）

## 写真図版 12 遺構 12

1. 井戸 S0637 断面（東から）

2. 井戸 S0674 断面（北西から）

3. 土坑 S0638 断面（南から）

## 写真図版 13 遺構 13

1. 竪穴建物 6 内炉 S0700 断面（東から）

2. 竪穴建物 5 内炉 S0821 断面（南から）

3. 土坑 S0756 土製品出土状況（東から）

## 写真図版 14 遺構 14

1. 土坑 S0490 土製品出土状況（北東から）

2. 土坑 S0591 土器出土状況（北から）

3. 土坑 S0620 断面（東から）

4. 土坑 S0590 断面（北から）

5. 井戸 S0674 上層土器出土状況（北西から）

6. 溝 S0677 断面（北西から）

7. 土坑 S0611 土器出土状況（北西から）  
8. 土坑 S0739 土器出土状況（北西から）
- 写真図版 15 遺構 15  
1. II-a 区全景（南東から）  
2. II-a 区全景（東から）
- 写真図版 16 遺構 16  
1. II-a 区近景（南東から）  
2. II-a 区近景（西から）  
3. 溝 S0030 断面（北西から）
- 写真図版 17 遺構 17  
1. 流路 S0034（北西から）  
2. 流路 S0034（南東から）  
3. 集石遺構 S0063（東から）
- 写真図版 18 遺構 18  
1. II-b 区全景（北西から）  
2. II-b 区全景（俯瞰）
- 写真図版 19 遺構 19  
1. II-b 区北突出部近景（南東から）  
2. 北突出部西壁断面（北東から）  
3. II-b 区深掘部（南から）
- 写真図版 20 遺構 20  
1. 土器群 A 出土状況（南東から）  
2. 土器群 B 出土状況（北東から）  
3. 土器群 C 出土状況（南から）
- 写真図版 21 遺構 21  
1. II-c 区全景（西北から）  
2. II-c 区全景（南東から）
- 写真図版 22 遺構 22  
1. 流路 S0034 近景（南東から）  
2. 流路 S0034 内土器出土状況（東から）  
3. 流路 S0034 南岸土器出土状況（南から）
- 写真図版 23 遺構 23  
1. 土器 S0134 出土状況（北から）  
2. 土器 S0135 出土状況（北東から）  
3. 土器 S0136 出土状況（東から）
- 写真図版 24 遺構 24  
1. II-d 区全景（北西から）  
2. II-d 区全景（南東から）
- 写真図版 25 遺構 25  
1. 流路 S0034（東南から）  
2. 流路 S0034 近景（東南から）  
3. 流路 S0034 断面（南東から）
- 写真図版 26 遺構 26  
1. 流路 S0034 内土器出土状況（南から）  
2. 建物状遺構 S0908（北から）  
3. 土坑 S0909 内土器出土状況（西から）
- 写真図版 27 遺物 1  
1~5 I-b 区出土  
1・5. S0369 2. S0409 3. S0455  
4. S0481  
6~9 I-c 区出土  
6・7. S0620 8. S0674 9. S0521
- 写真図版 28 遺物 2  
1~12 I-c 区出土  
1. S0584 2. S0600 3. S0638  
4. S0674 5・6. S0740 7. S0821  
8~12. S0739
- 写真図版 29 遺物 3  
1. I-b 区出土 井戸 S0155・掘立柱建物 1 (S0162)  
2. I-b 区出土 穴室建物 1~3 (S0300・S0294・S0295)  
3. I-b 区出土 井戸 S0368・井戸 S0447・土坑 S0369・土坑 S0371
- 写真図版 30 遺物 4  
1. I-c 区用水路以東部出土  
S0611・S0585・S0495・S0489・S0591・S0580  
2. I-c 区用水路以西部出土  
S0721・S0701・S0705・S0677・S0678・S0680
- 写真図版 31 遺物 5  
1~8. II-c 区出土 流路 S0034
- 写真図版 32 遺物 6  
1~5. I-c・II-d 区出土  
1. 流路 S0034 2. S0023 3. S0928

4. S0909 5. S0951  
6. I-c・II-d区出土 S0926・S0927・  
包含層

写真図版 33 遺物 7

- 1～3 II-a区出土  
1. 3層 2・3. 流路 S0034  
4・7. II-b区出土 土器群A  
5. II-c 区出土 土器 S0135  
6. II-b区出土 土器群B  
8. II-b区出土 土器群C

写真図版 34 遺物 8

1. I-b・c区出土石器（A面）  
2. I-b・c区出土石器（B面）

写真図版 35 遺物 9

1. I-c区出土石庖丁（A・B面）  
2. I-b区出土石斧  
3. II-a・b・d区出土石器（A面）  
4. II-a・b・d区出土石器（B面）

写真図版 36 遺物 10

1. I-b・c区出土磨製石器  
2. I-b・c区出土砥石（A面）  
3. I-b・c区出土砥石（B面）

写真図版 37 遺物 11

1. I-c、II-a・b・d区出土楔形石器  
2. I-b・c、II-a・c・d区出土円筒埴輪

写真図版 38 遺物 12

1. II-d区土坑 S0901 出土円筒埴輪  
2. I-c区出土移動式かまど  
3. I-a、II-a・b区出土焼土塊  
4. I-c区土坑 S0490・土坑 S0756 出土土製品

# 第1章 調査の経緯と方法

## 第1節 調査に至る経緯と経過

### (1) 調査の経緯

本書は、松原市新堂4丁目土地区画整理事業に伴う、新堂遺跡の発掘調査報告書である。

新堂遺跡は、松原市の中央から南部、松原市新堂1～5丁目、高見の里5・6丁目、柴垣1丁目、岡2丁目に所在する（図1）。遺跡範囲は東西長約970m、南北長約900mである。主に東西に長い形をとり、西端は国道309号より約0.1km西、北端は松原中学校北側までとする。北から東には上田町遺跡、西には高見の里遺跡、南には岡遺跡が隣接する（図5）。

新堂遺跡は旧石器時代から近世の複合遺跡として周知されていたが、これまで大規模な調査は行われていなかった。平成17（2005）年度に新堂1丁目で大阪府教育委員会（現大阪府教育庁）による下水管渠築造工事に伴う調査（府2006）が、昭和57（1982）年度に新堂2丁目で松原市教育委員会による分譲住宅擁壁部分の調査が行われているが、いずれも調査面積100m<sup>2</sup>未満の小規模なものである。

近年、国道309号という幹線道路に隣接していることもあり、沿道の新堂4丁目地区における都市的土地区画整理事業の機運が高まつた。松原市の支援のもと、地権者の間で事業化の検討が行われ、平成26（2014）年12月新堂4丁目地区まちづくり協議会が設立され、さらに、平成29（2017）年2月本格的なまちづくりを進めるため、松原市新堂4丁目土地区画整理事業準備組合が設立された。平成30（2018）年7月には、松原市新堂4丁目土地区画整理事業準備組合が設立され、業務代行者として戸田建設株式会社大阪



図1 遺跡位置図

支店・イオンタウン株式会社共同企業体が正式に決定された。この事業により商業施設等の計画が進められている。

事業に先立ってこの区域が新堂遺跡の包含地にあたることから、平成 29（2017）年度に松原市教育委員会が 14 箇所のトレンチを設定して試掘確認調査を行った。試掘確認調査結果や既往の調査成果も参考にした結果、対象地の北東部と南東部の 2 箇所、面積にして約 9,500m<sup>2</sup>を文化財調査範囲に決定した。

松原市教育委員会は、戸田建設株式会社大阪支店からの依頼を受けて発掘調査を実施するにあたり、大阪府教育庁に協力を依頼し、大阪府教育庁から当センターに調査実施の要請があった。さらに、戸田建設株式会社大阪支店が文化財調査業務を株式会社島田組に委託したため、松原市教育委員会、戸田建設株式会社大阪支店、株式会社島田組、当センターの 4 者が平成 30（2018）年 8 月 16 日付で協定書を取り交わした。その協定書に基づき、株式会社島田組と当センターは、平成 30（2018）年 9 月 3 日付で業務委託契約書を取り交わした。

調査は、松原市教育委員会と当センターが共同調査で実施することになった。出土遺物、図面、写真類は松原市教育委員会が保管している。実施期間は発掘調査、整理事業をあわせて平成 30（2018）年 9 月 3 日から令和 2（2020）年 6 月 30 日である。

## （2）調査の経過

今回の調査対象箇所は、大きく南北 2 箇所の調査区に分かれる（図 2）。北（Ⅰ区）と南（Ⅱ区）の調査区は約 200 m 離れている。Ⅰ 区とⅡ 区を作業工程の都合上、七つの調査区に分けて調査を実施することになった（調査区名称 I-a～c 区、II-a～d 区）。

協定締結以降、現地調査に入るまでに松原市教育委員会、戸田建設株式会社大阪支店、（株）島田組、当センターで調査方法等の協議や確認を行った。

整理作業終了後、調査成果一式は松原市教育委員会に引き渡すため、整理や収納の詳細は松原市教育委員会の『松原市教育委員会発掘調査取扱い基準』に沿うようにすること、調査期間中 1 回は現地公開を実施し、調査成果を近隣住民に公開することを取り決めた。また、測量方法はラジコンヘリコプターを使用した空中写真測量を行い、空中写真測量時は高所作業車もしくは足場からの写真撮影も併用すること、等を取り決めた。

調査における諸手続きは松原市教育委員会が行うこととした。立会は調査区ごとに松原市教育委員会が行い、松原市教育委員会が調査完了したと判断すると戸田建設株式会社大阪支店に引き渡した。

各調査区では機械掘削、人力（包含層）掘削、遺構検出、遺構掘削、写真撮影、図化作業等を順次行った。遺構面の調査終了時にはラジコンヘリコプターによる空中写真測量を 6 回、高所作業車や足場を使用した写真撮影を 7 回行った。

また、II-c 区の調査時には、これまでの調査成果を近隣住民の方に公開するのを主目的として、調査終了のタイミングに合わせて平成 31 年 2 月 16 日（土）に現地公開を実施した。松原市内の方を中心、約 130 名の参加を得た。

発掘調査と並行して遺物登録や洗浄、図面整理、写真整理等の基礎整理作業を行った。発掘調査終了後に中部調査事務所で整理作業を引き続き行い、報告書を令和 2 年 6 月に刊行して、すべての作業を完了した。

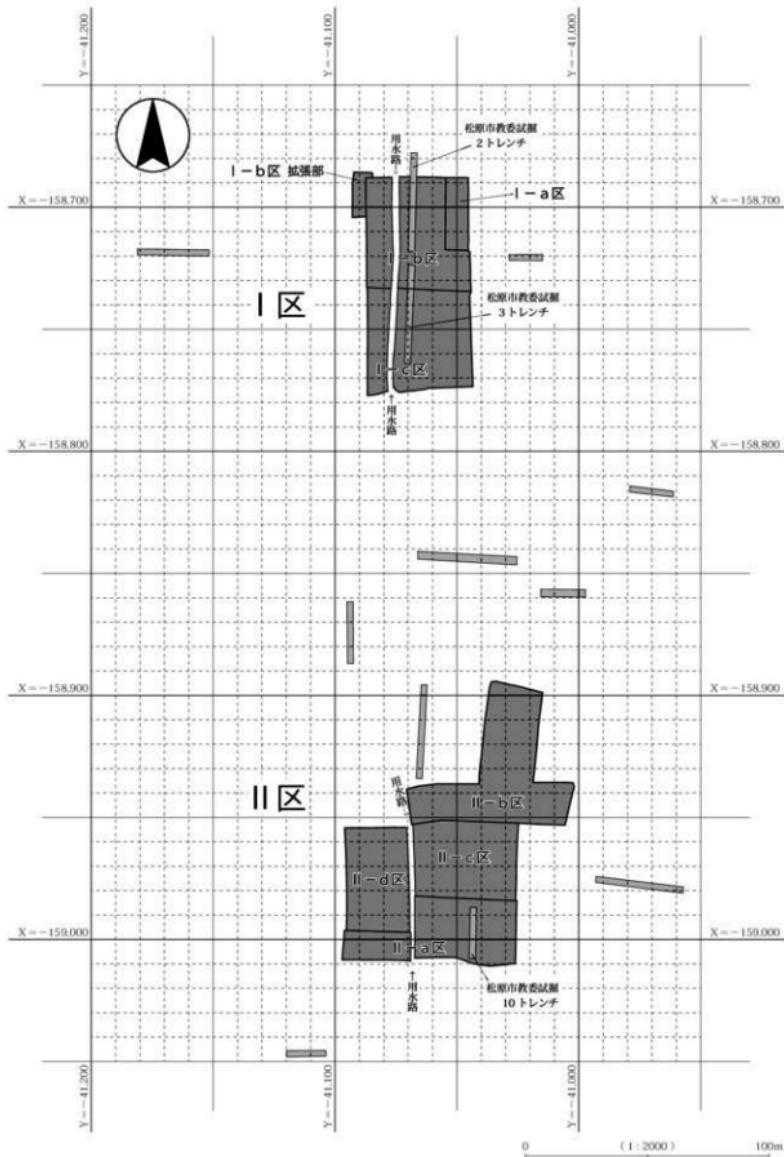


図2 調査区位置図

## 第2節 調査・整理の方法

松原市教育委員会との共同調査のため、発掘調査及び整理作業の方針については調査着手前に両者で協議し、検討を行った。

この結果、松原市教育委員会には『発掘調査取扱い基準』、当センターには『遺跡調査基本マニュアル』という発掘調査の統一や標準化をはかるマニュアルがあり、これをもとに発掘調査はセンターの方式に準じて、調査成果として残るもの表記や保管収納に関しては、松原市に近い方式をとることとした。

### (1) 調査の方法

**調査区割** 遺物の取り上げや遺構の位置確認に関しては、世界測地系（測地成果2011による）平面直角座標系第VI系を基準とした区画を使用した。これにのっとり、第I～第Vまでの大小5段階の区画を設定した（図3）。

第I区画は、大阪府の南西端X= - 192,000、Y= - 88,000を基準とし、南北方向に6km、東西方向に8kmで府域を62区画に分割したものである。表示は、南西端を基点に北へA～O、東へO～8とする。第II区画は、第I区画を南北方向に1.5km、東西方向に2.0kmでそれぞれ4分割し、計16区画を設定する。表示は南西端を1とし、東へ4まで、同様に西端を5、9、13、北西端を16と平行式で表す。第III区画は第II区画を100m単位で、南北15、東西20に区画する。表示は北東端を基点に、南へA～O、西へ1～20とする。第IV区画は、第III区画を10m単位で南北方向、東西方向ともに10に区画する。表示は北東端を基点に南へa～j、西へ1～10とする。

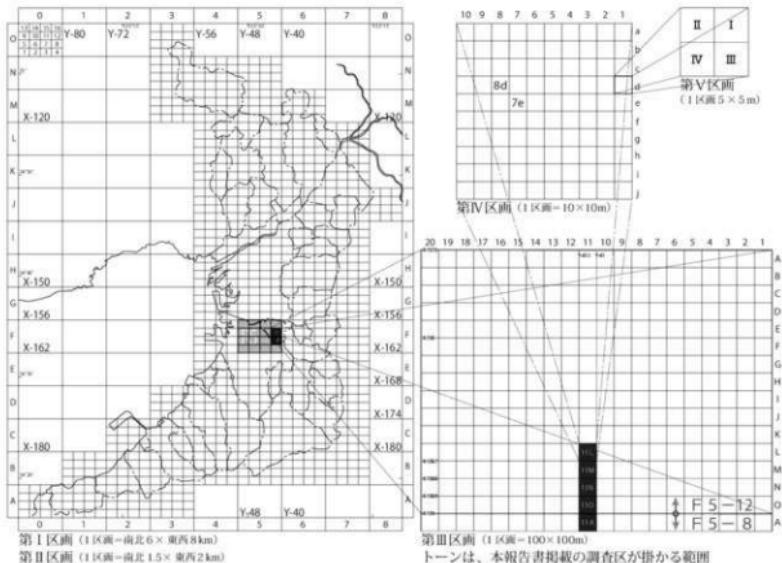


図3 地区割図(1)

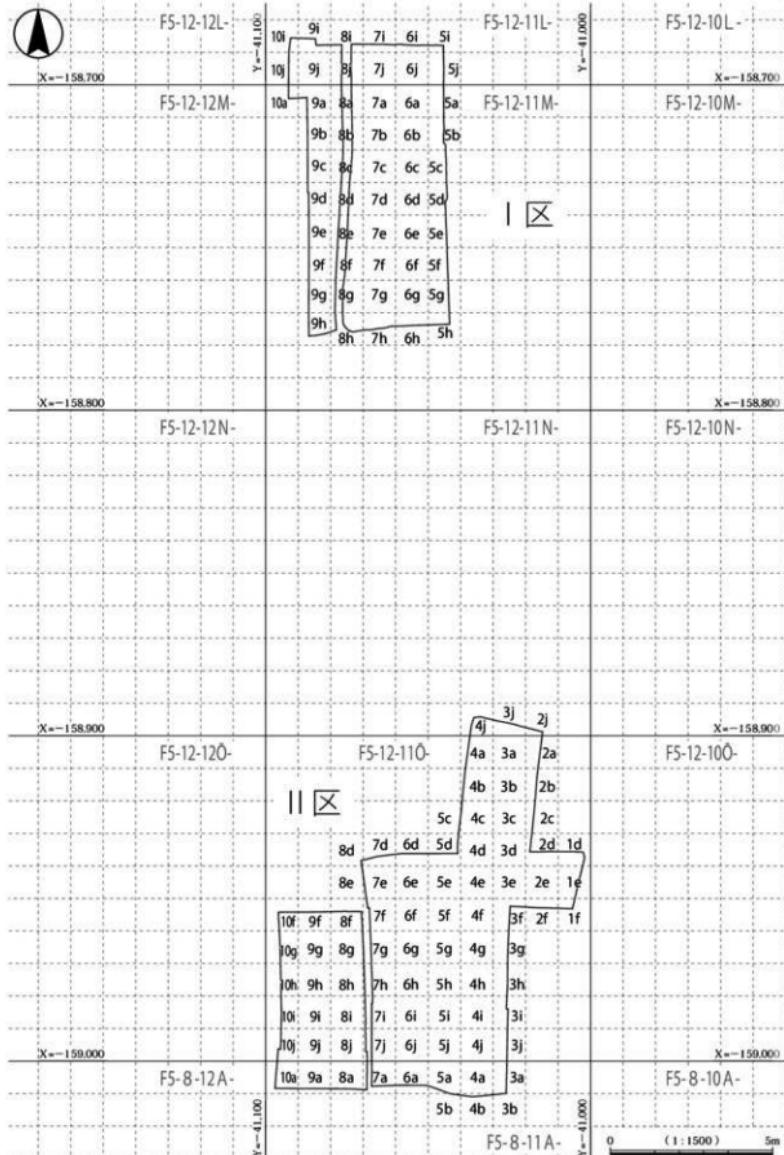


図4 地区割図(2)

今回の調査地は第Ⅰ区画がF 5、第Ⅱ区画が12・8、第Ⅲ区画が11 L、11 M、11 O、8 Aにあたる。第Ⅳ区画は1から10、aからjのすべてにまたがる(図4)。出土遺物を取り上げる際には、第Ⅰ区画から第Ⅳ区画までをラベルに記入した。遺物が密集して出土した場合等は、第Ⅳ区画をさらに4分割する第V区画までを使用して取り上げ、ラベルにも第V区画まで記入した。また、遺構面や遺構の平面図作成にも区画名を表記するようにした。

なお、方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海面(T.P.)からのプラス値を用いた。

**調査名・調査区の設定・呼称** 当センターでは、前述のマニュアルに従って遺跡名に調査年度を加えた調査名称を使用している(池内遺跡15-1等)。しかし、松原市では『松原市道路台帳地図』における図画割を基準とした記号で表記しているため、今回は当センターで使用している区画割とは別の区画割法をとる。

松原市域にあたるX=-155,400、Y=-44,000～X=-160,800、Y=-37,600の範囲を東西800m、南北600mの区画で東西に8つ、南北に9つに分け、西から東へA～H、北から南へ1～9とする(大地区)。一つの大地区はさらに東西400m、南北300mの区画で分けられる(小区画)。つまり、一つの大地区は四つの小地区に細分され、北西から南東に1から4の番号が振られる。この地区的下に、調査業務発生順に業務番号を付与しており、大番号一小番号一業務番号で調査名は表される。今回の調査地の所在する地域をこの地区名にあてはめると、E 7-1-61となる。

今回は、返却後の保管方法等を考慮し、松原市の調査名に遺跡名を併記する形式、新堂遺跡(E 7-1-61)をとることとした。従って、遺構実測図、写真ラベル、出土遺物ラベル等すべてこの形式で表記している。

調査区名も松原市での呼称方法に基づいた。北側の調査区をⅠ区、南側の調査区をⅡ区とした。その中で、さらに複数の調査箇所に分かれるため、まとめて調査する単位(空中写真測量の単位)ごとにaからeの地区名を付与した。(例:Ⅰ-a区)。

本報告での調査区はⅠ-a区、Ⅰ-b区、Ⅰ-c区、Ⅱ-a区、Ⅱ-b区、Ⅱ-c区、Ⅱ-d区の七つ存在する(図2)。Ⅰ-b区は立会後に竪穴建物の全域を検出するため北西部の約100m<sup>2</sup>を拡張して調査を行った。この区域を広義にはⅠ-b区に含めるが、調査成果の説明時にはⅠ-b区拡張部と呼称している。

**遺構名** アルファベットのSのあと、遺構の検出順に、4桁の1からの通し番号を遺構種別の前に付与した(例:S0001)。調査区をまたいでも連続して同一の遺構になる場合や、明らかに連続する遺構には同一遺構番号を与えた(例:S0034)。ただし、同一遺構になるか紛らわしいものは別個の遺構番号を与え、整理作業時の際どちらかに統一した。複数調査区を並行して調査することもあったため、遺構番号が調査区内でも連続しない場合がある。

また、竪穴建物等は個別の柱穴等に対し調査時は遺構番号を付与したが、整理作業の際に、竪穴建物1等のように、遺構種類を前に、番号を後ろにした遺構番号を別に付与することとした。

**掘削方法** 盛土、近世～近代期の耕作土層、確認調査の擾乱等を重機で掘削した。機械掘削深度は0.2～0.5mであった。それ以下を人力によって層序ごとに掘削を行い、遺構面、遺構の確認及び遺物の取り上げに努めた。人力掘削は平均で0.2m、厚いところでは0.5mである。

人力掘削はシャベル等を使用して行い、土砂の排出はベルトコンベアを使用した。遺構の掘削はヘラやスコップを用いて慎重に行った。湧水や雨水はポンプを用いて場外へ排出した。

**遺構面と層** 近～現代の整地層や盛土は除外して、近世～近代の耕作土を第1層、遺物を包含する弥生時代中期～中世と考えられる土層を2層、3層とし、遺物を包含しない基盤層（地山）を4層とした。2層と3層は、さらに土層が細分できる箇所もあり、それらを2～1層、3～2層等と表現した。

検出した遺構面は4層上面を第1面とした。実際には、3層上面で中世以降の鋤溝を検出できることもあるが、調査区によっては検出し得なかったところもあった。よって、基本的には4層（基盤層）上面のみを遺構面として捉え、調査を行った。本報告書では4層上面のみを第1面として掲載している。

**記録作業** 遺構面は平板測量で100分の1の平面図を作成し、遺構の把握に努めた。必要な場合には、レベル測量を行い、高低差等地形の変化を記録した。第1面で空中写真測量を行い、50分の1の平面図、遺構図、100分の1の縮小平面図、I区とII区各々の合成遺構図を作成した。

また、個別遺構の平面図・断面図・立面図や出土状況図については、必要に応じて5分の1、10分の1、20分の1等で適宜作成した。土層観察用の断面に関しては調査区外周の北、南、東の壁面を通して20分の1の断面図を作成した。

現場での写真撮影は、6×7カメラ及び35mmイメージセンサーAPS-c一眼レフデジタルカメラを使用し、6×7カメラについては黑白フィルム、カラーリバーサルフィルムを用いた。デジタルカメラはRAW形式とJPEG形式でデータを保存した。フィルムカメラについては、ネガと焼き付け写真を、デジタルカメラについてはTIFFデータを成果品として作成した。

主要な遺構面の全景写真撮影に関してはラジコンヘリによる俯瞰写真と調査区遠景写真の撮影を計7回行った。その際に足場及び高所作業車を用いて斜め写真の撮影も行った。

**立会等** 各調査区の調査が終了した時点や、指示を仰ぐ必要がある時等は、松原市教育委員会の立会を受けた。完了すると戸田建設株式会社大阪支店に引き渡しを行った。

II-b区やI-b区の調査時に壁断面や遺構埋土から土壤サンプルの採取を行い、新堂遺跡周辺の古環境を復元するため、花粉分析を委託した。

**基礎整理作業** 現地調査期間中には遺物の登録、洗浄、注記や遺構実測図、遺構写真の整理等の基礎整理作業を行った。遺物の総コレクション数は約70箱にのぼり、一部は中部調査事務所にて洗浄、注記、遺物写真撮影を行った。

## （2）整理の方法

平面図や主要遺構については、現地で作成した実測図や空中写真測量図を編集して、調査区平面図や遺構断面図等の遺構挿図を作成した。遺構挿図の合成はadobe社製PhotoshopCS6で、墨書きはIllustratorCS6を用いてデジタルトレースを行った。

出土遺物は、接合、復原を行った後、実測作業を実施した。遺物実測図は調査区、遺構、包含層ごとにレイアウトを作成し、合成はadobe社製PhotoshopCS6を用いて行い、墨書きはIllustratorCS6を用いてデジタルトレースを行った。

現地で撮影した遺構面及び個別遺構の写真に関しては、報告書に掲載するものを選別し、6×7カメラフィルム写真のスキャニング作業を行い、デジタルデータ化して写真図版を作成した。デジタル一眼レフカメラの写真についても画質を調整する等して、写真図版を作成した。また、出土遺物については、報告書に掲載するものを選別して写真撮影を行い、デジタルデータ化して写真図版を作成した。写真図版の編集に関しては、InDesignCS6を使用した。

委託した自然科学分析についても完了検査を実施した後に報告書の納品を受けた。その後、報告書の

書式に合わせた編集作業を実施し、第4章に掲載した。

以上の作業と並行して調査成果の文章や表を作成し、編集作業を実施して報告書を完成した。報告書本文の編集に關しても、InDesignCS6を使用した。

入稿後、校正作業を経て本書の刊行をもって完了した。

また、編集作業と並行して出土遺物は報告書掲載遺物と未掲載遺物に分類した。報告書掲載遺物は挿図や写真図版番号が確定すると遺物に掲載遺物ラベルを記入し、掲載順にコンテナに収納作業を行った。未掲載遺物についても同一調査区や同一遺構、包含層ごとに分類して収納し、収納されているものがわかるようラベルを添付した。報告書掲載遺物、未掲載遺物のコンテナ台帳を作成し、貸し出しや資料調査時に対応できるようにした。

白黒写真是ネガフィルム、紙焼き、リバーサルはポジフィルムを各々専用のアルバムに収納し、写真番号をシートに記入した。デジタル写真については、撮影時にRAWデータとJPEGデータの2形式で保存しており、これらと報告書掲載写真についてはTIFF形式で作成し、整理作業終了時にはハードディスクに保存して松原市教育委員会に引き渡すこととした。

写真台帳はMicrosoft社のExcel形式で台帳を作成し、掲載遺物番号、掲載写真番号等も登録し、収納場所等が検索できるよう整備し、今後の活用に対応できるよう努めた。遺物台帳は現場での取り上げ時に作成し、整理段階でExcel形式で台帳入力し、出土地区、遺構ごと等で検索できるよう努めた。

遺構実測図についても、地区や図面種類ごとに並べ替え、図面番号を付与して番号順に図面ケースに収納した。遺物実測図は挿図番号順に並べ替え、図面ケースに並べ替えた。

調査成果品並びに航空測量成果品は納品確認を行った後、整理作業完了後に遺物や実測図、写真アルバム等とともに松原市教育委員会に引き渡した。今後は松原市教育委員会によって保管され、地域の歴史を知る資料として活用されることとなる。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

新堂遺跡は、松原市の中央から南部、松原市新堂1～5丁目、高見の里5・6丁目、柴垣1丁目、岡2丁目に所在する（図1）。遺跡範囲は東西長約970m、南北長約900mの範囲で広がる、旧石器時代から近世の複合遺跡である。近鉄南大阪線の南、阪和自動車道の西、西除川の東に位置する。

新堂遺跡が所在する松原市は大阪府のはば中央、河内平野の南に位置する。現在の行政区画で言えば北は大阪市平野区、東住吉区、西と南は堺市北区・美原区、東は八尾市、藤井寺市、羽曳野市と接する。人口は令和元（2019）年7月末現在で11万9761人を数える。松原市は昭和30年に市制が施行されて、平成27年2月で市制60周年を迎えた。

松原市の北端には大和川が東西に流れ、それと交わるように東には狭山池に源を発する東除川が、西にも狭山池から発する西除川が流れる。東除川左岸には河内台地（大和川以北では瓜破台地）と呼ばれる洪積段丘が南からのびている。現在の天野川の前身である、古天野川によって形成された扇状地が古天野川自身の浸食によって段丘化したものが河内台地、瓜破台地と考えられている。

また、現在の西除川、東除川は大和川に合流するが、これは宝永元（1704）年の大和川付け替え以後の景観である。それ以前は、旧西除川は狭山池から北上して東除川と共に北流して旧大和川の1つである平野川に合流する。旧西除川右岸には北に広がる氾濫原が形成されていた。新堂遺跡は西除川の右岸にあたり、この氾濫原上の低位段丘に立地することとなる。

松原市は標高T.P.+10.0mからT.P.+40.0mの間に位置し、大きな起伏がほぼない地形であるが、南南東に高く北北西に緩やかに低くなる傾斜地形をとる。新堂遺跡は松原市の南部に位置するため標高は松原市域では高く、北側のI区ではT.P.+24.1～24.5m、南側のII区ではT.P.+25.2～26.1mが平均的な高さである。

### 第2節 歴史的環境

新堂遺跡が立地する河内平野南部には、旧石器時代から近世の遺跡が数多く所在している。

また、古代には河内国丹比郡、後の丹北郡に属していた。新堂遺跡は北を上田町遺跡、東を立部遺跡、南を岡遺跡、西を高見の里遺跡と接している。図5では松原市域の中央から南部にかけての遺跡を図示したが、松原市域の遺跡について各時代に従って概観していく。

**旧石器時代** 松原市の北限にあたる大和川今池遺跡では、翼状剥片石核や国府型ナイフ形石器等の石器が出土する。新堂遺跡より南の岡遺跡や立部遺跡、清堂遺跡でもナイフ形石器が出土している。

**縄文時代** 縄文時代になると、大和川今池遺跡、三宅西遺跡、上田町遺跡、新堂遺跡、丹南遺跡などで当該期の遺物が確認される。

大和川今池遺跡では、包含層から石鏃や有舌尖頭器、石匙等の石器が出土している。大和川今池遺跡の東にある三宅西遺跡では、放射性炭素年代測定でB.C.1600年という実年代が示された縄文時代後期中葉の土器が出土した。

上田町遺跡では有舌尖頭器が、新堂遺跡では石棒が、丹南遺跡では有舌尖頭器が出土しているが、明らかな遺構は検出されていない。

**弥生時代** 池内遺跡、大和川今池遺跡、三宅西遺跡、天美南遺跡、上田町遺跡、高木遺跡、東新町遺跡、高見の里遺跡、若林遺跡で、弥生時代になると遺跡数が増加する。

大和川今池遺跡の東にある池内遺跡では、弥生時代前期の小区画水田等の生産域と、弥生時代前期の平地建物、竪穴建物、掘立柱建物からなる環濠集落（居住域）を検出した。また、弥生時代中期の溝が検出された。

大和川今池遺跡では、弥生時代前期、後期、庄内式期の遺構と遺物が確認されている。三宅西遺跡では、弥生時代中期の竪穴建物が30棟以上と土器が確認されており、集落の存在が判明した。天美南遺跡では、弥生時代中期の掘立柱建物が確認されている。

上田町遺跡では弥生時代後期の水田が確認された。弥生時代後期から古墳時代前期にわたる河川跡からは井堰が確認されている。また、小型彷製鏡や打製石剣、木製鍬が出土している。

高木遺跡では、弥生時代中期から後半の竪穴建物や掘立柱建物が確認された。

東新町遺跡では、弥生時代中期の溝、掘立柱建物、井戸が確認されている。弥生土器の他、石鎌や石庖丁が出土している。高見の里遺跡では弥生時代後期の河川跡が確認され、磨製石剣が出土している。

**古墳時代** 古墳時代になると遺跡数が大幅に増加する。大和川今池遺跡、三宅西遺跡、堀遺跡、新堂

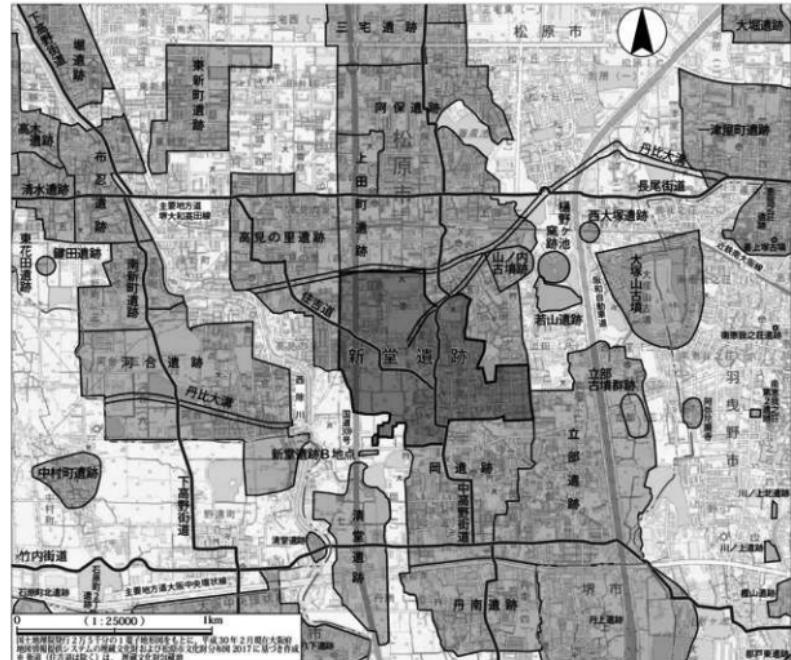


図5 周辺遺跡図

遺跡、上田町遺跡、東新町遺跡、高見の里遺跡、岡遺跡、立部遺跡、丹南遺跡等である。

大和川今池遺跡では、古墳時代前期から後期の竪穴建物や掘立柱建物、井戸、中期の埋没古墳等が確認されている。遺物も韓式系土器や須恵器、家形埴輪や円筒埴輪等が出土している。三宅西遺跡では、古墳時代前期から中期の流路から大量の土器が出土、百濟系の土器も出土している。

堀遺跡では掘立柱建物と滑石製紡錘車が、東新町遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓や古墳時代後期の水路が確認されている。高見の里遺跡では鉄斧が出土している。

上田町遺跡では古墳時代前期の竪穴建物や井戸が確認されている。竈や韓式系土器、埴輪が出土し、弥生時代末から古墳時代初めにかけての土器は、上田町式という標準土器になっている。

新堂遺跡では古墳や掘立柱建物の他、昭和57(1983)年の松原市教育委員会による新堂2丁目の調査で、木製の橋梁が検出された。その他、東南から西北への斜向道路の側溝を検出し、丹比と難波を結ぶ道として注目される。新堂遺跡や岡遺跡、丹南遺跡では埴輪が出土しており、埋没古墳があったと推測される。

立部遺跡内でも古墳時代中期から後期の古墳跡が7基確認されている。直径12mの円墳の他、1辺4.5~10.0mの方墳である。立部遺跡でも埴輪が出土した他、滑石製の子持勾玉が出土している。

**古代** 池内遺跡では平安時代中期から後期の掘立柱建物60棟以上を確認した。区画溝内に庇付大型建物3棟と小型建物32棟、井戸や土壙墓等があり、在地領主層の集落と推定される。

大和川今池遺跡では、難波宮中軸線延長上に幅18mの間隔をもつ2条の溝が検出され、難波宮の朱雀大路から直線で南下し藤原宮や平城京に至る官道の「難波大道」と断定された。その後も、難波大道と思われる道路状遺構を南北46mにわたって検出している。

高木遺跡では、「難波大道」から東へ1里の里境畦畔を確認している。初現が奈良時代に遡る溝の発見から、「難波大道」を基準とした条里制の施行が奈良時代まで遡ることを示唆する。水田区画や奈良時代から平安時代の大型掘立柱建物の配置からも、条里地割の施行が判明した。海獸葡萄鏡や硯等が出土することより、官衙か居館となる遺跡と考えられる。

堀遺跡は複数の水田が確認されているが、奈良時代後期の水田は条里地割を示さず、後の9世紀前半に形成された水田が条里地割に基づいたものである。

河合遺跡では、飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物群や大溝が検出され、人面墨書き土器や人形等の祭祀遺物が出土している。また、大型建物3棟から4棟がコの字形に配置され、総柱建物を含む7棟で構成される奈良時代の掘立柱建物群が検出された。硯や墨書き土器の出土から官衙遺跡と考えられる。

阿保遺跡では飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物が確認された。南新町遺跡や東新町遺跡でも平安時代の掘立柱建物が確認された。丹南遺跡では飛鳥時代から奈良時代の官衙と思われる大規模な掘立柱建物群や井戸が検出された。

**中世** 平安時代末以降は、耕地開発が盛んになり段丘上が削平されたためか、遺跡数は減少する。

堀遺跡や高見の里遺跡では掘立柱建物や水田を確認している。岡遺跡や立部遺跡、丹南遺跡では、掘立柱建物や井戸等からなる居住域が確認され、鉛滓や鋳型が出土することから河内銅物師の工房と推測されている。今回の新堂遺跡の調査でも焼土塊がみつかっており、それとの関連が考えられる。丹南遺跡では中世寺院関連施設と考えられる掘立柱建物群等がみつかっている。

**近世** 新堂遺跡の中央には中高野街道が縦断し、南側は竹内街道が横断する交通の要所でもあった。また、新堂遺跡の南の丹南地区には、江戸時代初期から譜代大名高木氏の陣屋が置かれていたことが知

られている。

<参考・引用文献>

松原市教育委員会 1985 『松原市史』 第1巻

松原市教育委員会 1978 『松原市史』 第3巻

松原市文化財分布図 2017 松原市教育委員会事務局 教育総務部 文化財課 文化財係

地村邦夫・藤澤真依編 2006 『新堂遺跡－大阪府教育委員会文化財調査報告 2005－6』 大阪府教育委員会

森屋美佐子・入江正則・平田洋司・新海正弘・正岡大実・永田由香編 2010 『池内遺跡－都市計画道路大和川線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 (財) 大阪府文化財センター

川瀬貴子・林日佐子編 2012 『池内遺跡 2－都市計画道路大阪河内長野線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 (公財) 大阪府文化財センター

永野仁編 2012 『池内遺跡 3－都市計画道路大阪河内長野線外建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 (公財) 大阪府文化財センター

川瀬貴子編 2017 『池内遺跡－松原市天美東土地区画整理事業に伴う池内遺跡 (C 2-4-2) 発掘調査埋蔵文化財発掘調査報告書－』 松原市教育委員会・(公財) 大阪府文化財センター

河本純一編 2019 『池内遺跡－松原市天美東土地区画整理事業区内における店舗建設に伴う池内遺跡 (C 2-4-6) 発掘調査報告書－』 松原市教育委員会・(公財) 大阪府文化財センター

中村淳穂・村上富貴子・森井貞雄・池田研・小倉徹也・河端智・清水梨代編 2009 『三宅西遺跡』 (財) 大阪府文化財センター

正岡大実・森屋美佐子編 2010 『三宅西遺跡 II』 (財) 大阪府文化財センター

大和川・今池遺跡調査会編 1980 『大和川・今池遺跡 II 第3・4・5地区 発掘調査報告書』

村上富貴子・森本徹・後川恵太郎・三辻利一・渡辺正巳・安部みき子・山口誠治著編 2000 『大和川今池遺跡(その1・その2)』 (財) 大阪府文化財調査研究センター

村上富貴子・杉本博美・岡本圭司・渡辺正巳・渡辺栄次・吉村佐紀恵著編 2001 『大和川今池遺跡(その3・その4)』 (財) 大阪府文化財調査研究センター

佐伯博光編 2002 『大和川今池遺跡(その5・その6・その7)』 (財) 大阪府文化財センター

三宮昌弘・福佐美智子・水野恵理子著編 2009 a 『大和川今池遺跡 I－難波大道の調査－』 (財) 大阪府文化財センター

市村慎太郎・森屋美佐子著編 2009 b 『大和川今池遺跡 II』 (財) 大阪府文化財センター

森屋美佐子編 2010 『大和川今池遺跡 III』 (財) 大阪府文化財センター

小野久隆・小林千夏編 2011 『大和川今池遺跡 IV』 (財) 大阪府文化財センター

永野仁編 2011 『大和川今池遺跡・天美西遺跡』 (公財) 大阪府文化財センター

柳本哲・服部文章・阪田育功著編 2010 『大阪府埋蔵文化財調査報告 2010-3 高木遺跡』 大阪府教育委員会

大阪府立狭山池博物館 2010 『H22年度秋期企画展 古代西除川沿いの集落景観』

日下雅義 1980 『歴史時代の地形環境』 古今書院

## 第3章 調査成果

### 第1節 基本層序

今回の調査区は大きく北側のⅠ区と南側のⅡ区に分かれており、両者の距離は北端間で約200mある。また、Ⅰ区は南北長が約100m、東西幅が約50m、Ⅱ区は南北長が約110m、東西幅が約100mある。Ⅰ区とⅡ区、さらに、各区の両端でも堆積状況は大きく異なり広範囲なため、連続した地層断面図を掲載するのは無理がある。そこで、Ⅰ区、Ⅱ区の基本層序を設定して柱状模式図で表現した(図6・7)。

今回の調査に先だって、松原市教育委員会によって試掘確認調査が行われており、以下の層序基準が設定されている(Ⅰ-b・c区には試掘2トレンチ、Ⅱ-a区には試掘10トレンチが存在する)。

第1層：黒褐色粘質土層、現耕作土及び床土。

第2層：黄褐色粘質土～粘質シルト層、近世の耕作土。

第3層：灰色粘質シルト層、本層上面を第1面とした。

第4層：黄褐色粘質土層、本層上面を第2面とした。基盤層。

第5層：灰～黄褐色粘質土層。

第6層：灰色細砂～粗砂層、氾濫堆積か。

本調査でもこれを参考に分層を行い、この層名を踏襲して使用し、各層で細分できるものは枝番号を付与して、3-1層等と表現した。ただし、Ⅰ-a区、Ⅱ-a区やⅠ-b区の一部は2面調査を行ったが、それ以外は1面調査で、全調査区を通して遺構を検出したのは概ね4層上面であるので、報告書では4層(一部は3-4層)上面をすべて第1面と統一表記して報告した。その点が、試掘確認調査とは異なる。

#### (1) Ⅰ区の基本層序(図6)

1層：2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂混シルト層、現代の耕作土及び床土である。平均地表高T.P.+24.4～25.0m、厚さ0.1～0.3mをはかる。

2層：近世の耕作土で2-1層と2-2層に分層可能である。

2-1層は10YR5/6 黄褐色極細砂混シルト層、平均検出高T.P.+24.6～24.8m、厚さ0.1mをはかる。2-2層は10YR5/4にぶい黄褐色シルト層、平均検出高T.P.+24.5m、厚さ0.1mをはかる。Ⅰ-b区やⅠ-a区等Ⅰ区の北東部のみ極端に厚く1層が堆積し、2層が存在しないのは、この区域が近現代の開発で削平されているためで、本来は2層がX=-158,720以南と同様に堆積していたと考えられる。中世から近世の遺物を含む。

3層：いわゆる遺物包含層で、弥生時代中期から古墳時代、特に弥生時代後期から古墳時代前期の遺物を多く包含する。3-1層や3-2層は固く締まり、灰黄褐色や黄褐色の極細砂混シルト層であるが上下層との対比で紫灰色にみえ、酸化鉄斑がみられる。北西部で堆積が厚く、南東部で薄い傾向にある。堆積が厚い箇所では、3-1層から3-4層の3～4層に分層可能である。

3-1層は10YR3/4 暗褐色シルト層で、検出高T.P.+24.6m、厚さ0.1m未満をはかる。3-1層は北西部の限られた部分でしかみられない。

3-2層は10YR6/2灰黄褐色シルト層もしくは10YR6/6明黄褐色シルト層で酸化鉄斑が観察でき、固く締まるのが特徴である。検出高T.P.+24.3~25.0m、厚さ0.1~0.4mをはかり、I区全域で普遍的にみられる鍵層である。遺物を大量に包含するが、弥生土器の他に古墳時代前期の土師器、古墳時代中期から後期の須恵器等も一定量含まれる。

3-3層は10YR5/3にぶい黄褐色シルト層で酸化鉄斑が観察できる。3-2層とは土色が大きく異なり土色、土質とも4層に近いが、3-2層より量は少ないが遺物を包含するので3層に含める。検出高T.P.+24.1~24.8m、厚さ0.1~0.3mをはかる。3層の堆積が厚いI-c区西部や南東部では、3-3層の下にさらに3-4層が観察できる。

3-4層は10YR5/6黄褐色シルト層もしくは10YR4/2灰黄褐色シルト層で酸化鉄斑が観察できる。検出高T.P.+24.3~24.7m、厚さ0.1~0.4mをはかる。3-3層、3-4層で包含する土器の時期は弥生時代中期から弥生時代後期末である。

I区では4層以外の3-3層、3-4層の2面にわたって遺構を検出でき、I-b区拡張部では3-4層上面で遺構を検出したのでこれを第1面とした（検証の結果、3-4層上面の遺構は古墳時代初めから前期のもので、I-b区で検出した他の遺構より若干新しいと言える）。3-3層、3-4層に含まれる遺物は破片がほとんどであり、遺物が二次的に集められた整地土層とも言える。つまり、4層上面で居住域が形成された後、3-3層や3-4層上面でも遺構がみられることは、短い周期で廃絶と居住が繰り返されたと考えられる。3-3層から3-4層は土色が近似する。

**4層**: 10YR5/6黄褐色シルト層である。西側では細かいシルト質だが、東部では砂質が強まる等、地域によって若干土質が異なる。検出高T.P.+23.7~24.7m、厚さ0.2~0.3mをはかる。全地域でみられ、無遺物層である。I区の広範囲で本層上面で遺構を検出したので、本層上面を基盤層と捉え、4層上面を第1面とした。

**5層**: 2.5Y5/3黄褐色細砂～中砂混シルト層で、4層より砂質が強まり、北西部ほどその傾向は顕著であり、泥質の箇所もある。検出高T.P.+23.5~24.5m、厚さ0.1~0.3mをはかる。無遺物層である。

4層と5層の間にごく薄く灰白色細砂層が認められる箇所があるが、部分的である。

**6層**: 10YR6/4にぶい黄橙色シルト～砂礫層で検出高T.P.+23.5~24.5m、厚さ0.1~0.3mをはかる。I-c区用水路以東の南東部や側溝等で観察したにとどまった。無遺物層で砂質が強くなり、流路の氾濫によって生じた堆積層と考えられる。

I区では南東から北西に低くなる傾向はあるものの、4層の検出高については、I-b区、I-c区を通じてもさほど差はない。5層や6層では氾濫による堆積があるものの、それ以降は大きな流路等が当調査内にはみられないため、比較的安定し、氾濫によって一挙に堆積するような環境ではなかったことが、土壤の質からも判断できる。3層以降の土地開発、造成によって、上層の堆積に差が生じたと考える。

I区では、I-b区の北西部の遺構やI-c区壁断面等から土壤を採取し、自然科学分析や層序の検討を行った（第4章参照）。この結果からもI区では比較的3-3・3-4層の堆積期間が短かったことが示された。

また、II区の噴砂痕跡ほど明確ではないが、5層以下の泥質堆積は地震動で生じたと第4章第1節で報告されており、巨大地震があったことがI区でもうかがえる。

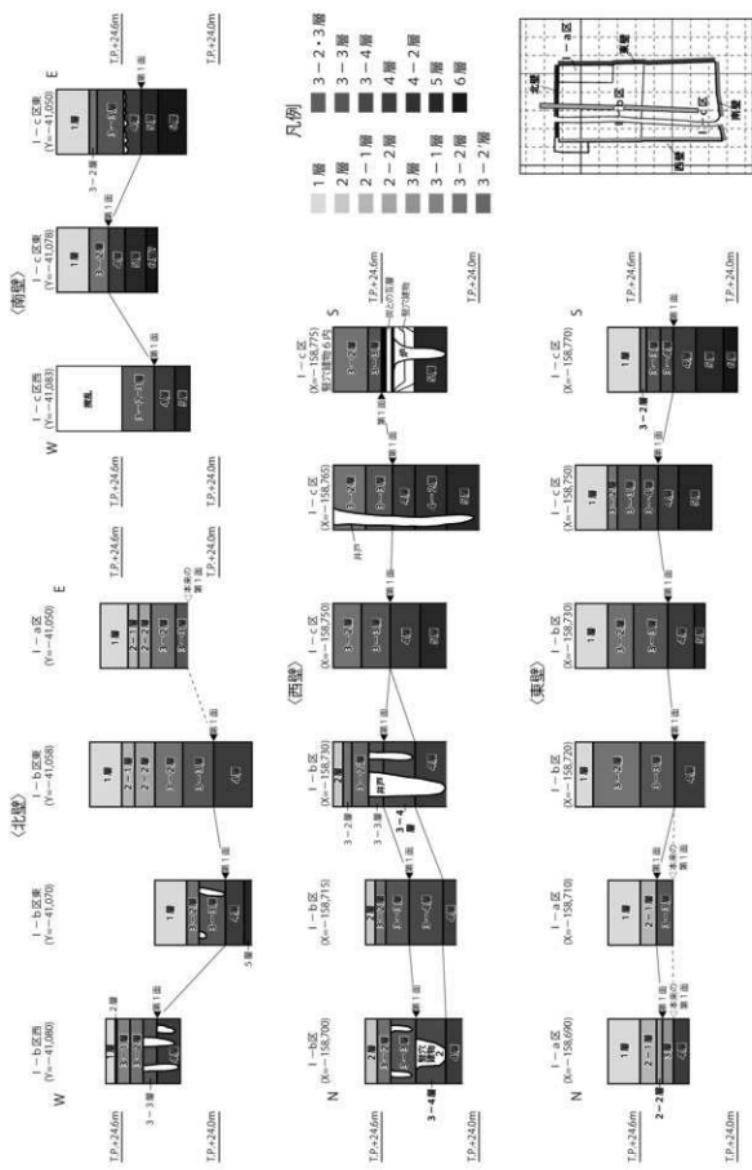


図6 1区基本層序模式図

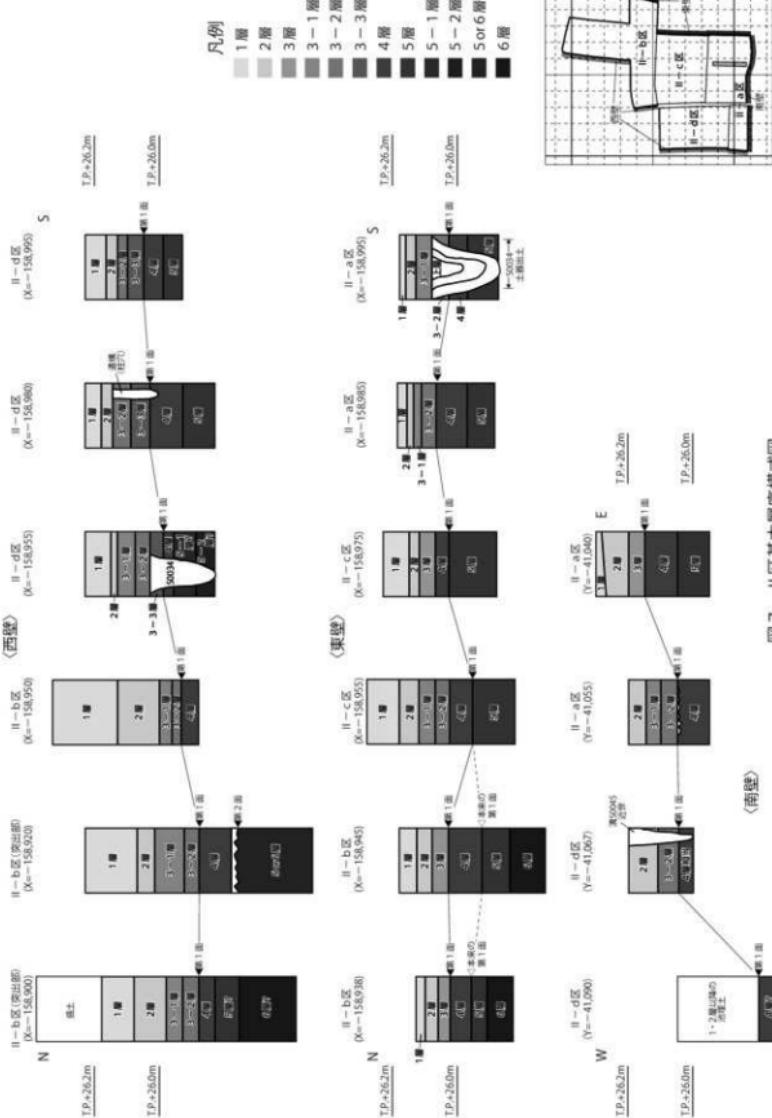


図7 II区基本圖序模式図

## (2) II区の基本層序(図7)

II-b区の北突出部の北壁と東壁は湧水による崩落が著しく、土層断面図を作成できなかったため、東壁はX=-158,945より南の観察作成となった。また、II-a区南壁のY=-41,070より西についても現代の溜池によって削平されたため、堆積状況の観察に至らなかった。

II区ではI区と基本層序は似るが、調査区中央を流路S0034が横断する等大規模な流路が数時期にわたって東西に流れる影響も受けたか、流路以外の箇所でも総じて砂礫の割合が多く、5層以下は流路の氾濫堆積が主となる。

**1層**: 2.5Y4/2 暗灰黄色極細砂混シルト層で、現耕作土及び床土である。平均検出高T.P.+26.3~26.9m、厚さ0.1~0.6mをはかる。近世の遺物を含む。

**2層**: 2.5Y6/2 灰黄色シルト層もしくは10YR5/6 黄褐色シルト層で、平均検出高T.P.+26.1~26.8m、厚さ0.1~0.3mをはかる。中近世の耕作土である。古代から中世の遺物を含み、その時期はI区よりやや古いので、I区より古い段階から耕作地としての利用がなされたと考える。

**3層**: 遺物包含層で主に弥生時代中期から古代の遺物を包含する。ただし、包含量はI区に比べるとかなり少ない。灰黄褐色シルト層あるいは極細砂混シルト層だが紫灰色にみえ、酸化鉄斑がみられる。3-1層から3-3層に分層可能である。

3-1層は2.5Y6/2 灰黄色シルト層で、検出高T.P.+25.8~26.8m、厚さ0.1mをはかる。わずかに遺物を含む。

3-2層は10YR6/2 灰黄褐色シルト層もしくは10YR6/6 明黄褐色シルト層で酸化鉄斑がみられ、固く締まる。検出高T.P.+26.1~26.4m、厚さ0.1mをはかる。II区全域で普遍的にみられる鍵層である。主に弥生時代から古代の遺物を含む。

3-3層はII-d区等一部にみられる。10YR5/4にぶい黄褐色シルト層で4層と土色、土質とも似る。検出高T.P.+26.1~26.2m、厚さ0.1mをはかる。わずかに遺物を含む。

II-a区やII-b区の3-2層上面では鋤溝等の耕作に伴う遺構を確認した。また、第1面(4層)上面で検出した流路S0034の上層に存在する溝や溝S0030等は、壁断面の観察によると3-2層上面からの遺構と考えられる。

**4層**: 2.5Y5/4 黄褐色シルト層で、検出高T.P.+25.5~26.4m、厚さ0.2~0.3mをはかる。II-a・b・d区では本層上面を第1面とした。3-3層と4層は土色が近似するが、遺物の包含の有無以外には土の締まり具合が4層のほうが強く、やや砂質が強くなる等の傾向がある。また、II-b区等北側では4層と5層も近似するが、5層がより砂礫の割合が大きくなると言える。

4層以下も流路S0034と同位置に流路痕跡が確認され、同じ箇所で流路が氾濫と堆積を繰り返していたと推測される。

**5層**: 2.5Y5/4 黄褐色粗砂混シルト層もしくは10YR5/6 黄褐色粗砂混シルト~粗砂層で、下層に行くほど粒径が粗くなる。検出高はT.P.+25.4~26.1m、厚さ0.1~0.3mをはかる。

5層まではII区全域で普遍的にみられるが、土質は区域によってシルトが強いか、砂質が強いか異なる。5層以下はII-b区北突出部等ではシルトではなく砂礫層となるが、これは下層の6層と同じで、より古い段階での氾濫による堆積の影響を大きく受けた影響と思われる。地盤が緩く、下層の湧水層に達しやすいためか中世以降の井戸が多く検出された。

また、第4章の自然科学分析によると、5層以下は弥生時代中期に相当すると考えられ、これは3層、4層で検出した遺構の出土遺物の時期とも一致する。II-b区の深掘トレンチ部では、5層と6層の間に攪拌されたようなごく薄い灰白色細砂層が存在していた。

**6層**：10YR5/4にふい黄褐色極細砂～粗砂や礫混シルト層で、II-b区深掘トレンチ部や流路S0034の下層確認トレンチ等のみで観察した。検出高T.P.+25.2～25.8m、厚さ0.5m以上である。流路の氾濫による堆積層と考えられ、斜方向のラミナがみられる無遺物層である。

第2章の地理的環境で述べたように、地形は南南東から北北西にむかって緩やかに低くなり、II区とI区では地表高に1m以上の差がある。標高差は特にII区で顕著であるが、北にむかって何段階かに低くなり、II-b区の北突出部等は明瞭である。第1面で検出した流路S0034より古い段階の流路が、この地域に存在したと考えられるが、これは第4章第1節で、I区とII区の間に西に傾いた河成段丘面が伏在することが示唆されていることとも合致する。

II区は地形環境からも流路S0034が存在する箇所が最も低くなった結果、その近辺に自然発生的に流路や溝が形成されたと考えられる。流路S0034より北は、氾濫が多いことや砂礫が強い土壤から居住に適さない地域であったと推測でき、居住域はII-d区等のII区でも南西部の一部でみられるに過ぎない。

## 第2節 I区の遺構と遺物

### (1) 概要

I区は調査区全体では北側にあたり、南北に主軸をもつ長方形で総面積は約3,620m<sup>2</sup>である。遺構面の標高については最低の北西部でT.P.+24.2mをはかり、最高位の南東部でT.P.+24.5mをはかる。I区内での標高差は余りないが南のII区より低く、II区最高部とI区最低部の比高は約2.0mある。

I区は調査区の西寄りを南北に用水路が通り、この部分は生活道路となっているため調査対象外となつた。よつて、調査区が東：西=2：1の割合で分断されている。用水路は現代に造成されたものだが近世以前にも用水路が造成されていたようで、同位置下層から近世の遺物を含む溝が検出された。

工程や掘削土を仮置きする関係上、I区をI-a・I-b・I-c区の三つの調査区に分けた（調査時期はI-a区が平成30（2018）年9月、I-b区が平成31（2019）年1～3月、I-c区が平成31（2019）年3月～令和元（2019）年5月）。それぞれの面積は297m<sup>2</sup>、1,564m<sup>2</sup>、1,659m<sup>2</sup>である。また、I-b区に関しては、調査区の北西隅で竪穴建物2棟の一部を検出したため、本来は調査区外であった西側を竪穴建物の規模が判る範囲まで拡張することとし、約100mを追加調査した。この拡張部では空中写真測量による撮影・図化作業は行わず、高所作業車による撮影を行い、平面図は手測りで実測し空測図に追加した。

### (2) I区の遺構（図8～36、写真図版1～14）

I区の特徴として包含層（3層）が厚いことがあげられる。I-c区南東部では現地表高が最も高くT.P.+25.2m、削平されている以外の低い部分でT.P.+24.8m前後であるが、1層、2層を除去した後の3層は約0.2～0.8mもの厚さがあった。また、3層上面を精査したところ、大量に土器を含み帶状に広がる遺構や柱穴、ピット等を検出した。この窪みが4層まで達して4層上面の遺構との輪郭が不明確になるため、4層上面まで掘削しこれを第1面とし、それより低い箇所は落ち込みとして遺構番号を与えた（S0153・S0160・S0370等）。従つて、第1面で報告した遺構には3層上面からの遺構も含まれる。

また、落ち込みに含まれる土器は破片で摩耗が著しいことから、遺構から離れて集められ投棄され、整地されたような感を受ける。出土遺物の時期も第1面の遺構に伴う土器には須恵器がほとんど伴わず、この落ち込みや3層中には古墳時代中期から後期の須恵器も含まれる。従つて、第1面が廃絶後、整地して機能していた遺構面が3層中に存在していた可能性が高い。

I区第1面で検出した遺構は、竪穴建物6棟、掘立柱建物1棟、井戸、溝、土坑、ピット等であった。遺構密度が非常に高く、遺構面は南から北、東から西にいくほど高くなる傾向にある。遺物も包含層（3～2層・3～3層）及び遺構から大量に出土し、コンテナ数にすると約50箱にのぼる。土器は縄文時代晚期、弥生時代前期から中期のものを少量含むが、多数を占めるのは弥生時代後期から古墳時代中期までのものである。土器の他には、サヌカイトの石器や壁材とみられる被熱した土製品等が含まれる。

**I-a区の遺構（図8・9・10、写真図版1）** I区の北東部にあたる調査区で、全調査区中最狭で、東西幅約10.0m、南北長約30.0mと南北が長軸の長方形である。試掘確認調査の結果に基づいた結果、層位の認識が他の調査区とずれ、3～2層上面を第1面、3～3層上面を第2面として調査した。従つて、他の遺構面より上面を第1面として捉えたことになる。この第1面では主に南北方向の鋤溝で構成される耕作面を検出したが、報告書では第2面を他の調査区と統一して第1面とした。

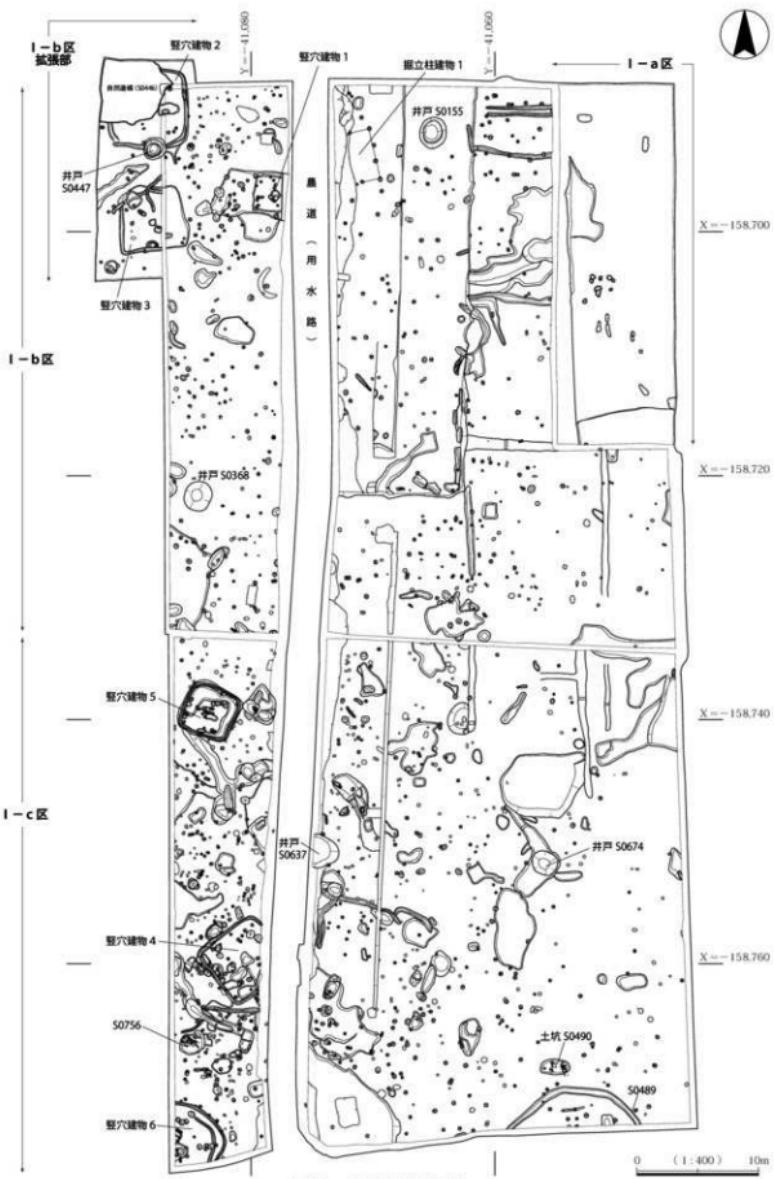


図 8 I 区全体平面図



図9 I-a・b区平面図

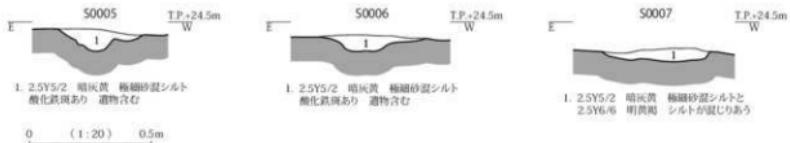


図 10 I-a 区遺構断面図

遺構・遺物とも希薄で、南側で段状の落ちと土坑や溝を数基検出した。また、調査区の西端中央で不定形の落ち込みを検出したが、隣接する I-b 区の落ち込み S0160 の続きと思われる。遺構、包含層から古墳時代中期の遺物が出土する。

**土坑 S0005・S0006・S0007(図 10)** いずれも調査区中央西寄りで検出した土坑である。直径 0.4 m、深さ 0.05 m をはかる。断面は皿形で、暗灰黄色シルトが堆積する。I-a 区全体が耕作地である可能性が高く、これらの土坑も耕作関連の遺構であろう。

**I-b 区の遺構**(図 8・9・11~21、写真図版 2~7) I-b 区は I-a 区を合わせると、X = -158.735 で I 区を 2 分した北側にあたり、1 辺約 45m の正方形だが、I-a 区を除くと L 字状を呈する。また、北西隅で竪穴建物を検出したため、その続きを調査する目的で調査区を拡張した(I-b 区拡張部と呼称する)。従って北西隅はさらに長方形が飛び出したような形状をとる。

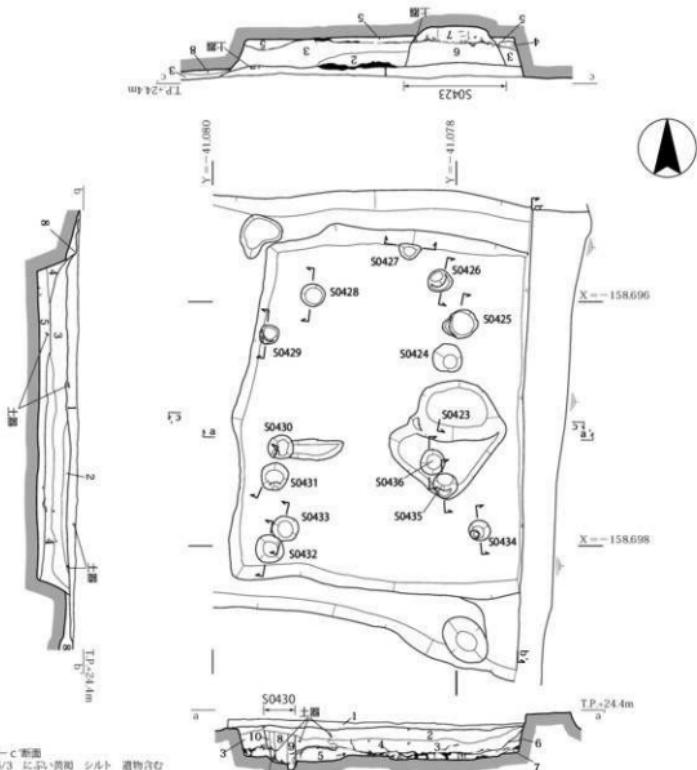
用水路(農道)を挟んで東と西に分かれるので、それぞれを用水路以東部、用水路以西部と呼称する。用水路以東部と用水路以西部では標高が異なり、用水路以東部の標高は最低部で T.P. + 24.2 m、用水路以西部の標高は T.P. + 24.4 m であった。

用水路以東部のなかでも Y = -41.062 より西、X = -158.722 より北の部分は、近代以降の耕作によって周辺より約 0.2 m 剥削されており、耕土の下は基盤層(4 層)が露呈していた。従って、この箇所は耕土(1 層)を掘削すると包含層の堆積は薄く、すぐに遺構面に達した。これより東側と南側は包含層(3-2・3-3 層)が 0.3 ~ 0.7 m 堆積しており、その中には弥生時代中期から古墳時代中期までの遺物が多数含まれていた。特に S0153・S0160・S0237 は 3 層の堆積が厚く、上層の遺物を多く包含し、たわんで落ち込んだ部分にあたると捉え、落ち込みとした。

また、掘立柱建物 1 以外にも北東部や南西部で規則的に並ぶ柱穴群を検出した。これらは掘立柱建物になる可能性が高いが、柱の深さが 0.1 m 未満と浅く、形状からも第 1 面とした遺構面より上層で構築された建物で、古墳時代以降の遺構の可能性が高い。Y = -41.060 以東になると柱穴等の遺構は希薄になり、畦畔や耕作溝等の遺構が顕著となる。

用水路以西部になると、包含層(3-2・3-3 層)の堆積がさらに厚くなり、厚いところでは 0.5 ~ 0.6 m にも達する。特に南西隅の落ち込み S0370 から斜め方向に帶状の堆積が認められ、用水路以東部の落ち込み S0160 まで続いている可能性が高い。この包含層や落ち込みには大量の土器が含まれるが、完形品が少なく摩耗した破片がほとんどだった。包含層を除去すると、北半からは竪穴建物を 3 棟検出し、西端では S0368 や S0447 等の井戸、S0369 等の土坑、溝、柱穴等を検出した。

包含層の遺物が弥生時代後期~古墳時代中期までのものに対し、第 1 面の遺構出土遺物は弥生時代後期後半に一部古墳時代前期が混じる。第 1 面として検出した居住域が弥生時代後期後半まで存続し、短期間断絶の後、古墳時代前期に居住域が形成された際整地を行い下層の土器が包含層に混じったのではないかと推測する。



b - b' - c - c' 面面

1. 10YR5/3 に咲く黄蘭 シルト 遺物含む  
(南土5030)
2. 10YR5/2 黄灰蘭 シルト 遺物含む(底床剥離)
- 2.5Y5/2 咲灰蘭 シルト 遺物含む(底床剥離)
4. 10YR5/4 に咲く黄蘭 シルト 遺物含む
5. 10YR4/4 蘭(シルト)(底床剥離)
6. 10YR5/6 黄蘭 シルト(50423)
7. 10YR5/2 黄灰蘭 シルトと
7. 10YR5/6 黄蘭 シルトが混じりあう(50423)
8. 2.5Y6/2 黄蘭 シルト

- | a-a 斜面                                    |                               |
|---|-------------------------------|
| 1. 10Y3/2 黄灰 シルト 遺物含む 磨化鉄錆あり<br>(覆土50300) | 6. 2.5Y6/2 黄灰 シルト             |
| 2. 2.5Y5/2 暗灰 黄シルト 遺物含む 磨化鉄錆あり<br>(粘土床)   | 7. 10Y5/6 黄灰 シルト              |
| 3. 10Y3/4 にぶい 黄褐色 シルト(粘土床)                | 8. 10Y5/3 にぶい 黄褐色 シルト(SD430)  |
| 4. 2.5Y3/1 黒褐色 シルト 剥離                     | 9. 10Y6/2 黑褐色 シルト(SD430)      |
| 5. 10Y5/6 黄褐色 シルト(粘土床)                    | 10. 10Y6/3 にぶい 黄褐色 シルト(SD430) |

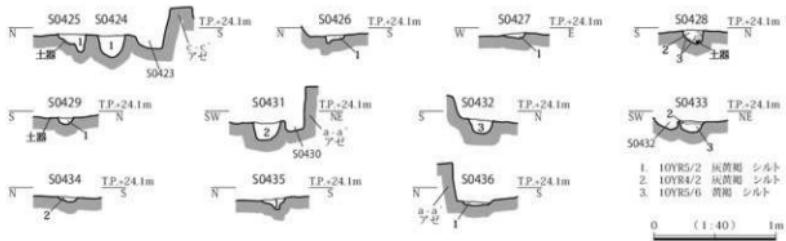


図11 竪穴建物1平・断面図

用水路以西部北半で検出した3棟の竪穴建物は平面プランが方形か隅丸方形を呈する。また、3棟とも外周溝や周堤は検出できなかった。

**竪穴建物1**（図11、写真図版2・3・6）I-b区の北東部用水路以西部の北東部で検出し、X=-158,697、Y=-41,078地点に位置する。竪穴建物1を含む広範囲に3-2・3-3層のにぶい黄褐色シルト土が厚く堆積していた（この覆土をS0300と呼称した）。

竪穴建物の平面は方形を呈する。また、竪穴建物の東部約4分の1は用水路に切られてさらに調査区外となるため検出し得なかった。そのため、屋内施設として中心に土坑S0423、西に3本の主柱穴S0432・S0433・S0428の検出にとどまった。東の柱穴は不明で、壁溝は有しない。

建物の主軸はN-5°-Eをとり、ほぼ南北方向を指向する。建物の規模は、南北長3.0m、東西長2.4m以上をはかり、正方形に近いと推測される。覆土は厚さ0.1m程度残存しており、にぶい黄褐色ないし灰黄褐色シルトで、覆土内から弥生時代後期末から古墳時代初めの土器が一定量出土した。

柱穴は覆土を少し下げたところで検出できたものと貼床層（断面の2・3・5層）上で検出したものがある。柱穴は検出面での直径は0.3mをはかるが、柱穴下部の直径は0.2m、深さは0.2~0.25mをはかる。埋土の状況や断面形状から、柱は抜き取られたものと考えられる。なお、柱穴間の芯々距離はS0428-S0432間で2.1mをはかる。小規模であることから、住居以外の作業場といった機能をもつ建物であった可能性が高い。

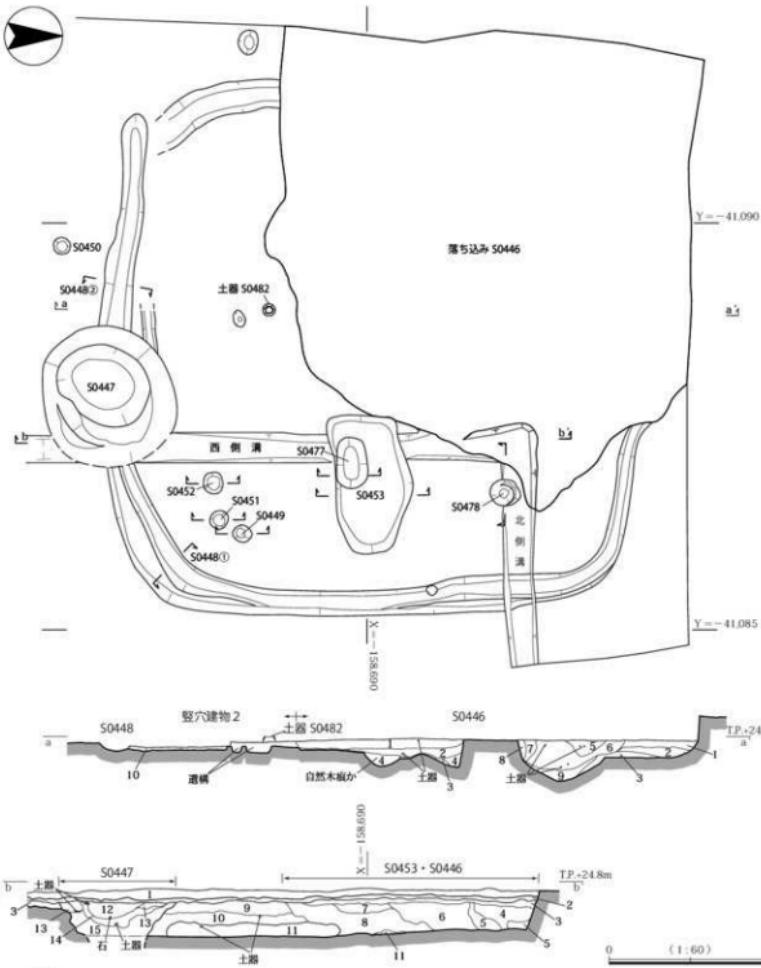
土坑S0423は建物の中央に設けられた中央土坑で、方形の中に楕円形が重なった形を呈する。検出段階での規模は長辺0.9m、短辺0.7m、深さ0.4mをはかる。埋土は3層で、上層は灰黄色シルトが、中層は黄褐色シルトが、下層は灰黄褐色シルトと黄褐色細砂混シルトが埋積し、中層と下層間に炭を挟み、炉と考えられる。弥生時代後期の甕〔17・18〕等が出土した（以下、器種の後や単独でも〔〕で表記された数字は、報告書掲載挿図・写真図版の遺物番号を表す）。

**竪穴建物2**（図12・13、写真図版2・3・4）I-b区の北東部用水路以西部の北西角で検出し、X=-158,690、Y=-41,087地点に位置する。I-b区では全体の4分の1程度しか検出できなかったため、北西部を竪穴建物の形状が判る範囲まで拡張して調査した。竪穴建物2を含む広範囲に3-2・3-3層のにぶい黄橙色シルト土が厚く堆積していた（この覆土をS0294と呼称した）。

建物の平面は隅丸方形を呈する。屋内施設として壁溝を有するが、北西部の多くを落ち込みS0446に削剥されているため、主柱穴は南東部の柱穴S0449・S0451・S0452以外は不明である。また、土坑S0453・土坑S0477が中央やや東にある。南側壁溝も中央で上層の井戸S0447に切られている。外周溝や周堤は検出できず、建物の出入口も上層遺構と重複するためか不明である。

建物の軸はN-5°-Eをとり、ほぼ南北方向を指向する。建物の規模は、南北長6.9m、東西長6.7m以上をはかり、正方形に近いと推測される。覆土は厚さ0.2m程度残存していた。灰黄褐色シルトで、覆土内から破片だが弥生時代後期の甕〔13・14〕等が一定量出土した。

壁溝S0448は検出されている3辺の壁際をめぐるが、貼床層（b-b'断面9・10層）の上から掘り込まれる。幅0.3~0.4m、深さ0.1mをはかり、埋土は灰黄褐色シルトであった。柱穴S0449・S0451・S0452は直径0.15~0.2m、深さ0.2mをはかる。柱痕は明瞭でない。掘方埋土はにぶい黄橙色、灰黄褐色、にぶい黄褐色シルトである。中央で検出した井戸S0447は長円形を呈する。長径0.6m、短径0.4m、深さ0.2mをはかる。埋土はにぶい黄褐色シルトに黄褐色シルトがブロックで混じる。竪穴建物の壁溝を切っており、上層の遺構と考える。



- a-a断面
- 10YR5/2 灰黄褐 シルト 遺物多く含む(S0446)
  - 10YR4/4 にぶい黄褐 シルト
  - 遺物多く含む(遺物層中部)
  - 10YR6/2 灰黄褐 シルト(S0446)
  - 1.1 10YR5/2 灰黄褐 シルト(S0446)
  - 5.10YR5/2 灰黄褐 シルト 遺物含む
  - 2.5Y5/2 灰灰 黄 シルト
  - 遺物含む 酢化鉄斑あり(S0446)
  7. 10YR5/1 黃灰 シルト 遺物含む(S0446)
  8. 10YR6/2 灰黄褐 シルト(S0446)
  9. 2.5Y5/1 黃灰 シルト(S0446)
  10. 2.5Y5/2 灰灰 黄 シルト
- b-b断面(西壁跡裏より抜粋)
1. 10YR5/4 にぶい黄褐 シルト 遺物含む  
(10YR5/4)
  2. 10YR5/6 灰黄褐 シルト
  3. 10YR5/3 にぶい黄褐 極細砂混シルト
  4. 2.5Y7/2 灰黄 極細砂混シルト 酢化鉄斑あり
  5. 10YR6/2 灰黄褐 極細砂混シルト 酢化鉄斑あり
  6. 10YR5/3 にぶい黄褐 シルト 酢化鉄斑あり
  7. 10YR6/4 にぶい黄褐 極細砂混シルト
  8. 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混シルト 酢化鉄斑あり
  9. 10YR5/6 黄褐 極細砂混シルト 酢化鉄斑あり  
(床床跡)
  10. 10YR4/2 灰黄褐 極細砂混シルト 酢化鉄斑あり
  11. 10YR6/6 明黄褐 極細砂混シルト  
(地山)
  12. 10YR6/2 灰黄褐 極細砂混シルト 酢化鉄斑あり  
(S0447)
  13. 10YR5/2 灰黄褐 極細砂混シルト 酢化鉄斑あり  
(S0447)
  14. 10YR5/6 明黄褐 極細砂混シルト(S0447)
  15. 10YR4/3 にぶい黄褐 極細砂混シルト(S0447)

図 12 豊穴建物 2 平・断面図

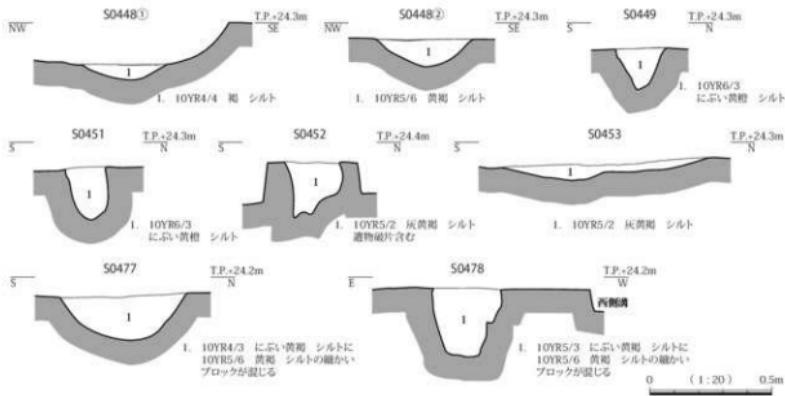


図 13 竪穴建物 2 内遺構断面図

覆土 S0294 や、竪穴建物 2 を切る井戸 S0447 から弥生時代中期から後期の土器が出土する。また、上層の落ち込み S0446 からは古墳時代前期の土師器細片に混じって、北部九州産の層灰岩製とみられる扁平片刃石斧 [109] が出土しており、近畿内陸部に搬入されたものとしては初出であることから注目される。

**竪穴建物 3** (図 14、写真図版 2・3・5・7) 竪穴建物 2 の南に並行する形で、X = -158,700、Y = -41,092 地点で検出した。竪穴建物 2 と同じく、I-b 区では全体の 3 分の 1 程度しか検出できなかったため、北西部を竪穴建物の形状が判る範囲まで拡張して調査した。竪穴建物 3 を含む広範囲に 3-2・3-3 層のにびい黄橙色シルト土が厚く堆積していた（この覆土を S0295 と呼称した）。

建物の平面は隅丸方形を呈する。屋内施設として壁溝 S0464 を有するが、I-b 区で検出した際に貼床面まで一度に掘削した結果、東辺の壁溝の検出ができなかった。I-b 区拡張部で慎重に掘削を進めた結果、壁溝 S0464 を検出した。柱穴 S0400・S0463 等が主柱穴にあたる可能性がある。中央には土坑 S0466・S0470 が存在し、S0470 が炉にあたると考える。南辺中央にも土坑 S0465 が存在する。

建物の軸は N-5°-W をとり、ほぼ南北方向を指向する。建物の規模は、南北長 5.3 m、東西長 5.7 m をはかり、ほぼ正方形である。覆土は厚さ 0.1 ~ 0.2 m 程度残存していた。にびい黄橙色シルトで、覆土と貼床層 (a-a'・b-b' 断面の 2 層、c-c' 断面の 4・5 層) の境界面には炭層が存在する。

柱穴は覆土を少し下げたところで検出できたものと貼床層の上で検出したものとがある。柱穴は直径 0.3 m、深さは 0.2 ~ 0.25 m をはかり、埋土の状況や断面形状から、柱は抜き取られたものと考えられる。

壁溝 S0464 は検出されている四辺の壁際をめぐるが、貼床層の上から掘り込まれる。幅 0.3 ~ 0.4 m、深さ 0.1 m をはかり、埋土はにびい黄橙色シルトであった。南辺中央で検出した土坑 S0465 は円形を呈するが、壁溝 S0464 に切られる。直径 1.0 m、深さ 0.4 m をはかる。埋土はにびい黄橙色シルトもしくは灰黄褐色シルトである。北西部の土坑 S0456 や土坑 S0465 は貯蔵穴の可能性がある。炉 S0470 はほぼ円形で、直径 0.6 m、深さ 0.1 m をはかる。埋土は黒褐色シルトで土器片を含む。覆土 S0295 から弥生時代後期の甕 [15・19] が出土している。

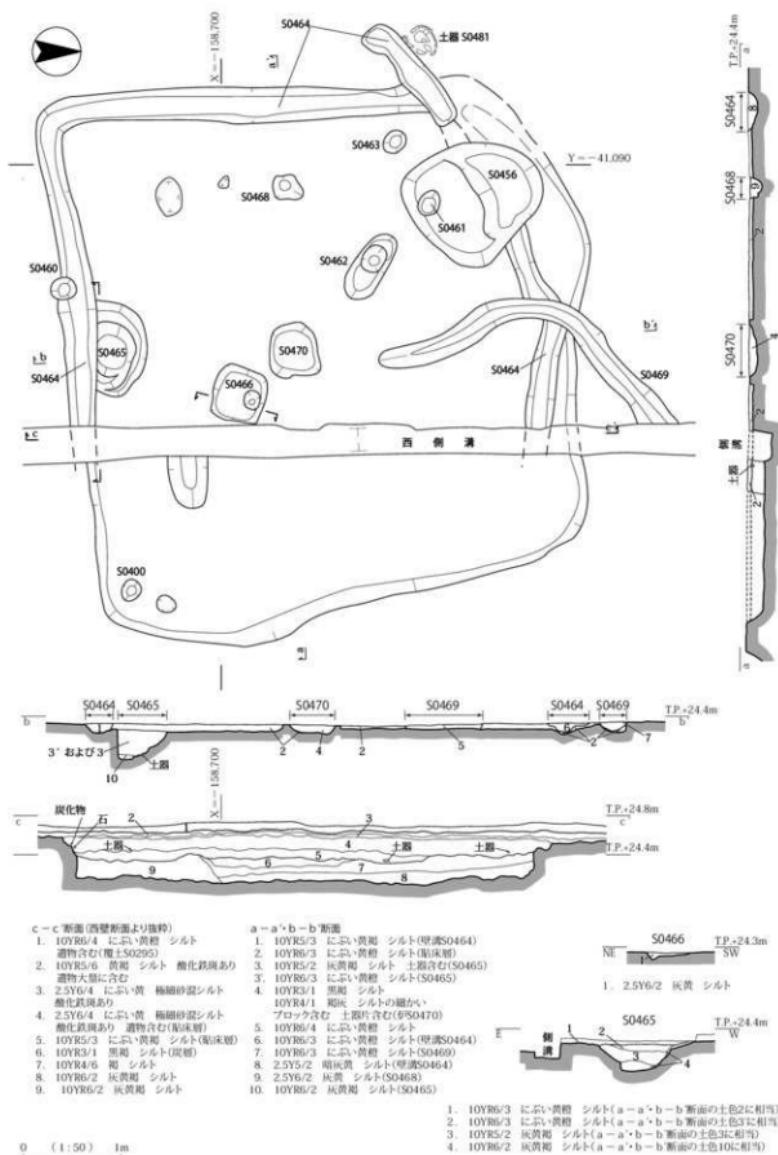


図 14 積穴建物 3 平・断面図

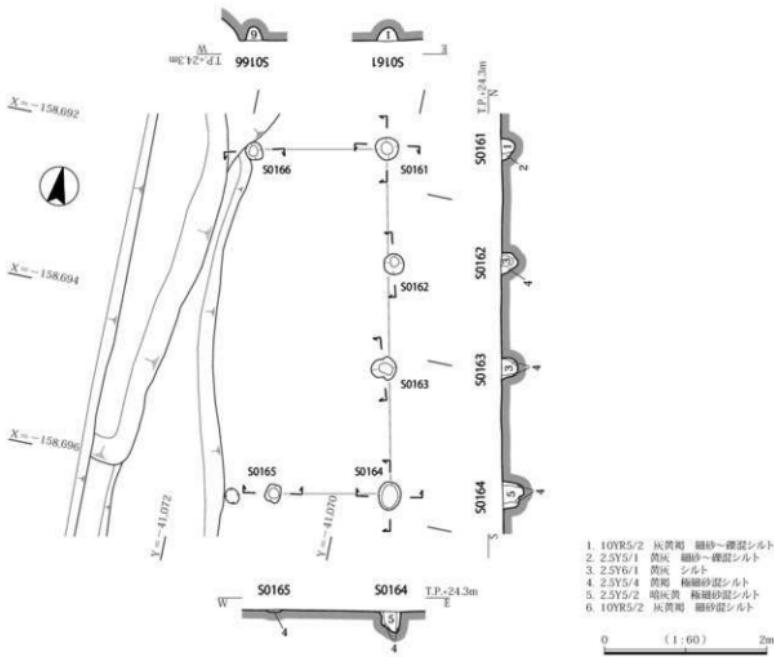


図 15 掘立柱建物 1 平・断面図

竪穴建物 1 から竪穴建物 3 は周溝間距離が約 5 m と近接する。上屋があったことを勘案すると、同時に併存していたと断定したいが、出土遺物に大きな時期差がみられず、I-c 区の建物とは 40 m 以上の距離があることから、相関性をもった遺構と捉える。

**掘立柱建物 1** (図 15、写真図版 6・7) 用水路以東部の北西部で検出し、 $X = -158,694$ 、 $Y = -41,070$  地点に位置する。梁行 1 間、桁行 3 間の掘立柱建物である。

規模は梁行が 1.5 m、桁行は 4.5 m をはかる。桁行側の柱穴間の芯々距離は 1.5 m で、建物の軸は N-5°-E をとる。西側は近世以降の溝によって削平されているため、実際の梁行は 2 間以上あったと考えられる。柱穴 S0164 や柱穴 S0165 の南にある柱穴 S0196、S0197 等も芯々距離は 1.0 m と短いが、掘立柱建物 1 南列と平行なので、建物に付随する柵列柱穴等の可能性がある。柱穴は直径 0.2 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m をはかる。柱掘方の埋土は灰黄褐色シルト層であった。

柱穴 S0161 や S0162 から弥生土器の小片 [11] 等が出土しており、すぐ西に位置する井戸 S0155 から弥生時代後期の遺物が出土していることから、掘立柱建物 1 は弥生時代後期の遺構と考える。

**井戸 S0155** (図 16、写真図版 7) 掘立柱建物 1 の西側、用水路以東部の北西部、 $X = -158,692$ 、 $Y = -41,065$  地点で検出した。平面長円形の素掘り井戸で、南北に長軸があり、長径 2.6 m、短径 2.1 m、底部径 0.5 m、深さ 1.7 m をはかる。断面は逆台形を呈し、平面形をみると三重円を描くような井筒部を徐々に狭めて掘りくぼめた形状をとる。埋土は包含層の灰黄褐色シルトが水平に幾層か堆積し、下層

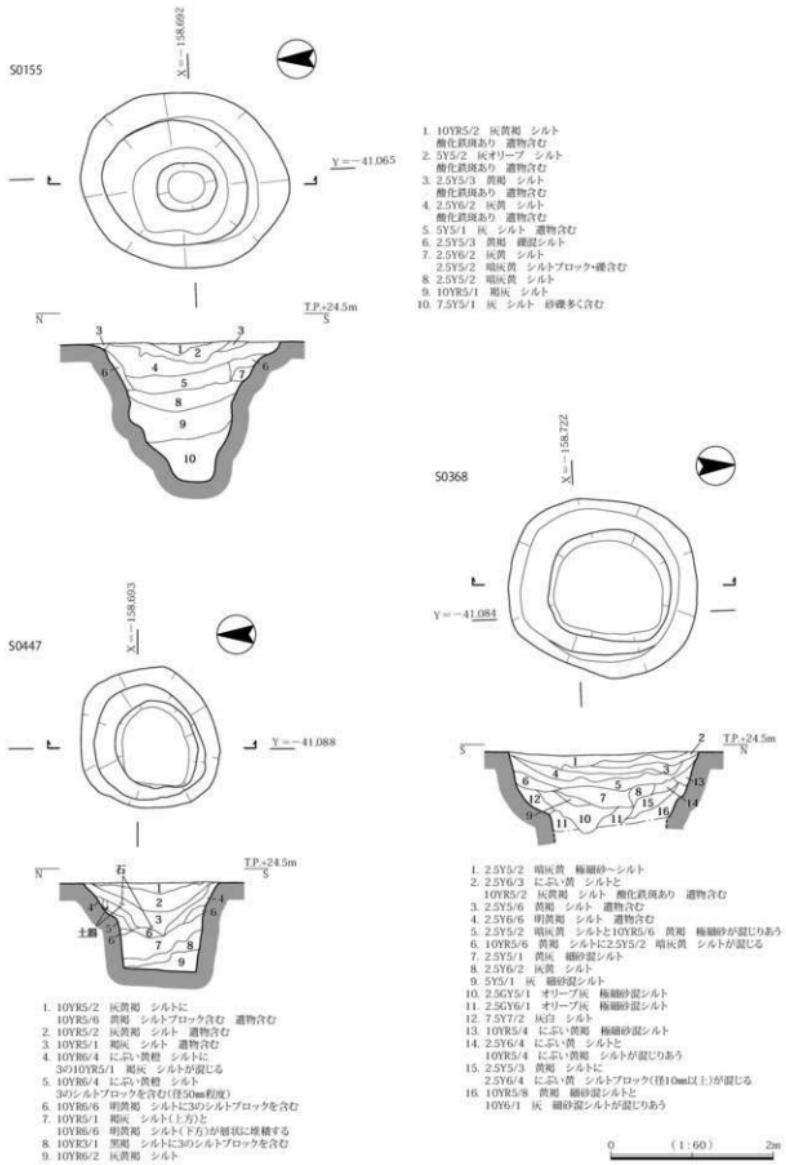


図16 戸井 S0155・S0368・S0447 平・断面図

にいくほど砂礫を多く含み湧水層に達していた。

上層から下層には遺物を多く含むが、完形のものではなく、井戸廃絶に伴う埋納等の意図をもって投棄された土器とは考えにくい。遺物は弥生時代後期の甕〔5～8〕等が多数出土する。

**井戸 S0368**（図 16）用水路以西部の南西部、 $X = -158.722$ 、 $Y = -41.084$  地点で検出した。円形の素掘り井戸で、直径 2.3 m、検出した深さ 1.0 m をはかるが、最底部まで掘りきれていない。

断面は逆台形を呈し、底部は二重に掘りくぼめた形状をとる。埋土は上層から中層は包含層の暗灰黄色シルトや黄褐色シルトが堆積し、下層は地山の黄褐色シルトに上層の土がブロックとして混じる。

土師器脚付皿〔22〕が出土しており、近接する土坑 S0362 とともに古代末の遺構と考えられる。

**井戸 S0447**（図 16、写真図版 7）用水路以西部の北西部と拡張部の境界、 $X = -158.693$ 、 $Y = -41.088$  地点で検出し、竪穴建物 2 の壁溝 S0464 を切る。

円形の素掘り井戸で、直径 1.7 m、検出した深さ 1.1 m をはかるが、最底部まで掘りきれていない。断面は逆台形を呈し、底面は平らで底部は三重に掘りくぼめた形状をとる。埋土は上層から中層は灰黄褐色シルトに黄褐色シルトが混じって堆積し、下層は褐灰色シルトや黒褐色シルトに上層のブロックが混じる。広口壺〔30〕が出土している。

**溝 S0455**（図 17、写真図版 7）拡張部の竪穴建物 2 と竪穴建物 3 の間で検出した北東～南西に直線的にのびる溝である。北東端は検出したが、南西端は調査区外にのびている。検出長 5.0 m、最大幅 0.6 m、深さ 0.3 m をはかる。断面は皿形で、埋土は褐灰色シルトで大量の遺物を含む。弥生時代後期の高杯〔33〕や古墳時代前期の甕〔32〕が出土しており、古墳時代前期に埋没したと考えられる。

竪穴建物 2 と竪穴建物 3 の間にあるが、直線的であることや出土遺物の時期から竪穴建物より上層の遺構と判断した。また、溝 S0455 と竪穴建物 3との間、竪穴建物 3 の壁溝 S0464 北西肩部からは古墳時代前期の二重口縁壺 S0481〔35〕が出土している。拡張部のこの周辺一帯は竪穴建物 2 と竪穴建物 3 を検出するため慎重に掘削を進めた結果、1-a 区より高い 3-4 層上面で遺構面を検出した。そのため、やや新しい古墳時代前期の遺物を伴う遺構が数多く検出された。

**土坑 S0369**（図 17、写真図版 7）用水路以西部の南部、 $X = -158.727$ 、 $Y = -41.083$  地点で検出した。落ち込み状遺構 S0370 の先端に位置する長円形の土坑である。長径 2.15 m、短径 0.9 m、深さ 0.2 m をはかる。断面は皿形で、埋土は褐灰色シルトが堆積する。浅い土坑だが遺物を多く含み、弥生土器高杯や小形壺〔23～25〕等が出土した。弥生時代後期の遺構と捉える。

**用水路以東部の遺構**（図 18）用水路以東部では上記の遺構以外にも多数の柱穴、ピット、土坑、溝等を検出した。掘立柱建物 1 周辺には柱穴（S0168～S0170 等）が多くみられ、柱穴 S0196・S0197 は掘立柱建物 1 の南辺に平行するので、建物に伴う柵列等になる可能性がある。柱穴 S0204 や S0205 も列は復原できなかったが、柱痕が確認でき建物の一部になる可能性がある。

また、掘立柱建物 1 や井戸 S0155 の東の 1 段高い部分や、落ち込み S0237 の南には長方形に並ぶピット列が存在し掘立柱建物になる可能性が高いが、深さが 0.1 m 未満と浅く、上層の掘立柱建物の残りを検出したと判断したため、ここでは報告しなかった。南西部にあたる  $X = -158.725 \sim -158.730$ 、 $Y = -41.060 \sim -41.070$  間にも東西を長軸とする長方形にピットや柱穴が認められ、掘立柱建物である可能性が高いが、上記と同様、上層の遺構と判断した。その西付近にある柱穴 S0251 や S0252、S0254 も直径 0.1 m 程度の柱痕を確認でき、建物の一部となる可能性が高い。

落ち込み S0160 は I-a 区まで広がっており、S0153 や S0160、S0237 といった落ち込みは、本

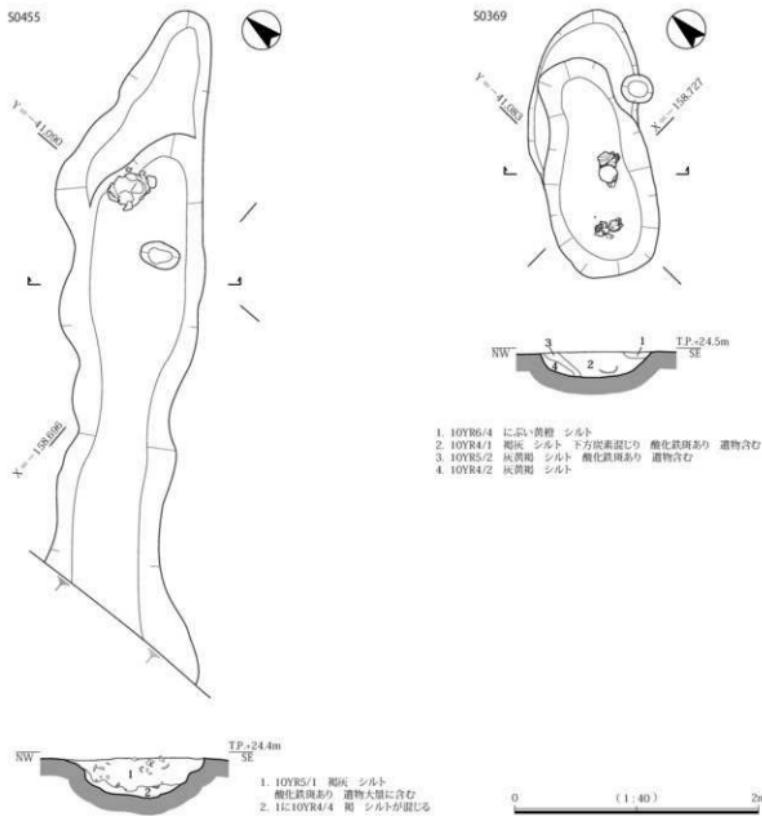


図 17 溝 S0455・土坑 S0369 遺物出土状況図

來はもっと帶状に広がって一連のものだったと考えられる。用水路以西部の S0370 も同じ性格の遺構である。上層の包含層を掘削してより深くたわんだところを検出したもので、土器等が投棄され溜まっていたと考えられる。

また、土坑 S0250 は不定形の土坑で、中にピット等を検出した。I-c 区で検出した土坑 S0490 や土坑 S0756 同様、炭と共に壁材とみられる土質質の土製品を含んでおり、これが竪穴建物に伴うものであれば、I-b 区の南東部には消失しているが竪穴建物やそれに付随する施設があった可能性もある。土製品は土坑 S0250 のみでなくこの周辺の包含層中からも一定量出土している。

$Y = -41,060$  より東の南東部では遺構は希薄になり、北側では東西の、南側では南北の方位にのつた畦畔や溝がピット等とともにみられるので、耕作地としての利用がなされていたと考えられる。 $Y = -41,060$  周辺で居住域と生産域の境界があったと思われる。

**用水路以西部の遺構**（図 19～21）用水路以西部では現地表は用水路以東部より高いが、それは現

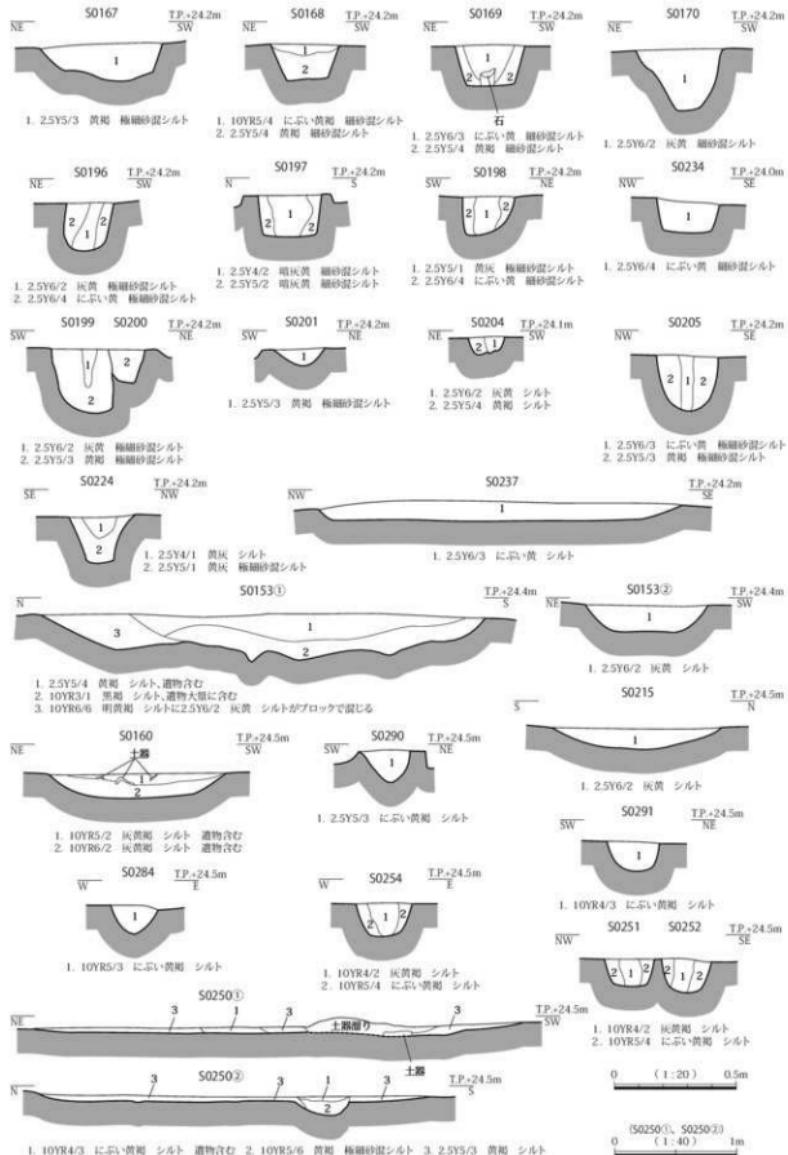


図 18 I - b 区用水路以東部構造断面図

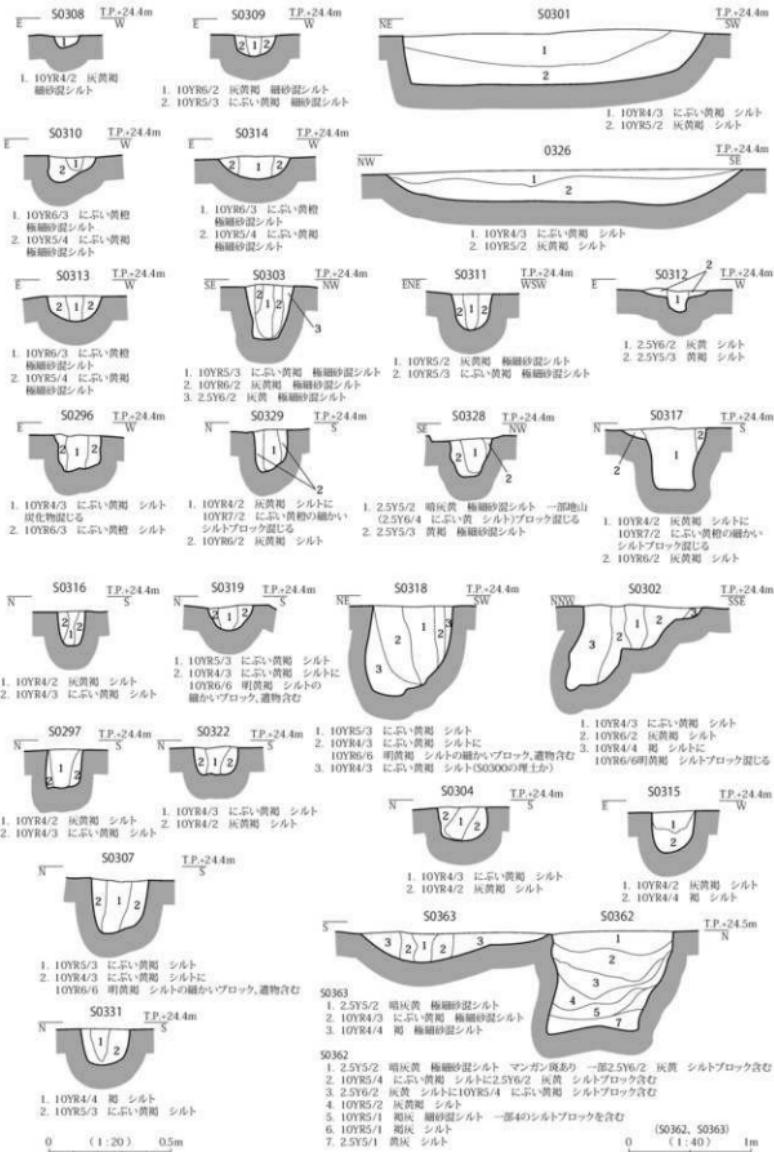


図 19 I - b 区用水路以西部遺構断面図 (1)

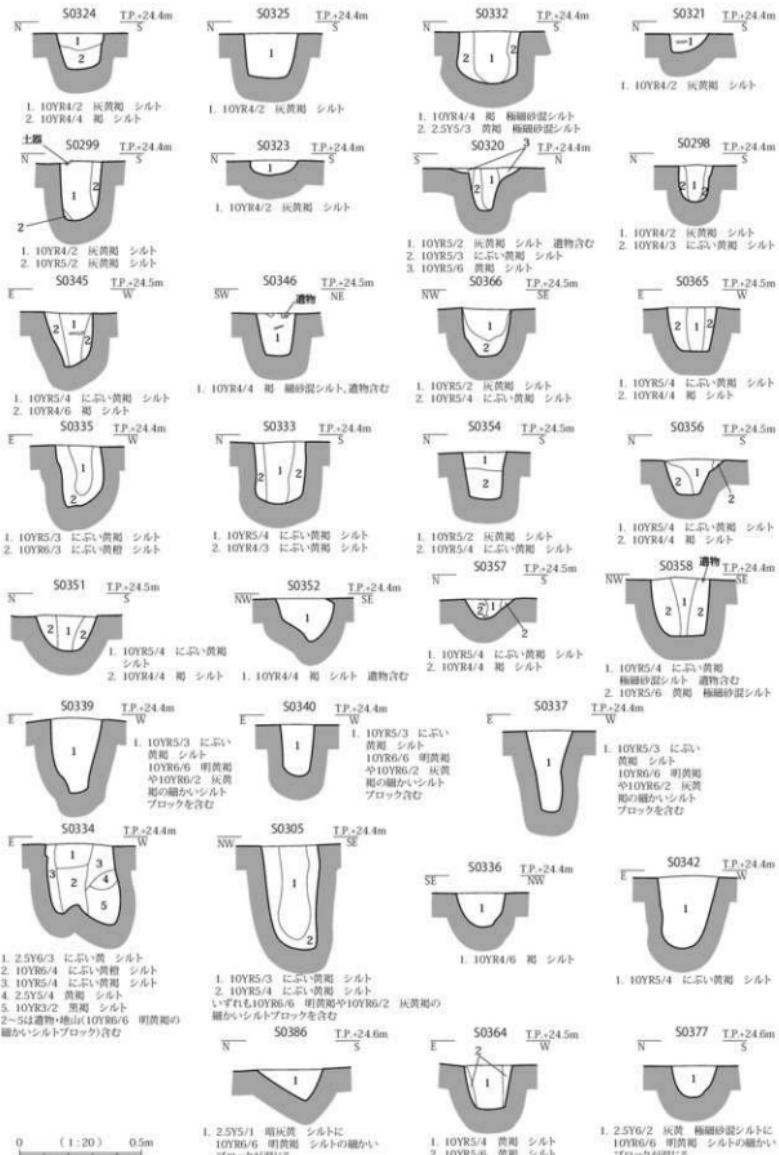


図 20 I-b区用水路以西部遭構断面図 (2)

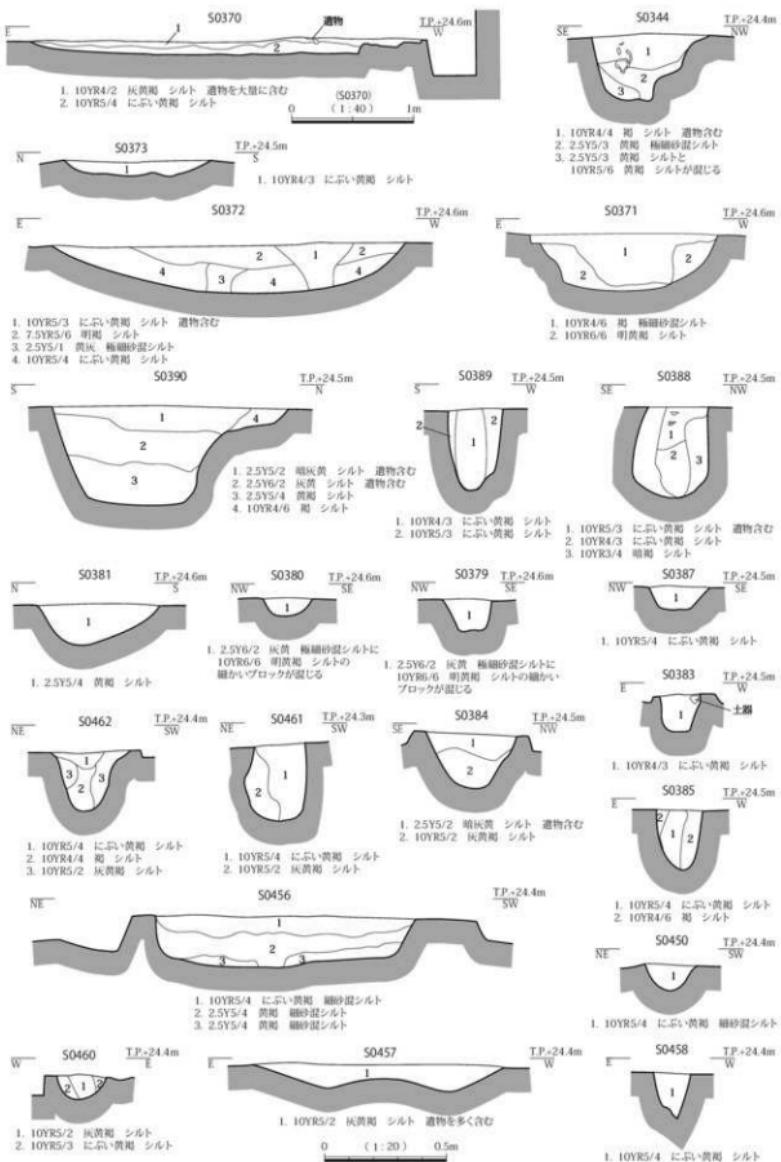


図 21 I-b 区用水路以西部遺構断面図 (3)

代まで耕作地として利用されていたため、盛土や耕土で厚く覆われていた。また、それらの層を除去すると地形的には遺構面は北西に低くなるため、包含層（3層）が厚く堆積していた。遺構の遺存状況も良く、多くの遺構を検出した。

遺構の密集度は用水路以東部よりさらに密になり、前述の竪穴建物や井戸、溝以外にも土坑や落込み、柱穴、ピット等を検出した。北西部に特に多く、中央はやや疎らになるが南西部では落込み S0370 と重複するように井戸や土坑が検出された。井戸 S0368 や井戸 S0447 等は  $Y = -41.085$  線上に並んでみられる。土坑 S0301 や土坑 S0326 は不定形の土坑だが、落込み S0370 と同じく上層のたわみである可能性が高い。

北部の柱穴 S0296・S0297、S0308～S0314、S0316～S0320・S0322～S0325 等は直径 0.2～0.4 m、深さ 0.1～0.4 m をはかり、中心に直径 0.1 m 程度の柱痕をもつ柱穴である。柱穴 S0318・S0302 は柱穴が重複しており、柱の建て替えがあったことを示している。特に竪穴建物 1 の覆土 S0300 上からは規模が大きく、残存状態が良い柱穴を複数検出したが、建物を復原するに至らなかった。軸線を推定するなら北東—南西に 45 度斜行するようにみえ、掘立柱建物 1 とは方向が異なる。また、いずれの柱穴からも遺物は細片しか出土しておらず、明確な時期決定ができなかった。

土坑 S0363 と土坑 S0362 は直径が 1.0 m 以上有する土坑である。土坑 S0363 は深さが 0.2 m で中心に柱穴状の遺構に入る。土坑 S0362 は深さが 0.8 m をはかり断面は逆台形で、その形状や堆積状況から井戸になる可能性がある。瓦器碗・土師器皿〔20・21〕が出土し、近接の井戸 S0368 と共に古代末の遺構になる。

中央部で検出した柱穴 S0345、S0346、S0351、S0352、S0354・S0356～S0358 や、それよりやや北の S0332～S0338・S0340・S0342 等も柱穴もしくはピット、土坑である。直径 0.1～0.4 m、深さ 0.05～0.4 m をはかる。断面は皿形もしくは逆台形で中心に直径 0.1～0.15 m の柱痕をもつものもある。土坑 S0342 や柱穴 S0352 からわずかに弥生時代後期の甕や高杯の破片が出土している。

南西隅で検出した落込み S0370 は東西最大幅約 3.5 m、南北長約 8.0 m に広がる。深さ約 0.1 m で、土坑 S0369 や S0390、S0372 に切られる。3～2 層上面で精査を行ったところ、北東から南西の斜め方向にちょうど落込み S0160、落込み S0237、落込み S0370 をつなぐように遺物の破片を大量に含む落込みが広がっていた。本来これらは上層の包含層の一部であるが、包含層を平均的な高さで掘削した結果、特にたわんだところが下層の第 1 面まで残ったと言える。落込み S0370 からは弥生時代後期の広口甕や甕〔26・27〕等が出土している。

土坑 S0371 や土坑 S0372、土坑 S0390 は南端部側溝によって半裁された形で検出した土坑である。土坑 S0371 は直径 0.8 m、深さ 0.25 m、土坑 S0372 は直径 1.45 m、深さ 0.2 m、土坑 S0390 は直径 0.95 m、深さ 0.4 m をはかる。断面形状は皿形、逆台形と様々である。各土坑からは弥生時代後期の甕や鉢の一部〔28・29〕が出土している。落込み S0370 内の S0389、S0388 も柱穴と思われる。落込み S0370 の東にあるピット、S0379、S0387、S0383 等は断面形状や埋土が似ており、列状に並ぶ等何らかの関連性ある遺構と考えられる。井戸 S0368 と土坑 S0362 の間で、包含層中を除去した第 1 面直上からであるが、弥生時代後期の甕 S0409〔34〕も出土している。

I-b 区の拡張部でも竪穴建物や溝、井戸以外にも土坑 S0456、S0457 やピット等を検出している。土坑 S0456 は竪穴建物 3 の壁溝を切るので、これより新しいと思われるが出土遺物は土製品（壁材）等で、正確な時期は不明である。

I-b区は用水路以東部と以西部、また、以東部の中でも場所によって遺構面の高さが異なり捉えにくい部分があるが弥生時代後期の遺物が多く、I-b区拡張部の溝S0455や土器S0481、竪穴建物2の上層、落ち込みS0446は古墳時代前期から中期の遺構である。落ち込みに含まれる土器は須恵器も含み弥生時代後期末から古墳時代中期を主体とする等、ややばらつきがある。わずかに弥生時代前期や中期の土器、石器を含むものの、I-b区の第1面は弥生時代後期が主体で、竪穴建物2のある北西部等の一部で、古墳時代前期に機能した遺構面が重複していたと考えられる。

**I-c区の遺構**（図9・22～36、写真図版8～14）I区をX=-158.735ラインで2つに割り、それより北半をI-b区、南半をI-c区として調査した。I-c区もI-b区同様用水路（農道）によって、東西に分断されており、それぞれを用水路以東部、用水路以西部と呼称する。用水路の下はやはり中近世の溝で擾乱されている。

I-c区ではI-b区を上回る密度で遺構、遺物を検出した。用水路以西部で竪穴建物3棟（内1棟は円形建物、2棟は方形建物）を検出した他、井戸、土坑、溝、柱穴等を検出し、西側ほど遺構、遺物とも密である。用水路以東部でも西側は遺構の種類から居住域と言えるが、東側では若干であるが畦畔の痕跡等を検出したことから、耕作地としての利用も考えられる。

遺構面の標高は用水路以東部の南東部でT.P.+24.4m、北東部でT.P.+24.5m、用水路以西部の南西部でT.P.+24.5m、北西部でT.P.+24.6mである。全体地形としては南東から北西に高くなるが、I-c区内ではさほど標高差はないと考えられる。

**竪穴建物4**（図23・24、写真図版8・9・11）I-c区の竪穴建物3棟は全形もしくは2分の1以上を調査区内で検出した。

竪穴建物4はX=-158.760、Y=-41.080地点に位置する。竪穴建物4の上層には、包含層の3-2・3-3層の灰黄褐色シルト土が厚く堆積した状態であった（この上層の覆土をS0678と呼称した）。建物の平面は隅丸方形を呈するが、東側溝で一部を切られるため全体の約4分の3を検出した。壁溝S0761は四辺をめぐるようで、その他、屋内施設として中央土坑S0785、主柱穴（S0794・S0771等）をもつ。竪穴建物4の南西部を環状にめぐる溝S0677が外周溝になる可能性もあるが、部分的な検出にとどまり、断定できない。

建物の軸はN-45°-Eをとり、北東-南西方向を指向する。建物の規模は、南北長5.8m、東西長6.0m以上をはかり、ほぼ正方形と推測される。覆土は厚さ0.2m程度残存し、灰黄褐色シルトで、覆土内から弥生時代後期から古墳時代初めの土器が多量に出土した他、炭も含まれる。

壁溝S0761は建物外辺に沿って壁際をめぐるが、貼床層（2層）の上から掘り込まれる。幅0.2m、深さ0.2mをはかり、断面逆台形で埋土は暗灰黄シルトであった。

柱穴はS0771、S0794等角に位置するものもあるが、それ以外も多数検出した。直径0.15～0.2m、深さ0.1m程度のものが多い。直径0.1m程度の柱痕がみられるものもあり、掘方埋土は黄褐色シルトで、遺物は出土するが細片で図示し得なかった。

中央で検出した土坑S0785は不定形を呈し、1辺1.0mをはかる。埋土は黄褐色シルトで、上層のS0678の埋土に炭が混じり埋積することから、炉の可能性がある。他にもS0787、S0788等の直径0.6～0.7mの土坑やそれよりやや小形の直径0.4m程度のS0773、S0774等の土坑、また、S0776やS0762等の溝状の遺構もみられる。S0787、S0788等の土坑は貯蔵穴になる可能性もあり、溝S0677の外にある土坑S0756からは壁材と推測する土製品が出土し、竪穴建物4に関連する可能性が



図22 1-c区平面図

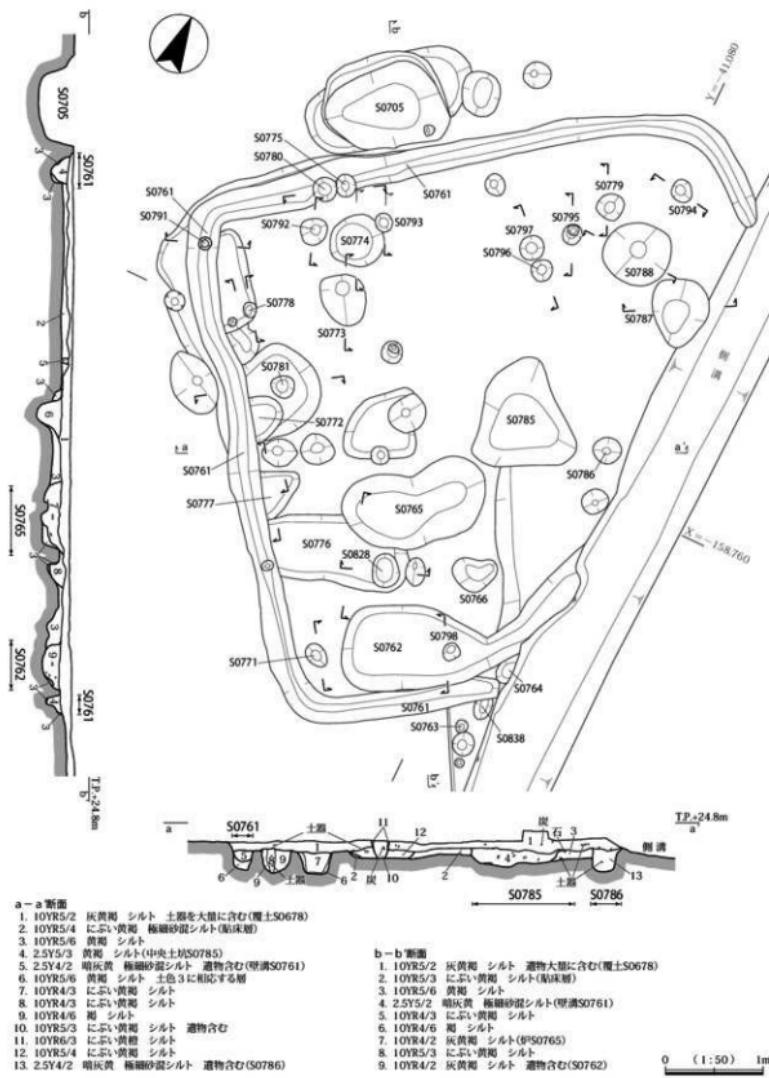


図23 竪穴建物4平・断面図

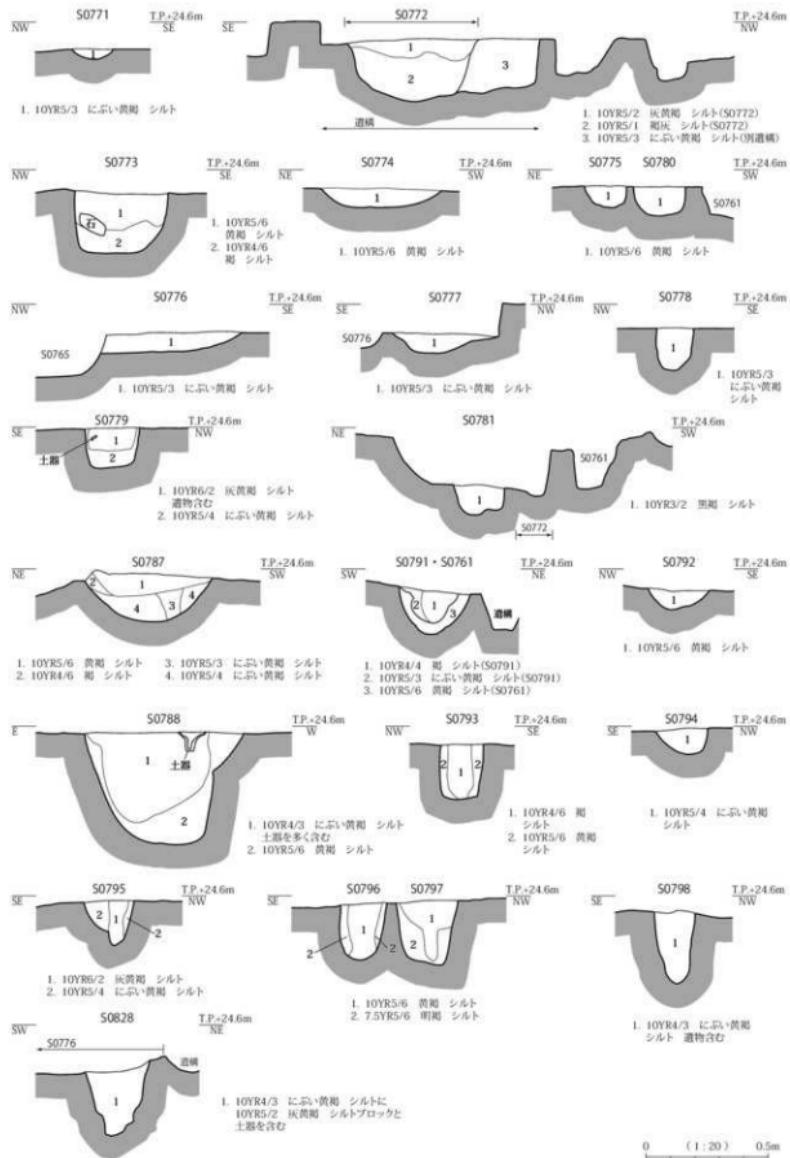


図 24 竪穴建物 4 内遺構断面図

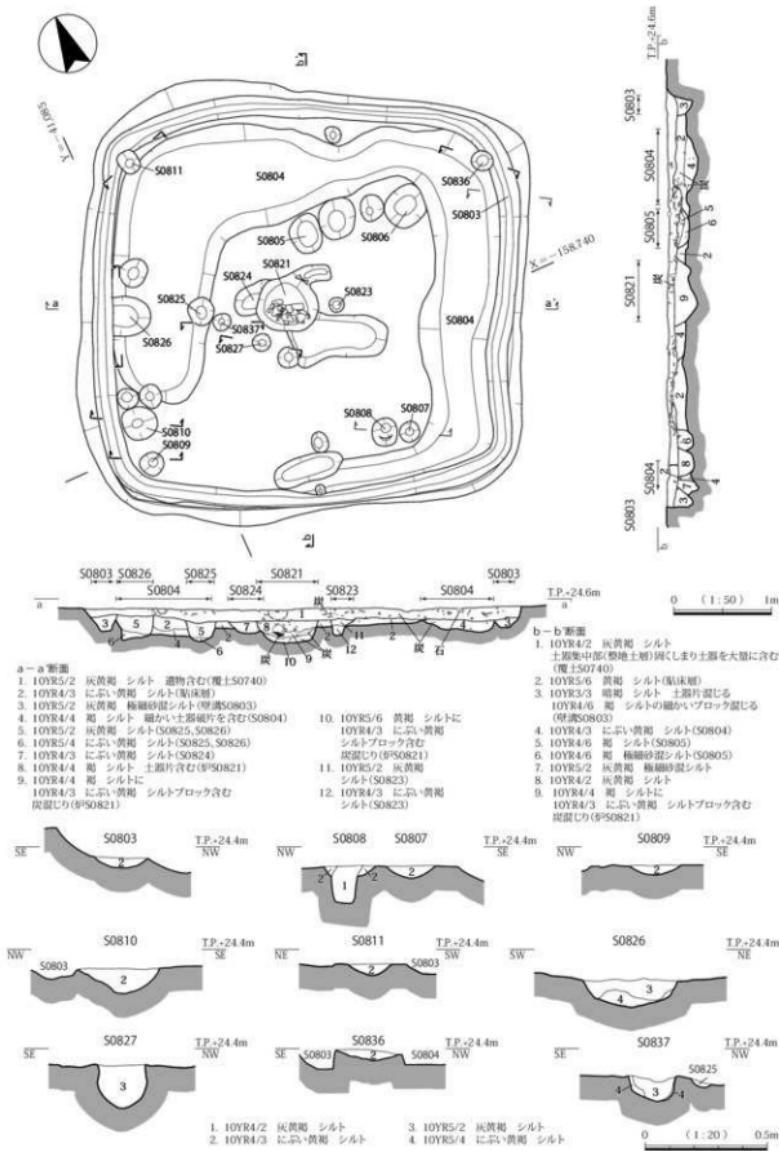


図 25 窓穴建物 5 平・断面図、窓穴建物 5 内遺構断面図

ある。

遺物は覆土 S0678 内や土坑 S0777 から弥生時代後期の甕や石器〔109・113・116〕が出土した。

**竪穴建物 5**（図 25、写真図版 8・9・10・13）I-c 区では最も北の I-b 区に近い、X=-158,740、Y=-41,085 地点に位置する。竪穴建物 5 の上層には包含層の 3-2・3-3 層の灰黄褐色シルト土が厚く堆積した状態であった（この上層の覆土を S0740 と呼称した）。

竪穴建物 5 の東には方形ともとれる土坑 S0739 を検出しこれも竪穴建物になると思われたが、掘削を進めると凹凸の激しい構状になったため、建物でないと判断した。竪穴建物 5 の南東にあり、溝 S0721 で竪穴建物 5 と区画されるかのような S0733 も検出時は方形を呈し、竪穴建物になるかと思われたが、屋内施設としての壁溝や柱穴が検出できなかったため、落ち込みと捉えた。

竪穴建物 5 は全形を検出し、平面は隅丸方形を呈する。壁溝 S0803 は四辺をめぐる。その他、屋内施設として炉 S0821、主柱穴（S0811・S0809・S0836 等）をもつ。建物の軸は N-45°-E をとり、北東-南西方向を指向する。外周溝や周堤は検出していない。

建物の規模は、南北軸長 4.3 m、東西軸長 4.5 m とほぼ正方形である。竪穴建物 1 に次ぎ小規模である。覆土は厚さ 0.2 m 程度残存し灰黄褐色シルトで、覆土 S0740 内から土器が多量に出土した。

壁溝 S0803 は壁際をめぐり、貼床層（2 層）から掘り込まれる。幅 0.2 m、深さ 0.1 m をはかり、埋土は暗褐色もしくは灰黄褐色シルトであった。床面も炉 S0821 を中心として 2.5 m 四方は高く、その外側は溝状の遺構 S0804 が幅 0.7 ~ 1.0 m で三方をめぐる。

主柱穴は直径 0.2 m、深さ 0.1 m 程度のものが多い。柱穴 S0808、S0807 等柱痕がみられるものもあり、掘方埋土はにぶい黄褐色シルトで、遺物は細片で図示し得なかった。柱穴間の芯々距離は長軸側が 3.5 m、短軸側は 3.0 m であった。中央で検出した炉 S0821 は円形を呈し、直径 0.5 m、深さ 0.2 m をはかる。埋土は褐色シルトに黄褐色シルブロックや炭が混じり埋積する。弥生土器甕〔78〕等が出土した。これ以外の遺物は、覆土内から弥生時代後期後半から末の甕や台付甕、脚付鉢〔75~77〕が出土した。

**竪穴建物 6**（図 26・27、写真図版 8・9・10・11・13）I-c 区の南西隅にあたる X=-158,775、Y=-41,080 地点に位置する。調査区の南西隅で検出したが、現地表にあった構造物により遺構面が攢乱されていたため、包含層を除去した 4 層上面で平面形を捉えることができず、本来の構築面より低い位置で検出した。また、西側と南側は調査区外にあり、全体の 2 分の 1 弱の検出と思われる。竪穴建物 6 の上層には包含層の 3-2・3-3 層の灰黄褐色シルトが厚く堆積した状態であった（この上層の覆土を S0768 と呼称した）。

竪穴建物 6 の平面は円形を呈するが、全体の約 2 分の 1 の検出のため壁溝 S0696 も北東部の検出にのみとどまった。その他、屋内施設として炉 S0700、柱穴 S0829、S0831 や土坑 S0698、S0701 をもつ。建物の規模は、直径 4.0 m をはかり、ほぼ円形である。覆土 S0678 は厚さ 0.3 m 程度残存していた。灰黄褐色シルトで、覆土内から土器が多量に出土した。貼床層（a-a' 断面の 1 層、b-b' 断面の 7~11 層）は灰黄褐色シルトと黒褐色シルト（炭層）が互層となって堆積する。

壁溝 S0696 は壁際をめぐらせ、貼床層の上から掘り込まれる。幅 0.2 m、深さ 0.15 m をはかり、埋土はにぶい黄褐色シルトであった。柱穴は直径 0.15 m、深さ 0.15 m 程度のものが多い。柱痕がみられるものもあり、掘方埋土はにぶい黄色シルトで、遺物は細片で図示し得なかった。土坑は直径 0.4 m、深さ 0.4 m 程度のものが多く、土器や炭を含み、黒褐色を呈する。土坑 S0701 からは甕〔65〕等が出土した。中央で検出した炉 S0700 は円形を呈し、直径 0.5 m、深さ 0.4 m をはかる。埋土は黒褐色シ

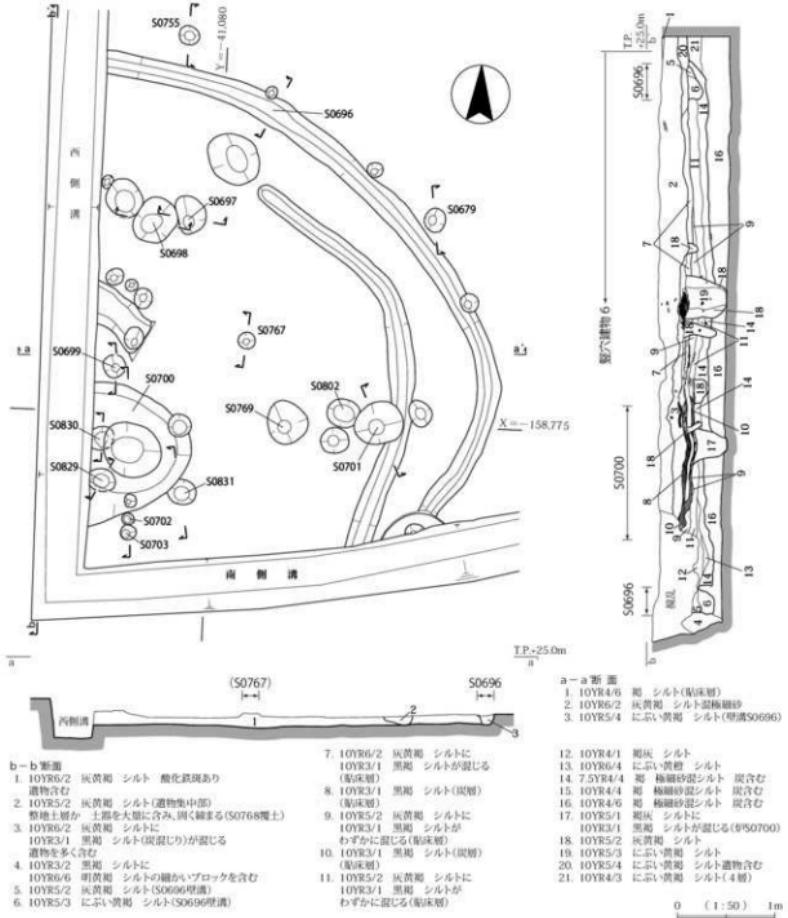


図26 積穴建物6平・断面図

ルトに褐色シルトや灰黄褐色シルトブロックが混じり埋積する。

近畿の主な地域で、積穴建物は弥生時代後期以降、多くは平面形が円形から方形へと移行するとされる。しかし、積穴建物6の覆土及び炉S0700内で出土した土器は弥生時代後期から後期末のもので、I-c区の上層包含層中にも弥生時代中期の土器や石器は含まれるが、ごく少量である。積穴建物6は他の積穴建物より古い様相をもつが、建築時期が弥生時代中期となるかは不明である。

しかし、I-b区の出土遺物にも時期幅があり、南側でやや古い弥生時代中期の石器等が出土し、北西のI-b区拡張部で古墳時代前期の土器が出土する傾向がある。そこで、弥生時代中期に積穴建物等

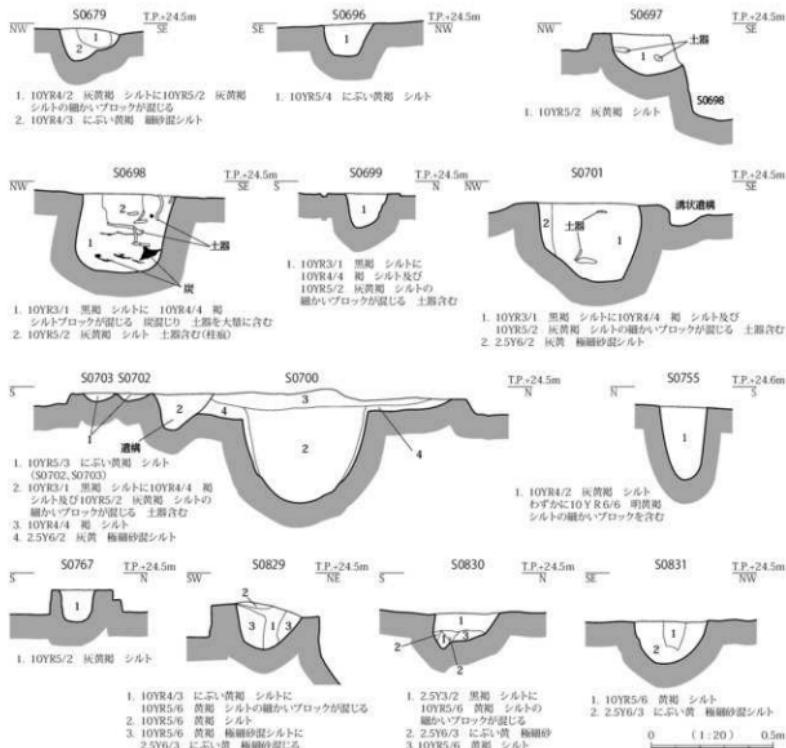


図 27 積穴建物 6 内遺構断面図

による居住域の形成が始まり、弥生時代後期を中心として古墳時代前期までに居住域の中心が南から北へ次第に移行したという推測も成り立つ。積穴建物 5 と積穴建物 4、積穴建物 4 と積穴建物 6 の周溝間距離が 20 m と 15 m とあり、積穴建物 1・2・3 と比較すると各々が独立した印象を受ける。

**井戸 S0637** (図 28、写真図版 12) 用水路以東部の西端中央、X = - 158,750、Y = - 41,074 地点で検出した。土坑 S0638 と隣接する。長円形の素掘り井戸だが、西側約 3 分の 1 は用水路で攪乱されており、短径 2.8 m、深さ 0.9 m をはかる。

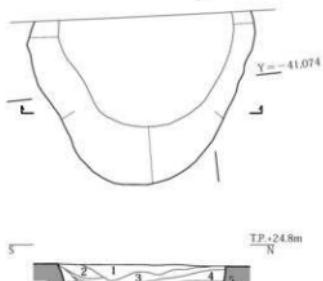
断面は皿形を呈し、埋土は黄褐色からにぶい黄褐色シルトが水平に細かく堆積する。弥生時代後期の壺や甕が出土した。

**土坑 S0638** (図 28、写真図版 12) 井戸 S0637 の南で検出した。不定円形の土坑で、南側はさらに掘りくぼめられて平面形が 3 重円の構造となる。長径 2.5 m、短径 1.9 m、深さ 0.1 m をはかる。

断面は皿形を呈し、埋土は黄褐色からにぶい黄褐色シルトであるが、炭や大量の遺物を含む。小形壺や甕 [54 ~ 56] が出土している。

**井戸 S0674** (図 28、写真図版 12・14) 用水路以東部の中央やや東にあたる、X = - 158,752、

S0637

X = -158,768  
Y = -41,074

1. IOYR5/6 黄褐色 細砂混シルト
2. IOYR5/4 にぶい黄褐色 細砂混シルト
3. IOYR5/8 黄褐色 細砂混シルト
4. IOYR5/4 にぶい黄褐色 細砂混シルト
5. IOYR4/6 灰褐色 細砂混シルト
6. IOYR6/3 にぶい黄褐色 細砂混シルト
7. IOYR5/3 黄褐色 シルト
8. IOYR4/3 にぶい黄褐色 シルト
9. IOYR5/2 黄褐色 シルト
10. IOYR5/4 にぶい黄褐色 シルト
11. 2.5Y5/4 黄褐色 シルト
12. 2.5Y6/3 にぶい黄褐色 シルト
13. 2.5Y5/2 灰褐色 シルト
14. 2.5Y5/3 黄褐色 シルト
15. 2.5Y6/2 灰褐色 シルト

0

(1:60)

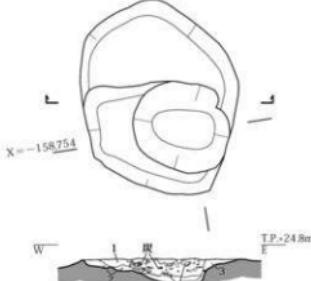
図28 井戸S0637・土坑S0638・井戸S0674平・断面図

Y = -41,056 地点で検出した。不定形の井戸で落ち込みS0539を切り、長径2.1m、短径1.9m、深さ0.3mをはかる。

断面は逆台形を呈し、埋土は黄褐色から灰黄褐色シルトであるが、炭や遺物を含む。上層から広口壺や高杯〔51・52〕が、中層、下層からも土器の細片が出土した。

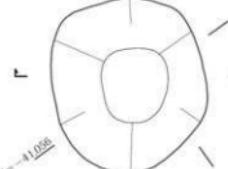
**土坑S0490**（図29、写真図版14）用水路以東部の南端中央、X = -158,768、Y = -41,055 地点で検出した。南を中心として環状にめぐる溝S0489の北に位置する。長円形の土坑で長径2.4m、

S0638

X = -158,754  
Y = -41,073

1. IOYR4/3 にぶい黄褐色 シルト
2. IOYR5/6 黄褐色 シルトブロックを含む 壱・大量の遺物を含む
3. IOYR5/4 にぶい黄褐色 シルト
3. IOYR5/6 黄褐色 シルト

S0674

X = -158,752  
Y = -41,056

NE

TP +24.8m SW

1. 2.5Y5/2 灰褐色 黄褐色 シルト
2. 2.5Y5/3 黄褐色 シルト
3. 2.5Y6/2 灰褐色 シルト
4. 2.5Y5/1 灰褐色 シルト
5. 2.5Y5/2 灰褐色 シルト
6. IOYR5/2 灰褐色 シルト
7. IOYR6/2 灰褐色 シルト
8. IOYR4/2 灰褐色 シルト
9. IOYR5/3 にぶい黄褐色 シルト
10. IOYR6/2 灰褐色 シルト
11. IOYR5/2 灰褐色 細砂混シルト
12. IOYR5/4 にぶい黄褐色 細砂混シルト

2m

短径 1.25 m、深さ 0.05 m をはかる。断面は皿形で、埋土はにぶい黄褐色シルトを呈する。

土坑全体から土師質の土製品〔写真図版 38-210〕が出土した。土製品は細片から 1 辺 15cm くらいまでと様々であるが、表面は被熱しておらず粘土にスサや植物、礫等も混ざっていない。しかし、所々に植物の茎や細い棒状の木材を通していったような直径 1.0 ~ 5.0cm 程度の孔がみられる。これらのことから、植物の茎や細い棒状の木材を芯材として、粘土質の土を固めて壁等に使用した壁材と推測した。

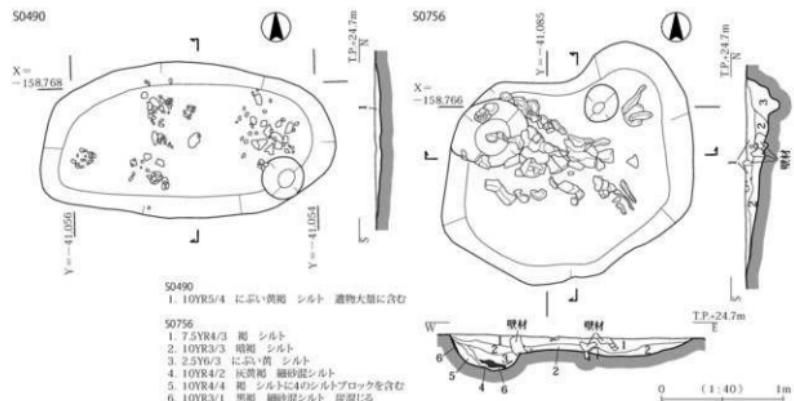
土坑 S0756 では、この土製品がより明確にかたまった状態で出土している。また、I-b 区の土坑 S0250 でも同様の土製品の細かい破片と炭が出土している。さらにより細かい碎片が I-b・c 区の包含層中からも広範囲に出土している。土製品以外の遺物は弥生土器の碎片が出土したのみで、時期を決定できない。壁材とすると建物に付随すると考えられるが、溝 S0489 を竪穴建物 6 のような円形建物の壁溝とすると、土坑 S0756 同様壁溝の外側に土坑 S0490 が存在することになる。竪穴建物全体を覆う壁材としては出土範囲が狭く、土坑 S0250 の近辺に竪穴建物はないので、現状では不明である。

**土坑 S0756** (図 29、写真図版 13) 用水路以西部の南側、X = -158.766、Y = -41.085 地点で検出した。不定形の土坑で長径 2.2 m、短径 1.6 m、深さ 0.3 m をはかり、中にさらに土坑が 2 基重なる。断面は皿形で、埋土は褐色シルトを呈する。

この土坑からは土坑 S0490 よりさらに大きい、似た形状の土製品が大量に出土した。また、底面にこの土製品が 3 列の放射線状に並んでいるようにもみうけられる。ただし、この土坑内から出土した土製品で接合を試みたが、立体的な形状には復原できなかった。土坑 S0756 出土品は土坑 S0490 や土坑 S0250 より遺存状態は良好だが、やはり用途は不明である。また、立地も竪穴建物 4 とは溝 S0677 を挟んで約 5.0 m、竪穴建物 6 とは中心で約 9.0 m 離れた場所に位置し、壁材としても直接これらの建物を覆う壁材とは考えにくく、どちらかの建物に付随する施設になるかも不明である。

出土した土製品〔79・80、写真図版 38-209・211・212〕は外面が面取りされた形状のものもあるが、面取りの方向も様々で直線と曲線が混在し、直方体になるとは限らず、中心や表面に直径 0.5cm ~ 5 cm 程度の孔があるもの等様々である。

土坑 S0490、土坑 S0756 とともに、土製品の孔は、遺構面の粘土質の土に植生していた木の根が焼け



落ちて空洞になった可能性も考えられる。

**土坑 S0591** (図 30、写真図版 14) 土坑 S0590、土坑 S0591、土坑 S0584 は用水路以東部の南西部で検出した。土坑 S0591 が土坑 S0590 を切る。土坑 S0591 は  $X = -158,762$ 、 $Y = -41,065$  地点で検出した長円形の土坑で、長径 2.3 m、短径 0.8 m、深さ 0.3 m をはかる。断面は皿形で灰黄褐色シルトが堆積する。土器を大量に含み、広口壺 [42] 等が出土している。

**土坑 S0584** (図 30) 土坑 S0591 の西、 $X = -158,761$ 、 $Y = -41,066.5$  地点で検出した。隅丸方形の土坑を円形の土坑が切っており、長さ 1.2 m、幅 0.8 m、深さ 0.2 m をはかる。断面は皿形でにぶい黄褐色シルトが堆積する。鉢 [39] が出土しており、土坑 S0591 と同じく弥生時代後期の遺構と思われる。

**土坑 S0590** (図 30、写真図版 14) 土坑 S0591 の北、 $X = -158,764$ 、 $Y = -41,066$  地点で検出し、土坑 S0591 に切られる。不定円形の土坑で、長径 2.1 m、短径 1.7 m、深さ 0.35 m をはかる。断面は皿形でにぶい黄褐色から褐色シルトが堆積する。各層から土坑 S0490 で出土した土製品と同じものが出土したが図示できなかった。

**土坑 S0580** (図 30)  $X = -158,764$ 、 $Y = -41,066$  地点で検出した。不定形の土坑で、長径 1.6 m、短径 1.1 m、深さ 0.2 m をはかる。断面は皿形でにぶい黄褐色から暗灰黄色シルトが堆積する。弥生土器甕 [38] が出土している。

**土坑 S0608** (図 30) 土坑 S0590、土坑 S0591、土坑 S0584 の北になる、 $X = -158,758$ 、 $Y = -41,067$  地点で検出した。不定形の土坑で、長辺 2.8 m、短辺 2.0 m、深さ 0.15 m をはかる。断面は皿形でにぶい黄褐色から暗褐色シルトが堆積する。

**土坑 S0620** (図 31、写真図版 14) 用水路以東部の南西端の落ち込み S0585 の中にあり、 $X = -158,767.5$ 、 $Y = -41,073$  地点で検出した。長円形の土坑で長径 1.05 m、短径 0.6 m、深さ 0.4 m をはかる。断面は逆台形で、埋土は褐色灰シルトを呈する。土器を多く含み、弥生土器高杯や甕 [49・50] が出土した。

土坑 S0620 が位置する落ち込み S0585 には S0629 や S0627 等他にも土坑やピットが多く存在し、土器が多く含まれる。落ち込み S0585 は上層の包含層のたわみと捉えられるが、土坑 S0629 や土坑 S0627 は弥生時代後期、落ち込み S0585 は弥生時代後期末から古墳時代初めと考えられる。

**土坑 S0627** (図 31) 土坑 S0620 と同じく、用水路以東部の南西端の落ち込み S0585 の中、 $X = -158,764$ 、 $Y = -41,074$  地点で検出した。円形の土坑で直径 0.8 m、深さ 0.4 m をはかる。断面は漏斗形で、埋土は灰黄褐色シルトを呈し、中層に土器を多く含むが図化できなかった。

**土坑 S0629** (図 31) 土坑 S0620、土坑 S0627 と同じく、用水路以東部の南西端の落ち込み S0585 の中、 $X = -158,762$ 、 $Y = -41,073$  地点で検出した。隅丸方形の土坑で長辺 2.1 m、短辺 1.0 m、深さ 0.35 m をはかる。断面は鉢形で、埋土は灰黄褐色シルトを呈し、上層に土器を多く含むが図化できなかった。

**用水路以東部の遺構** (図 32 ~ 34) 落ち込み S0585 やその北東にある同様の遺構、落ち込み S0520、落ち込み S0521、落ち込み S0538、落ち込み S0540 等はすべて上層の包含層がたわんで落ち込んだところに土器等が大量に流入し堆積したと考えられる。I-b 区の落ち込み S0160、落ち込み S0153、落ち込み S0370 等と同じで、時期的にも古墳時代初めから前期の土師器や古墳時代中期の須恵器を含む等、第 1 面で検出した遺構より若干新しくなると考えられる。

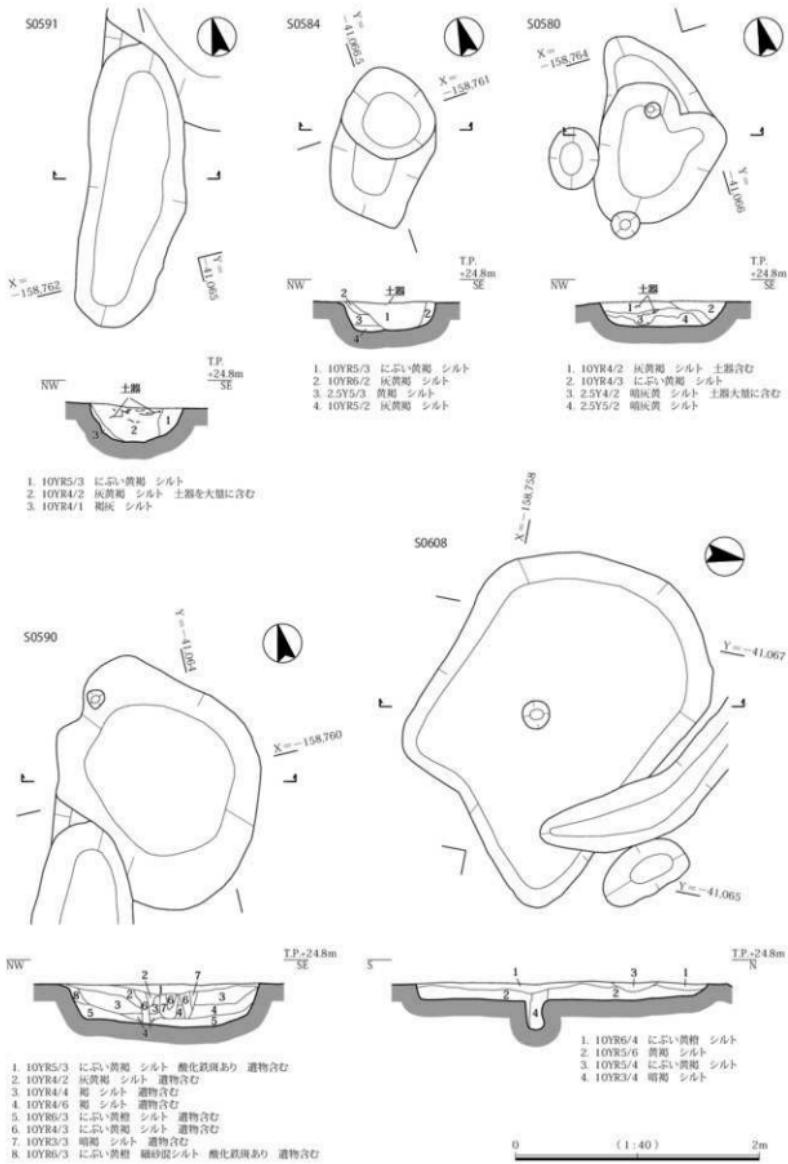


図30 土坑 S0591・S0584・S0580・S0608 平・断面図

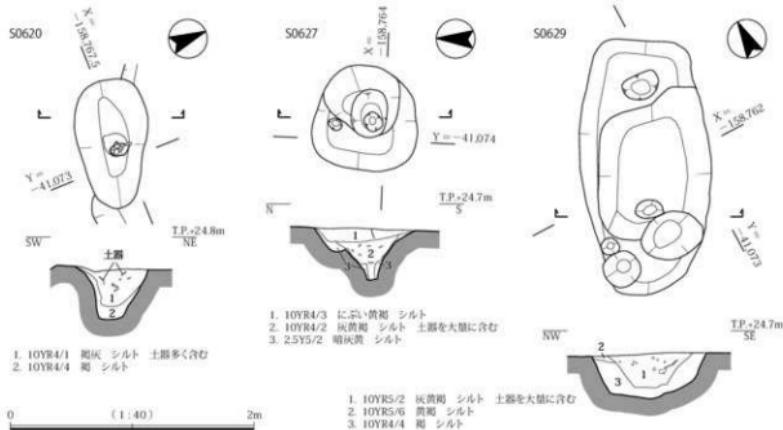


図31 土坑S0620・S0627・S0629 平・断面図

溝S0489は南東隅で検出した弧を描いてめぐる溝である(図32)。幅0.4~0.6m、深さ0.05~0.1mをはかる。南西隅で検出した竪穴建物6と同様に、円形竪穴建物の壁溝になる可能性もあるが、壁溝としては規模がやや大きい。また、周辺のS0486・S0488や溝の円周内部のS0492~S0494・S0497がそれに伴う柱穴になる可能性があるが、削平を受けており遺存状態が悪く断定できない。

土坑S0495は溝S0489内にあるが中心より東にずれており、方形の形状や堆積状況からも炉の可能性は低い。ただし、北2.0mほどの距離に炭や土製品(壁材)を検出した土坑S0490がある構造は、竪穴建物4と竪穴建物6の間に土坑S0756がある構造と似ている。溝S0489からは壺〔36〕の他、北の土坑S0490と同じく炭や土製品が出土している。

溝S0489・土坑S0490より北東にある柱穴S0487や柱穴S0499~S0504も建物や柱列を復原できなかった。土坑S0490の北西にある柱穴S0506~S0509、S0513・S0515・S0516・S0519等も同様である(図37)。いずれも直径0.1~0.25m、深さ0.1~0.2mで、中心に直径0.1m弱の柱痕をもつ。

土坑S0490や溝S0489の西にある柱穴S0559・S0556・S0547は約2.0mの等間隔で南北に並び、柱穴S0547と柱穴S0545、柱穴S0559と柱穴S0554がそれに直交する東西列をなす等、東西に長軸をもつ掘立柱建物となる可能性をもつ。上層からの遺構の可能性が高い。いずれも直径0.1~0.2m、深さ0.1~0.2m程度である。

また、用水路以東部の北東角から南西に連なるように検出した落ち込みS0538、落ち込みS0521、落ち込みS0539、落ち込みS0520は幅の割に深さが浅く、単一な層が埋積する状況が似ていることから、上層の包含層や遺物が大きくなんだところに堆積した可能性が高い。用水路以東部の南西角にも落ち込みS0585が存在し、ここまで溝状のたわみが続いている可能性もある。北西部にある不定形の土坑S0611や土坑S0650、土坑S0668も同様の可能性がある。

落ち込みS0585の東にある柱穴S0602、S0593、S0564~S0566、S0577、S0579等は直径0.15~0.3m、深さ0.2~0.4mをはかる。断面は逆台形を呈し、中心に直径0.1m程度の柱痕がある。列

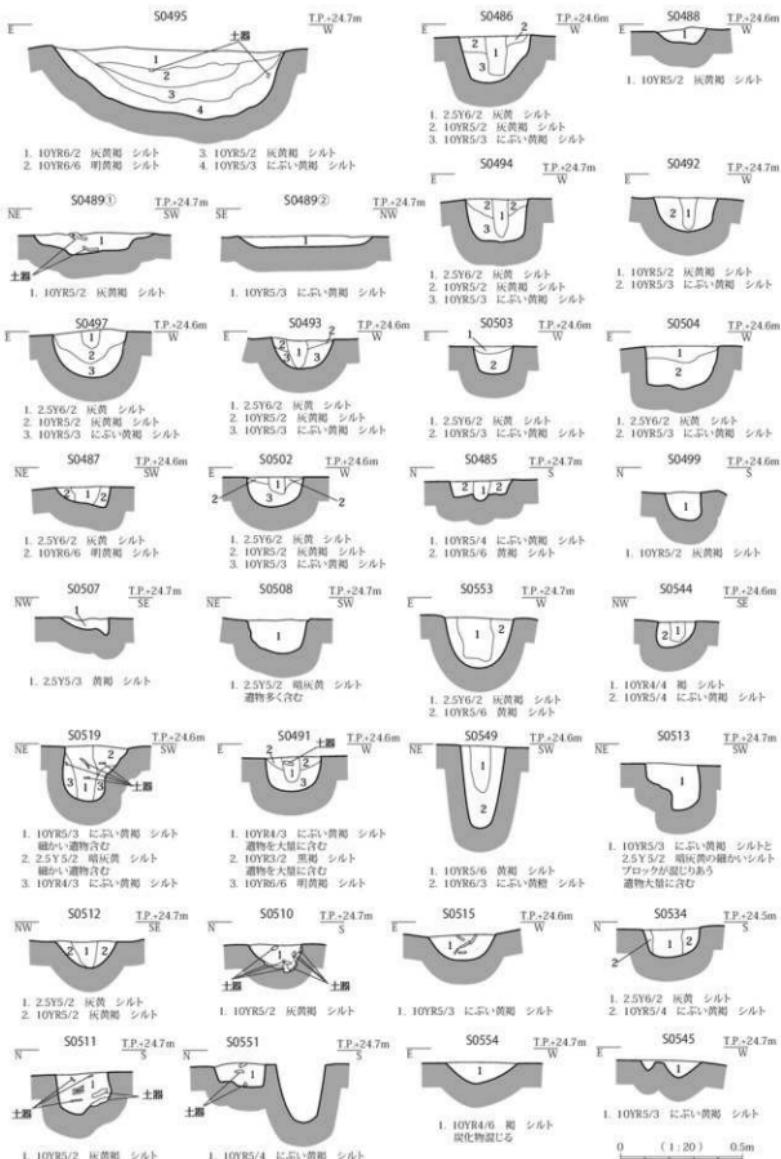


図 32 I-c 区用水路以東部構造断面図 (1)

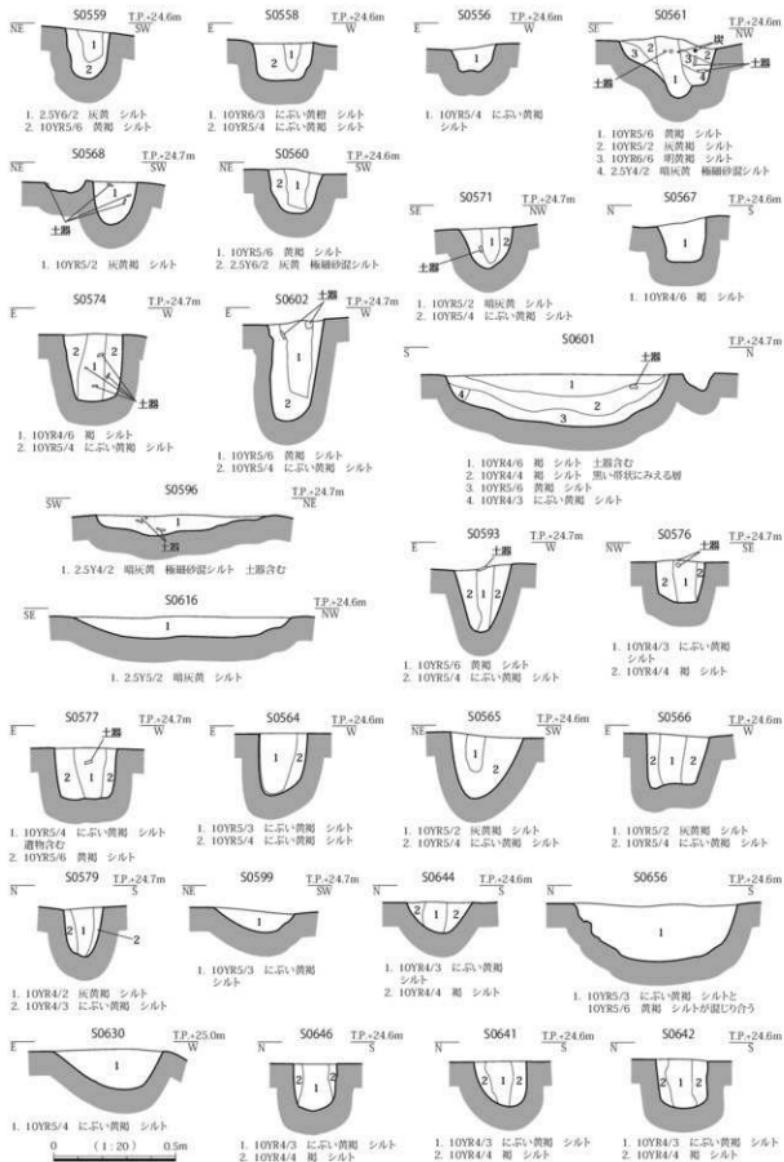


図 33 I-c 区用水路以東部遺構断面図 (2)

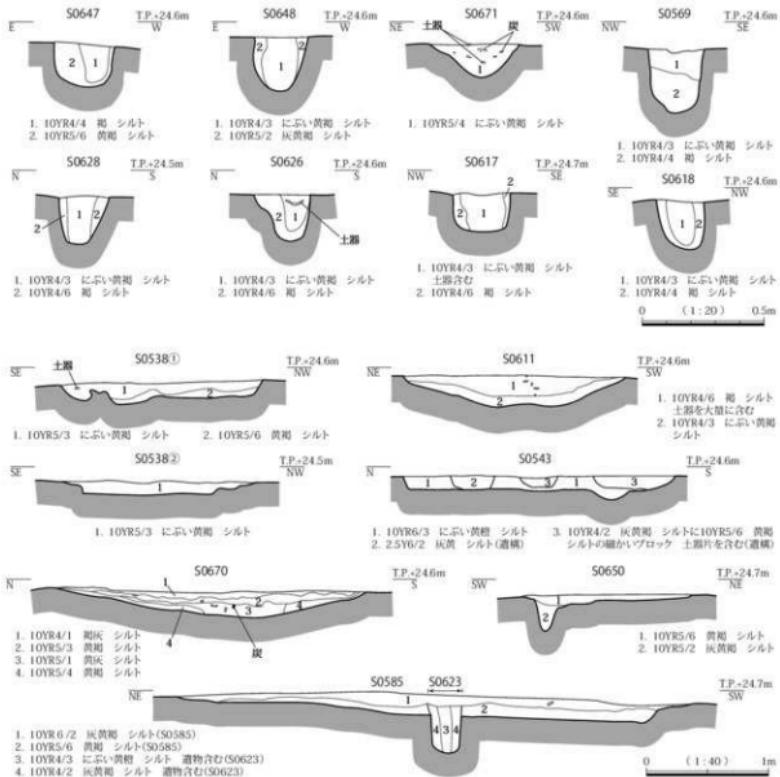


図34 I-c区用水路以東部遺構断面図(3)

状に並ぶものもあるが、建物を復原できなかった。また、落ち込みS0585には埋土が厚く堆積しており下層の遺構と判別が難しかったが、甕[50]が出土した土坑S0620の他にも、土坑S0626や土坑S0628等多数の土坑や柱穴、ピットが存在していた。

用水路以東部で検出した多数の柱穴は、形状や出土遺物から弥生時代後期末頃の遺構と考える。

**用水路以西部の遺構**(図35・36) 用水路以西部では前述の竪穴建物や土坑以外にも、溝S0721や溝S0677、落ち込みS0733・S0739や土坑、柱穴、ピットを多数検出した。用水路以東部よりさらに遺構が密集し、包含層が厚かったため遺物の残存状況も良好だった。

土坑S0705は竪穴建物4に隣接する楕円形の土坑で直径0.85m、深さ0.3mをはかる。断面は逆台形で黄褐色シルトが埋積し、遺物を多く含む。弥生土器甕[66]が出土した。

溝S0677は竪穴建物4と土坑S0756の間を、北東を中心として弧を描くようにめぐる溝である。幅は0.75~1.1m、深さは0.2~0.35mをはかる。上層に遺物が大量に含まれるが、多くは弥生時代後期の甕・壺・鉢[59~61]である。

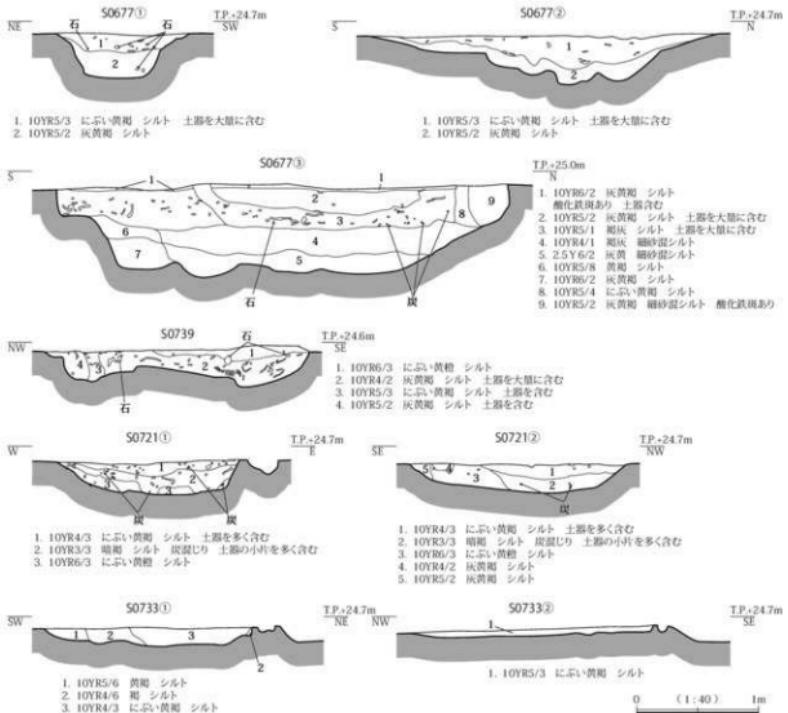


図 35 I-c 区用水路以西部遺構断面図（1）

溝 S0721 は竪穴建物 5 に切られその南にのびる溝で、途中で東へと屈曲する。幅 1.5 m、深さ 0.2 ~ 0.3 m をはかる。遺物を大量に含み、弥生土器甕〔62〕等が出土している。

落ち込み S0739 は竪穴建物 5 の東に位置する方形区画で、形状から建物になるかと思われたが、底面の凹凸が激しく壁溝や主柱穴等の内部構造をもたないことから、落ち込みとした。幅 2.2 m、深さ 0.4 m をはかる。大量の遺物を含み、甕や壺等〔68 ~ 74〕が出土している。弥生時代後期末頃と考えられる。

柱穴 S0711 や柱穴 S0708 も直径 0.45 m と 0.75 m の柱穴だが、中心に直径 0.1 m 程度の柱痕をもつことから柱穴とした。竪穴建物 4 より南に位置する柱穴 S0680 ~ S0687、柱穴 S0691、柱穴 S0692 等も直径約 0.2 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m 程度で、中心に直径 0.1 m 程度の柱痕をもつものが多い。柱穴の並びを確認できず、建物を復原することはできなかった。遺物は細片のため図化できるものは少なく弥生時代後期の甕や高杯が含まれていることから、これらの柱穴も竪穴建物 4 と同時期と考える。

竪穴建物 4 より北に位置する柱穴 S0743 ~ S0747、柱穴 S0717、柱穴 S0749 等も直径約 0.1 ~ 0.2 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m 程度で、中心に直径 0.1 m 程度の柱痕をもつものが多い。こちらでも柱穴の並びを確認できず、建物を復原することはできなかった。遺物は弥生時代後期後半から終末の甕や高杯が含まれ

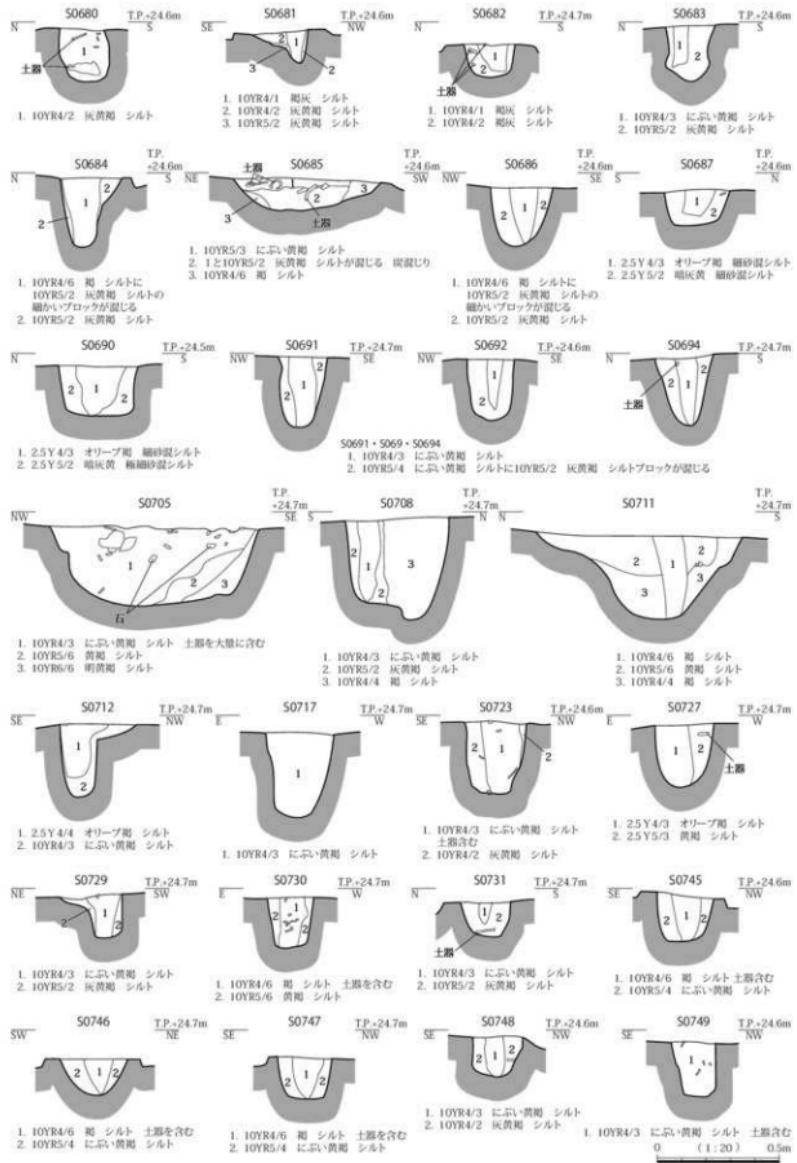


図 36 I - c 区用水路以西部遺構断面図 (2)

ており、他の遺構と時期を同じくすると言える。

また、I 区の西壁断面等で観察できる地層の変形は古地震痕跡で、広範囲に起きた巨大地震を示唆する（第 4 章第 1 節参照）。

### (3) I 区の遺物（図 37～43、写真図版 27～30、34～38）

I-a・b 区遺構出土土器（図 37、写真図版 27・29）〔1〕から〔4〕は I-a 区からの出土で、〔1〕のみ土坑 S0007、それ以外は包含層からの出土である。須恵器杯身〔1・2〕は古墳時代後期、甕〔4〕は弥生時代、灰釉陶器〔3〕は古代と、異なる時期のものが混在する。

〔5〕から〔35〕は I-b 区の遺構からの出土である。甕〔5・7〕・壺〔6〕・鉢〔8〕は井戸 S0155 からの出土で、〔8〕のような半環状の取手がついた鉢は、富田林市神山遺跡等に類例がある。いずれも弥生時代後期後半と考えられる。

甕〔11〕は掘立柱建物 1 の柱穴 S0162 からの出土で、甕〔13・14〕は竪穴建物 2、甕・高杯〔15・16・19〕が竪穴建物 3、甕・壺〔17・18〕は竪穴建物 1 の上層覆土に含まれる遺物である。

瓦器椀〔20〕・土師器皿〔21〕は土坑 S0362 からの出土で、土師器脚付皿〔22〕は井戸 S0368 からの出土で 11 世紀末から 12 世紀初めの遺物である。いずれも用水路際の遺構のため、上層の混入と考えられる。

高杯〔23〕・小形壺〔24〕・広口壺〔25〕は用水路以東部の土坑 S0369 から出土した（図 17、写真図版 7）。

広口壺〔26〕・甕〔27〕は土坑 S0369 と重複する落ち込み S0370 から出土した。弥生時代後期である。落ち込み S0370 には弥生時代中期から古墳時中期までの甕、高杯、須恵器杯等が多量に含まれたが、破片が多く圓化できたのはわずかである。

壺〔34〕は井戸 S0368 と土坑 S0369 の間の地点 S0409 で出土した。頸部から上を欠損し体部は算盤形とも言える横に扁平な器形をとる。弥生時代後期末と考えられる。

I-b 区の拡張部の溝 S0455 からも一定量の土器が出土した（図 17、写真図版 7）。そのうち甕〔32〕は、出土時にはほぼ完形だったが、器壁が薄く下半は取り上げ時に欠損し上半のみの圓化となった。球形の体部を呈する布留式の甕である。

溝 S0455 に隣接する地点 S0481 からは、二重口縁壺〔35〕が出土した。ほぼ完形で口縁は外方に開き、口縁端部は平坦な面をもつ。頸部は「く」の字に屈曲し、体部は胴長の器形をとり丸底である。摩耗のため調整は不明瞭だが、体部外面はタテハケ、内面はヘラケズリか。萱振遺跡 SK03 出土遺物等と類似する。

I-b 区の遺構出土土器は弥生時代中期も少量含むが、弥生時代後期後半から後期末におさまるもののが大勢で、I-b 区拡張部等では〔32・35〕等古墳時代前期のものを含む。

I-c 区遺構出土土器・土製品（図 38・39、写真図版 27・28・30・37・38）I-c 区の用水路以東部では壺〔36〕が溝 S0489 から、甕〔37〕がその中に位置する土坑 S0495 から出土した。甕〔38〕は土坑 S0580 から、鉢〔39〕は土坑 S0584 から、ミニチュア土器〔40〕が落ち込み S0585 から出土する。また、不定形の落ち込み S0521 からは甕〔41〕が出土する。落ち込み S0521 の中にある井戸 S0674 からは広口壺〔51〕と高杯〔52〕が出土する。〔52〕は外側面にヘラミガキを施す。

甕〔44・45〕は不定形の土坑 S0611 からの出土である。壺〔47〕・高杯〔48〕は土坑 S0611 に近い土坑 S0670 からの出土である。高杯〔49〕・甕〔50〕は土坑 S0620 からの出土で、〔50〕はほぼ完形である。体部上半は横方向の、下半には斜め方向のタタキを施す。甕や小形壺〔54～56〕は土坑

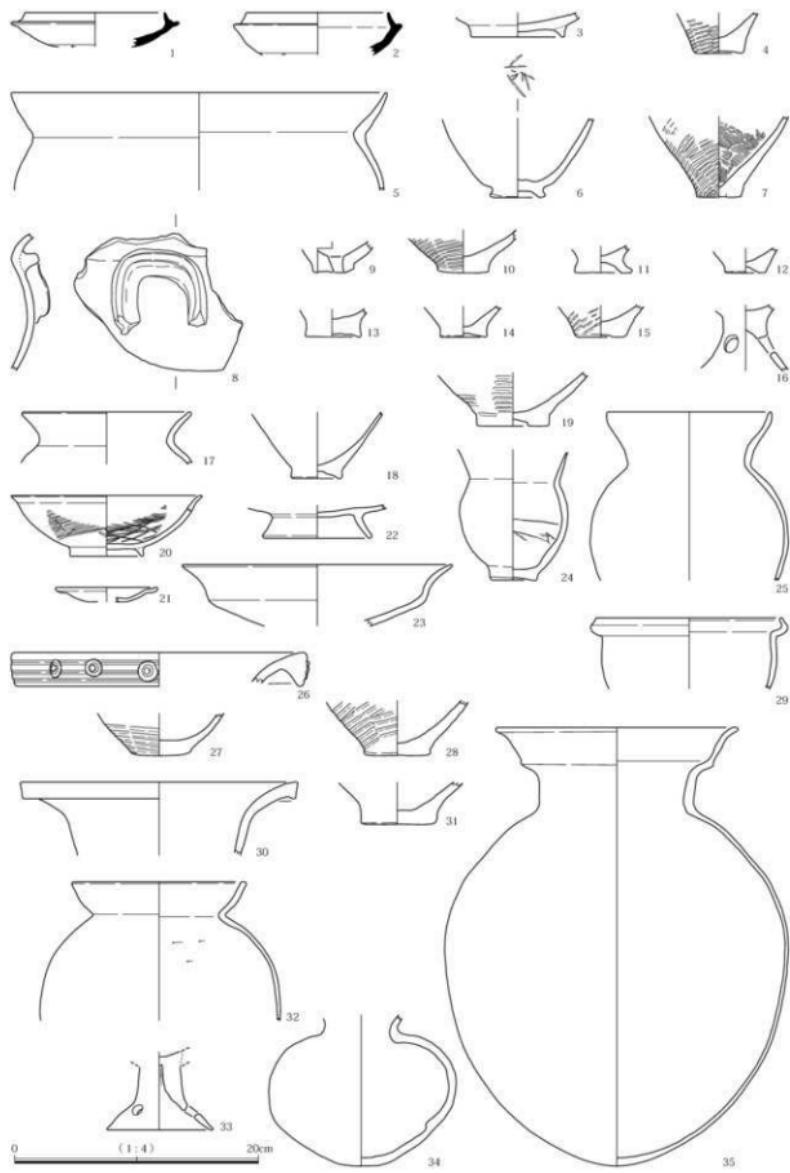


図37 I-a・I-b区出土遺物実測図

S0638からの出土である。いずれも弥生時代後期後半から後期末である。

東播系須恵器こね鉢〔57〕は溝S0630、陶器椀〔58〕は土坑S0639からの出土で、中世以降の遺物である。溝S0630と土坑S0639は用水路際の遺構のため、上層の耕土層（1層から2層）の遺物が混入したと考えられる。

用水路以西部では、甕・鉢・壺〔59～61〕が竪穴建物4の南西部の溝S0677からの出土である。甕〔62〕は竪穴建物5の南にのびる溝S0721からの出土で、口縁端部をつまみあげ、鋭く外反する等の形状が弥生時代後期でもやや新しいと考える。

広口壺〔63〕は竪穴建物4の覆土からの出土で、甕〔66〕は竪穴建物4に隣接する土坑S0705からの出土である。竪穴建物5に近接する落ち込みS0739からは、甕〔67～69〕、壺〔70～72〕、鉢〔73〕、高杯〔74〕等の多様な遺物が出土した。甕〔67〕は甕〔62〕と口縁部が「く」の字に外反し、口縁端部を丸くおさめる特徴が似る。鉢〔73〕も器壁が薄く精良であることから、弥生時代後期末になる可能性がある。また、細頸壺〔72〕は器壁が厚く、狭い口縁部から頸部が大きく開き体部へつながる器形が特徴的で、搬入土器の可能性がある。落ち込みS0739の遺物は弥生時代後期後半から後期末と捉え、I-c区の土器の中ではやや新しい。

脚付鉢〔75〕、台付甕〔76〕、甕〔77〕は、竪穴建物5の上層覆土である土坑S0740からの出土である。〔75〕等若干新しい様相をもつが、弥生時代後期末までにおさまるものである。

甕〔78〕は竪穴建物5の炉S0821からの出土である。ほぼ完形で底部が丸みを帯び、体部と一体化しつつある等新しい様相をもつが、弥生時代後期におさまると考える。I-c区の遺構から出土した土器は、ほぼ弥生時代後期後半から末に限定されると言える。

用途不明の土製品〔79・80〕は竪穴建物5と竪穴建物6の間に位置する土坑S0756から出土した。土坑S0756やその周辺の包含層、あるいはI-b区の土坑S0490や土坑S0250、包含層からも同様の土製品が大量に出土しており、土坑S0756では放射線状に列をなして並んでいた（図29、写真図版13）。実測できないものでも大形のものは写真を示した〔写真図版38～209～212〕。

〔79・80〕とも土師質の土を成形し焼成し、焼成時の黒斑はみられるが煤等の2次焼成痕はなく、II区で出土した焼土塊のような高温焼成ではないため軟質である。形状は長方形でもなく、表面は面取りしているが平らでなく、曲線的な部分もあり断面は多角形を呈する。内部中心に直径1.0～1.5cmの孔があるが、それ以外にも直径0.5mm以下の孔や凹面をもつ個体もある。推測として、孔部分に木の枝や棒状の有機物を芯材として通した建物の壁材の用途が考えられる。

I-b・c区包含層出土土器・土製品（図40、写真図版32・38）須恵器、弥生土器、土師器他が出土した。〔81～92〕がI-b区の包含層出土、〔93～104〕がI-c区の包含層出土である。

I-b区は上層包含層（3～2層）出土には、瓦器椀〔83〕や瓦質土器甕〔84〕、黒色土器B類椀〔85〕等の古代末から中世の遺物を含む他、弥生時代から古代のものが含まれる。下層（3～3層）は古墳時代以前の遺物である〔90～92〕。円筒埴輪〔90〕は古墳時代中期である。

I-c区の包含層出土遺物は縄文土器〔102・103〕、弥生土器〔96～99〕、須恵器〔93～95〕、陶器〔100・101〕等である。陶器椀〔100・101〕は近世のもので耕作土からの混入であろう。

縄文時代晚期突帯文深鉢〔102・103〕はおそらく同一個体である。二条突帯の上段と下段で、突帯より下半の体部も出土したが接合しなかった。I-c区で縄文土器が出土したのは、用水路以東部の調査区南端の限られた区域である。〔104〕は移動式かまとの底の一部と思われる。

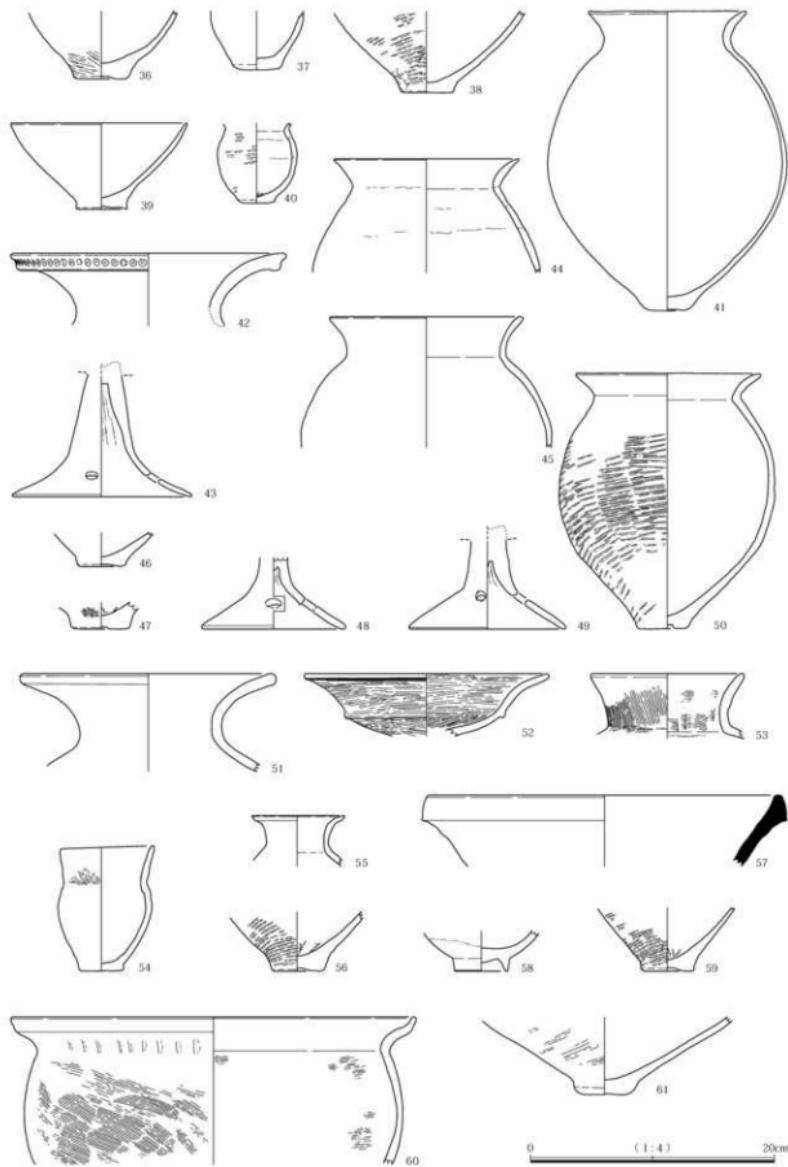


図38 I-c区出土遺物実測図(1)

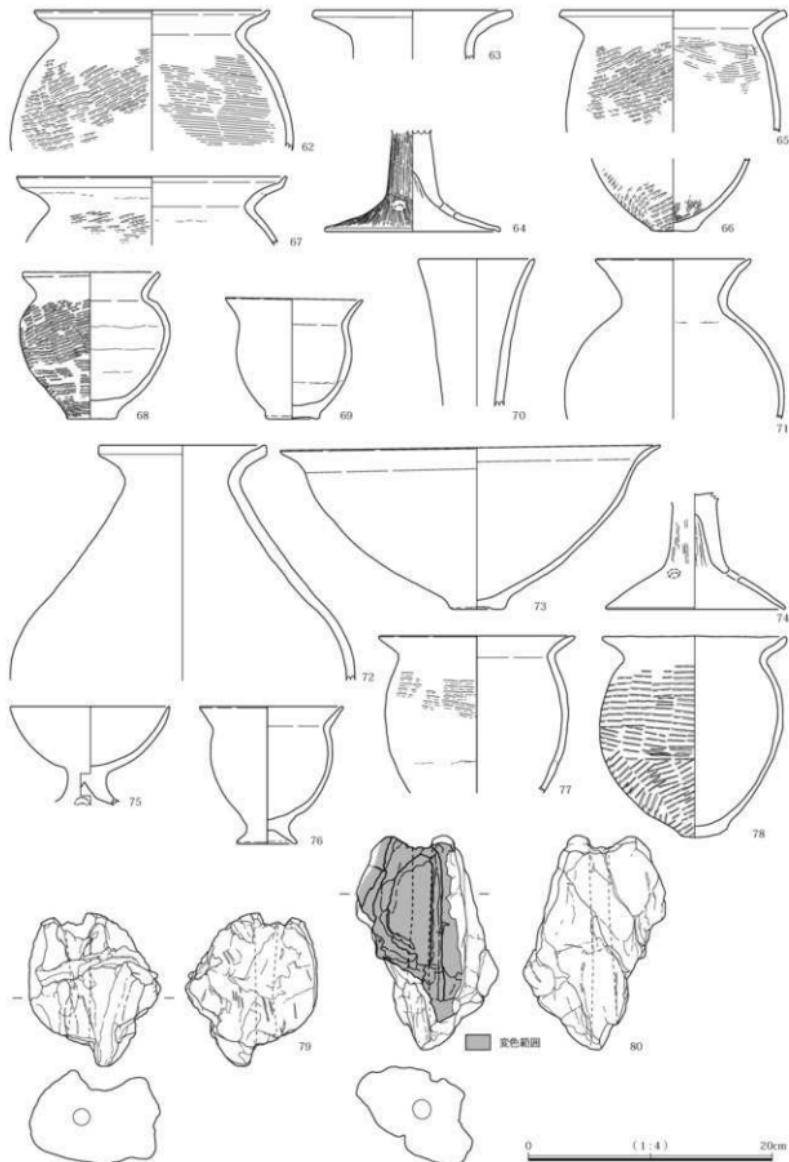


図39 I-c区出土遺物実測図(2)

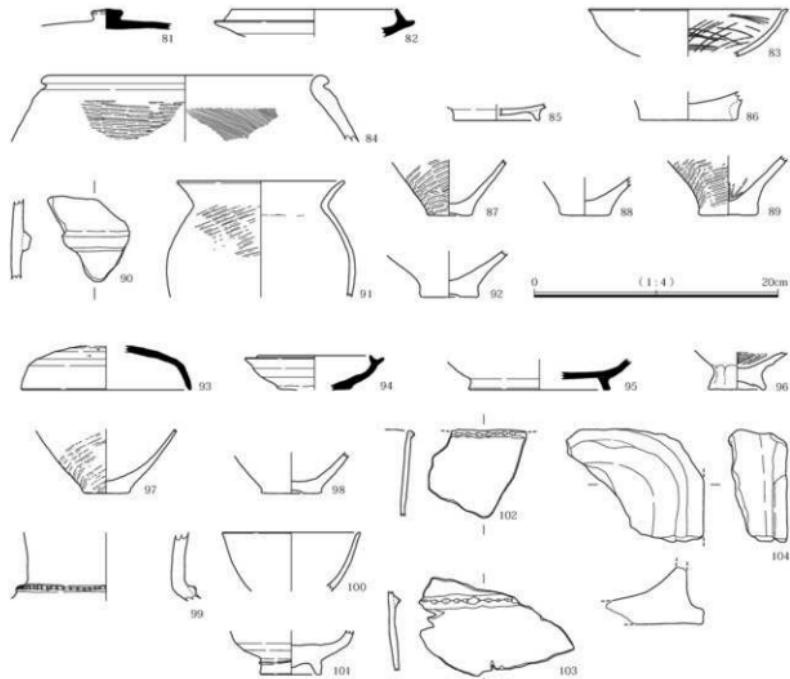


図40 I-b・I-c区包含層出土遺物実測図

I-b区とI-c区の包含層（3層）出土土器は縄文時代から中世後半以降のものまでを含むが、主体となるのは弥生時代後期から古墳時代中期のものである。特に用水路以西で量的には大量の甕や高杯等の弥生土器が出土するが、多くが破片で摩耗が著しく接合不可能だった。

**I区出土石器・石製品**（図41～43、写真図版34～37）凸基有茎式石鏃〔105〕はI-b区の竪穴建物を検出するため拡張した部分の包含層から出土した。弥生時代中期のものである。無茎石鏃〔107〕はI-c区の包含層から出土した。縄文時代の可能性がある。

スクレイバー〔106・108〕の〔106〕はI-b区の柱穴S0298からの出土、〔108〕はI-c区の竪穴建物4近くの遺物集中部からの出土である。

〔112〕も位置はやや離れているが、I-c区の溝S0721付近遺物集中部からの出土である。旧石器時代のナイフ形石器であるが、国府型よりやや新しい。

扁平片刃石斧〔109〕はI-b区拡張部の落ち込みS0446から出土した。敲打面を丸く仕上げる形状からは弥生時代前末期から中期初めのものと思われる。ただし、S0446に含まれる土器は古墳時代初めから前期のものであり、〔109〕とは時期的な隔たりがある。形態的にも通常より長辺に対して厚みがあり、本来はもっと大形の製品だったのを研ぎ直して再生、再利用した等の可能性も考えられる。

特筆されるのは、石材が黄灰色で重量感があり縦方向の縞目（葉理）が特徴的である、対馬や北部九

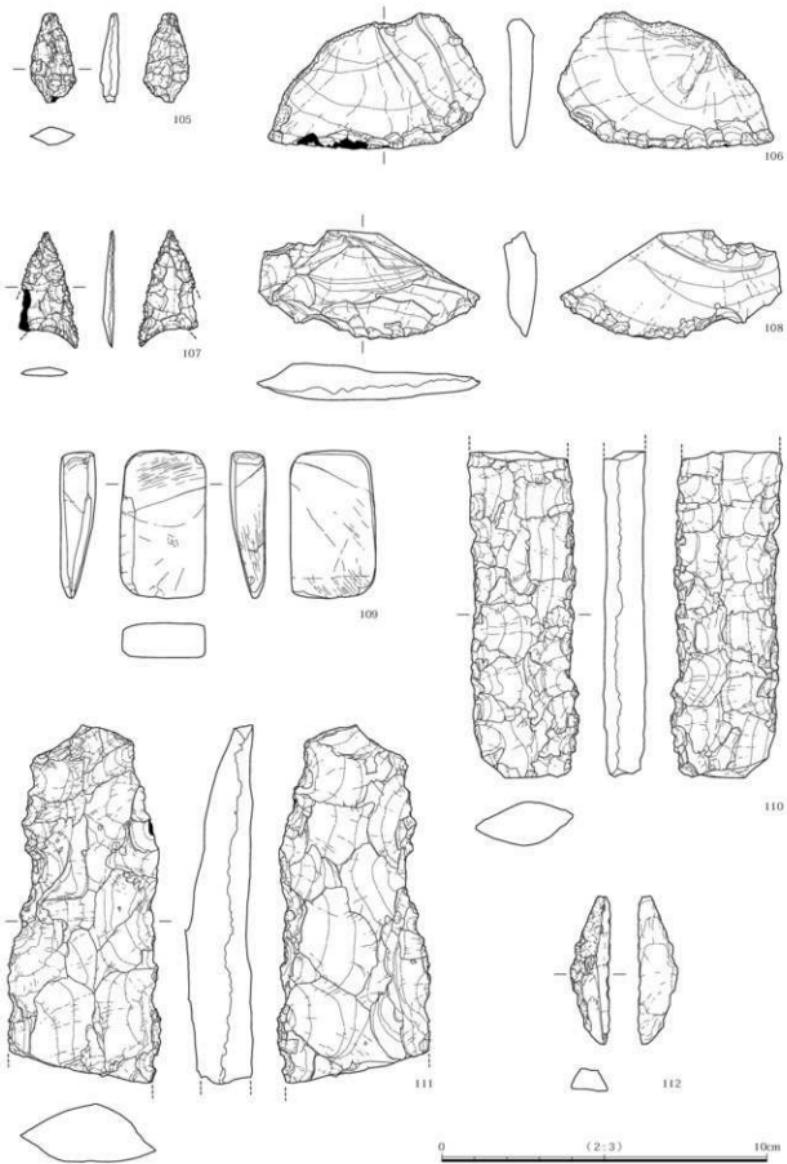


図41 I区出土石器・石製品実測図(1)



図42 I区出土石器・石製品実測図（2）

州周辺で産出されるとされる層灰岩であることである（岩手大学佐藤由紀男氏の写真観察、及び兵庫県立考古博物館上田健太郎氏の肉眼観察による教示）。

層灰岩材の石器は北部九州では石斧や石庖丁に広く使われているが、本州では鳥取県、島根県、石川県等の日本海沿岸地域に搬入品の出土例が近年報告されているにすぎない。内陸部での報告例は当遺跡が初出となる。ただし、当遺跡で出土する土器は、弥生時代中期が最も古いがII区で出土地も離れてお

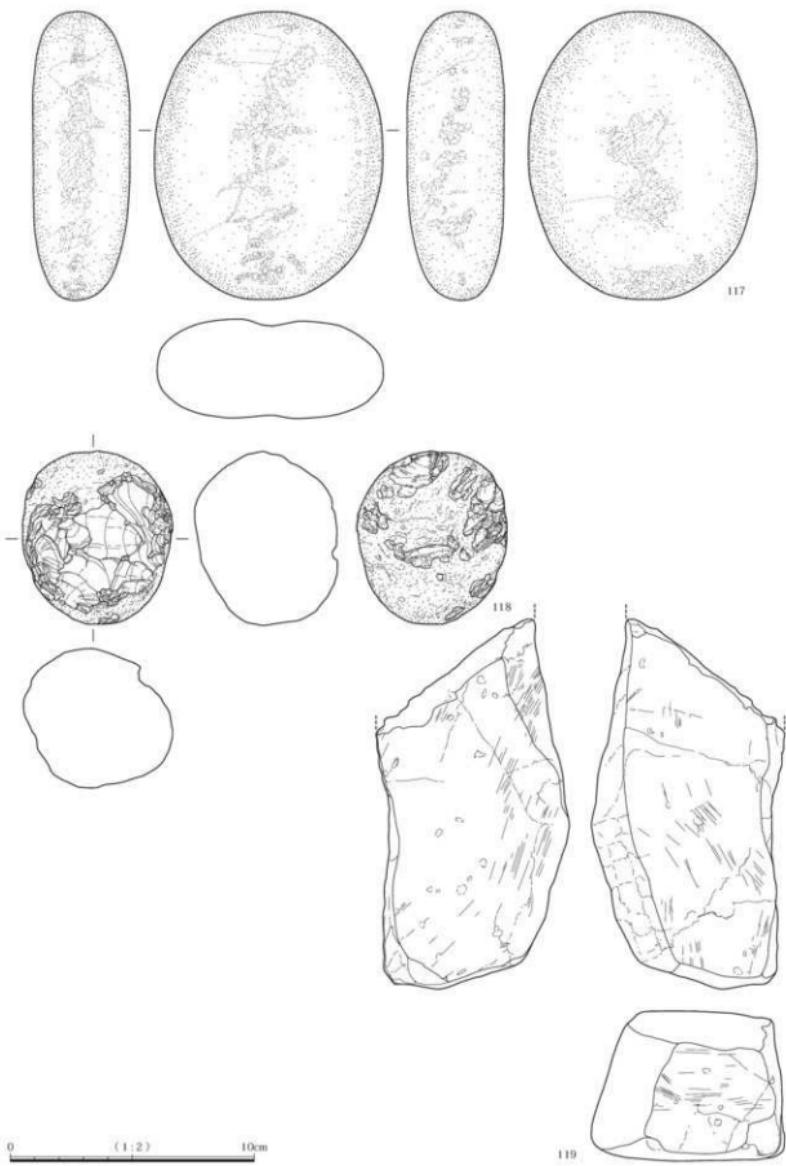


図43 I区出土石器・石製品実測図(3)

り、圧倒的に増加するのは弥生時代後期であるので時期的に大きな隔たりがある。この石斧だけが当時期に当遺跡に搬入されたとは考えにくく、搬入時期、経路が疑問点として残る。

打製石剣〔110・111〕はI-c区の包含中からの出土である。110は上半を欠損し、111は未製品と考えられる。いずれも弥生時代中期のものである。

石庖丁〔113〕は全体に摩耗が著しく、刃部調整等も不明瞭である。直線刃半月形で、紐穴の位置等から弥生時代中期のものであろう。

砥石〔114～116〕は砂岩製で、いずれも四方向に擦痕がみられる。くぼみ石〔117〕は表裏面に敲打痕跡が残り、使用のため中心がくぼんで凹状をなす。ハンマーストーン〔118〕は上面が摩耗して擦り減っているが原礫面を残す。安山岩製のすり石〔119〕は細かい擦痕が認められる。I-b区の溝SO455からの出土である。

I区で出土した石器は〔112〕の旧石器時代、〔109〕の弥生時代前中期の可能性をもつものもあるが、多くは弥生時代中期以降の製品と考えられる。出土土器の中心時期が弥生時代後期から古墳時代前期であり、やや乖離があるが石器の特質上からは十分考えうる。

#### 〔参考文献〕

- 大野薫 1983 『葦振遺跡発掘調査概要・I』 大阪府教育委員会  
市村慎太郎 2014 「脚付小形丸底土器小考」『古墳出現期土器研究』2号 古墳出現期土器研究会  
大阪府教育委員会 1989 『神山遺跡発掘調査概要・II』 大阪府教育委員会  
寺澤薫・森岡秀人編 1989 『弥生土器の様式と編年—近畿編I—』 木耳社  
佐藤由紀男・宮田明 2018 「石川県小松市八日市地方遺跡出土の層灰岩製片刃石斧と三面石斧をめぐって」『考古学研究』第65巻第3号 考古学研究会  
森貴教 2013 「弥生時代北部九州における片刃石斧の生産・流通とその背景—「層灰岩」製片刃石斧を中心にして」『古文化談叢』第69集 九州古文化研究会  
森貴教 2011 「北部九州における弥生時代の石器流通」『第60回埋蔵文化財研究集会要旨集 石材の流通とその背景—弥生～古墳時代を中心に—』 埋蔵文化財研究会  
岡本茂史・森屋美佐子・桑野一幸・木村まり・正岡大実編著 2008 『八尾南遺跡』 (財)大阪府文化財センター

### 第3節 II区の遺構と遺物

#### (1) 概要

新堂4丁目土地区画整理事業地の中で、調査区はI区とII区に分かれれる。

南側のII区は東西方向の道に挟まれる南北長120m、最大東西幅90mの範囲で、長方形の北に逆T字がついた形状をとる(図2・44)。II区の総面積は約5,900m<sup>2</sup>で、掘削土置場の確保や工程の都合上、四つの調査区に分けて調査を行った。調査順(II-a区が平成30(2018)年10月～11月、II-b区が平成30(2018)年12月～平成31(2019)年1月、II-c区が平成31(2019)年1月～2月、II-d区が令和元(2019)年6月)に調査区名を配した。

調査前は畑等の耕作地が主で、II-b区の北突出部の東西両脇のみ宅地が隣接していた。II-d区とII-a区の境界は用水路が、II-c区とII-b区の境界には畦道が存在しており、それによって南から北に低くなる段状の地形となっていた。全体に南南東から北北西にむかって低くなり、II-a区南東端

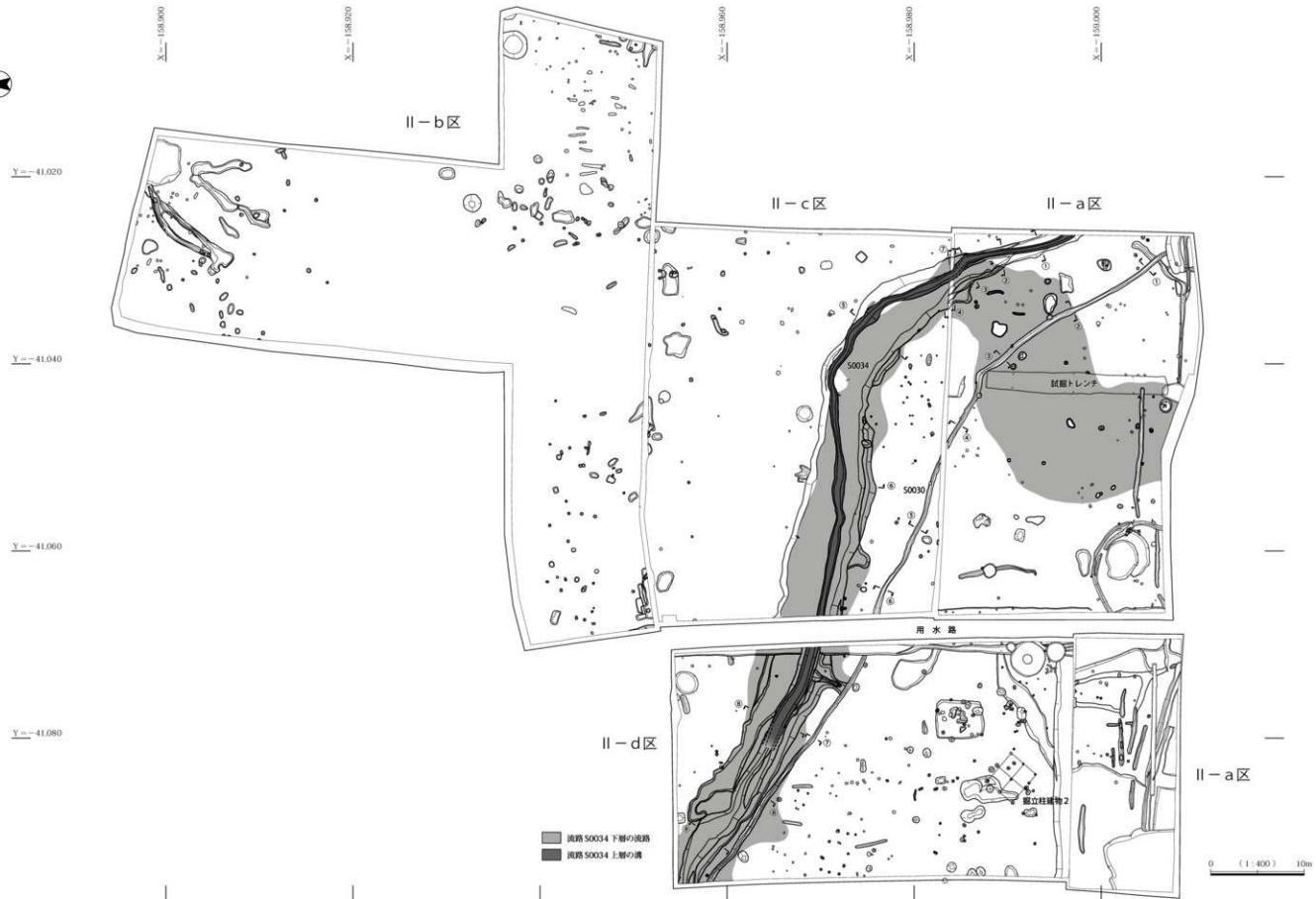


図44 II区全体平面図

現地表の標高は T.P. + 26.4 m、II - b 区の北東端では T.P. + 25.5 m と約 0.9 m の標高差がある。

II - a 区、II - c 区、II - d 区を蛇行するように流路 S0034 とそれに平行する溝 S0030 がとおり、遺構は主に流路 S0034 の南で検出した。遺構、遺物とも II - c 区の北西部や II - b 区等、北ほど希薄となる。また、用水路を挟んだ II - a 区の西側（II - d 区との隣接地）は近世以降の溜池が存在していたと思われ、現状でも湿地状の荒地で低い地形であった。

## （2）II 区の遺構（図 44～63、写真図版 15～26）

各調査区で遺構を詳細にみていくが、流路 S0034 と溝 S0030 については、複数の調査区にまたがっているが一連のものであるため、まとめてここで記述する。

### 流路 S0034（図 44～46、写真図版 15～17、21・22、24～26）

検出長約 85.0 m、最大幅 8.0 m、検出した深さ約 0.8 m をはかる。II - a 区の東及び II - d 区の西にもさらに続くと思われる、南東から北西に緩やかに蛇行して流れる大規模な流路である。最も深いところは最底部まで掘削できず、空中写真測量・立会終了後に部分的に掘り下げて断面調査を行った。

断面は逆台形で埋土はにぶい黄褐色やにぶい黄橙色を呈し、上層にはシルトが、下層は粗砂から礫が数層にわたって堆積する。流路 S0034 上層には溝 S0030 とほぼ同じ幅の溝が同方向に流れ、流路 S0034 より新しい時期には、上層に溝があったことが分かる（推定平面形は図 44 流路 S0034 内の濃くアミフセした範囲である）。

また、流路 S0034 の形状も両肩からさらに段がついて狭まり深くなる形状をとる。つまり、何回かにわたって流路が流れていることを示す。さらに、空中写真で確認すると、流路 S0034 の下層に、重複するように茶褐色の砂礫層が帶状に広がるのが観察できる（巻頭写真図版 2 参照）。これは流路 S0034 よりさらに古い時期の流路が下層に存在していることを示している（推定平面形は図 44 流路 S0034 と重複して薄くアミフセした範囲である）。

古い時期の流路は、II - a 区では南北方向に垂直にのびたのち大きく東に屈曲し、II - c 区に入ると流路 S0034 とほぼ重なりながら再び東から西へ蛇行する流れとなる。II - c 区で北より西の II - d 区に入り、II - d 区の北西角にあたる X = - 158.955、Y = - 41.095 地点で調査区外へと抜けていく。

流路 S0034 は II - c 区に入るとより幅が広がっており、どこまでが古い時期の流路で、どこまでが流路 S0034 か断面をみても、堆積が川幅を変えて何段階にもわたっているため判別が難しい（図 45-⑤、⑦等）。

そこで、II - a 区の試掘トレチ部分等で下層確認を行ったところ、最も深いところは地表高から 2.0 m 近く下がり、その下層は土壤が砂礫層になるため流路と基盤層上層との判別も難しくなった。地形上低くなるほど同じ箇所に自然流路の形成が繰り返されていたと考えられる。

この流路からは弥生時代中期から古墳時代後期の土器が多数出土した（図 64、写真図版 31～33）。土器は II - a 区と II - c 区の境界や II - c 区の中央アゼ⑤、⑥付近等にかたまってみられ、川幅が広くなり流れの淀んだところに集積したと言えるだろう。

特に弥生時代後期の遺物量が多く、また、II - c 区では流路 S0034 の南肩から古墳時代初めから前期の土器（S0134～S0136、S0150）が數点完形で出土している。これらのことから勘案して、流路 S0034 は弥生時代後期から古墳時代前期に機能し、古墳時代後期までには廃絶したと考えられる。

II 区の地形や地質条件は I 区と比較すると下層は 5 層、6 層と言った砂礫層の堆積が厚く（図 7 参照）、弥生時代中期から古墳時代前期までは氾濫と堆積が繰り返され、それ以降は比較的安定し、土壤化した

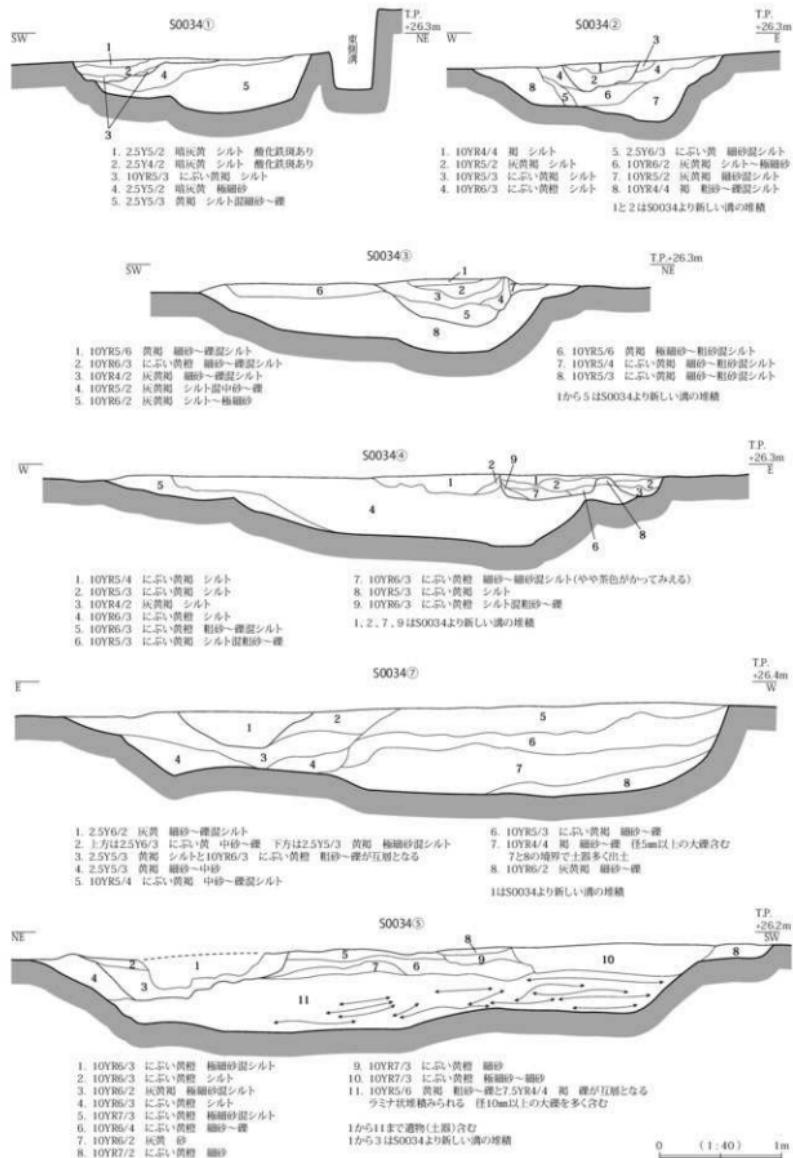


図45 流路 S0034 断面図 (1)

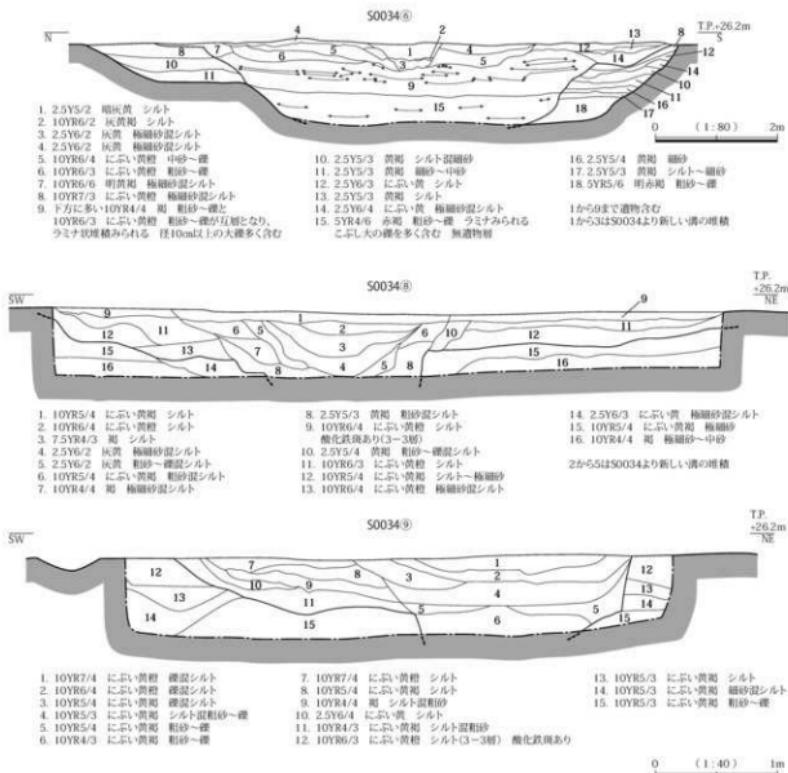


図46 流路S0034断面図(2)

と考えられる（第4章第1節参照）。流路S0034やその上層、下層の溝や流路はまさにその状況を反映した遺構と言えよう。

**講 S0030** (図 44・47、写真図版 15・16、21、24) 流路 S0034 に沿うように、その南を流れる溝である。緩やかに曲線を描きながら II-a 区南東角から II-d 区北西角にむかって流れ、両端は調査区外にさらに続いている。検出長 85.0 m 超、最大幅 0.5 m、深さ 0.05 ~ 0.25 m をはかる。断面は逆台形もしくは皿形で、にぶい黄褐色や黄褐色シルトが堆積する。地形の高低から流路 S0034 同様、南東から北西に流れていたとを考えられる。流路 S0034 との距離は、最も近いところでは 0.05 m、最も離れたところでは 10.0 m 程度である。壁断面等の観察により、第 1 面（4 層）より上層、3~2 層上面からの遺構と考えられる。

流路 S0034 と溝 S0030 の間や溝 S0030 の南からは、弥生時代後期末から古墳時代前期の土器が數点出土した（図 58、写真図版 23）。また、溝 S0030 内からは出土量は少ないが古墳時代後期の須恵器杯「174」等が出土している。流路 S0034 上層に溝 S0030 と同規模の溝が平行にあり、流路 S0034

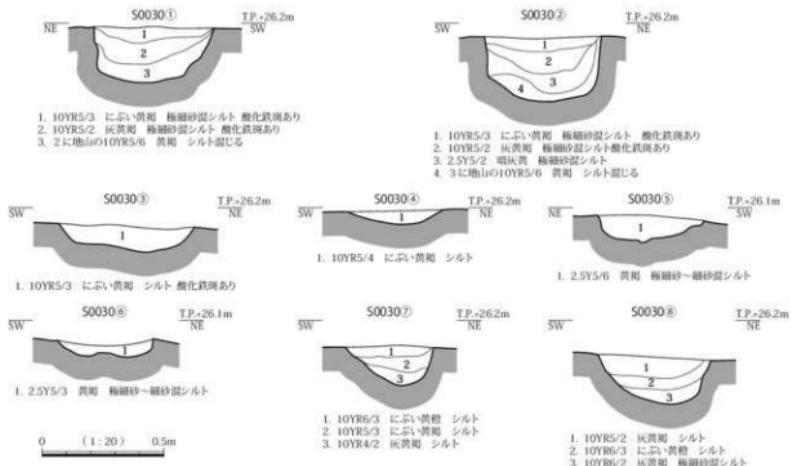


図 47 溝 S0030 断面図

上層の溝と何らかの関係性があるといえる。流路 S0034 より新しく古墳時代中期から後期に機能したと考える。

**II-a 区の遺構**（図 48～50、写真図版 15～17） II-a 区は II 区の中では最も南に位置し、総面積は約 1,371m<sup>2</sup>をはかる。Y = -41,068～-41,069 間にある南北用水路に分断され、東西に長い長方形が二つ連なった形状となる。この用水路を境に東と西では西が一段低くなっていた。用水路より東部分は調査前には畑等の耕作地だったが、用水路より東部分はかつて溜池等があったようで湿地状になっていた。

Y = -41,041～-41,043 間には松原市教育委員会が行った試掘確認調査の 10 トレンチが存在する。また、地形としては南東から北西にむけて低くなるので、先述の流路 S0034 や溝 S0030 も南東から北西に流れていると考えられる。II-a 区の用水路より東、南東部の標高は T.P. + 26.2～26.3 m、北西部の標高は T.P. + 26.1 m 前後である。南北用水路際の溝や用水路より西の南端中央で井戸、Y = -41,057～-41,067 間に環状にめぐる溝とその中に円状の落ち込み（おそらく井戸）を検出したが、近世以降の遺物が出土した。

II-a 区では試掘確認調査の結果をふまえて、耕土層（1 層）とその直下層（2 層）を機械掘削し、3～2 層上面を第 1 面として調査を行った。東側では東西方向の、西側では南北方向の鋤溝を全体に検出した。遺物も古代や中世の土器を含むことから中世の耕作遺構と判断した。その下層（3～2・3 層）にも一定量の遺物を含み、4 層上面で多くの遺構が認められることからこれを第 2 面とした。その後の II 区の調査で 3 層の堆積が北にむかって厚く遺物を含むことが判明し、4 層上面を遺構面とし調査区全域を 1 面調査することとなった。そのため、報告書に記載する第 1 面は 4 層上面を指し、II-a 区でも第 2 面を第 1 面として報告している。

用水路より西の調査区では東から西に段状に落ちる棚田や段畠状になっており、Y = -41,083 より西は湿地状になる。ここから出土する遺物は近世以降のもので、東半の比較的綿まとった地表面からは畦

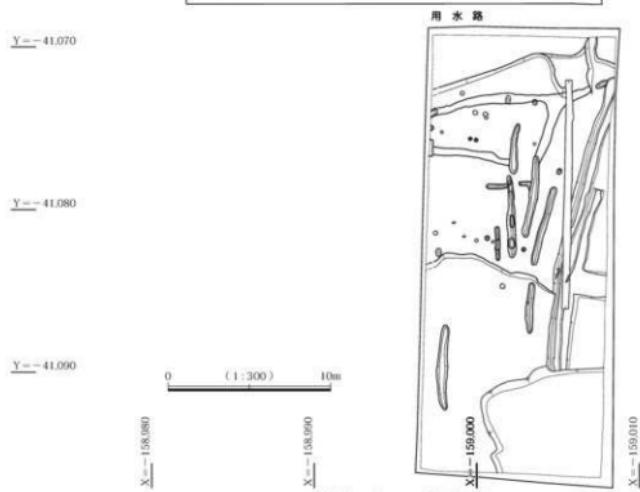
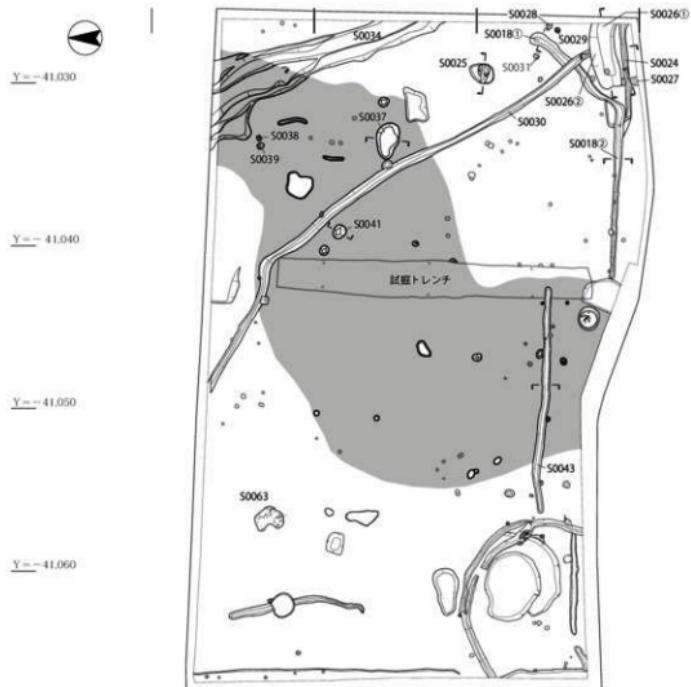


図 48 II-a 区平面図

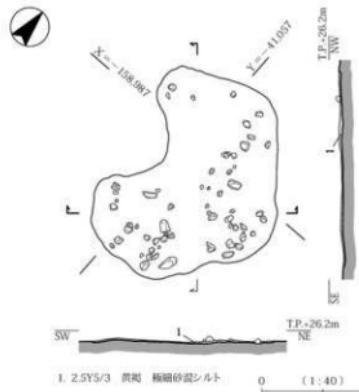


図 49 集石遺構 S0063 平・断面図  
取りや加工痕があるものはなかった。上層の包含層や基盤層もシルトか極細砂層で構成されており礫は包含されないことから、これらの石が他の場所から人為的に運び込まれ、この場所に集められたことは間違いないが、その用途や性格は不明である。

**溝 S0018** (図 50) 南東部で検出した東西方向の溝で検出長 17.0 m、幅 0.2 ~ 0.7 m、深さ 0.2 m をはかる。東西にのびる溝が途中から北東に屈曲する。断面は逆台形を呈し、埋土は上層が暗灰黄色極細砂混シルト、下層が褐色極細砂から細砂混シルトである。土坑 S0026 を囲むように溝 S0018、溝 S0024、溝 S0027 が存在している。

**溝 S0024・S0027** (図 50) 溝 S0024 は南東部で検出した東西方向の溝である。調査区東端よりのび溝 S0027 と直交して西端は S0018 と接する。検出長 7.0 m、幅 0.25 m、深さ 0.05 m をはかる。

溝 S0027 は南東部で検出した南北方向の溝である。調査区南端よりのび、溝 S0024 と直交して、北端は土坑 S0026 と接する。検出長 1.0 m、幅 0.35 m、深さ 0.07 m をはかる。

いずれも断面は皿形で、埋土は黄褐色極細砂混シルトや灰黃褐色礫混シルトである。

**土坑 S0026** (図 50) 南東隅で検出した土坑である。東西に長い長方形を呈する。長辺 4.0 m、短辺 1.5 m、深さ 0.4 m をはかる。断面は逆台形を呈し、埋土は上層がぶい黄褐色粗砂から礫混シルト、中層が暗灰黄細砂～礫混シルトである。細片の遺物を含む。溝 S0024 や溝 S0027 がこの土坑 S0026 に接していることから、溝 S0024、溝 S0027 からの水を取り込み貯水する施設とも考えられる。

**土坑 S0025** (図 50) 調査区東側で検出した楕円形の土坑である。断面は逆台形であるが、壁面が底面より張り出し、庇状になる。短径 0.75 m、深さ 0.3 m をはかる。埋土は灰黃褐色シルトで炭が混じり、下方ほど炭の含有量が多くなる。遺物を含む。

**ピット S0028・S0029** (図 50) 調査区東端で検出したピットである。直径 0.25 ~ 0.3 m、深さ 0.05 m をはかる。

**ピット S0031** (図 50) 土坑 S0025 と溝 S0018 の間に位置するピットであり、溝 S0018 を挟んでピット S0029 と線対称に位置することから溝 S0018 に付随する施設や水量調節を行う杭木痕等の可能性もある。

畔の痕跡や東西方向の耕作溝を検出した。従って、この区域は近世以降耕作地として利用され、それ以前は池だった可能性が高い。

**集石遺構 S0063** (図 49、写真図版 17) 調査区の北西部、X = -158.987、Y = -41.057 の地点で検出した。調査区の北西部はほとんど遺構がない区域であるが、長辺 1.5 m、短辺 1.0 m ほどの範囲にのみ 5 ~ 20 cm の大きさの礫石が集中して検出された。ただし、土坑状に窪んでおらず、平坦な面から石が集中して検出された。石を中心や輪郭の縁辺に規則的に配列したり、積み重ねて立体的な構築物を作っていた状況でもなく、石が無作為に散在するような状況だった。

また、石は数十個あったが、いずれも自然石で面取りや加工痕があるものはなかった。上層の包含層や基盤層もシルトか極細砂層で構成されており礫は包含されないことから、これらの石が他の場所から人為的に運び込まれ、この場所に集められたことは間違いないが、その用途や性格は不明である。

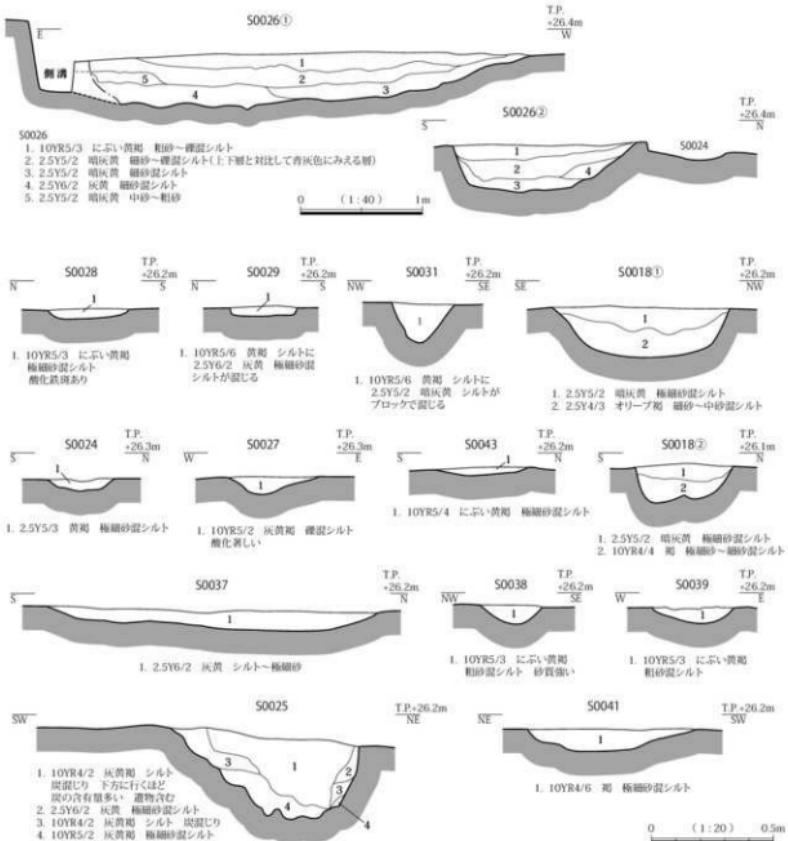


図 50 II-a 区遺構断面図

**土坑 S0037 (図 50)** 西端が溝 S0030 の中心に位置する土坑である。楕円形を呈し、直径 1.35 m、深さ 0.08 m をはかる。断面は皿形を呈し、埋土は灰黄色のシルトから極細砂である。

**ピット S0038・S0039 (図 50)** 調査区の北東部に位置し直径 0.25 ~ 0.35 m、深さ 0.05 m をはかる。

**土坑 S0041 (図 50)** 溝 S0030 の西肩に位置する円形の土坑で直径 0.7 m、深さ 0.1 m をはかる。

**溝 S0043 (図 50)** 調査区の南部に位置する東西溝である。検出長 14.0 m、幅 0.35 m、深さ 0.05 m をはかる。断面は皿形でにぶい黄褐色極細砂混シルトが堆積する。溝 S0018 の北西に位置するが、平面・断面形等が類似している。

**II-b 区の遺構 (図 51・52、写真図版 18 ~ 20)** II-b 区は II 区の中では最も北に位置し、北にむかって先端が飛び出す逆 T 字の形状をとる。北突出部の北辺は東西の市道に接し、南辺は II-c 区と接する。II-b 区と II-c 区の境界には畦道が存在し、現況でも II-b 区が一段低くなっていた。総面

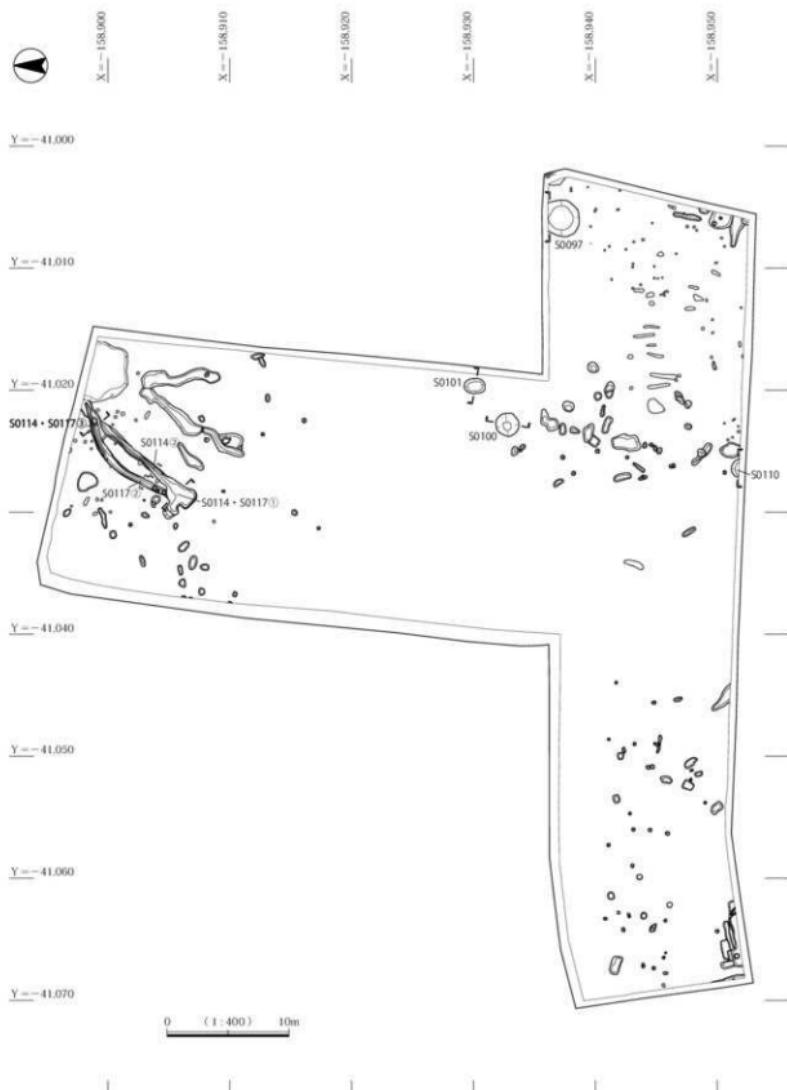


図 51 II-b 区平面図

積は1,893m<sup>3</sup>で全調査区の中で最大である。

II-b区では南東から北にむかって遺構面の高さが急激に低くなる。南東端の標高がT.P.+26.3mであるのに対し、北突出部の北西端ではT.P.+25.8mと比高はおよそ0.5mある。

現地表面から遺構面までの厚さは0.5~0.6mで、基盤層(4層)との判別も難しかった。そのため、空中写真測量終了後に最も低くなると思われる北突出部の西端部分に沿って、南北方向のトレンチを設定して下層を確認した(図53、写真図版19)。このトレンチを深さ0.5m程掘削したところ、弥生時代中期初めから後期の土器が、遺構からではないがまとまって出土した(図54~56)。従って、北突出部の西側や東側はさらに低くなる可能性が高く、II-b区の北東部はかなり高低差のある地形だったと言える。

遺構、遺物とも全調査区中で最も少なく、東西に長い部分で検出した遺構は井戸や土坑、鋤溝、ピット等で、中世以降に主に耕作地として利用されていたと考える。また、北突出部でみられる溝S0114、溝S0117等も人為的な遺構でなく、低くなった部分に自然にできたたわみと考えるのが妥当かもしれない。流路S0034のような大規模な流路は検出していないが地形としても低く、常に湧水するような環境だったため居住には適さなかったと考えられる。

**井戸S0097**(図52) 調査区の北東部で検出した。北端は調査区外となる。直径2.4~2.8mのほぼ円形の土坑ですり鉢状に窪み、井戸枠瓦等が出土することから井戸と判断した。ただし、明確な井筒等の施設が検出されたわけではない。周辺一帯に鋤溝が確認できることから、耕作遺構に伴った灌漑施設だと考えられる。

断面は逆台形で、下底面の直径は1.2m、深さ0.8mをはかる。埋土はにぶい黄色から黄褐色のシルトがたわんだように堆積する。中近世の陶磁器、井戸枠瓦等が出土していることから、近世以降の遺構と捉える。

**井戸S0100**(図52) 北突出部から東西に屈曲する場所で検出した。ほぼ円形の土坑で、形状や深さがあることから素掘りの井戸と判断した。直径1.8m、深さ0.8mをはかる。断面は逆台形で、深さ0.6mのところからすばまって、さらに直径0.4m程度の円状に深くなる二重円の構造となるので、直径0.4mの井筒があったと想定する。

埋土は上層はシルトブロック混じりのにぶい黄橙色シルトがたわんだように堆積し、下層は井筒の外側にはにぶい黄色から黄灰色のシルトに炭化物が混じる。各層から中近世の陶磁器等が出土することから、近世以降の遺構と捉える。

**土坑S0110**(図52) 調査区の南端にあり、II-b区とII-c区にまたがって検出した。円形の土坑で直径1.35m、深さ0.6mをはかる。断面は深い鉢形で、埋土は暗灰黄色シルトに地山のシルトブロックが混じり、單一な層であることから廃絶時に一挙に埋められたと思われる。

中近世の陶磁器等が出土しており近世以降の遺構と考えられる。

**土坑S0101**(図52) 北突出部の東側、井戸S0100の北東で検出した。長円形の土坑で長径1.6m、短径0.6m、深さ0.15mをはかり、断面は皿形を呈する。遺物は出土しておらず、正確な時期は不明であるが、井戸S0100等と同様の時期と推測する。

**溝S0114・S0117**(図52、写真図版19) 北突出部の北部で検出した溝で、溝S0114と溝S0117は同じ始点から出発して二股に分かれる溝状の遺構であるが、溝というより地形の傾斜によるたわみと言えるかもしれない。

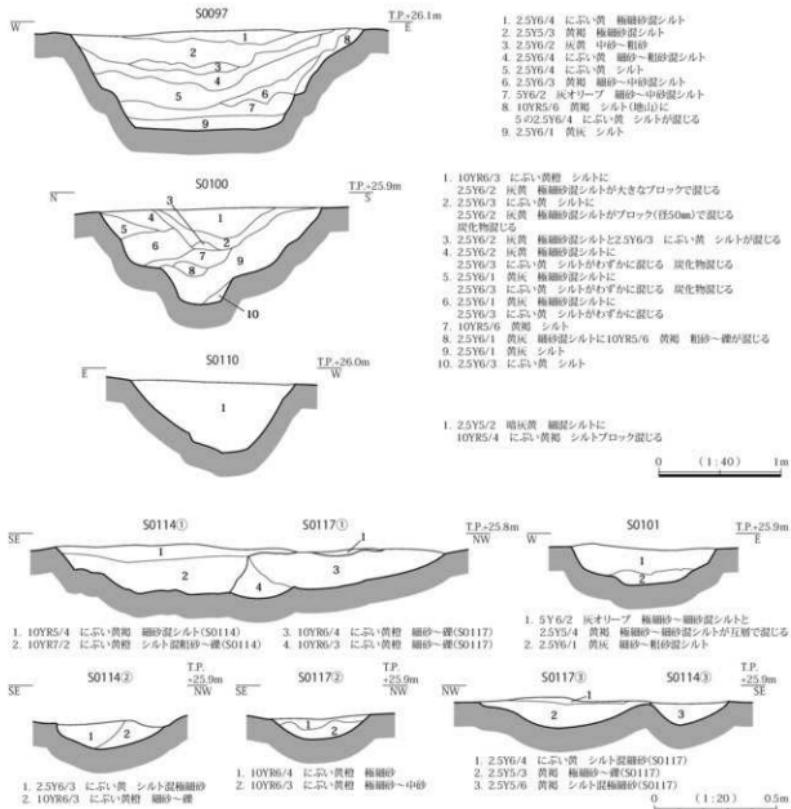


図52 II-b区遺構断面図

検出長 12.0 m、幅 0.3 ~ 0.8 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m をはかる。断面は皿形で、にふい黄色のシルトから細砂が堆積する。須恵器壺の小片が出土し、古墳時代後期とされる。

この東にも同様の形状のV字状に分かれる溝を検出したが、遺物は出土していない。

**II-b区深掘部の遺構**(図53～56、写真図版19・20) II-b区の第1面の遺構は北突出部に限られ、東西に長い部分で検出した土坑や井戸、鋤溝等は中世以降のものであった。

しかし、北突出部の側溝を掘削した際に4層下からも須恵器の破片を確認し、4層と5層の境界に人为で攪拌されたような砂層が存在することから、部分的にトレンチを設定して下層確認を行った(図53)。

トレントの幅は2.0 mで、深さは約0.5 m掘削した。すると、4層と5層の境界にあたる薄い砂層(図7、X=-158.920 基本層序模式図参照)もしくは5層上面から土器が3箇所にかたまって検出されたため、各々の土器群にA、B、Cという名称を与えた。



図 53 II-b 区深掘トレンチ平面図

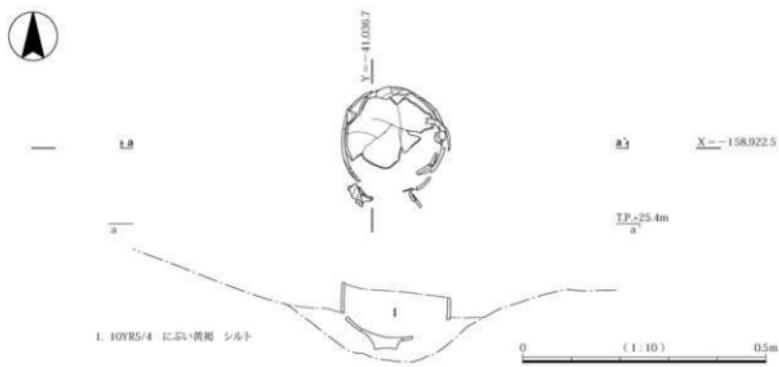
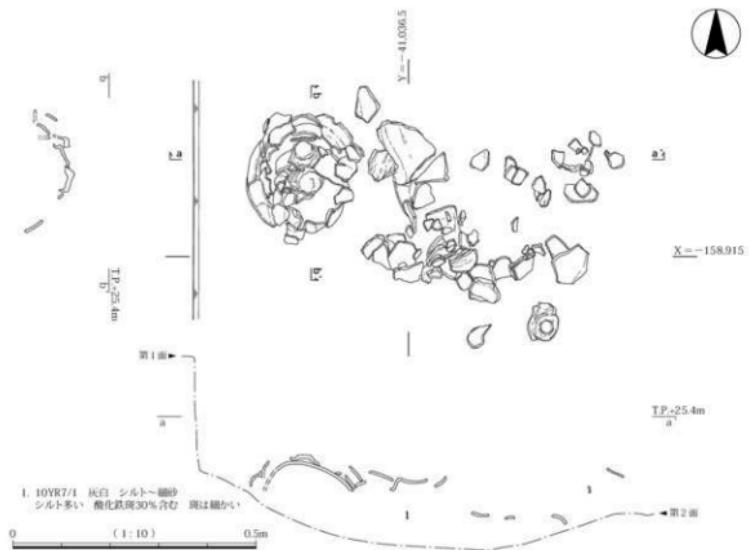
また、この地表面から第1面まで地震の液状化現象による埴砂痕跡がみられるが、I区と同じ南関東から四国でみられる巨大地震の痕跡と考えられる（第4章第1節参照）。

**土器群A**（図 54、写真図版 20）土器群A、B、C 中では最北にあり、西側溝際の  $X = -158,915$ 、 $Y = -41,036.5$  を中心として複数個体の土器が東西約 0.8 m に広がって出土した。遺構からの出土ではなく地表のややたわんだところに土器が溜まっていたような状態で出土した。出土高は T.P. + 25.2 ~ 25.3 m である。最大の個体は弥生時代後期の鉢 [162] で、底部が上になった倒置の状態で出土した。その東にも甕 [161] の破片等が散在して出土した。また、細片のため器形も不明だが、内面に赤色顔料を塗ったおそらく壺の破片〔写真図版 33 ~ 200〕が一定量出土した。剥離が著しく、赤色顔料の原料も丹や水銀朱が考えられるが不明である。

**土器群B**（図 55、写真図版 20）土器群A から南下した  $X = -158,922.5$ 、 $Y = -41,036.7$  地点で出土した。土器群B は弥生時代後期の壺 [164] 他が底部を遺構面に接地する正置の状態で出土した。壺の体部下半は器形を保ち球形を示すが、体部上半から口縁部は内部に落ち込み、大半は失われている。出土高は接地面が T.P. + 25.2 m である。弥生時代後期前半と考えられる。

**土器群C**（図 55、写真図版 20）土器群の中では最も広範囲に深さも約 0.1 ~ 0.2 m に集中して、土器が押しつぶされたような状態で出土した。取り上げるため土坑状に掘りくぼめたが、西から東へ滑り落ちるように埋積しており、流路の流れの方向に押し流されたと考える。土器は南北に約 1.0 m、東西に約 1.2 m の範囲で広がる。土器はすべて弥生時代中期の甕 [165 ~ 171] で、口縁部から底部もしくは体部まで続くもので 3 個体復原でき、底部のみのものも含めると少なくとも 5 個体以上の甕が集中していたことが分かる。出土高は T.P. + 25.1 ~ 25.3 m である。

遺構、遺物ともほとんどみられなかったII-b区のこの部分でのみ、弥生時代中期から後期の遺物が器形を保ったままの状態で出土した。土器群検出面の下層にあたる 6 層は砂礫を多く含んだ氾濫堆積層であり、第1面ではこの区域で明確な流路は検出していないが、より下層の流路の氾濫によってもたら



されたと考えられ、北突出部や東西に長い区域の東側は5層上面を遺構面とすべきだったかもしれない。

さらに、土器群出土地点に直交するように東西方向のトレンチ調査を行ったが、遺構、遺物とも確認できなかった。

この周辺が地形環境からも居住域とは考えにくいが、土器の存在は近辺に弥生時代中期から人が生活していたことを示唆する。また、第4章で掲載した自然科学分析でも、5層が弥生時代中期末から後期

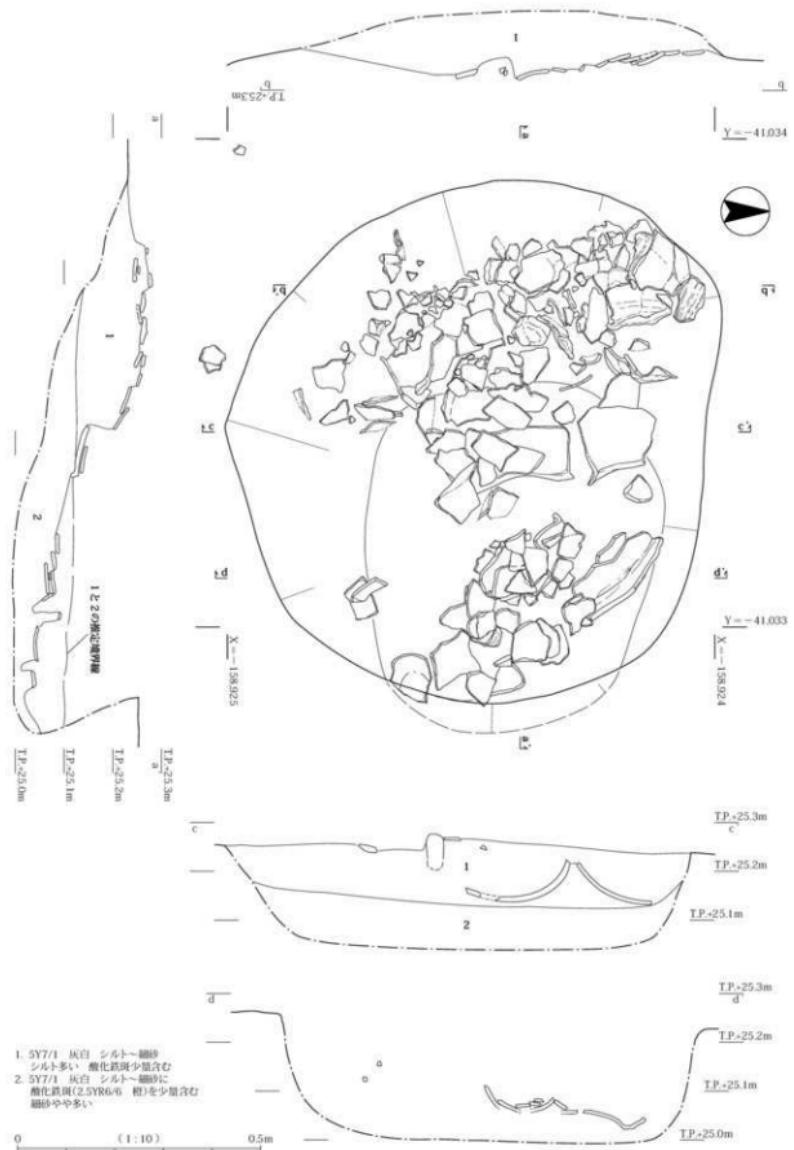


図56 II-b区土器群C出土状況図

に相当するとの値が得られており、出土した土器の時期と大きく齟齬はない。

**II-c 区の遺構**（図 57～59、写真図版 21～23） II-c 区は II 区の中央に位置し、北は II-b 区、南は II-a 区、西は II-d 区に接する。東西約 43 m、南北約 32 m の東西に長い長方形を呈し、総面積は 1,342 m<sup>2</sup> である。調査区の中央から南半には II-a 区から続く流路 S0034 と溝 S0030 が南東から北西に横断し、西の II-d 区へとびていく。II-c 区内での流路 S0034 の検出長は 40 m 超、溝 S0030 の検出長は 18 m 超となる。II-c 区の流路 S0034 内からは弥生時代中期から後期の土器や古墳時代の須恵器、流木等が含まれていた。

流路 S0034 南岸と溝 S0030 の間には、ピットや土坑、完形に近い土器が遺構面に散在して認められた（土器 S0134・S0135・S0136・S0150 等）。流路 S0034 より北では調査区北西で井戸や土坑等が若干認められるものの、井戸は中世以降のものであり、南半に比べると遺構は希薄になる。よって、機能していたのは主に流路 S0034 より南の区域と考えられる。ただし、建物等の明確に居住を示す遺構は検出されなかった。S0134 等で土器が完形に近い状態で遺構面上から検出されるのは、流路 S0034 によって運ばれてきたと考えられ、この近辺での居住を示す根拠といえる。

II-c 区の最も高い南東部での標高は T.P. + 26.1 m、最も低い北部の標高は T.P. + 26.0 m であり、流路や溝もこの傾きにより南東から北西に流れていると考えられる。

また、流路 S0034 と重複する位置に基盤層のシルトより砂質の強い範囲が帶状に広がり、これがより古い時期の流路に相当すると考えられる。トレーナーを設定し流路 S0034 とそれ以前の流路の深さを断面調査し、深さ 2.0 m 以上になることが判明した。

**土器 S0134**（図 58、写真図版 23-1） 流路 S0034 の南岸中央、Y = -41.0047 ~ -41.051 の間で数点の土器が散在して検出された。いずれも土坑等の中に埋納されていたのでなく、遺構面上に置かれていた出土状況から、流路 S0034 の氾濫によって、流路 S0034 の両岸に土器が集積した可能性が高い。このうち最西の土器を S0134 とした。

土器 S0134 は古墳時代前期に相当する甕で、口縁部を上にむけた正置の状態で検出した。体部下半は器形を保っていたが、上半は中に落ち込んだ状態であり、大半は失われていた。体部は直径が約 25 cm で球形に近い形を成していたが、摩耗が著しく取りあげ後に器形を復原することができなかった。

**土器 S0135**（図 58、写真図版 23-2） 散在する土器の中では最も東、X = -158.982、Y = -41.047.5 地点で高杯を 2 点検出した。1 点は杯部内面を遺構面にむけた倒置の状態で検出され、杯部はほぼ残存していたが、脚部の途中から欠損し脚台部は失われていた。古墳時代前期の高杯〔172〕である。

他の 1 点は杯部内面を南東のもう 1 体の高杯に、台部を北にむけた横置の状態で検出した。杯部から脚部、台部まで器形を留めていたが半分は削平されている。摩耗が著しく復原できなかった。検出状況でみる限りは杯部口径約 20.0cm、器高 20.0cm 弱、台部底径約 15.0cm で、〔172〕の高杯と同時期と考える。

**土器 S0136**（図 58、写真図版 23-3） 土器 S0135 の北東、X = -158.981、Y = -41.047.8 地点で土師器壺を検出した。口縁部を南にむけた横置の状態で検出した。上半分は欠損し、摩耗が著しく復原できなかった。検出状況でみる限りは杯部口径約 10.0cm、体部径約 15.0cm、器高 20.0cm 弱をはかり、丸底で器壁が薄いことから、古墳時代前期の壺と考えられる。

**土器 S0150**（図 57） 土器 S0136 より約 20 m 西で土師器の壺もしくは甕を複数個体検出した。土器 S0134 から土器 S0136 と違って、土圧によって押しつぶされ器形をとどめていない。そのうち 1 個

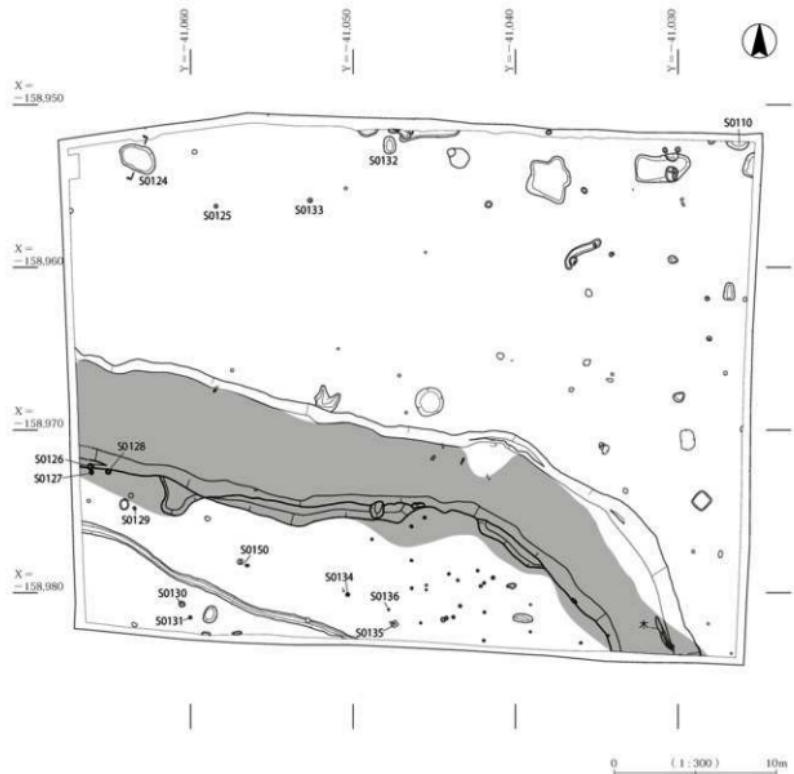


図 57 II-c 区平面図

体のみ復原図化したが、口縁部や底部も失われ、体部も約2分の1残存するのみだった。古墳時代前期の甕〔173〕である。

**土坑 S0124**（図 59） 調査区北西端で検出した楕円形の土坑である。東西に長く、長径 2.0 m、短径 1.5 m、深さ 0.2 m をはかる。断面は逆台形で、調査区北西部は 4 層も砂質が強く、にぶい黄褐色のシルトから粗砂、礫が堆積する。遺物は出土していない。

**ピット S0125**（図 59） 土坑 S0124 の南東に位置するピットである。直径 0.15 m、深さ 0.1 m をはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

**ピット S0126・S0127・S0128**（図 59） 調査区西端、流路 S0034 の南肩で検出したピットである。直径 0.1 ~ 0.25 m、深さ 0.05 ~ 0.1 m をはかる。断面は皿形を呈する。流路 S0034 に付随する施設であったかは不明である。遺物は出土していない。

**ピット S0129**（図 59） ピット S0126・S0127・S0128 より東で検出した。直径 0.1 m、深さ 0.05 m をはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

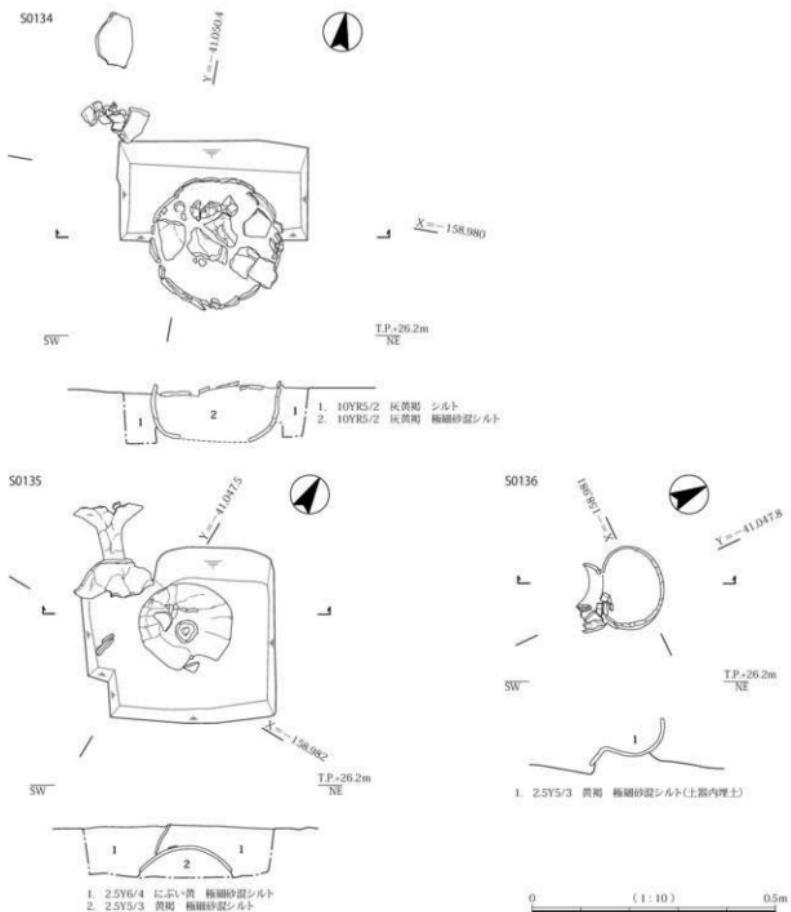


図 58 II-c 区土器 S0134・S0135・S0136 出土状況図

**ピット S0130・S0131** (図 59) 調査区の南西部、溝 S0030 の南側で検出した。ピット S0130 は直径 0.35 m、深さ 0.2 m をはかる。断面は方形を呈する。ピット S0131 は直径 0.15 m、深さ 0.15 m をはかる。いずれも遺物は出土していない。

**土坑 S0132** (図 59) 調査区北端中央で検出した。長円形の土坑で南北に長い。長径 1.0 m、短径 0.7 m、深さ 0.1 m をはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

**ピット S0133** (図 59) 調査区北西部、ピット S0125 と土坑 S0132 の間に位置する。直径 0.15 m、深さ 0.1 m をはかる。断面は皿形を呈する。遺物は出土していない。

II-c 区では流路 S0034 より北東でみられる遺構は中世以降の土地開発に伴って形成された井戸

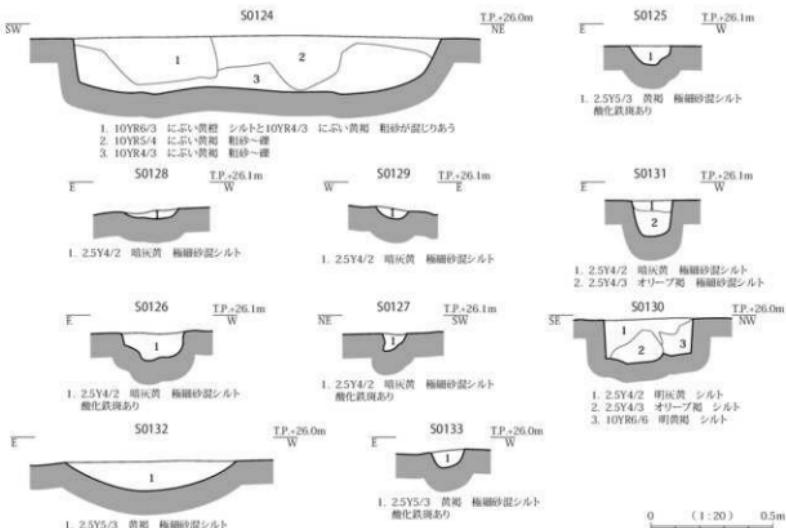


図 59 II-c 区遺構断面図

と考えられ、それ以前の明確な生活痕跡は検出できなかった。しかし、土器 S0134～S0136・S0150 の土器は遺構に埋納されたものではなく、流路 S0034 によって運ばれてきたと推測される。つまり、II-c 区よりやや離れてはいるが、周辺に古墳時代前期の居住域があったことを示す。

**II-d 区の遺構**（図 60～63、写真図版 24～26） II-d 区は II 区の中では最も西に位置し、南北が長い長方形の形状をとる。東辺は用水路を挟んで II-c 区に接する。南辺は II-a 区と接するが、ここにも現況の畦道や水路が存在し II-d 区が一段低くなっていた。総面積は 1,109m<sup>2</sup>で II 区の中では最小である。II-a 区や II-c 区との境界の現存する用水路や畦道の下層にも近世の遺物を含む溝（水路）が検出され、近世以前には同じ位置に水路が存在していた。また、II-d 区の南東端には近世以降の井戸が検出され、接する II-a 区も池であり、この周辺は標高が低く貯水池と考えられる。

調査区の中央東から北西端にむかっては II-c 区から続く流路 S0034 及び溝 S0030 が流れ、それより南西部では掘立柱建物、ピット、土坑、溝等の遺構が検出された。遺構は南ほど密になり、II 区の中では遺構分布密度が高い。調査区西端の西壁にも柱穴や土坑が観察でき、一定量の遺物もみられるところから II-d 区の南西部から西に居住域が広がっていたと思われる。

遺物も弥生土器、土師器の他にも縄文土器や、一つの土坑から出土する大量のサヌカイトの石器、剥片、古墳時代前期の円筒埴輪等多様な時期のものがみられる。

II-d 区は南東部の遺構面標高は T.P. + 26.1 m 前後、北西部の遺構面標高は T.P. + 26.0 m で余り比高がみられない。

**建物状遺構 S0908**（図 61、写真図版 26） 調査区の南東部で検出した Y = -41,078 を長軸とし、長軸が南北の正方位にほぼ一致する長方形の土坑である。検出時には竪穴建物もしくは掘立柱建物と推測したが、床面が浅く壁溝も認められないと、四隅に柱穴が描わないと等から、建物状遺構とした。

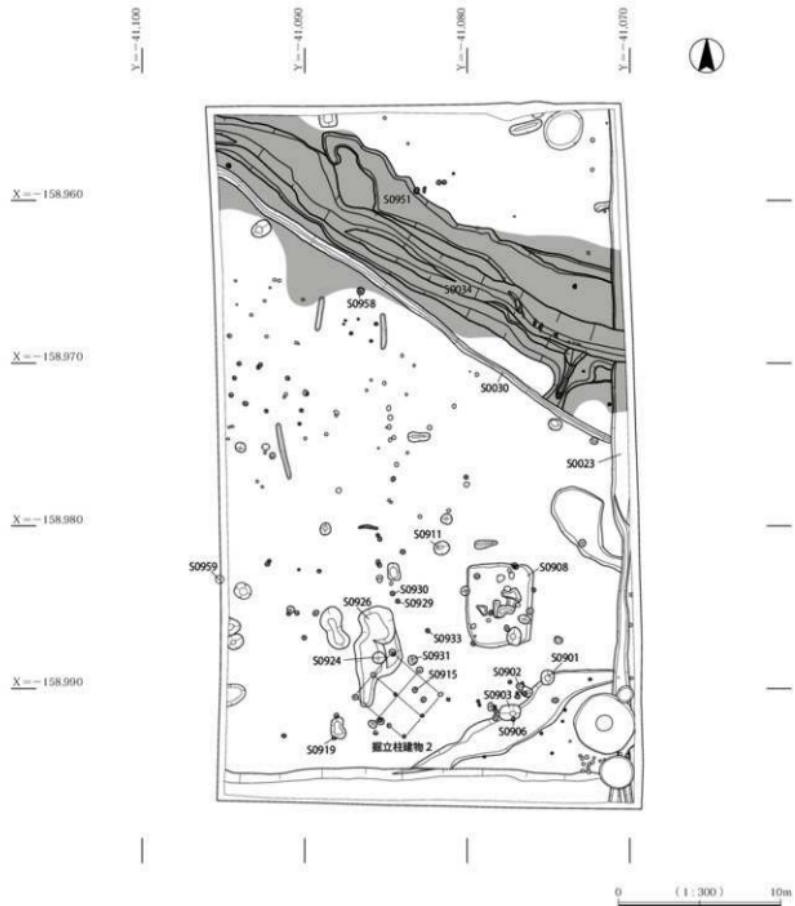


図 60 II-d 区平面図

長辺 5.2 m、短辺 4.0 m、深さ 0.1 m をはかる。隅丸方形の長方形を呈し、断面は削平を受けているものの浅く、地山の土を掘りくぼめたようである。中心に不定形の土坑 S0940 を、南東隅に土坑 S0928 を、西辺に土師器高杯が出土した土坑 S0909 を、北辺に柱穴 S0910 を、その他周辺や内部に複数のピットや土坑を有する。掘方内から遺物は出土していない。建物状遺構 S0908 を切る土坑 S0928 出土遺物から、弥生時代後期以前の遺構と考える。

**土坑 S0928 (図 61)** 建物状遺構 S0908 の南東隅で検出した長円形の土坑である。長径 1.0 m、短径 0.85 m、深さ 0.25 m をはかる。断面は皿形で、褐色シルトに炭が混じって堆積する。炭が混在することから炉の可能性も考えたが、中層から高杯 [177] が出土しており、この高杯が被熱していない

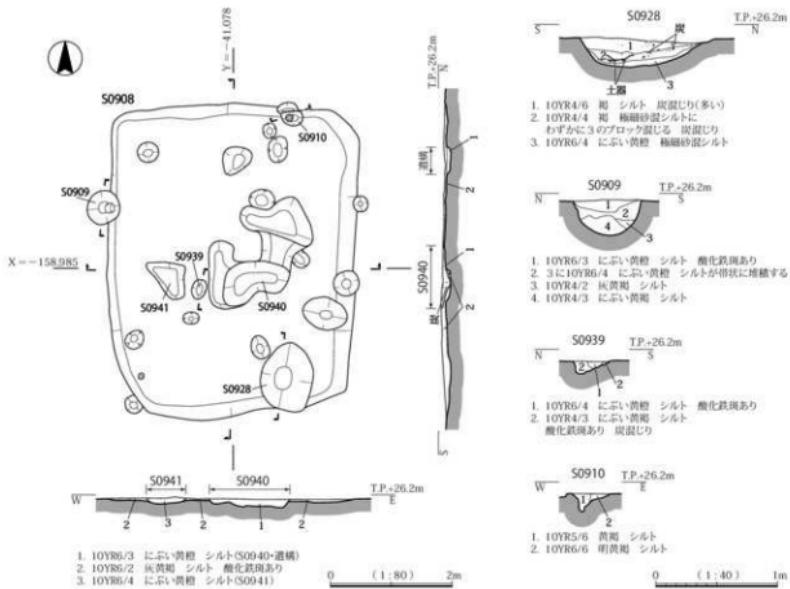


図 61 建物状遺構 S0908 平・断面図

ことや位置が南辺中央よりずれていることから柱穴ではないと判断した。弥生時代後期と考えられる。

**土坑 S0940** (図 61) 建物状遺構 S0908 の中心に位置する土坑である。複数の土坑が切り合う複雑な形状を呈するが、凹字状の不定形で全長 2.0 m、幅 0.3 m、深さ 0.1 m をはかる。断面は皿形で、にぶい黄褐色シルトが堆積する。遺物は出土していない。

**土坑 S0909** (図 61、写真図版 26) 建物状遺構 S0908 の西辺にあり、建物状遺構 S0908 を切る土坑である。直径 0.55 m、深さ 0.3 m をはかる。断面は鉢形で、にぶい黄褐色からにぶい黄褐色のシルトが堆積する。土坑の上面には拳大的礫が、内面底部からは高杯の杯部のみ正置の状態で出土した〔178〕。飛鳥時代のものである。Y = -41.708 を中心として線対称に東辺にもピットがあるが規模が異なる。

**柱穴 S0910** (図 61) 建物状遺構 S0908 の北辺にあり、建物状遺構 S0908 を切る柱穴である。直径 0.3 m、深さ 0.15 m をはかる。断面は三角形で、柱痕が残ることから柱穴とみなした。X = -158,985 を中心線として柱穴 S0910 と対称に南辺にあるのが土坑 S0928 であるが、両者は規模や遺構の性格も異なることから、関連ある遺構とは判断し難い。その他、建物状遺構 S0908 の東西辺や内部にもいくつかピットや柱穴状の遺構が認められたが、掘方も浅く建物状遺構 S0908 に伴うか不明である。

**掘立柱建物 2** (図 62) 柱穴が一定間隔で並ぶ柱列になることは認識していたが、整理作業を経て掘立柱建物 2 として掲載することとした。そのため、柱穴断面の位置はそろっていない。

柱穴 S0912・S0913・S0914 列は芯々距離が 1.7 m の等間隔で並び、各柱穴は直径 0.2 ~ 0.25

m、深さ 0.1 ~ 0.2 m をはかる。中心に直径 0.1 m の柱痕をもつことから柱穴とした。柱穴 S0916・S0917・S0918・S0932 は上記の柱穴に平行するようにその北西に並び、2 つの柱列の間隔はおよそ 2.0 m である。各柱穴は直径 0.2 ~ 0.5 m、深さ 0.15 ~ 0.4 m をはかり、柱穴 S0917 と柱穴 S0918 は規模や形状も上記の列と似た柱穴とみなされるが、柱穴 S0916 は礎盤石のような根石が底面にあったが、他の柱穴とは規模も大きく、別の遺構（土坑）と捉えるべきかもしれない。柱穴 S0920・S0921・S0922・S0923 列は上記の柱列のさらに北西に並び、芯々距離はおよそ 1.8 m である。各柱穴は直径 0.25 ~ 0.45 m、深さ 0.05 ~ 0.3 m をはかり、中心に直径 0.1 m の柱痕をもつ。

掘立柱建物 2 は X = -158,990、Y = -41,084 地点に位置する。梁行 2 間、桁行 2 間の総柱建物となるが、等間隔であることから柱穴 S0920 南の柱穴 S0920 までを含めると、梁行 3 間、桁行 3 間の建物となる。含めないと規模は梁行が 4.0 m、桁行が 3.7 m もしくは 5.0 m である。柱穴のいずれからも遺物は出土しておらず、時期が明確でないが他の遺構との関連を考えると、古墳時代以降と推測する。

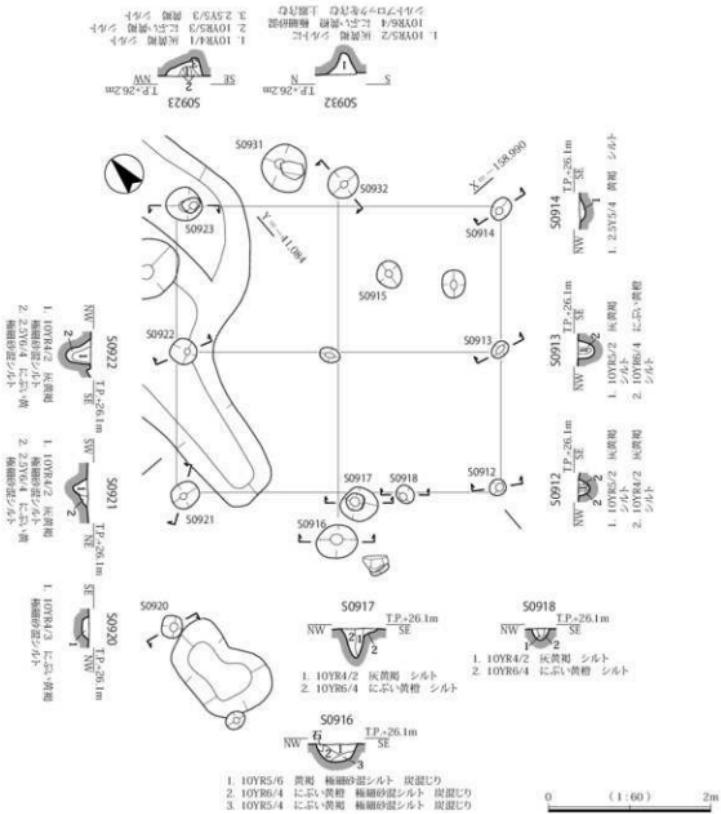


図 62 掘立柱建物 2 平・断面図

**土坑 S0901** (図 63) 調査区の南東部で北東から南西に広がる、溝状の落ち込みを検出した。その西肩部からは、土坑 S0901・S0902・S0903 が検出された。土坑 S0901 は円形の土坑で、直径 0.8 m、深さ 0.4 m をはかる。断面は深い鉢形で、褐色シルトが呈層的に堆積する。

上層には土師器高杯が出土したが、遺存状態が悪く、図化できなかった。また、古墳時代前期に属する円筒埴輪〔187〕が出土している。

**土坑 S0902** (図 63) 土坑 S0901 の南西に位置する。楕円形の土坑で長径 1.1 m、短径 0.5 m、深さ 0.3 m をはかる。断面からみると底部がさらに直径 0.1 m の範囲で窪む柱穴だった可能性もあるが柱痕は確認できなかった。上層から土師器壺が出土したが、遺存状態が悪く、図化できなかった。

**土坑 S0903** (図 63) 土坑 S0902 の南西に位置する。楕円形の土坑で長径 1.3 m、短径 0.85 m、深さ 0.3 m をはかる。断面は鉢形で、灰黄褐色や褐色シルトが堆積する。上層からは土器が出土したが、碎片になっており図化できなかった。

**柱穴 S0906** (図 63) 土坑 S0903 を切る柱穴である。直径 0.2 m、深さ 0.35 m をはかり、中心に

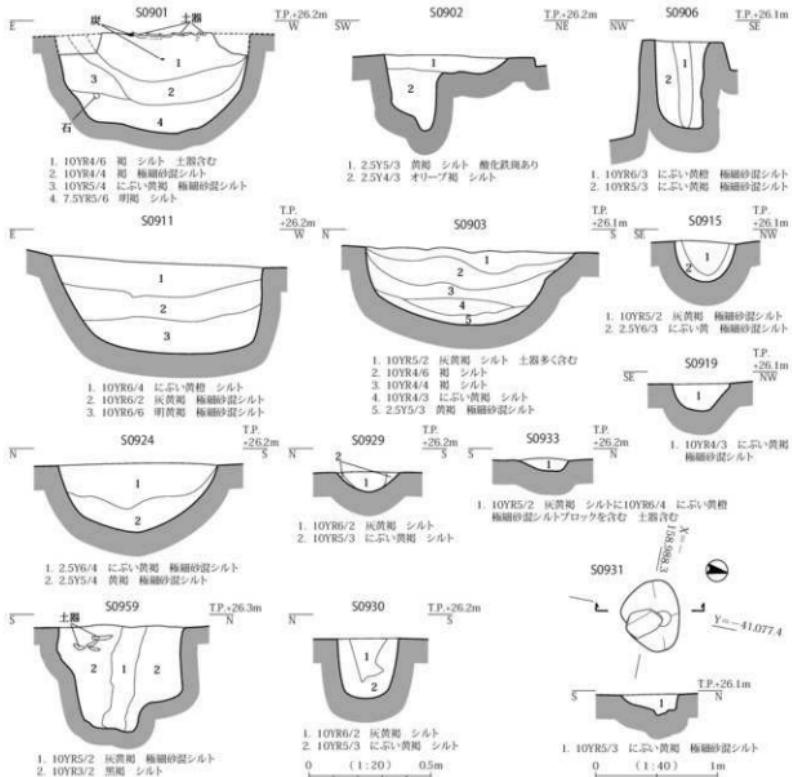


図 63 II-d 区遺構断面図

直径 0.05 m の柱痕があるため柱穴とした。

**土坑 S0911** (図 63) 建物状遺構 S0908 の北西に位置する円形の土坑である。直径 0.85 m、深さ 0.35m をはかる。断面は逆台形で灰黄褐色シルト等が堆積する。I 区で多くみられた不明土製品（壁材か）が出土した。

**土坑 S0924** (図 63) 落ち込み S0926 の中にあり、柱穴列の近くに位置する円形の土坑である。直径 0.65 m、深さ 0.3m をはかる。断面は鉢形で黄褐色極細砂混シルトが堆積する。

落ち込み S0926 や付近の包含層から縄文時代晚期の深鉢 [181 ~ 186] が出土している。

**柱穴 S0929・S0930** (図 63) 落ち込み S0926 の北東に位置する柱穴である。直径 0.25 m、深さ 0.1 ~ 0.25 m をはかる。

**ピット S0915・S0919・S0931・S0933** (図 63) 挖立柱建物 2 の周辺に位置するピットである。S0931 等は底面に礎盤石をもっており、これらのピットも柱穴だった可能性もある。

**柱穴 S0959** (図 63) 西壁で検出した柱穴である。直径 0.5 m、深さ 0.4m をはかり、中心に直径 0.1 m の柱痕をもつことから柱穴とした。甕 [179] や多数のサヌカイトの石器 [196・198・199]、剥片・チップが出土した。柱穴 S0959 周辺で石器製作が行われていた可能性もある。出土土器は弥生時代中期と考えられる。

**土坑 S0958** (図 60) 流路 S0034 の南岸中央で土坑 S0958 を検出した。弥生時代後期末の高杯 [180]、甕体部片、サヌカイトの剥片、チップが出土している。

II-d 区は II 区の中では唯一居住を示す遺構を検出し、II 区南西部に居住域が広がっていた可能性を示唆した。土器は縄文時代晚期から古代までを含み、その他にも埴輪が出土する等、時期幅が広いため遺構面の主要時期を決定できないとも言える。遺物の量や隣接する調査区との関連から、弥生時代後期から古墳時代前期を主要時期と捉える。

流路 S0034 は II-d 区では二重、三重に段がついたように形成されており、流路 S0034 の下層にもそれ以前の流路の砂礫層が広がってみえることから、何時期かにわたって流路が氾濫、堆積を繰り返していた様子がうかがえる。流路の幅がやや狭くなり、淀みに甕等の遺物が集積していた（写真図版 26）。II-d 区と II-c 区の 10m 以上離れた箇所から出土した須恵器甕等で接合した個体 [125] もあり、北西に遺物が運ばれてきたことがよくわかる。

溝 S0030 も向きをやや北寄りに変えたため、流路 S0034 とほぼ重なる位置まで北上し、II-d 区の北西角から調査区外へと抜けていく。古墳時代後期の須恵器甕 [174] が出土している。

### (3) II 区の遺物 (図 64 ~ 68、写真図版 31 ~ 33, 35, 37, 38)

個別の土器の詳細は遺物観察表にまとめた。流路 S0034 は複数区にまたがっているため図 64 にまとめ、それ以外は調査区ごとに概観していく。

**流路 S0034 出土土器・埴輪** (図 64、写真図版 31 ~ 33・38) 流路 S0034 の遺物出土量は II-c 区からが最も多く、次いで II-a 区、II-d 区である。II-c 区と II-d 区では流路の広範囲から出土するが、II-a 区は II-c 区との境界付近で多く出土した。弥生土器、土師器、須恵器、円筒埴輪等がある。

須恵器は杯身 [120・123]・杯蓋 [121・122]・甕 [125] であるが、古墳時代中期から後期と時期幅がある。

甕 [125] は口径 43.2cm の大甕で、口縁部から肩部のみ図化し得た。おそらく流路内で破損したた

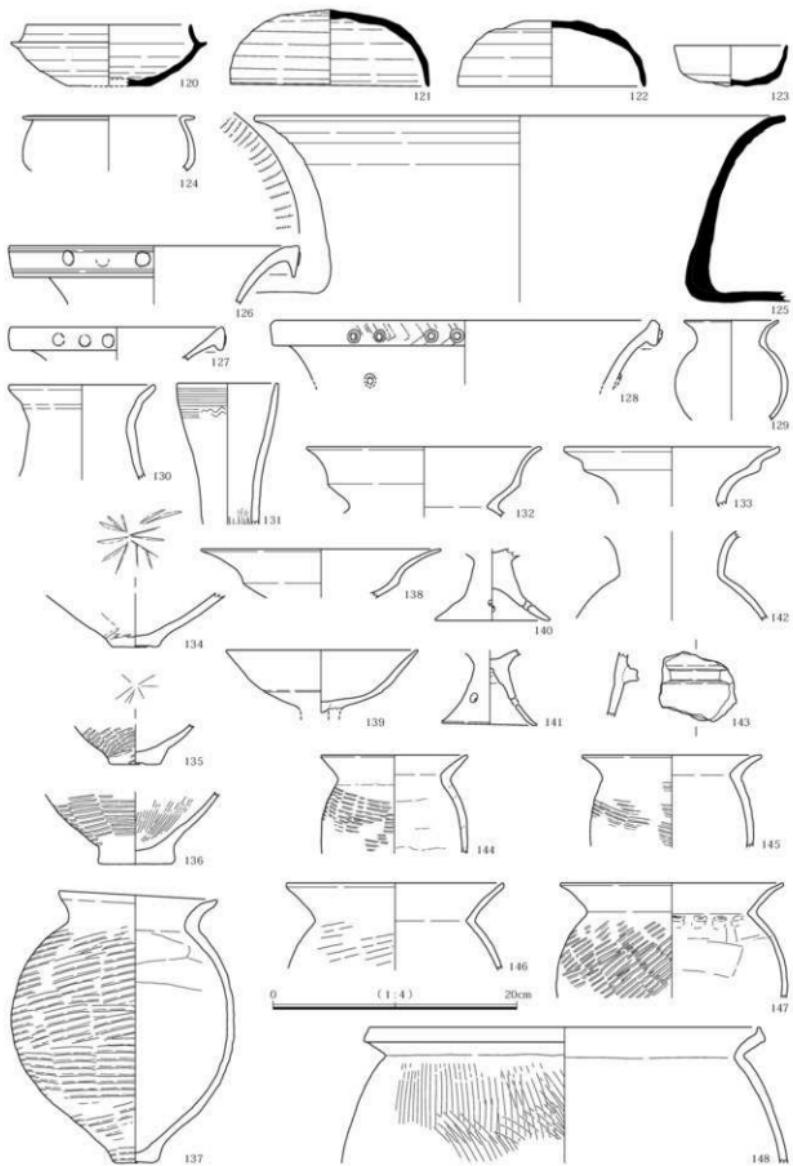


図 64 流路 S0034 出土遺物実測図

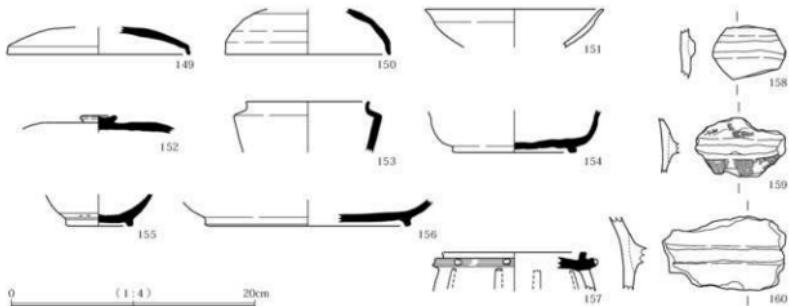


図 65 II-a 区出土遺物実測図

め流路内の広範囲に破片が出土し体部片も多く出土したが、体部器形の復原に至らなかった。口縁端部は丸く、肩部から口縁部が垂直に立ち上がり、口縁部の開きも緩やかである。体部は内外面ともタタキをスリ消している初期須恵器である。

弥生土器は、口縁部に円形浮文をもつ壺〔126～131・134〕や広口壺〔142〕、鉢〔124〕、高杯〔138～140〕、甕〔135～137・144～148〕がある。〔126・131・148〕は弥生時代中期だが、〔128〕は弥生時代後期末のものである。甕は体部外面がタタキの甕で体部片も多く出土しており、近隣の上田町遺跡から名称を付与された上田町式土器やその前段階に該当するものが多い。

土師器は壺〔132・133〕・高杯〔141〕がある。壺は2点とも布留式の二重口縁の壺であり、I-b区のS0481〔35〕やII-c区の流路 S0034 南岸から出土した土器〔172・173〕と同時期である。

円筒埴輪〔143〕は内外面の調整は不明瞭だが、貼付突帯の突出が平坦なこと等から古墳時代中期のものであろう。

流路 S0034 出土遺物は弥生時代中期、弥生時代後期から末、古墳時代前期から後期にわたる。遺構の性質上からも古い時期の遺物を巻き込んでいたとしても不思議でない。また、同位置に流路 S0034 以前、以後の複数回にわたって流路が形成されていたことも堆積状況からうかがえ、遺物の時期幅が大きいのは自然である。流路 S0034 は廃絶時期を古墳時代後期に求められると言える。

**II-a 区出土土器・埴輪**（図 65、写真図版 33・37・38） II-a 区では流路 S0034 以外にも溝 S0030 を始めとする遺構を検出したが、細片が多く図化できたのは包含層出土遺物のみであった。

瓦器椀〔151〕は体部内外面にヘラミガキの痕跡がある 13世紀後半代のものである。

須恵器は杯蓋〔149・150・152〕、壺〔153・155〕、杯〔154〕、皿〔156〕、円面鏡〔157〕である。円面鏡は脚部に推定 8 方向の長方形のスカシを、台部外周にもおそらく 8 個の貼付浮文をもつ。須恵器は古墳時代後期と奈良時代のものである。円筒埴輪〔158～160〕はいずれも別個体で、〔159〕は貼付突帯下にわずかにナナメハケが認められ、〔158・160〕より新しい要素をもつ。

II-a 区の遺構は弥生時代後期から古墳時代初めの遺物も含まれているが、包含層出土遺物は古墳時代後期から古代、中世の割合が多くなる。従って、包含層の上層（2 層）が中世、下層（3-2 層）が古代に機能した面で、第 1 面はそれ以前の遺構面と考えられる。

**II-b 区出土土器**（図 66、写真図版 33） II-b 区第 1 面では溝 S0114・S0117 からわずかに須恵器の小片が出土したが、その他の遺構、包含層からの出土は極めて少ない。しかし、部分的に 4 層（基

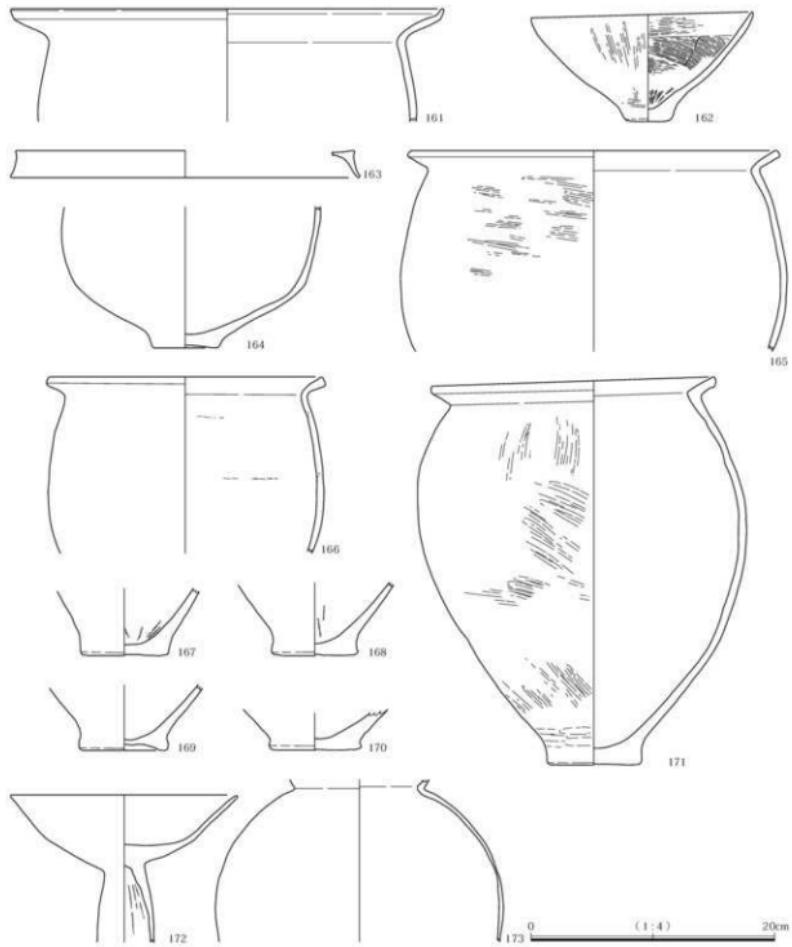


図66 II-b・II-c区出土遺物実測図

盤層)以下の深掘りを行ったところ、3箇所にかたまって土器が出土したため、各々を土器群A、B、Cと名付けて計測し、遺物の取りあげを行った(図54~56、写真図版20)。

土器群Aからの出土は、甕〔161〕、鉢〔162〕である。土器群Aからは他にも複数個体の土器が出土しており、その中にはおそらく壺になる個体の内面に、赤色顔料が塗布された破片も出土している〔写真図版33~200〕。いずれも弥生時代後期と考えられる。

土器群Aから西南の位置に倒置の状態で出土したのが、土器群Bの高杯〔163〕と壺〔164〕である。壺は体部下半から底部である。体部上半は一部が内側に倒れ込んで残っていたが、復原できなかった。

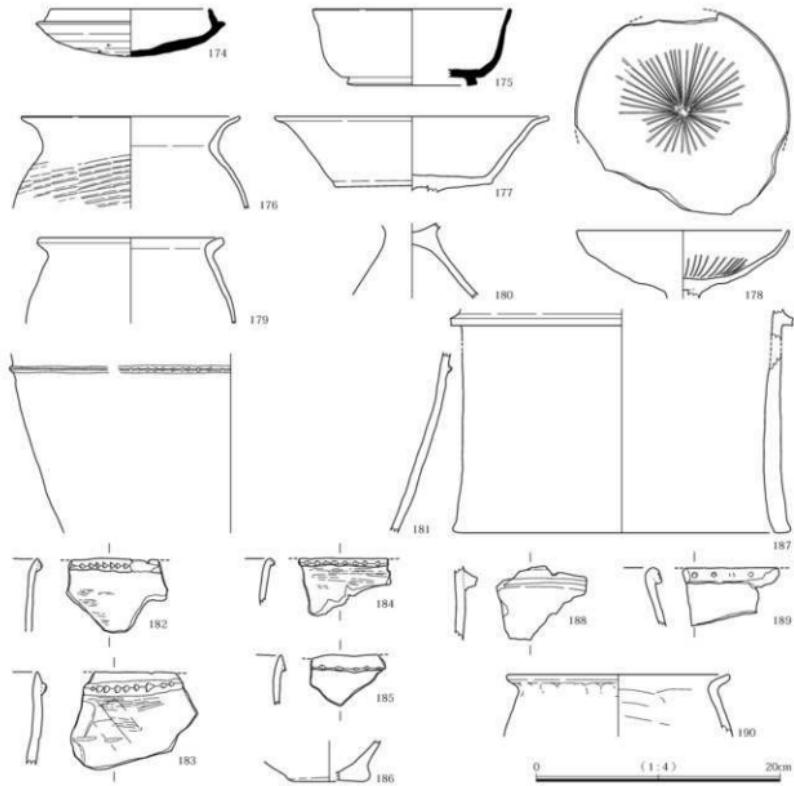


図67 II-d区出土遺物実測図

いずれも弥生時代後期と考えられる。

土器群Bより東の位置で出土したのが土器群Cである。弧を描くように土圧を受けて倒れた状態で出土し、上層を取りあげてもさらに中層、下層から同様に多数の土器が出土した。土器は土坑に含まれず、低い方向に滑り落ちるような状態で積み重なっていた。

土器はいずれも甕〔165～171〕である。〔171〕のみ口縁部から底部までの器形を復原し得た。〔165〕と〔166〕は体部上半、〔167〕から〔170〕は底部のみで少なくとも5個体以上の同型式、同法量の甕があった事が判明した。内外面とも摩耗が激しいが、外面にわずかにタテやヨコのヘラミガキが認められる。また、外面に煤痕がみられず、灰黄色から黄褐色を呈する。いずれも弥生時代中期である。

全調査区で弥生時代中期の土器がまとまって出土したのは土器群Cのみであるが、これにより弥生時代中期にはII-a区とII-b区の包含層中から焼土塊が複数出土〔写真図版38-203～208〕しており、新堂遺跡より南にある立部遺跡や丹南遺跡で出土した鋳造遺構・遺物との関連が考えられる。

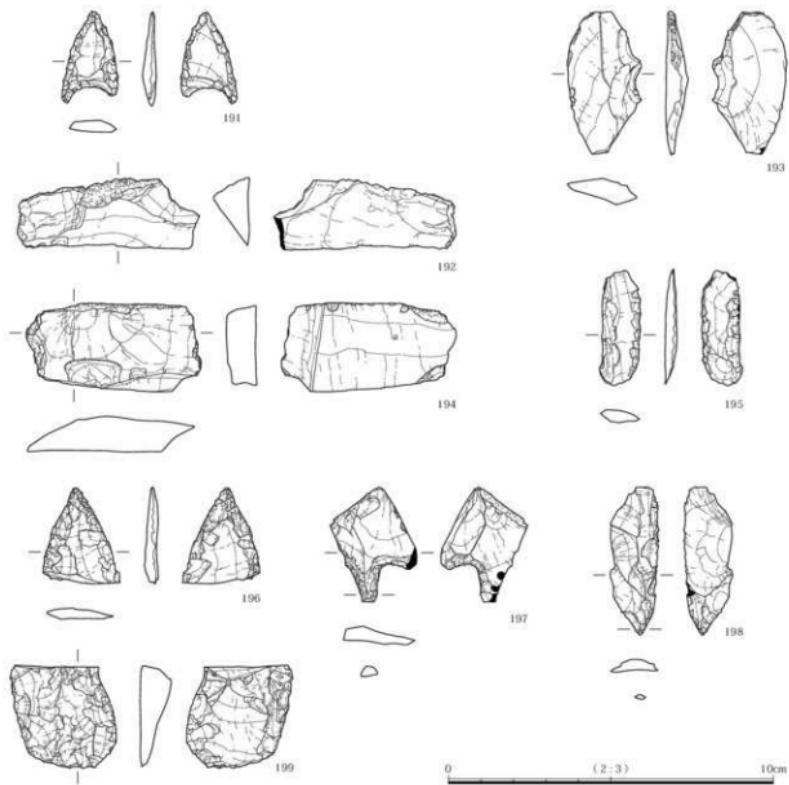


図 68 II区出土石器実測図

**II-c区出土土器**（図 66、写真図版 33） II-c 区では、中央を通る流路 S0034 から一定量の遺物が出土した以外は、流路 S0034 の南岸で S0134 の甕、S0135 の高杯 2 点、S0136 の甕、それより若干離れた地点から S0150 の甕が点在するように出土した（図 58、写真図版 23）のが、出土遺物のすべてである。

これらの土器は出土時には器形を保っていたが、器壁が薄く脆弱なため取りあげ時に破損し S0135 の高杯 1 点〔172〕と土器 S0150 の甕〔173〕のみ図化し得た。

高杯〔172〕は杯部から脚部で台部は失われている。杯部は底部から直線的に開き、脚部は中位からやや太くなる。古墳時代前期のものである。甕〔173〕は出土時には口縁部と体部下半も一部残っていたが、体部上半のみ図化し得た。球形の体部で器壁が薄く、古墳時代前期、布留式のものである。

**II-d区出土土器・土製品**（図 67、写真図版 32・37・38） II-d 区からは縄文時代から奈良時代までの多彩な遺物が出土するのが特徴である。

須恵器杯身〔174〕は流路 S0034 と平行するように流れる溝 S0030 から出土している。古墳時代後

期である。須恵器杯〔175〕はII-c区との境界にある溝S0023から出土した。濃い紫灰色の胎土に大粒の白色砂粒を含むのが特徴的で、陶邑古窯址以外の産地が考えられる。奈良時代前半のものである。

高杯〔178〕は建物状遺構S0908の西辺にかかる土坑S0909から出土した。杯部のみで脚から下は欠損する。杯部内面見込みに放射状暗文をもち、飛鳥時代のものである。

高杯〔177〕は建物状遺構S0908の南辺にかかる土坑S0928から出土した。杯部のみで、弥生時代後期末のものである。高杯脚部〔180〕は土坑S0958から、円筒埴輪〔187・188〕は土坑S0901と包含層から出土した。〔187〕は下段の貼付突帯から底部までを復原し得た。胎土に砂粒を多く含み粗く、黒斑をもち貼付突帯が細く突出していることから古墳時代前期と考えられる。〔188〕は〔187〕と別個体と考えるが、同時期の可能性がある。

甕〔176〕は土坑S0951から出土した。弥生時代後期末のものである。

縄文土器〔181～186・201〕は土坑S0926やその近辺の包含層から出土した。〔181～185〕はいずれも刻目突帯をもつ突帯文土器の深鉢で、〔181〕は突帯より下の体部下半まで残っていた。〔182～185〕は二条突帯の口縁端部と考えられる。縄文時代晩期の土器が出土するのは、II-d区土坑S0926の周辺とI-c区の用水路以東部南側の限られた地域である。

甕〔179〕は西壁内にあり平面検出できなかった土坑S0959から出土している。特に土坑S0959からは、弥生時代中期後半の土器の下層から100点を超えるサヌカイトの石器や剝片、チップが出土しており、この土器の年代が土坑の時期を決定する一助となる。

他に包含層中からは弥生時代中期の甕〔189・190〕が出土しており、II-d区は縄文時代晩期以降、奈良時代までの遺物を含む。

**II区出土石器**（図68、写真図版35・37）無茎式石鎌〔191〕はII-a区の第1面精査により出土した。縄文時代と考えられる。II-a区包含層の同箇所からの出土では、旧石器時代のナイフ形石器〔193〕と翼状剝片〔192〕がある。2点とも旧石器時代のものだが、〔192〕の方がやや新しい。

II-b区深掘部では、6層以下の流路砂層中からは横長の楔形石器〔194〕と用途不明石器〔195〕が出土した。〔195〕は縦長で側辺に刃部調整を施している製品である。

II-d区土坑S0926からはドリル〔197〕が出土した。〔197〕は約2.0cm四方のつまみ部の下に約1.0cm長さの錐部をもつ。

100点を超える石器・剝片が西壁内土坑S0959から出土した。そのうち明らかに製品で、用途を特定できるものを実測した。無茎式石鎌〔196〕は弥生時代中期と考えられる。ドリル〔198〕は〔197〕と異なり、細長く先端が尖る。楔形石器〔199・写真図版37-221～223〕は多数出土した。〔199〕は左右辺に打ち欠きがある。この土坑S0959から石核、剝片、チップも含め大量の石器が出土していることから、この土坑が石器製作のユニットだったとも考えられる。

II区で出土した遺物は流路S0034やII-d区の遺構からが多く、それ以外は流路S0034やそれ以前や以後の流路の氾濫によってもたらされたと考えられる。そのため、ある程度器形を復原し得る土器が散在して出土する。また、包含層中に含まれる遺物は古代や中世のものがI区と比較するとやや多くなり、上層包含層はI区より新しい時期まで機能していたと考えられる。

## 第4章 自然科学分析

### 第1節 新堂遺跡の地形・地質条件の検討

#### (1) 遺跡の位置、地形・地質概略

河内平野南部、大和川沿岸以南の台地面は北流する西除川の沿岸を境に、東側の標高 20 数m～50m 以下の河内台地と、西側の標高 10 数m～約 30 mまでの泉州北台地に大別される。新堂遺跡は西除川右岸の両台地境界部分に位置する。須長ほか(1998)、趙(2001)によると、河内台地はおもに河成堆積層からなる中位段丘面をなし、西縁に西落ちの撓曲を伴う。この台地の西に隣接する領域には、最終氷期晩氷期以後の河成堆積層(いわゆる沖積層)が台地表層に、数 m の厚さで分布する。同層は新堂遺跡を通る東西方向では、河内台地の西縁から西方の大泉緑地東辺付近までの幅約 2km の広い開析谷底を埋積し、北方の大和川以北の河内平野沖積低地より高い扇状地状の台地面を構成している。

#### (2) 遺跡周辺の地形(図 69～71)

遺跡の東方を南北にのびる中位段丘面頂部の不明瞭な稜線の高度は、標高 25～35m で、後述する沖積面との比高は、南方に向かってわずかに増大する(図 69)。西除川側の緩斜面には、沖積面側に開く幅 200m までの凸地や、幅 30m 以下の短い谷状の起伏がみとめられ、沖積面への小規模な流出を起こす集水域となっている。中位段丘面縁辺には低い崖をなす部分がある。それらを含め、沖積面との境が中位段丘側に凸な形状を示す部分は、沖積面発達以前の流路の侵食で生じたと考えられる。

沖積下位面は、西除川の流路に接して分布する、比較的新しい流路帯の地形面で、図中で分類した砂礫州・自然堤防はこのカテゴリーに含まれる。下位面領域には、幅 50 m程度の旧流路、流路縁の侵食、2m 以下の高さで段丘化した氾濫原などが判読できる。現在の西除川は、図化区间でおよそ 4% の河床勾配をなし、砂礫を流送し、自然状態では現況の数倍の河床幅で、中洲、寄州を伴う網状流路の曲流河川であろう。

沖積上位面は、下位面のように連続した河川地形はほとんどみとめられないが、下位面より相対的に古い時代に、西除川の河流、氾濫、それらに伴う堆積物の運搬・堆積の直接的な影響をうけた範囲で、低く段丘化した西除川の旧河床や充填流路、自然堤防、破堤砂堆からなる、氾濫原よりわずかに高い沖積リッジが断片的に分布し、右岸側では中位段丘からの土砂流出で発達した幅 100m 以下の舌状の堆積地形(以下、ロウブと表記)が点在する。

図幅左端に、明瞭な谷壁の輪郭はないが、比較的長大な埋没開析谷の縁辺がみとめられる。図 70 で示されるように、現地表面では沖積上位面と下位面との高度差は約 2m 以下で、地点によって差があり、微地形の分布パターンが不連続なことから、沖積下位面は、いったん下刻された狭い谷底を充填しているのではないかという印象を受ける。このような流路帯と氾濫原の変化は、遺跡形成過程と深くかかわる。また、西除川右岸の沖積面に対して左岸側はやや低く、河川活動や堆積物の累重様式が両岸で異なる可能性、中位段丘側の隆起等を考慮する必要がある。

図 71 に示した調査地付近の現在の地表起伏には盛土を主とした人工的な改変が多く含まれるが、調査地 II 区の南部には主に溜池(宮の池)の南東方、中位段丘からの土砂流出で発達したロウブが分布し、その一部は調査地西縁から国道 309 号の盛土で覆われた南北にのびる流路に向かっていることがわかる(図中矢印)。II-a・c・d 区で検出された埋没流路はこのロウブの一部を構成すると考えられる。

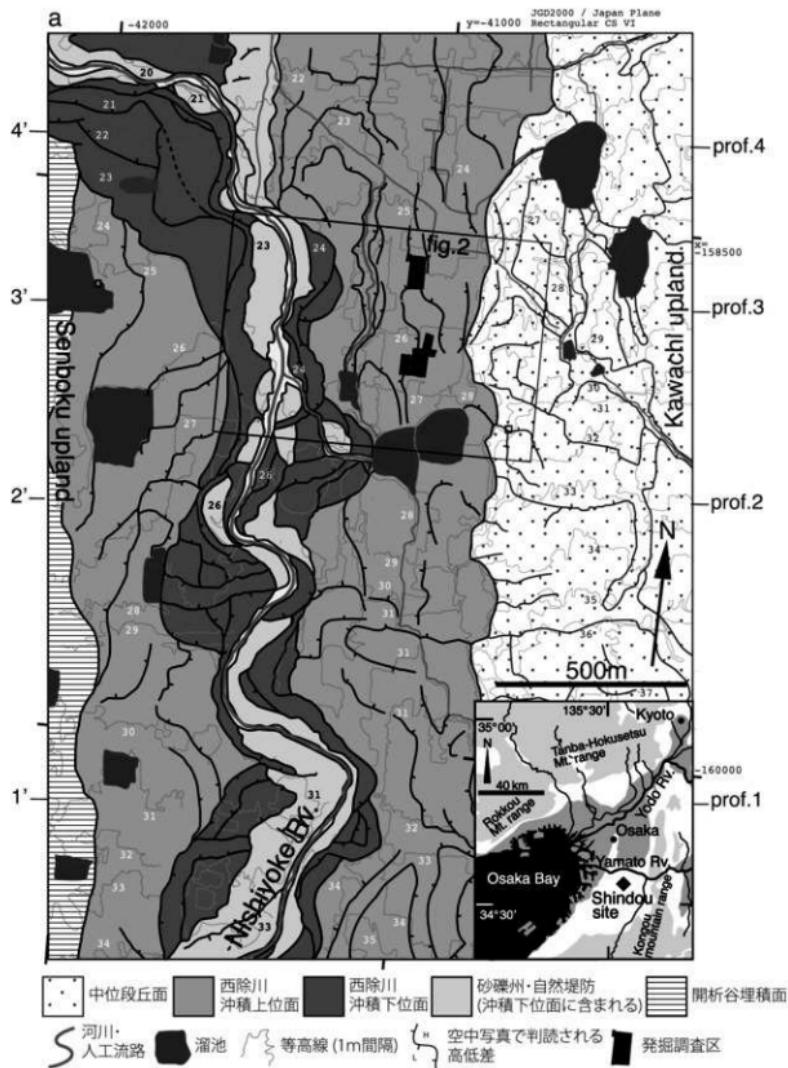


図69 新堂遺跡とその周辺の地形分類図

地形分類は、1946年撮影米軍写真(USA-M157-A-6-176 ~ 179)を用いた。図69の等高線と図70の横断高度分布図は、国土地理院基盤地図情報「数値標高モデル」の当該範囲データからQGISで生成した。標高データは広範囲な土地改良、河川改修を経た2000年以後のもので、かならずしも空中写真判読の結果とは一致しない。

II区・I区間は緩やかな北向きの勾配で、中位段丘と西除川に沿ったわずかな高まりに挟まれた低平な領域をなす。I区の北側には、住宅地の盛土に影響されているが、幅約50mの帯状の高まりが認められ、空中写真判読では、やや西寄りでI区をほとんど含むような比較的の判然とした古い冲積リッジがのびている。同区東方にみられる中位段丘から的小規模なロウブは用水路の掘削に伴い、近代に発達した可能性が高い。

### (3) 調査地断面、ボーリング資料、地震変形層準による層序の検討

現地の観察に基づくと、図72、柱状図cs-1の標高26.0mより上位の堆積層は、長径2cm以下の团粒からなり、均質な擾乱構造をなす耕作土で、異地性の砂を人為的に混合している可能性がある。1層下面、12層下面直下には耕盤を示唆する酸化鉄斑紋の密集がみとめられ、それぞれ直上の堆積物とも粒度組成の差は明瞭であった。しかし、根系に沿って分布する酸化鉄斑紋は必ずしも堆積層の境界を表さず、標高25.75mの14・15層の境界以外は岩相層序的に区分できない。15層以下の砂質シルトは、II区拡張トレーニングのcs-2、3(図73も参照)の最上部に対比され、年代測定結果から古墳時代の堆積層と判断される。cs-3では、その下底とみなせる標高約25.4mの層準にわずかにシルト質の粗～中粒砂が挟まれる。この砂層は、II区南西部と北東部に広く分布するシート状の氾濫堆積物である(図中の\*\*)。この下ではより細粒のシルト質粘土に漸移し、標高25m付近の乱れた上面層界から、cs-2での最深部の24.6mまでに植物片を多く含む、有機質シルト質粘土層が分布する。図73に示すように、南西・北東にのびる幅約8mの流路状の凹地を充填したもので、植物遺体の放射性炭素年代は弥生時代中期～後期を示す。同層下底直下から上位の砂層直下まで(図中のDZ:変形ゾーン)には後述する変形構造が認められる。標高23.5mの掘削底付近から、有機質シルト質粘土までの約1mの垂直範囲は、細粒の中礫を含む礫質砂からシルト質粘土まで上方細粒化する重層をなす。掘削底23.4mの植物遺体層の放射性炭素年代は弥生時代中期を示す。以上のおもにcs-2の堆積層累重から、II区北部が西除川の氾濫原で、弥生時代後期以後、堆積物のさかんな上方付加とともに、湖沼的な氾濫低地の環境が継続し、その後遅くとも中世までに冲積上位面が離水したと推測される。II区拡張トレーニングの東部ではcs-3の標高24.7mから西側で急傾斜をなし、cs-2の東側で掘削底に達してより下方にのびる侵食面が認められた(図73)。この侵食面以下を更新統と認定した。

II区下層調査トレーニング断面での判断を採用すると、ボーリング柱状図b-4、b-5で標高25m付近までに累重する礫層は更新統とみなせる。II区の南に隣接するb-1の柱状では、標高21m以上の累重式がb-4、b-5とは異なり、25m付近に分布する砂礫層はすでに述べた中位段丘斜面からの流出土砂であり(図中の\*)、その下位にはb-4、b-5の同高度堆積物に比べ細粒で垂直範囲の小さい上方細粒化サク

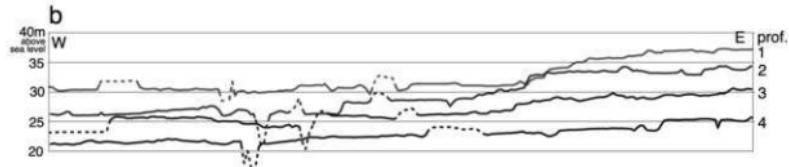


図70 新堂遺跡周辺の西除川をはさむ地形面の横断高度分布図

横断高度分布図の破線は盛土と掘削部分を示す。V字形に落ちた西除川の高度は最近の河川改修の結果生じた。横断形3の西端部は灌漑池だが、更新世間析谷理積上部の凹地にあたると考えられる。

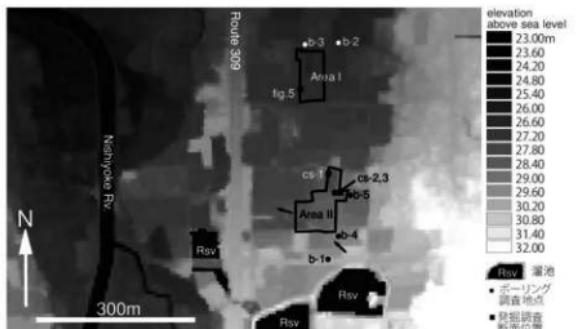


図 71 新堂遺跡調査地周辺の数値地図標高データに基づくグレーマップ

調査地区と断面(図 72~74)位置図を示す。標高データは、「基盤地図情報数値標高モデル(5 mメッシュ)」と松原市教育委員会よりご提供いただいた2017年度「現況測量図(4級基準点網図)」を用いた。

セッションがみられる。cs-2 の累重はこの上部に対比できる。II 区南部で検出された埋没流路を載せる口ウブは弥生時代から発達し始めたと推測される。II 区北側の b-2 の標高 20m 付近より上位の砂礫層の上面・下面是南方の b-4、b-5 の上部と対比しやすい。しかし、その西側の b-3、標高 23m 以下の礫層(図中の \*\*\*)は、図 74 写真に示した古墳時代前期以前の礫層に対比され、表層を構成する I 区と同様の泥質堆積物と指交して上述した沖積リッジを構成することから、完新統とみなしうる。以上のことから、調査地 I・II 区の東縁付近の沖積上位面下に、更新統からなるやや西に傾いた河成段丘面が伏在すると考えられる。

I 区拡張トレントの有機質泥層とその上位の泥層で認められた変形構造は Matsuda(2000) が記載した水底下の泥質堆積物の含水塑性変形で、堆積物が上方に引きずり上げられて生じる、羽毛状・火炎状の乱流パターンと、その下辺部で、堆積物が下方に押しつけられて生じた多数の窪み(荷重構造)を特徴とし、地震動で生じたと考えられる。酸化鉄斑紋で判断しないが、地震イベントの年代を指示する変形ゾーン上端は、標高 25.3m 付近の古墳時代前期層準にある。一方、I 区の下層調査トレントでは図 74 に示した、横臥褶曲と衝上断層からなる変形が認められ、その変形上端が古墳時代前期の調査面に達していることから、I 区の変形と同時に生じたと考えられる。地盤がせん断されるのは、経験的には震度 6 以上(250 ~ 800gal)であり、かなり大きな地震であったと想像される。

#### 〈参考文献〉

須長博明・堀野正勝・熊本洋太・太田正孝・安藤久満・内川講二・長井二郎・新西正昭(1983)「土地条件調査報告書(大阪地区)」、国土地理院、pp.47-48.

趙哲済(2001)瓜破台地東北部の段丘について、「大阪市文化財協会研究紀要」4、pp.7-16.

Matsuda, J.-i. (2000) Seismic deformation structures of the post-2300 BP muddy sediments in Kawachi lowland plain, Osaka, Japan. *Sedimentary Geology*, 135, 99–116.

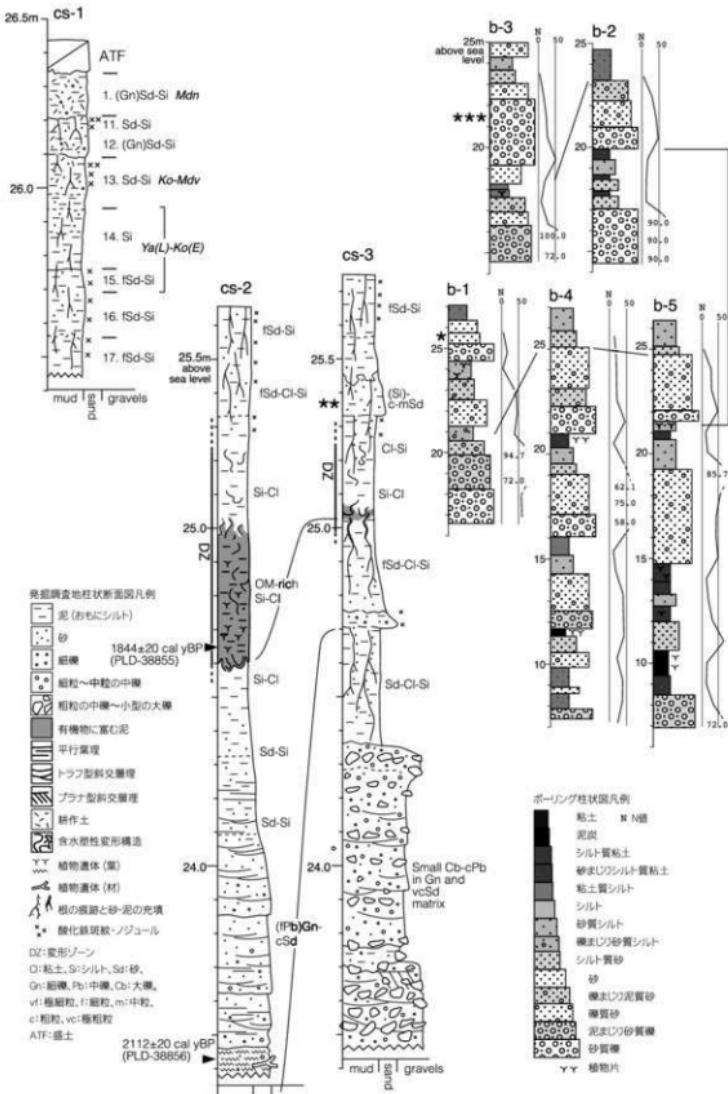
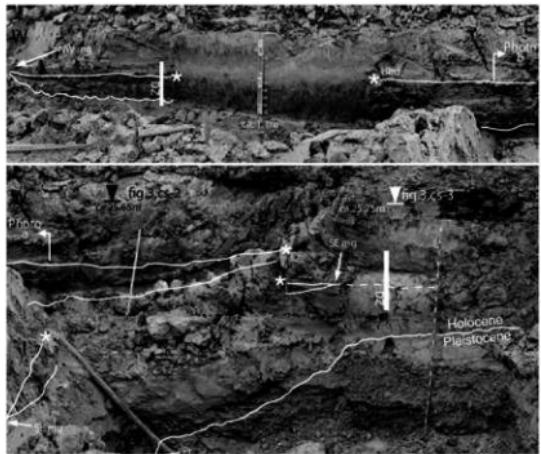


図72 II区拡張トレントの柱状断面図と新堂遺跡調査地のボーリング柱状図

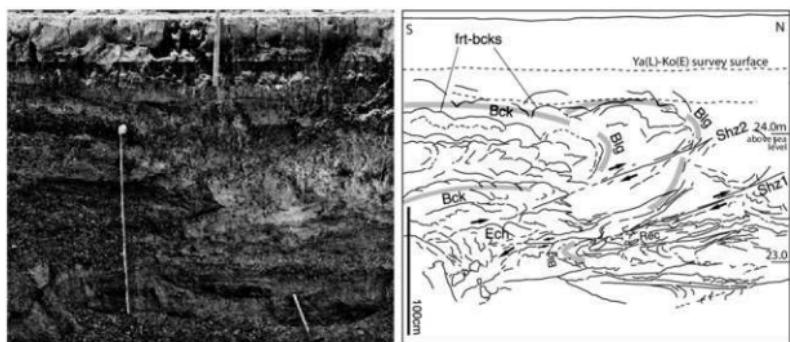
ボーリング柱状図は、松原市新堀4丁目土地区画整理準備組合御所蔵の調査結果を松原市教育委員会を通じてご提供いただき、コアサンプルを観察して作成した。



Udb : 有機物に富む褐色層の上部。\*: 同一標準を示す。NW mg, SE mg : 褐色層の堆積域西端、東端。写真b左端、南北断面に褐色堆積層の衝突域がみとめられる。Pr : 植物遺体層、DZ : 変形構造の垂直範囲。

図 73 新堂遺跡調査 II 区 拡張トレンチ北壁断面の合成写真

a 写真的撮影位置は図 71 の cs-2, 3。その上端は地震イベントの年代を指示する層準であり、図 74 の変形イベントと時間対比できる。写真 b の右中位から左下の線は、推定更新統・完新統境界の侵食面。更新統の粘土質シルトは上位の同質堆積物と異なりよく締まっていて、砂礫で置換充填された根系の痕跡はこの上面で截頭されている。砂礫層は小型の大疊～粗粒の中疊からなる複層と細疊を主とする砂礫層が粗疊に互層し、トラフ型・プラナ型斜交層理をなす。下部は調査範囲をこえる規模の緩傾の一部で、上部は幅 1m 以下、高さ 20cm 以下の小型の砂礫州（デューン）が重なり合う。下流側に斜傾倒した土塊の配向（覆瓦構造）から推測される古流向はおよそ北北西であった。網状流路河床堆積物と考えられる。



Bk : 座屈面、frt-bcks : フラクタルな座屈面、Bld : 応力方向に生じる膨らみ(屈曲背斜にあたる)、Ech : 立ち上がった層理、Rrc : 反り返り(横屈褶曲)、Shz : せん断帯(断層)、矢印は土塊の相対的な変位方向を示す。

図 74 新堂遺跡調査地 I 区西断面下層調査トレンチに見られる座屈・衝上とせん断帯

写真的撮影位置は図 71 に fig.5 で示す。水平方向の圧縮力により、全体が逆 S 字状に曲がるとともに、Shz1 を境に上位の土塊が右に移動し、その後上位の土塊の上半がさらに右に押されて Shz2 が発生した。衝上断層の一層と言える。Shz1 より下の楔形の土塊は上方から圧迫されて薄く引き伸ばされた変形パターンをなし、せん断面に接した部分は上部の土塊に引きずられて反り返っている。上部土塊のとくに Shz2 より上の部分は、大気下に開放されているため、ほぼ水平方向の圧縮によって上凸に座屈している。また大きな座屈面は、幅 50cm 以下の座屈面(フラクタル座屈面と仮称)に分割されている。いったん右側にのし上がった Shz1 より上の土塊が、いずれかのタイミングで 10 数 cm 左に引き戻されたことを示す部分が Shz1 の左端に認められる。未固結堆積物のごく短時間の変形のため、長時間で形成される砂岩の褶曲構造に比べ層理はかなり破壊されている。写真は松原市教育委員会からご提供いただいた。

## 第2節 新堂遺跡の自然科学分析

### (1) はじめに

新堂遺跡は、大阪府中央部の松原市新堂1～5丁目、高見の里5・6丁目、柴垣1丁目、岡2丁目に所在する遺跡である。

本報告は公益財団法人 大阪府文化財センターが下記の目的のために文化財調査コンサルタント株式会社に委託実施した調査報告書を再編したものである。

1. 新堂遺跡発掘調査に伴い検出された各層の堆積時期について明らかにする。
2. 周辺地域の森林植生及びその変遷について明らかにする。
3. 調査地近辺の堆積環境（変遷）及び植生（変遷）について明らかにする。
4. 耕作地が推定される場合、栽培作物について考察する。

### (2) 分析試料について

分析試料のほとんどは、公益財団法人 大阪府文化財センターとの協議の上、文化財調査コンサルタント株式会社が採取した。一部の試料は、採取・保管中の試料から、提供を受けた。また、以下に示す平面図及び断面図は、公益財団法人 大阪府文化財センターより提供を受けた原図を基に作成した。

調査区の配置、及び試料採取地点を図75に示す。

I-b区拡張部平面図（図76）に土器の地点（試料No.2を内部から採取）及び比較試料（試料No.1）採取地点を示す。またSO455断面図（図77）に①として比較試料（試料No.1）の採取位置を示す。I-b区拡張部の2試料については、提供いただいたいた。

I-c区平面図（図78）に試料を採取したS0674（井戸）、S0677（溝）を示す。またS0674の断面図（図

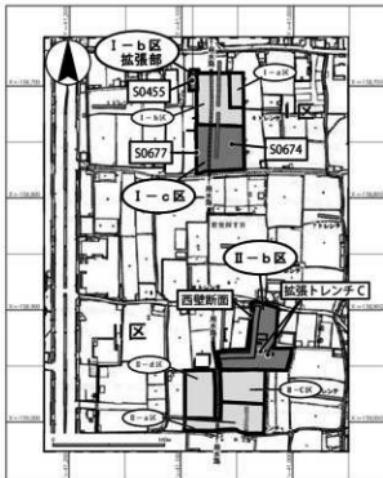


図75 調査区の配置（試料採取地点）

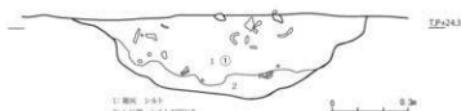
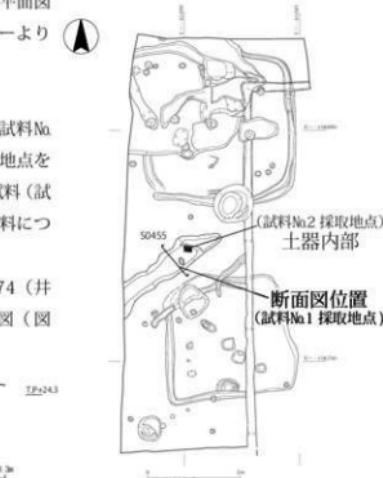


図76 I-b区拡張部平面図(試料採取地点)



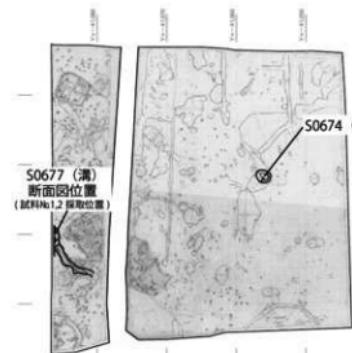


図 78 I-c 区平面図（試料採取地点）

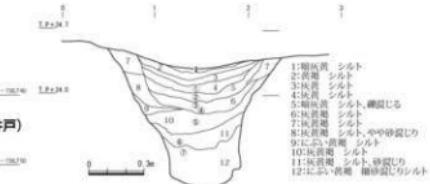


図 79 S0674 断面図（試料採取位置）



図 80 S0677 断面図（試料採取位置）

79) に分析試料を採取したおおよその位置を①～⑦で示した。更に図 S0677 の断面図（図 80）に分析試料を採取したおおよその位置を①、②で示した。

II-b 区平面図（図 81）に、分析試料採取地点を示す。また、西壁断面での試料採取地点付近の断面図（図 82）に、分析試料の採取位置を①～⑨で示した。更に、拡張トレンチ C の模式柱状図（図 83）に、分析試料の採取位置を、「● 1」～「● 12」で示した。

### （3）分析方法

#### 1. 微化石概査方法

花粉分析用プレバラート及び花粉分析処理残渣

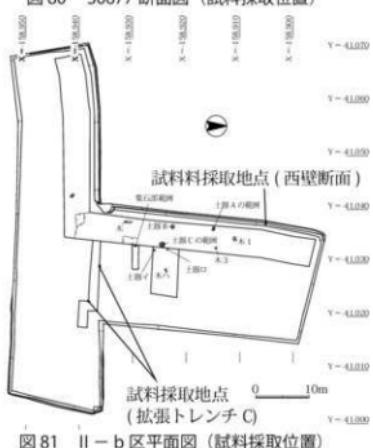
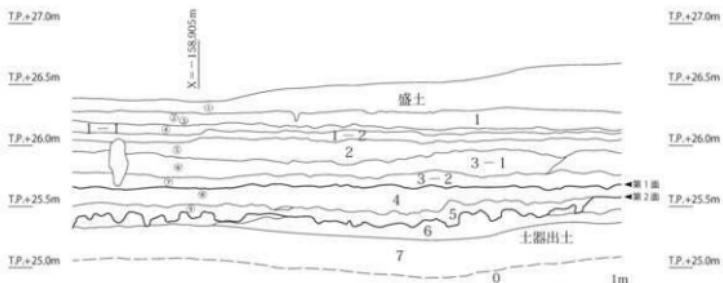


図 81 II-b 区平面図（試料採取位置）



3-1 : 3-1層：にい黄シルト(3層：発生時代後期～古墳時代)

3-2 : 3-2層：灰褐色シルト

4 : 4層：黄褐色シルト(基盤部)

5 : 喀斯特シルト

6 : 黄褐色シルト

7 : 潟粗砂

図 82 II-b 区西壁断面サンプル採取地点

を顕微鏡下で観察し、花粉（胞子）、植物片、微粒炭、珪藻、植物珪酸体、火山ガラスの含有状況を5段階で示した。

## 2. 花粉分析方法

渡辺（2010）に従って実施した。花粉化石の観察・同定は、光学顕微鏡により通常400倍で、必要に応じ600倍あるいは1000倍を用いて実施した。原則的に木本花粉総数が200粒以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本・胞子化石の同定も行った。また中村（1974）に従ってイネ科花粉を、イネを含む可能性が高い大型のイネ科（40ミクロン以上）と、イネを含む可能性が低い小型のイネ科（40ミクロン未満）に細分した。

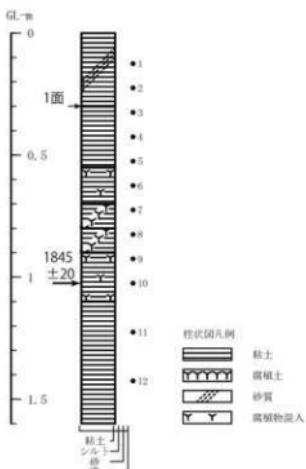
## （4）分析結果

### 1. 微化石概査結果

微化石概査を表1に示す。花粉化石は、ほとんどの試料で多量に検出された。植物珪酸体化石の検出量も多かったが、

植物片、微粒炭の検出量はやや少なかった。一方、珪藻化 図83 II-b区拡張トレントC模式柱状図石の検出量は、拡張トレントC中～下部で多かった

表1 微化石概査結果



ものの、その他の試料ではほとんど検出できなかつた。火山ガラスの検出量も多く多くの試料で少なかつたが、I-c区S0674（井戸）下部では多く含まれた。おそらく、基盤からの二次堆積と考えられる。

## 2. 花粉分析結果

花粉分析結果を花粉ダイアグラム（図84～88）と花粉組成表（表2、3）に示す。花粉ダイアグラムでは、分類群ごとの百分率（百分率の算出には、木本花粉総数を基準にしている）を、スペクトルで表している（木本（針葉樹）は黒、木本（広葉樹）は暗灰、草本・藤本は明灰、胞子は白のスペクトルで表した）。[総合ダイアグラム]では「木本（針葉樹）」、「木本（広葉樹）」、「草本・藤本」と「胞子」の割合を示すグラフを示した。[含有量ダイアグラム]では「木本」、「草本・藤本」、「胞子」「花粉・胞子（全ての合計）」ごとに含有量（潤滑試料1g中の粒数）の変化を示している。

ほとんどの試料で花粉・胞子化石含有量が多く、統計処理に十分な量の木本花粉化石が検出できたが、I-b区拡張部S0445、I-c区S0677の4試料では、花粉・胞子化石含有量が少なく、統計処理に十分な量の木本花粉が得られなかつた。これらの地点（試料）では、参考として花粉ダイアグラムを作成した。

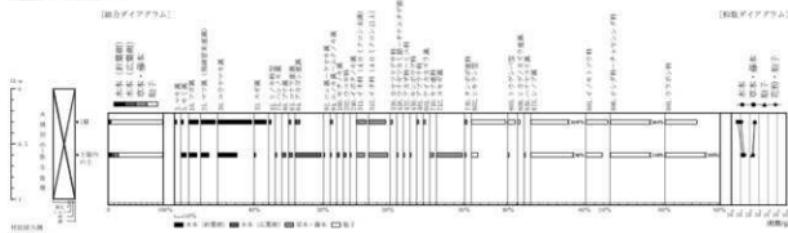


図 84 I - b 区拡張部 S0445 の花粉ダイアグラム

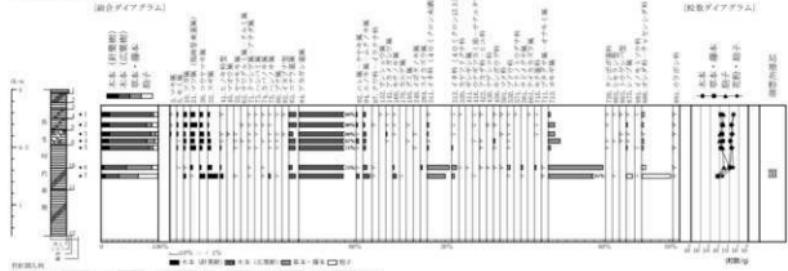


図 85 I - c 区 S0674 の花粉ダイアグラム

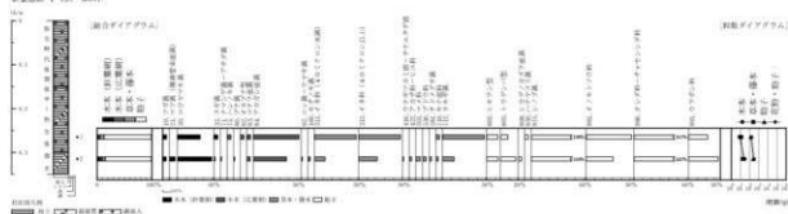


図 86 I - c 区 S0677 の花粉ダイアグラム

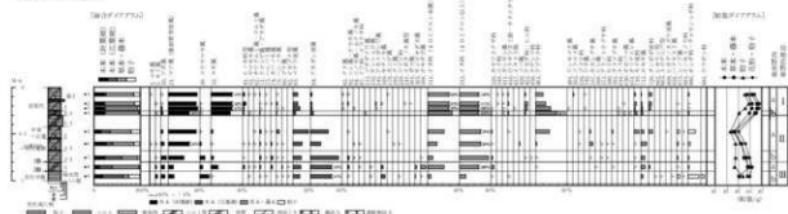


図 87 II - b 区西壁断面の花粉ダイアグラム

「政治文化アート」

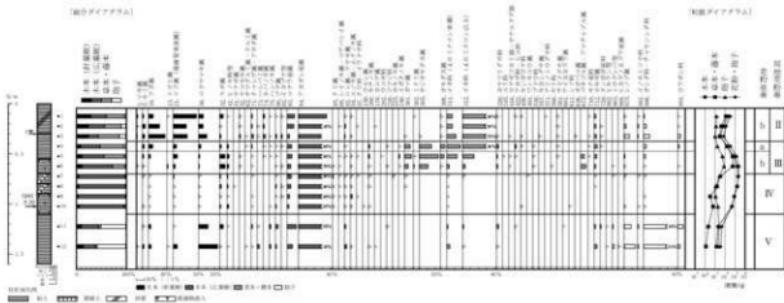


図88 II-b区拡張トレーニチCの花粉ダイアグラム

表2 花粉組成表(1)

表3 花粉組成表(2)

測定区 測定試料	JGRNo.	II-b 区							
		西壁面							
	1	2	3	4	5	6	7	8	
3. Rhizophyllum	サクシ属	2 0.7%	1 0.2%	2 0.8%	2 0.8%	1 0.3%	1 0.3%	1 0.3%	1 1.7%
4. Trapa	モク属	2 0.7%	2 0.7%	6 2.0%	10 2.8%	8 3.0%	9 4.5%	10 7.5%	4 1.0%
5. Rosa	ウメ属								
6. Carex	アシ属								
7. Cyperaceae	アシ科								
8. Scrophulariaceae	スコツリ科								
9. Orobanchaceae	オロバチ科								
10. Cyathalia	マツカケ属								
11. Selaginella	ヤマトモ属								
12. Selaginella	ヤマトモ属								
13. Polypodiaceae	サクシ属								
14. Trapa	モク属								
15. Trapa	モク属								
16. Cyperaceae	アシ属								
17. Carex	アシ属								
18. Betula	カシノキ属								
19. Alnus	ハルニレ属								
20. Populus	フジ属								
21. Populus	フジ属								
22. Populus	フジ属								
23. Populus	フジ属								
24. Populus	フジ属								
25. Populus	フジ属								
26. Populus	フジ属								
27. Populus	フジ属								
28. Populus	フジ属								
29. Populus	フジ属								
30. Populus	フジ属								
31. Populus	フジ属								
32. Populus	フジ属								
33. Populus	フジ属								
34. Populus	フジ属								
35. Populus	フジ属								
36. Populus	フジ属								
37. Salix	モク属								
38. Salix	モク属								
39. Salix	モク属								
40. Salix	モク属								
41. Salix	モク属								
42. Salix	モク属								
43. Salix	モク属								
44. Salix	モク属								
45. Salix	モク属								
46. Salix	モク属								
47. Salix	モク属								
48. Salix	モク属								
49. Salix	モク属								
50. Salix	モク属								
51. Salix	モク属								
52. Salix	モク属								
53. Salix	モク属								
54. Salix	モク属								
55. Salix	モク属								
56. Salix	モク属								
57. Salix	モク属								
58. Salix	モク属								
59. Salix	モク属								
60. Salix	モク属								
61. Salix	モク属								
62. Salix	モク属								
63. Salix	モク属								
64. Salix	モク属								
65. Salix	モク属								
66. Salix	モク属								
67. Salix	モク属								
68. Salix	モク属								
69. Salix	モク属								
70. Salix	モク属								
71. Salix	モク属								
72. Salix	モク属								
73. Salix	モク属								
74. Salix	モク属								
75. Salix	モク属								
76. Salix	モク属								
77. Salix	モク属								
78. Salix	モク属								
79. Salix	モク属								
80. Salix	モク属								
81. Salix	モク属								
82. Salix	モク属								
83. Salix	モク属								
84. Salix	モク属								
85. Salix	モク属								
86. Salix	モク属								
87. Salix	モク属								
88. Salix	モク属								
89. Salix	モク属								
90. Salix	モク属								
91. Salix	モク属								
92. Salix	モク属								
93. Salix	モク属								
94. Salix	モク属								
95. Salix	モク属								
96. Salix	モク属								
97. Salix	モク属								
98. Salix	モク属								
99. Salix	モク属								
100. Salix	モク属								
101. Salix	モク属								
102. Salix	モク属								
103. Salix	モク属								
104. Salix	モク属								
105. Salix	モク属								
106. Salix	モク属								
107. Salix	モク属								
108. Salix	モク属								
109. Salix	モク属								
110. Salix	モク属								
111. Salix	モク属								
112. Salix	モク属								
113. Salix	モク属								
114. Salix	モク属								
115. Salix	モク属								
116. Salix	モク属								
117. Salix	モク属								
118. Salix	モク属								
119. Salix	モク属								
120. Salix	モク属								
121. Salix	モク属								
122. Salix	モク属								
123. Salix	モク属								
124. Salix	モク属								
125. Salix	モク属								
126. Salix	モク属								
127. Salix	モク属								
128. Salix	モク属								
129. Salix	モク属								
130. Salix	モク属								
131. Salix	モク属								
132. Salix	モク属								
133. Salix	モク属								
134. Salix	モク属								
135. Salix	モク属								
136. Salix	モク属								
137. Salix	モク属								
138. Salix	モク属								
139. Salix	モク属								
140. Salix	モク属								
141. Salix	モク属								
142. Salix	モク属								
143. Salix	モク属								
144. Salix	モク属								
145. Salix	モク属								
146. Salix	モク属								
147. Salix	モク属								
148. Salix	モク属								
149. Salix	モク属								
150. Salix	モク属								
151. Salix	モク属								
152. Salix	モク属								
153. Salix	モク属								
154. Salix	モク属								
155. Salix	モク属								
156. Salix	モク属								
157. Salix	モク属								
158. Salix	モク属								
159. Salix	モク属								
160. Salix	モク属								
161. Salix	モク属								
162. Salix	モク属								
163. Salix	モク属								
164. Salix	モク属								
165. Salix	モク属								
166. Salix	モク属								
167. Salix	モク属								
168. Salix	モク属								
169. Salix	モク属								
170. Salix	モク属								
171. Salix	モク属								
172. Salix	モク属								
173. Salix	モク属								
174. Salix	モク属								
175. Salix	モク属								
176. Salix	モク属								
177. Salix	モク属								
178. Salix	モク属								
179. Salix	モク属								
180. Salix	モク属								
181. Salix	モク属								
182. Salix	モク属								
183. Salix	モク属								
184. Salix	モク属								
185. Salix	モク属								
186. Salix	モク属								
187. Salix	モク属								
188. Salix	モク属								
189. Salix	モク属								
190. Salix	モク属								
191. Salix	モク属								
192. Salix	モク属								
193. Salix	モク属								
194. Salix	モク属								
195. Salix	モク属								
196. Salix	モク属								
197. Salix	モク属								
198. Salix	モク属								
199. Salix	モク属								
200. Salix	モク属								
201. Salix	モク属								
202. Salix	モク属								
203. Salix	モク属								
204. Salix	モク属								
205. Salix	モク属								
206. Salix	モク属								
207. Salix	モク属								
208. Salix	モク属								
209. Salix	モク属								
210. Salix	モク属								
211. Salix	モク属								
212. Salix	モク属								
213. Salix	モク属								
214. Salix	モク属								
215. Salix	モク属				</				

アカガシ亜属が高い出現率を示し、その他の木本花粉、草本・藤本花粉の検出量も少ない。

### 3. III带(西壁断面試料No.9、8、拡張トレーナーC試料No.6~4)

アカガシ亜属が86～68%と穏やかな減少傾向を、温帯針葉樹種や草本花粉が穏やかな増加傾向を示す。更にIV帶に比べ草本・藤本花粉が急増する。また、上部（西壁断面試料No.8、拡張トレンドC試料No.4）ではイネ科（40ミクロン以上）が急増する。これらのことからIII帶を、b亜帯（西壁断面試料No.9、拡張トレンドC試料No.6,5)とa亜帯（西壁断面試料No.8、拡張トレンドC試料No.4)に細分した。また、I-c区S0677は、アカガシ亜属が高率を示すことと、堆積時期からIII帶に対応すると考えられる。

#### 4. II带(西壁断面試料No.7~5、拡張トレーナーC試料No.3~1)

温帶針葉樹種、特にマツ属（複維管束亞属）の増加が顕著になり、上部（西壁断面試料No 6, 5）で

は50%を超える試料もある。一方、アカガシ亜属が急減する。これらのことからⅡ帯を、b亜帯（西壁断面試料No.7、拡張トレンチC試料No.3～1）とa亜帯（西壁断面試料No.6、5）に細分した。

### 5. I帯（西壁断面試料No.4～1）

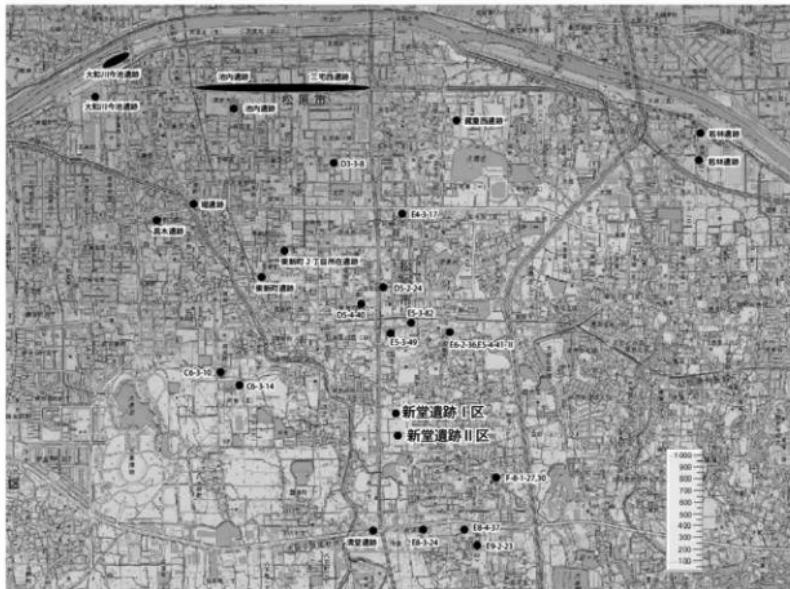
Ⅱ帯に比べ草本・藤本花粉、特にイネ科（40ミクロン以上）が急増する。木本花粉ではマツ属（複雑管束亜属）、スギ属が高率を示す。下部（試料No.4）ではマツ属（複雑管束亜属）の出現率がスギ属を上回るが、中～上部（試料No.3～1）ではスギ属の出現率がマツ属（複雑管束亜属）を上回る。これらのことからⅡ帯を、b亜帯（西壁断面試料No.4）とa亜帯（西壁断面試料No.3～1）に細分した。

### （6）既知の花粉分析結果との比較

松原市内では、松原市他により図89に示す各地点で花粉分析が行われている。これらの結果を概観すると、以下のような傾向を示す。

#### 1. 近世以降

松原市内を含む大阪府中部地域では、木本ではマツ属（複雑管束亜属）の卓越、草本・藤本ではイネ科（40ミクロン以上）の卓越で特徴付けられている。さらに、近代以降は（木本花粉で）マツ属（複雑管束亜属）に加えスギ属が高率を示すようになる（スギ属の出現率増加はスギ植林に起因するが、スギ植林の詳細な記録がなく、また花粉分析でも時期特定が行われていない）。このような花粉分析結果から、近世以降には松原市内も水田域に覆われ、生駒・金剛・葛城山系や、泉州・羽曳野丘陵をアカマツ林（里山）が被ったことを示唆する。また近代以降、特に第二次世界大戦後に盛んになったスギ植林の影響が示唆される。



今回の分析結果ではⅠ帯が近世以降に対応する。特に、Ⅰ帯a亜帯ではスギ属の出現率がマツ属（複雜管束亜属）を上回り、近代以降の花粉化石群集の特徴と一致する。

## 2. 中世以前

松原市内を含む大阪府中部地域では、古墳時代以降、マツ属（複雜管束亜属）の増加がはじまり、これに対応するようにアカガシ亜属が減少する。ここでのマツ属（複雜管束亜属）の増加は、開発行為に伴う照葉樹林の伐採に由来すると考えられており、遺跡によってその開始時期は異なる。この傾向が現れる最も早い遺跡は東大阪市鬼虎川遺跡であり、弥生時代中期にはマツ属が増加している。

松原市内では地点ごとの変異が大きく、中央部の上田町遺跡では弥生時代から中世に至るまでアカガシ亜属が卓越する。また、松原市北部、西部では、特に中世までの時期に、コウヤマキ属やスギ属等の針葉樹花粉の卓越が、断続的に認められる。ただしこのような地点では花粉・胞子化石の含有量が少なく、胞子の割合が高いことが特徴である。おそらく花粉・胞子化石が選択的に劣化・消滅した結果と考えられる。

今回の結果では、アカガシ亜属が高率を示すⅣ帯から弥生時代中期末～後期末を示す $1,845 \pm 20$  yrBP (90-237 cal AD : 2σ) の値が得られている。また、上位のⅢ帯b亜帯では弥生時代中期～古墳時代の遺物が出土している。マツ属（複雜管束亜属）が増加をはじめるのがⅡ帯（弥生時代後期～古墳時代）で、同時期にはマツ属（複雜管束亜属）の出現率がアカガシ亜属をしのいでいる。今回のマツ属（複雜管束亜属）の増加開始時期は、上田町遺跡に比べ明らかに早い。また、古墳時代にマツ属（複雜管束亜属）がアカガシ亜属をしのぐ点でも、大阪府中部地域では早い部類に入る。

V帯では（アカガシ亜属より低率であるが）、コウヤマキ属が特徴的に検出される。V帯では胞子の割合がやや高く、ここでも選択的な劣化・消滅が起きている可能性が指摘できる。

I-c区の3地点は、いずれも弥生時代後期（あるいは古墳時代初頭まで）に堆積したと考えられている。これらのうちS0674はアカガシ亜属が高率を示すなど、Ⅲ帯の特徴を示す。ただし、井戸内の堆積物で、水系が遮断されていることから、イネ科（40ミロン以上）がほとんど検出されていない。S0455、S0674では、花粉・胞子化石含有量が少なく、コウヤマキ属が特徴的に検出され、胞子の割合が高い。また、S0674と近距離にあるものの特異な組成を示すことから、選択的な劣化・消滅に起因するものと考えられる。

## （7）古墳時代の稲作について

古墳時代の植生を示すⅢ帯a亜帯、Ⅱ帯b亜帯でイネ科（40ミロン以上）花粉の出現率が高く、水田跡の可能性が指摘できる。一方別途実施した植物珪酸体分析結果（図90、91）では、これらの層準でイネ植物珪酸体が検出されるものの500～1000粒/gと、稲作の指標とされる5000粒/gの検出密度を大きく下回るものであった。イネ植物珪酸体は葉で生産されたものであり、収穫方法や収穫後の稻藁の始末によって、一枚の田の中でも分布に大きな差が生じる。このことを踏まえるとイネ植物珪酸体の検出密度が少ないと判断することはできない。この様な事からⅢ帯a亜帯、Ⅱ帯b亜帯相当層準が耕作土であったと考えられる。

## （8）古植生の復元

花粉分析結果を基に、調査地周辺の古植生について考察する。また、植生変遷を明確にするために、過去から現在へ向かい、局地花粉帯に沿って考察を行う。

### 1. V帯期（弥生時代中期）

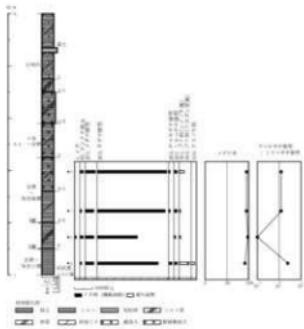


図 90 植珪ダイアグラム(西壁断面)

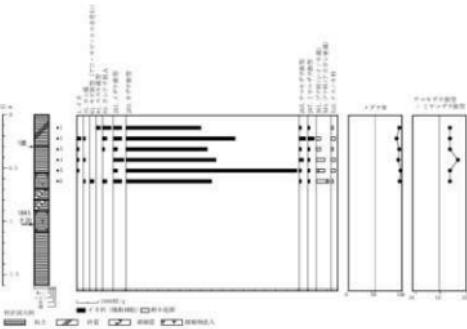


図 91 植珪ダイアグラム(拡張トレンチC)

### ① 堆積時期について

試料No.12の下位で確認された葉集積層のAMS年代値として $2,110 \pm 20$ yrBP (198-56 cal BC:  $2\sigma$ )が得られている。また、上位のIV带下部、試料No.10近辺で $1,845 \pm 20$ yrBP (90-237 cal AD:  $2\sigma$ )のAMS年代が得られていることから、V帶は弥生時代中期の植生を示していると考えられる。

### ② 森林植生

得られた花粉・胞子化石群集は、アカガシ亜属の高率出現と共に次ぐコウヤマキ属のやや高率での出現で特徴付けられている。一方で、花粉・胞子化石含有量が少なく、胞子の割合が高い等の特徴を併せ持つ。一般にコウヤマキ属の高率での出現と、花粉・胞子化石含有量が少なく、胞子の割合が高いこととの相関は高く、選択性劣化・消滅との関連が示唆される。また、葉集積層の葉(種実)同定結果(表4)ではカシ類やクスノキ科が検出された。従ってこの時期には、カシ類を主要素として温帯針葉樹を混淆する照葉樹林が、遺跡近傍から松原市の後背地となる信太山台地～美原台地、富田林丘陵、二上山地、葛城・金剛山地、更に和泉山地(地形名は、中瀬古・中川(1974)に従った。)を覆っていたと考えられる。また、山地高所には温帯針葉樹林や、ブナ林の存在も示唆される。

### ③ 調査地(II-b区)近辺の環境

葉集積層からはイチイガシやアラカシ、エゴノキのドングリの他、アラカシ、イチイガシ、クスノキ科、フジ属の葉が検出されており、調査地近辺に広がった水域の周辺にも照葉樹林が迫っていた可能性も指摘できる。

草本・藤本花粉の割合が低いこと、極細粒の堆積物が続くことから、調査地近辺には開放的な水域が広がり、水辺にはイネ科のヨシやマコモ、カヤツリ

グサ科のホタルイ、ウキヤガラが分布していたと考えられる。

### 2. IV带期(弥生時代中期～後期末)

#### ① 堆積時期について

IV带下部(試料No.10近辺)で弥生時代中期末～後期末を示す $1,845 \pm 20$ yrBP (90-237 cal AD:  $2\sigma$ )のAMS年代が得られている。上

表4 葉(種実)同定結果

	葉	果実	果皮	内果皮	核斗
アラカシ	41	1			
イチイガシ	2	3			
アカガシ亜属			4		3
エゴノキ					1
クスノキ科	1				
マメ科?	1				
フジ属	2				
合計	47	4	4	1	3

位のⅢ帯下部(b亜帯)からは弥生時代中期～古墳時代の遺物が出土していることから、弥生時代中期末～後期末の植生を示していると考えられる。

#### ② 森林植生

花粉・胞子化石含有量が多く、草本・藤本花粉、胞子がほとんど検出されなかった。また、木本花粉の多くはアカガシ亜属であった。これらのことから、カシ類を主要素とした照葉樹林が、松原市の後背地となる信太山台地～美原台地、富田林丘陵、二上山地、葛城・金剛山地、更に和泉山地を覆っていたと考えられる。また、山地高所には温帶針葉樹林や、ブナ林の存在も示唆される。温帶針葉樹には、照葉樹林内に混淆していた可能性も指摘できる。

#### ③ 調査地(II-b区)近辺の環境

草本・藤本花粉の割合が低いこと、極細粒の堆積物が続くことから、調査地近辺には開放的な水域が広がっていたいと考えられる。草本花粉の割合は下位のV帯に比べ減少するものの、含有量に変化は認められない。従って、水辺の景観には変化がない(イネ科のヨシやマコモ、カヤツリグサ科のホタルイ、ウキヤガラが分布)ものの、照葉樹林(カシ類)が水域に迫っていた可能性が指摘できる。

### 3. Ⅲ帯期(弥生時代中期末～古墳時代)

#### ① 堆積時期について

下位のIV帯で弥生時代中期末～後期末を示す $1,845 \pm 20$  yrBP (90-237 cal AD :  $2\sigma$ ) のAMS年代が得られ、Ⅲ帯下部(b亜帯)で弥生時代中期～古墳時代、上位のⅡ帯下部(b亜帯)で弥生時代後期～古墳時代の遺物が出土していることから、下位のIV帯と時期が重複するが弥生時代中期末～古墳時代を中心とする時期の植生を示していると考えられる。

#### ② 森林植生

花粉・胞子化石含有量が多く、草本・藤本花粉がIV帯から急増する。また、木本花粉の多くはアカガシ亜属であるが、IV帯から温帶針葉樹種が微増する。草本・藤本花粉が急増し、水草の種類も多様化することから、水域は縮小し水草が繁茂する湿地へと変化したと考えられる。水域の縮小に伴い照葉樹林はIV帯の時期に比べ更に調査地近くに迫った可能性が指摘できる。温帶針葉樹種が微増することから、温帶針葉樹は照葉樹林内に混淆していたと考えられ、松原市の後背地となる信太山台地～美原台地、富田林丘陵、二上山地、葛城・金剛山地、更に和泉山地を覆っていたと考えられる。一方で、山地高所には温帶針葉樹林や、ブナ林の存在も示唆される。

#### ③ 調査地(II-b区)近辺の環境

検出される水草花粉の組成から、湿地内にはガマ類、ミクリ類、オモダカ類、サジョモダカ類やゴキズル類、イネ科のヨシやマコモ、カヤツリグサ科のホタルイ、ウキヤガラ等が分布していたものと考えられる。また、a亜帯の時期にはイネ科(40ミクロン以上)が急増し、前述のように近隣あるいは調査地で水田耕作が行われた可能性が指摘できる。

#### ④ I-b区・I-c区の環境

I-b区・I-c区で試料を採取した3地点も出土遺物からⅢ帯の時期に相当すると考えられる。これらのうち、水路埋土を対象としたS0455、S0677では、花粉・胞子化石含有量が少なく、花粉・胞子化石の選択的劣化・消滅が生じていると考えられる。同時に微粒炭の検出量は多く、植物片・珪藻・植物珪酸体の検出量が少ないとから、堆積後に化学変化を受けたことや、堆積中の水位が低く紫外線による影響を強く受けたことが原因と考えられる。また、化学変化に比較的強い植物珪酸体の検出

量が少ないとから、堆積期間が短かった可能性も指摘できる。得られた花粉化石群集は、選択的な劣化・消滅した結果であるが、イネ科（40ミクロン以上）及び水田雑草種も含まれることから、S0455、S0677の水路が、（水田の）用水路として用いられていた可能性は指摘できる。

井戸（S0674）で分析を行った最下位の試料では、花粉・胞子化石含有量が1,864粒/gとやや少なかった。ここでは胞子の割合が高く、上位の試料に比べ針葉樹の割合がやや高いなど、選択的な劣化・消滅が起きている可能性が指摘できる。ただし木本花粉組成について他の試料と大差ないことから、影響は少ないものと考えられる。また、最下部の試料では草本・藤本花粉が多く検出され、特にイネ科（40ミクロン未満）とヨモギ属が多く検出される。前述のように選択的な劣化・消滅が起きている可能性が指摘できるが、直上の試料でも同様の傾向を示すことから、本質的な現象と捉えられる。従って、井戸の廻りは比較的乾燥し、ススキやヨモギ類が繁茂していたと考えられる。また、井戸内から祭祀に利用された植物由来の花粉が検出されることがまれにあり、特徴的に検出されたイネ科（40ミクロン未満）、ヨモギ属にもこの可能性が指摘できる。しかし、これらの種類は通常から高率を示すことがあり、特に祭祀に用いられたとは考えにくい。

#### 4. II带期（古墳時代～中世）

##### ① 堆積時期について

II带下部（b亜帯）で弥生時代中期～古墳時代、II帶中～上部（a亜帯）で弥生時代後期～中世の遺物が出土していることから、古墳時代～中世の植生を示していると考えられる。

##### ② 森林植生

III帯から一変してマツ属（複維管束亜属）が急増し、アカガシ亜属が減少する。前述のように他地域と比べマツ属（複維管束亜属）の増加時期が早い。マツ属（複維管束亜属）は荒廃地に先駆的に進出するマツ類に由来することから、近隣地域での森林破壊（伐採）が急激に進んだと考えられる。原因として古墳築造等の開発行為や窯業に関連した森林伐採等による二次林化が考えられるが、詳細は不明である。

##### ③ 調査地（II-b区）近辺の環境

イネ科（40ミクロン以上）が高率を示し、オモダカ属、イネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科、キカラシグサ属等の水田雑草種を作うことから、調査地及び周辺地域では水田耕作が行われていたと考えられる。またソバ属が検出されることから、裏作や休耕田、畦畔を利用したソバ栽培が行われていたと考えられる。

#### 5. I带期（近現代）

##### ① 堆積時期について

近現代の遺物が出土し、最上位の試料は現代耕作土から採取している。これらのことから、近現代の植生を示していると考えられる。

##### ② 森林植生

マツ属（複維管束亜属）は高率を示すものの、スギ属がII帯から急増し、更に増加傾向を示している。松原市の後背地となる信太山台地～美原台地、富田林丘陵、二上山地、葛城・金剛山地、更に和泉山地における現在の森林植生のほとんどは、アカマツとコナラを高木層に持つ二次林（里山）とスギ植林である。スギ植林は第二次世界大戦後に政府によって推進され大規模に行われたが、古くは鎌倉時代後半まで遡ることができるようである。特に江戸時代には藩ごとに推奨され、行われていたようである。こ

のことから、スギ属の顕著な急増はスギ植林に由来すると考えられる。

### ③ 調査地（II-b 区）近辺の環境

イネ科（40 ミロン以上）がきわめて高率を示し、種類数は少いもののイネ科（40 ミロン未満）、カヤツリグサ科等の水田雑草種を伴うことから、調査地及び周辺地域では水田耕作が行われていたと考えられる。またソラマメ属やワタ属が検出されることから、裏作や休耕田、畦畔を利用してこれらの作物が栽培されていたと考えられる。また、b 亜帯ではアブラナ属も高率を示し、ナタネ栽培の可能性が指摘できる（藤田ほか、1991）。

### （9）まとめ

新堂遺跡で実施した花粉分析の結果、以下の事柄が明らかになった。

1. 花粉分析結果を基に、I～V 帯の局地花粉帶を設定した。更に I～III 帯をそれぞれ a、b 亜帯に細分した。
2. 松原市内での花粉分析結果との比較、及び既知の年代測定結果等から、各花粉帶が示す時期を推定した。
3. 花粉分析結果及び既知の松原市内での花粉分析結果との比較を基に、新堂遺跡周辺での弥生時代中期以降の植生を復元した。この結果 II-b 区では、弥生時代中期には水域があり、その後湿地環境を経て弥生時代後期には水田に変化したことが明らかになった。
4. 時期を絞り込むことができないが、松原市内中心部での既知の結果同様に、古墳時代～中世にはアカマツ林が広がっていたと考えられる。古墳の築造や窯の操業に起因する可能性が指摘できる。
5. II-b 区 3-1～4 層（古墳時代）について、作土と認定できる検出密度でイネ植物珪酸体が得られなかったが、イネ科（40 ミロン以上）花粉が多量に検出された事から水田作土と指摘できた。
6. I 帯（近現代）の時期には、ナタネ、ワタ、ソラマメの栽培が行われていた。

### 〈参考文献〉

- 中村 純 1974 「イネ科花粉について、特にイネを中心として」『第四紀研究』13,187-197  
藤田憲司・古谷正和・渡辺正巳 1991 「大阪府南部地域におけるアブラナ科花粉の高出現率期について」  
『日本文化財科学会第 8 回大会 研究発表要旨集』33-34  
渡辺正巳 2010 「花粉分析法」『必携 考古資料の自然科学調査法』174-177 ニュー・サイエンス社

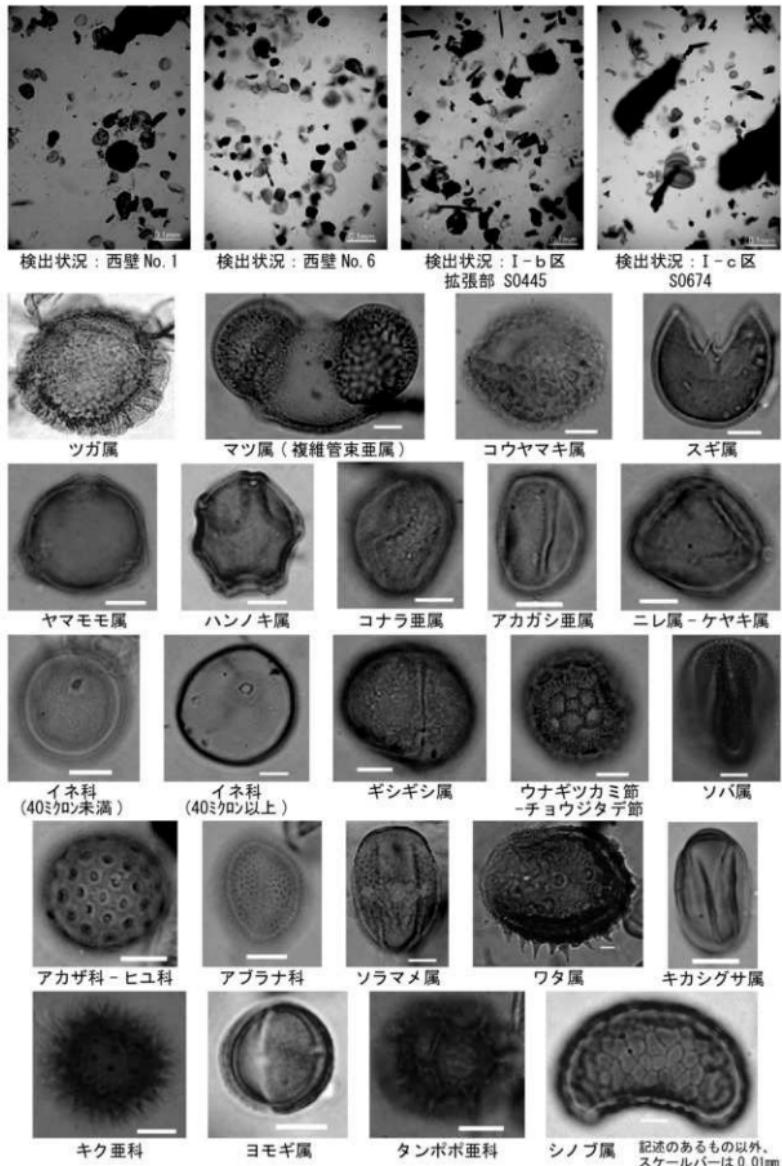


写真 1 花粉分析顕微鏡写真

## 第5章 総括

### 第1節 新堂遺跡の遺構について

#### (1) I 区の竪穴建物について

今回の調査で、北側の I 区で 6 棟の竪穴建物を検出した。6 棟のうち 5 棟が圓丸方形で 1 棟が円形である。このうち全形を検出したのは竪穴建物 3 と竪穴建物 5 の 2 棟で、竪穴建物 2 と竪穴建物 4 は約 4 分の 3 、竪穴建物 1 と竪穴建物 6 は約 2 分の 1 を検出するにとどまった（図 8 参照）。

建物の規模は最小の竪穴建物 1 で 1 辺約 3.0 m 四方の推定面積約 9.0m<sup>2</sup> 、最大の竪穴建物 5 で約 1 辺 6.0 m 四方、推定面積約 36.0m<sup>2</sup> である。竪穴建物 1 は規模が小さいため住居とは考えにくく他の用途を想定するが、それ以外の竪穴建物は住居と考えられる。いずれの建物も周堤や外周溝は確認できなかつたが、壁溝や主柱穴、炉等の内部施設を検出した。

竪穴建物はすべて Y = - 41.075 より西に位置している。I - b 区では調査区を拡張して Y = - 41.090 より東までの範囲で 3 棟を検出したが、遺構の密集度や溝等が調査区外にも延長する状況からすると、I - c 区の西側にさらに竪穴建物が広がっている可能性がある。

竪穴建物 1・2・3 は検出状況からは重複していないように見受けられる。ただし、実際には上屋があることを考へると、壁体外縁に 1.5 ~ 2.0 m の幅を設定しなければならない。併存する竪穴建物の周溝間距離については藤田憲司氏は通常 20 m 程度、沖積低地で 10 m 強を想定し、高田健一氏は最低でも 4 ~ 6 m 必要とする。竪穴建物 1・2・3 の周溝間距離は 5 m 程度できわめて近接するが、これが竪穴建物 1・2・3 の時期差、同時に存在しなかったことを示すかは明らかにできなかった。竪穴建物 4 と 6 、竪穴建物 4 と 5 は 10 ~ 20 m の距離があり、竪穴建物 3 と 5 は約 40 m の距離がある。

また、土坑 S0756 や土坑 S0490 で検出した、壁材とした土製品を含む土坑が竪穴建物に付随する何らかの施設とするなら、I - c 区の南東部の土坑 S0490 の南にある円形にめぐる溝 S0489 も竪穴建物の壁溝と考え得る。つまり、壁溝 S0489 で囲まれた円形住居になる可能性もあり、居住域が I - b 区の南東部よりさらに南にも広がっていた可能性もある。

竪穴建物の時期は内部構造がかまどではなく中心に炉をもつて、下限はおおむね古墳時代前期までと考えられる。上限は縄文時代に遡るが、弥生時代後期には多くの竪穴建物の平面形が円形から方形に移行するとされる。しかし、円形の竪穴建物 6 を住居内の遺構や覆土から出土した遺物の時期から、弥生時代中期に限定することはできなかった。ただし、周辺の包含層中からは弥生時代中期の土器や石器も一定量出土していることから、弥生時代中期からこの周辺に居住域が形成されたとも考えられる。すべての竪穴建物の炉や主柱穴、覆土から出土した遺物が弥生時代後期後半から後期末におさまることから、狭義には弥生時代後期後半の居住域と位置づけられよう。

北西に位置する竪穴建物 2 の周辺では、第 1 面上層からは古墳時代前期の遺構もみられることから、I 区の中でも南から北へ行くに従い、弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代初めと小時期差をもち、継続あるいは断絶しながら居住域が移動していたとも推測できる。

また、竪穴建物は Y = - 41.075 より西に集中し近辺には井戸等もみられるが、弥生時代後期を中心とする井戸や溝、柱穴等の遺構は Y = - 41.055 周辺まで広くみられることから、竪穴建物に伴う遺構

として居住域がここまで広がっていたと考える。

ともあれ、I 区でこれまでの新堂遺跡の調査では確認されていなかった、弥生時代後期後半から後期末の居住域が確認されたことは、今回の大きな調査成果であろう。

## (2) II 区の流路について

かわって南側のII 区では、最も主要な遺構としてII-a・c・d 区を蛇行しながら流れる流路 S0034 とそれに平行する溝 S0030 を検出した。流路 S0034 より北東では主に鶴溝等の耕作遺構が検出されるが、これは中世以降の遺構と考えられる。流路 S0034 の南西では II-d 区を中心として土坑や柱穴等が検出され（図 44 参照）、遺物は縄文時代晚期から古代のものが出土している。

流路 S0034、溝 S0030 はともに地形条件上、高い南東から低い北西へと流れていたと考えられる。

流路 S0034 は最大幅 8.0 m、推定される深さは下層の流路も含めて約 2.0 m の大規模な流路で、II-a 区の東端から現れ、蛇行しながら II-d 区の北西角へと流れる。II-a 区の東、II-d 区の西、調査区外へと続くが、調査区内での全長は直線距離でも 80 m 以上に及ぶ。

幅が狭くなったり淀んだ箇所に土器や自然木が溜まった状態で検出された。弥生時代中期から古代までの遺物を含むが、上層と下層の遺物で明確に時期差はない。また、数十メートル離れた地点に散在する遺物が接合でき、急流ではなく比較的緩やかな流れだったと想像される。

流路 S0034 の下層にも重複するように大規模な流路があったことが、平面精査や部分的な断面調査で判明した。下層の流路は南の II-a 区では南北方向にのびるが東に向きを変え、II-c 区に入ると流路 S0034 と重なるように東から西へとのび、II-d 区でもほぼ重複して北西角にむかっていく。最大幅は約 12.0 m で、深さは部分的なトレンチ調査から推測すると流路 S0034 とあわせてだが約 2.0 m である。また、流路 S0034 の上層には、3-2 層上面からの溝が検出された。流路 S0034 の中心をとおるよう II-a 区東辺から II-d 区北西角にむかって流れる。

溝 S0030 はこの溝より 5~15 m 南に離れているが、平行するように II-a 区南東角から II-d 区北西角にむかって流れる。3-2 層上面からの遺構で、遺物量は少ないが古墳時代の須恵器杯等が出上了。流路 S0034 と溝 S0030 の間から古墳時代中期の土器が数点出土することから、二つの溝の時期の一端を古墳時代中期に求められよう。II 区の中央では、多少流れの方向を変えながらも数世紀にわたって流路が形成され、氾濫を繰り返して周辺に影響を与えていたことが判明した。

II-b 区の北端の突出部でも基盤層のさらに下層に流路の痕跡が認められ、弥生時代中期の土器がまとまって出土するのは、調査面より下層に存在する流路の氾濫によってもたらされたと考えられる。流路 S0034 より北東部では中世以前の遺構がほぼ認められず、中世以降も耕作地としての利用が主のは、流路の氾濫を受けやすく土壤も砂礫が強いため、居住に適さない地域だったと考えられる。

自然科学分析でも II 区は弥生時代中期からの植生が復原でき、古墳時代前期に土壤が安定する結果を得られており、考古学的結果と合致している。

流路 S0034 の南西部でも II-a 区南側は近現代の池や井戸に攪乱され、遺構を検出したのは II-d 区や II-a 区のごく一部にとどまった。検出遺構は掘立柱建物 1 棟や建物状遺構、土坑、溝等で、遺物の時期も縄文時代晚期、弥生時代後期、古墳時代前期から後期、古代等多岐にわたる。居住域と呼ぶほどのまとまりはないが、長期間にわたって人が生活していたことが明らかになった。

また、II-d 区の西壁内土坑 S0959 からは多量のサヌカイトの石器、剥片、チップが出土しており、II-d 区のさらに西側にも遺構が広がっていたことが示唆される。

## 第2節 新堂遺跡の遺物について

今回の調査では調査面積約9,300m<sup>2</sup>の調査区から、コンテナ約70箱の遺物が出土した。特に北側のI区での出土量が多く、南側のII区との出土量比は3:1である。これはI区とII区では遺構の種類が異なるためで、I区では整穴建物をはじめとする居住域を検出したうえ遺構が密集しており、II区では出土遺物の多くは流路やその氾濫によるからであろう。

I区では整穴建物、井戸、溝、土坑、落ち込み等から廃棄された遺物が出土し、あるいはその上層の包含層は、下層の生活面の遺物を集めて整地したような状態であったため、大量の破碎された遺物を含んでいた。遺物は完形品が少なく、摩耗して接合不可能なものが多かった。

対して、II区は出土遺物の多くは調査区の中央を流れる流路S0034とその氾濫による流路付近地表面からの出土であり、その他は遺構数も少なく耕作遺構を主とするため遺物量は少ない。

遺物の種類は土器が最も多く、出土量全体の4分の3を占める。次いで石器・石製品で主にサヌカイトの石器は剥片や石核、チップも含めると200点以上を数える。サヌカイトの打製石器以外にも石庖丁やすり石、ハンマーストーン、砥石等もみられる。

焼土塊や土師質で壁材と推測した土製品もコンテナ2箱程度みられた。焼土塊はほぼII区から出土し、壁材とした土製品はほぼI区から出土した。

古墳時代前期から後期の円筒埴輪も10点程度出土した。瓦はごく少量で平瓦の破片のみ、金属製品、木製品・骨等の有機遺物はほぼみられなかった。II区の流路中からは自然木や種実は出土しているのでこれらの有機遺物が腐朽したと考えにくく、当初から少なかったのであろう。

遺物の時期は、打製石器には旧石器時代の国府型ナイフ形石器や縄文時代の石鏃がみられる。また、縄文時代晩期の土器が少数だが、晩期の突帯文土器がI・II区とともにみられる。弥生時代前期の土器は未検出だが、I-b区で出土した扁平片刃石斧は、形態的には弥生時代前期末葉から中期前半にかけてのもので、他地域からの搬入の可能性が高い。弥生時代中期になると土器や石器がI区の包含層中やII区の北側突出部等で一定量みられるようになる。

弥生時代後期後半になると、土器の量は一気に増え、弥生時代後期末から古墳時代初頭までの土器がそれに次ぐ。遺構から出土する土器は須恵器を伴わないものがほとんどであるが、上層の包含層には古墳時代前期から中期の土器、II区の流路からは古墳時代中期から後期の須恵器、初期須恵器の大甕等もみられる。

飛鳥時代から奈良時代の須恵器や円面鏡等も少量みられるが、それ以降は中世の土師器・黒色土器・瓦器椀等はごく少量で耕作遺構や包含層中にみられるにすぎない。

当遺跡の遺物の特徴として、その多様性、多時期性があげられよう。

縄文時代晩期の深鉢や旧石器は、近辺の遺跡でも少数確認されている。また、円筒埴輪も南側の立部古墳群跡等との関連も考えられるが、古墳時代前期、4世紀代にあたる古い型式もみられる。

土器は弥生時代後期後半から末としたが、当遺跡南には庄内式土器の標式遺跡である上田町遺跡があり、弥生時代後期から古墳時代に続く土器の系譜がたどれる。当遺跡でこれまで大規模な調査が行われていなかったが、今回の調査で南河内地域での弥生時代後期から古墳時代前期の土器についての資料が得られ、解明の一助となり得る。

また、主にII区で出土した焼土塊は南の岡遺跡や立部遺跡で古代遺構の鑄物師工房址が確認されてお

り、それらとの関連が考えられる。土製品でも壁材としたものについてはその特徴から自然木を芯とする壁材ではないかと推測したが、報告例がなくその用途については推測の域を出ない。今後、本書以外での報告を待ちたい。

特筆すべきは、I-b区で竪穴建物上層の自然遺構、たわみから出土した層灰岩製の扁平片刃石斧である。

層灰岩は北部九州地域臨野亞層群、対馬、下関亞層群等で産出されるとされる岩石で、北部九州では片刃石斧や石劍の材として多用されている。しかし、九州以外では層灰岩を材料とした石器はこれまでみられなかった。近年になって、島根県や鳥取県、石川県等の日本海沿海域で搬入されている事例が報告されており、日本海の海運を利用して本州に搬入されたと推測されている。

層灰岩製の石斧が日本海沿岸部でなく、近畿内陸部で確認されたものでは今回の例が初出である。ただし、形態的にみても転用、再利用された可能性は高いものの、扁平片刃石斧が使用されるのは弥生時代前期末から中期初めとされる。I区では時期的にこれに伴う土器が出土せず、この石斧が出土した地点からは古墳時代に入る土器が出土している。

他の遺物と時期的に大きく乖離していることから、どのように搬入されたか不明な点はあるものの、層灰岩製の扁平片刃石斧が出土したことは大きな調査成果である。

#### 〈参考文献〉

- 森屋美佐子・正岡大実編 2008 『八尾南遺跡』(財)大阪府文化財センター  
岡本茂史 2007 「『集落跡』から見えるもの—八尾南遺跡の集落景観ー」『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2005年度共同研究成果報告書』(財)大阪府文化財センター  
高田健一 2007 『山陰における弥生時代集落景観—妻木・晚田遺跡における集落景観復元の基礎作業を通じてー』『財団法人大阪府文化財センター・日本民家集落博物館・大阪府立弥生文化博物館・大阪府立近つ飛鳥博物館 2005年度共同研究成果報告書』(財)大阪府文化財センター  
藤田憲司 1984 『単位集団の集団領域—集落研究の基礎としてー』『考古学研究』第31卷第2号 考古学研究会  
佐藤由紀男・宮田明 2018 「石川県小松市八日市地方遺跡出土の層灰岩製片刃石斧と三面石斧をめぐって」『考古学研究』第65卷第3号 考古学研究会  
森貴教 2011 「北部九州—今山系石斧の流通を中心にー」『季刊考古学』第111号 雄山閣  
森貴教 2013 「弥生時代北部九州における片刃石斧の生産・流通とその背景—「層灰岩」製片刃石斧を中心にしてー」『古文化談叢』第69集 九州古文化研究会

表5 土器・土製品観察表

検査番号	遺物番号	図版番号	種別	器形	時期	法量(cm) ( )は推定 ( )は残存	調整等 (砂→はヘラケズりにより 砂が動いた方向を示す)	外面色調	調査面	調査区	報告書の 遺構番号・層
37	1		須恵器	杯身	古墳時代後期	口径 [11.6] 器高 [2.8]	外: 回転文デ、底部回転ヘラケズリ (砂→)	N6/0灰	第1面	I-a区	S0007
37	2		須恵器	杯身	古墳時代後期	口径 [11.6] 器高 [3.5]	外: 回転文デ、底部回転ヘラケズリ (砂→)	N6/0灰		I-a区	3層
37	3		灰陶器	楕	古代	底径 [7.4] 器高 [2.0]	外: 施釉 系切り、貼付け高台	SY6/2灰オリー ノ		I-a区	3層
37	4		弥生土器	甕	弥生時代後期未 半	底径 [3.9] 器高 [3.3]	外: タタキ 内: 調整不明	7.SYR7/6橙		I-a区	3層
37	5	29	弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	口径 [30.6] 器高 [8.0]	内外: 表面摩耗のため調整不明 外面部黒斑あり	2.SYB2/灰白	第1面	I-b区 井筒内上層	S0155
37	6		弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	底径 [4.3] 器高 [6.6]	外: 調整不明、 わざかにハケの痕跡残る 内: ナデ、底部に工具痕あり	2.SY6/2灰黄	第1面	I-b区	S0155
37	7	29	弥生土器	甕	弥生時代後期未 半	底径 [3.6] 器高 [6.7]	外: タタキ 内: ハケ	10YRA/1褐色	第1面	I-b区	S0155
37	8	29	弥生土器	鉢	弥生時代後期後 半	器高 [11.3]	内外: ナデ	2.SYB3/淡黄	第1面	I-b区	S0155 最下層
37	9		弥生土器	有孔鉢か 甕	弥生時代後期後 半	底径 [3.4] 器高 [2.6]	内外: 調整不明 底部穿孔。焼成前の穿孔	10YR7/6明黄褐	第1面	I-b区	S0160 塚土
37	10		弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	底径 [4.0] 器高 [3.5]	外: タタキ 内: 調整不明	10YR7/4にぶい 黄橙	第1面	I-b区	S0160 塚土
37	11	29	弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	底径 [3.6] 器高 [2.2]	内外: 調整不明	2.SY7/2灰黄	第1面	I-b区 櫛立柱建物1 S0162	
37	12		弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	底径 [3.2] 器高 [2.0]	内外: 調整不明	7.SYR6/6橙	第1面	I-b区	S0250
37	13	29	弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	底径 [3.4] 器高 [2.3]	内外: 調整不明	7.SYR7/6橙	第1面	I-b区 竪穴建物2 S0294	
37	14		弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	底径 [3.6] 器高 [2.6]	外: ナデ、底部指オサエ 内: ナデ	7.SYR7/4にぶい 橙	第1面	I-b区 竪穴建物2 S0294	
37	15		弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	底径 [3.6] 器高 [2.6]	外: タタキ、底部ナデ 内: ナデか 摩耗。倒壊のため調整不明	SYR6/6橙	第1面	I-b区 竪穴建物3 S0295	
37	16		弥生土器	高杯	弥生時代後期後 半	器高 [5.3]	内外: 調整不明 円形スカラ3方向、焼成前の穿孔	2.SYR7/6橙	第1面	I-b区 遺物集中部 (竪穴建物3 S0295)	
37	17	29	弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	口径 [13.6] 器高 [4.3]	内外: 調整不明 外面部体部のすかにタタキ残る	10YR7/3にぶい 黄橙	第1面	I-b区 竪穴建物1 S0300 西突出部	
37	18	29	弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	底径 [4.0] 器高 [5.5]	内外: 調整不明 黒斑あり	SYR6/6橙	第1面	I-b区 竪穴建物1 S0300 西突出部	
37	19	29	弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	底径 [5.5] 器高 [4.4]	外: タタキ 内: 調整不明	10YR7/2にぶい 黄橙	第1面	I-b区 竪穴建物3 S0295	
37	20		瓦器	楕	古代末(1世紀 紀初~12世紀初)	口径 [15.5] 底径 [5.8] 器高 [4.1]	外: ミガキ、底部ナデ 内: ミガキ	SY7/1灰白	第1面	I-b区 S0362 (西側溝)	
37	21		土師器	皿	古代末(1世紀 紀初~12世紀初)	口径 [8.2] 底径 [12]	内外: ナデ、口縁部ヨコナデ	2.SYB2/灰白	第1面	I-b区 S0362 (西側溝)	
37	22	29	土師器	脚付皿	古代末(12世紀)	底径 [8.6] 器高 [2.7]	外: 脚部ナデ	10YR8/3浅黄橙	第1面	I-b区	S0368
37	23	29	弥生土器	高杯	弥生時代後期	口径 [22.0] 底径 [5.1]	外: 調整不明 外面部タテのヘラミガキか	7.SYR8/4浅黄橙	第1面	I-b区	S0369
37	24	27	弥生土器	小形甕	弥生時代後期	口径 [8.9] 底径 [3.6] 器高 [10.5]	外: ヨコケ(不明瞭)、底部ナデ、 黒斑あり	2.SYR6/6橙	第1面	I-b区	S0369
37	25	27	弥生土器	広口甕	弥生時代後期後 半	口径 [12.3] 底径 [3.6] 器高 [13.8]	外: 調整不明	7.SYR8/4浅黄橙	第1面	I-b区	S0369
37	26		弥生土器	広口甕	弥生時代後期後 半	口径 [23.8] 底径 [2.8]	内外: 摩耗著しく調整不明 外面部凹窓の上に円形浮文	7.SYR6/6橙	第1面	I-b区	S0370
37	27		弥生土器	甕	弥生時代後期	底径 [4.8] 器高 [3.5]	外: タタキ 内: 調整不明	2.SY7/2灰黄	第1面	I-b区	S0370
37	28		弥生土器	甕	弥生時代後期	底径 [5.3] 器高 [3.5]	外: タタキ 内: 調整不明	10YR8/2灰白	第1面	I-b区	S0372
37	29	29	弥生土器	鉢	弥生時代後期	口径 [14.8] 器高 [5.5]	内外: 調整不明	10YR7/4にぶい 黄橙	第1面	I-b区	S0371

牌回 曲号	遺物 番号	図版 番号	種別	器形	時期	法量 (cm) ( ) は推定 ( ) は残存	調査等 (砂→はヘラグズリにより 砂が動いた方向を示す)	外面色調	調査面	調査区	報告書の 遺構番号・層
37	30	29	弥生土器	広口壺	弥生時代中期	口径 (22.6) 器高 (6.0)	内外：剥離著しく調整不明	7SYR7/6 棕	第1面	I - b 区	S0447 東半
37	31		弥生土器	壺	弥生時代後期	底径 6.1 器高 (3.5)	内外：調整不明	7SYR6/4 浅黄棕	第1面	I - b 区	S0390
37	32	27	土師器	甕	古墳時代前期	口径 (14.0) 器高 (11.4)	外：調整不明、底部煤付着 内：口径部調整不良、 底部へラグズリ (砂→)	2.5Y7/3 浅黄 ~ 5YR6/6 棕	第1面	I - b 区	S0455
37	33		弥生土器	高杯	弥生時代後期	底径 (8.6) 器高 (6.4)	内外：調整不明 円形スカシ 3 方向、焼成前の穿孔	5YR7/6 棕	第1面	I - b 区	S0455
37	34	27	弥生土器	壺	弥生時代後期末	底径 3.0 器高 (12.3)	内外：調整不明 外壁黒斑あり	2.5Y8/3 淡黄	第1面	I - b 区	土器 S0409
37	35	27	土師器	二重口縁 壺	古墳時代前期	口径 19.9 器高 35.9	内外：調整不明 外面上半タテバゲ、下半ヘラミガキが 内面上部へラグズリ (砂→)	7SYR7/6 棕	第1面	I - b 区	土器 S0481
38	36	30	弥生土器	壺	弥生時代後期 半	底径 3.8 器高 (5.6)	外：底部剥離、底部ヘラミガキ、底面 ナデ 内：底部ナデ	2.5Y7/2 灰黄	第1面	I - c 区	S0489
38	37	30	弥生土器	甕	弥生時代後期 半	底径 4.1 器高 (4.8)	外：ナデが 剥離、摩耗したため調整不明瞭 内：ナデ	10YR7/2 にぶい 黄棕	第1面	I - c 区	S0495
38	38	30	弥生土器	甕	弥生時代後期 半	底径 3.6 器高 (6.7)	外：タキ、底部ナデ、 底面黒斑、黒斑あり 内：底部剥離、底部ナデ	7SYR6/4 にぶい 棕	第1面	I - c 区	S0580
38	39	28	弥生土器	鉢	弥生時代後期	口径 (14.4) 底径 4.0 器高 7.0	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 ハケのチリナゲが	5YR6/8 棕	第1面	I - c 区	S0584
38	40	30	弥生土器	ミニチュ ア土器	弥生時代後期後 半	底径 3.1 器高 (6.6)	外：タキのチリナゲが、底部ナデ 内：底部剥離、底部ナデ、 工具痕、黒斑あり	10YR7/3 にぶい 黄棕	第1面	I - c 区	S0585
38	41	27	弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	口径 (12.8) 底径 (3.8) 器高 24.5	内外：摩耗著しく調整不明 外底に横部斜め方角のハケの痕跡	7SYR8/4 浅黄棕	第1面	I - c 区	S0521
38	42	30	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後 半	口径 (22.0) 器高 (5.8)	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 外底に横部に竹刷毛	10YR8/4 浅黄棕	第1面	I - c 区	S0591
38	43	28	弥生土器	高杯	弥生時代後期	底径 10.1	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 円形スカシ 2 方向ある、焼成前の穿孔 内面上部にぼり感あり	2.5Y8/2 白灰 ~ 5YR7/4 棕	第1面	I - c 区	S0600
38	44	30	弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	口径 (15.0) 器高 (9.3)	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 外面上部タキあり	7SYR7/4 にぶい 棕	第1面	I - c 区	S0611
38	45		弥生土器	甕	弥生時代後期後 半	口径 (15.6) 器高 (10.7)	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 外面上部タキあり	5YR7/6 棕	第1面	I - c 区	S0611
38	46		弥生土器	甕	弥生時代後期	底径 4.0 器高 (6.6)	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 内：剥離のため調査不能、工具痕あり	2.5Y8/6 棕	第1面	I - c 区	S0672
38	47		弥生土器	壺	弥生時代後期	底径 (3.8) 器高 (2.2)	外：ナデが、底部ナデ 内：剥離のため調査不能、工具痕あり	7SYR4/3 褐	第1面	I - c 区	S0670
38	48		弥生土器	高杯	弥生時代後期	口径 (11.4) 器高 5.85	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 内：剥離のため調査不能、工具痕あり	10YR7/3 にぶい 黄棕 - 7SYR7/4 にぶい棕	第1面	I - c 区	S0670
38	49	27	弥生土器	高杯	弥生時代後期	底径 (12.6) 器高 (7.3)	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 円形スカシ 3 方向、焼成前の穿孔 内面上部にぼり感あり	10YR8/2 白灰	第1面	I - c 区	S0620
38	50	27	弥生土器	甕	弥生時代後期	口径 (14.9) 底径 4.1 器高 20.9	外：タキ 内：調整不明	5YR6/6 棕	第1面	I - c 区	S0620
38	51	28	弥生土器	広口壺	弥生時代後期	口径 20.4 器高 (8.0)	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 外面上部にぼり感あり	5YR8/4 淡棕	第1面	I - c 区	S0674
38	52	27	弥生土器	高杯	弥生時代後期末	口径 19.8 器高 (5.1)	外：タマミガキ、口縁部沈線 3 条 内：ヘラミガキ	10YR5/2 灰黄褐	第1面	I - c 区	S0674
38	53		弥生土器	直口壺	弥生時代後期	口径 (12.4) 器高 (5.3)	外：口縁上部コナデ、下部タテバゲ、 周部ハカチナデからタマミガキ 内：口縁上部コナデ、下部ヨコハケ	10YR5/2 灰黄褐	第1面	I - c 区	S0685
38	54	28	弥生土器	甕	弥生時代後期	口径 7.6 底径 3.5 器高 10.2	外：剥離・摩耗著しく調整不明 頭部ハケ目残る 内：ナデ、縁部ハケのちナデ	2.5Y8/2 白灰	第1面	I - c 区	S0638
38	55		弥生土器	小形壺	弥生時代後期	口径 (7.6) 器高 (4.15)	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 内面上部斑斑あり	7SYR8/4 浅黄棕	第1面	I - c 区	S0638 南半
38	56		弥生土器	甕	弥生時代後期	底径 3.6 器高 (4.9)	外：タキ、底部ナデ、煤付着 内：ハケが、底部工具痕あり	5YR7/6 棕 ~ 10YR3/3 浅黄棕	第1面	I - c 区	S0638 南半
38	57		東播系須 吏器	こね鉢	中世 (12 世紀 末～13 世紀初)	口径 (28.2) 器高 (5.8)	内：回転ナデ	N4/0 灰・S7/6/1 灰	第1面	I - c 区	S0630
38	58		陶器	壺	中世後半～近世	底径 4.0 器高 (3.3)	外：擦傷、底部・高台部蟲食、 回転ナデ 内：擦傷	10YR2/1 黒 (輪) 7SYR6/3 にぶい 棕 (輪)	第1面	I - c 区	S0639

構図番号	遺物番号	回版番号	種別	器形	時期	法量(cm) ( )は推定 値(%)は既存	調節部 (砂=ヘラケズリにより 砂が動いた方向を示す)	外面色調	調査面	調査区	報告書の 遺構番号・層
38	59		弥生土器	甕	弥生時代後期後半	底径 4.0 器高 (5.2)	外: タキ、底部ナデ、裏斑あり 内: 刃縫・摩耗のため調整不明、底部具痕あり	10YR8/3 淡黄橙	第1面	I - c 区	S0677
38	60	30	弥生土器	鉢	弥生時代後期後半	口径 [32.8] 半	外: ハケ(のちへラミガキ)、 口縁部ヨコナデ 内: 体部ハケ残る、ハケのチナデか	5YR6/6 棕 ~2.5Y7/2 庚黃	第1面	I - c 区	S0677
38	61		弥生土器	壺	弥生時代後期後半	底径 3.4 器高 (6.4)	内外: 刃縫・摩耗著しく調整不明 外側ハラミガキ残る、底部ナデか 内面底部部に横方向のナデか	10YR7/2/にぶい 黄橙	第1面	I - c 区	S0677
39	62	30	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 [19.0] 器高 (11.5)	外: タキ、口縁部ヨコナデ、煤付着 内: ハケ、口縁部ヨコナデ	5YR8/6 明赤褐 ~10YR7/2/にぶい 黄橙	第1面	I - c 区	S0721
39	63	30	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後半	口径 16.0 器高 (4.0)	内外: 刃縫・摩耗著しく調整不明	7.5YR7/6 棕	第1面	I - c 区	竪穴建物 4 S0678
39	64	30	弥生土器	高杯	弥生時代後期後半	底径 [14.2] 器高 (8.3)	外: 縦方向へラミガキ、 裾部ハケ目残す 内: ナデ、口縁部ヨコナデ、 刃縫ナデあり 円形スカラ3方向、焼成前の穿孔	10YR7/3/にぶい 黄橙	第1面	I - c 区	S0680
39	65	30	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 [18.2] 器高 (10.0)	外: タキ、口縁部ヨコナデ、 全体煤付着 内: 脚部ハケ、口縁部ヨコナデ、 上半部付着	10YR4/1 暗灰 ~10YR6/2 庚黃 褐	第1面	I - c 区	竪穴建物 6 内 S0701
39	66	30	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	底径 3.7 器高 (6.0)	外: タキ、底部ナデ 内: 脚部ハケ、煤付着、 体部摩耗のため調整不明	10YR7/2/にぶい 黄橙	第1面	I - c 区	S0705
39	67		弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 [22.0] 器高 (5.6)	外: タキ、黒斑あり 内: 刃縫・摩耗のため調整不明、 口縁部黒斑あり	10YR8/2 庚黃	第1面	I - c 区	S0739
39	68	28	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 11.0 底径 3.8 器高 12.0	外: タキ、口縁部ヨコナデ、 体部ハラミガキ付着 内: 口縁部ヨコナデ、煤付着	2.5YR5/6 明赤褐	第1面	I - c 区	S0739
39	69	28	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 11.1 底径 4.0 器高 9.9	外: 刃縫・摩耗のため調整不明 内: 口縁部ヨコナデ	10YR8/4 淡黄橙 ~7.5YR7/4/にぶい 橙	第1面	I - c 区	S0739
39	70		弥生土器	細頸甕	弥生時代後期後半	口径 9.4 器高 (12.1)	内外: 刃縫・摩耗著しく調整不明 外側タテのハラミガキのチヨコナデか 内面ナデか	10YR8/4 淡黄橙	第1面	I - c 区	S0739
39	71	28	弥生土器	広口壺	弥生時代後期後半～後期末	口径 12.6 底径 4.1 器高 (13.1)	内外: 刃縫・摩耗著しく調整不明	7.5YR7/4/にぶい 黄橙	第1面	I - c 区	S0739
39	72	28	弥生土器	壺	弥生時代後期後半	口径 [13.4] 器高 (19.2)	内外: 摩耗のため調整不明	10YR7/4/にぶい 黄橙	第1面	I - c 区	S0739
39	73	28	弥生土器	鉢	弥生時代後期後半～後期末	口径 31.0 底径 4.1 器高 13.4	内外: 刃縫・摩耗著しく調整不明 内面口縁部あたりにすかにヨコハケ またはナデの痕跡が認められる	7.5YR8/3 淡黄橙	第1面	I - c 区	S0739
39	74		弥生土器	高杯	弥生時代後期後半	底径 [9.5] 器高 (9.5)	内外: 摩耗のため調整不明 内面底部部黒斑あり、ナデあり 円形スカラ3方向、1方向残る、 焼成前の穿孔	10YR7/3/にぶい 黄橙	第1面	I - c 区	S0739
39	75	28	弥生土器	脚付鉢	弥生時代後期後半～後期末	口径 13.0 底径 8.1	内外: 刃縫・摩耗著しく調整不明 内面ハケのちへラミガキ 円形スカラ3方向、1方向残る、 焼成前の穿孔	7.5YR8/3 淡黄橙	第1面	I - c 区 北東区画	竪穴建物 5 S0740
39	76	28	弥生土器	台付壺	弥生時代後期後半	口径 [11.6] 器高 11.5	内外: 刃縫・摩耗著しく調整不明 外側底部ナデあり、脚部ナデか 内面ナデか	10YR7/3/にぶい 黄橙	第1面	I - c 区 南東区画	竪穴建物 5 S0740
39	77		弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 [15.6] 底径 8.9	外: 頸部ヨコナデ、体部上半タキ 内: ナデ、体部下半ナデ	10YR8/2 白灰 ~7.5YR6/3/にぶい 橙	第1面	I - c 区 北西区画	竪穴建物 5 S0740
39	78	28	弥生土器	甕	弥生時代後期後半	口径 [14.8] 底径 8.0 器高 16.5	外: タキ、黒斑あり 内: 調整不明	2.5YR6/4/にぶい 橙	第1面	I - c 区 S0821	竪穴建物 5 内 S0821
39	79	38	土製品	壁材か		長さ 12.6 幅 10.7 厚み 8.0	全体ナデによる成形	10YR8/3 淡黄橙	第1面	I - c 区	S0756
39	80	38	土製品	壁材か		長さ 12.6 幅 10.7 厚み 8.1	全体ナデによる成形	10YR8/3 淡黄橙	第1面	I - c 区	S0756
40	81		須恵器	杯蓋	古墳～古代	器高 (1.6)	外: 回転ナデ 内: ナデ、回転ナデ	N8/0 白灰	I - b 区	2・3層 (機械削削)	
40	82		須恵器	杯身	古墳時代後期	口径 [12.7] 器高 (2.1)	外: 回転ナデ、底部回転ヘラケズリ、 (砂=) 内: 回転ナデ	N4/0 灰	I - b 区	3・2層	
40	83		瓦器	楕	中世(13世紀)	口径 [16.2] 器高 (3.9)	外: ナデ、口縁部ヨコナデ 内: ヘラミガキ、口縁部ヨコナデ	2.5Y7/3 淡黄	I - b 区	3・2・3層	

牌印 曲号	遺物 番号	図版 番号	種別	器形	時期	法量 (cm) ( ) は推定 ( ) は残存	測量等 (砂→はヘラケズリにより 砂が動いた方向を示す)	外面色調	調査面	調査区	報告書の 遺構番号・層
40 84	瓦質土器	甕	中世後半 (15世紀後半)	口径 (22.6) 器高 (5.4)	外: タタキ、口縁部ヨコナデ 内: ハケ、口縁部ヨコナデ	SY4/1 灰	I - b 区	3 - 2 層			
40 85	黒色土器 B 痕	桶	古代末 (11世紀)	底径 (6.8) 器高 (1.4)	外: ヨコナデ 内: ハラミガキ	SG2/1 緑黒	I - b 区	3 層 (機械削面)			
40 86	弥生土器	甕	弥生時代後期	底径 (7.9) 器高 (2.3)	外: タタキの跡あり、後に粘土を 足す 内: 調整不明	10YR6/6 明黄褐	I - b 区	3 - 2 層			
40 87	弥生土器	甕	弥生時代後期	底径 3.4 器高 (4.6)	外: タタキ 内: 調整不明	10YR7/6 明黄褐	I - b 区	3 - 2 層 (機械削面)			
40 88	弥生土器	壺	弥生時代後期	底径 3.8 器高 (3.1)	内外: 摩耗のため調整不明	SY6/8 棕	I - b 区	3 - 2 層			
40 89	弥生土器	甕	弥生時代後期	底径 (4.6) 器高 (4.9)	外: タタキ 内: 底部工具痕あり	7.5YR7/6 棕	I - b 区	3 - 3 層			
40 90 37	埴輪	円筒埴輪	古墳時代中期	器高 (6.5)	内外: 調整不明 外面部付突部	7.5YR7/6 棕	I - b 区	3 - 3 層			
40 91	弥生土器	甕	弥生時代後期末	口径 (13.4) 器高 (10.6)	外: タタキ 内: 調整不明、ナテが 残る	10YR8/3 淡黄褐	I - b 区	3 - 3 層			
40 92	弥生土器	壺	弥生時代後期	底径 4.6 器高 (3.3)	内外: 刃跡のため調整不明	2.5Y8/2 灰白	I - b 区	3 - 2 - 3 層			
40 93	須恵器	杆轆	古墳時代後期	口径 (13.7) 器高 (3.6)	外: 回転ヘラケズリ (砂→)、 口縁部回転ナデ 内: 回転ナデ	N6/0 灰	I - c 区	3 - 3 - 3 - 4 層 (南側溝)			
40 94	須恵器	杆身	飛鳥時代	口径 (9.2) 器高 (2.8)	外: 回転部下半回転ヘラケズリ (砂 →)、凹凸ナデ 内: 回転ナデ	N7/0 灰白	I - c 区	3 - 3 - 3 層			
40 95	須恵器	杯	飛鳥時代	底径 (11.5) 器高 (2.5)	内外: 回転ナデ	N7/0 灰白	I - c 区	3 - 3 層			
40 96	弥生土器	脚付甕 or 脚	弥生時代後期	底径 4.4 器高 (3.1)	外: 腹部指ナデ 内: ハケ	2.5Y6/2 灰黃	I - c 区	3 - 3 層			
40 97	弥生土器	甕	弥生時代後期	底径 3.8 器高 (5.3)	外: タタキ 内: 調整不明	10YR8/2 灰白	I - c 区	3 - 3 - 4 層 (青色シルト溝 層)			
40 98	弥生土器	壺	弥生時代後期	底径 4.8 器高 (3.4)	外: 刃跡のため調整不明 内面のナチナ、内面ナデか	2.5Y7/6 明黄褐	I - c 区	3 - 3 層			
40 99	弥生土器	壺	弥生時代後期	器高 (5.6)	外: 刃跡のため調整不明 外面部付突部と尖突部	7.5YR6/4/にぶい 相	I - c 区	3 - 3 層			
40 100	陶器 (唐津)	桶	近世	口径 (11.2) 器高 (4.8)	内外: 施釉、貢があり	7.5Y6/2 灰オリ 一ブ	I - c 区	南西隣接乱			
40 101	陶器 (唐津)	桶	近世 (17世紀前半)	底径 4.9 器高 (3.6)	内外: 施釉 高台付部剥離砂付着 底径の間にたちあがりがきつく、口径 小さくなる	7.5Y6/1 灰	I - c 区	攪乱			
40 102 32	織文土器	深鉢	縄文時代晚期	器高 (7.1)	内外: 刃跡・摩耗著しく調整不明 外面部縁部貼付帯のち刻目	10YR5/3/にぶい 黄褐	I - c 区	3 - 3 - 3 - 4 層			
40 103 32	織文土器	深鉢	縄文時代晚期	器高 (6.6)	内外: 刃跡・摩耗著しく調整不明 外面部縁部貼付帯のち刻目	10YR5/4/にぶい 黄褐	I - c 区	3 - 3 - 3 - 4 層			
40 104 38	土製品	移動式 かまと		器高 (9.2)	内外: 調整不明	SY6/8 棕	I - c 区	3 - 3 層			
64 120 31	須恵器	杆身	古墳時代後期	口径 (13.4) 器高 (5.05)	外: 回転ナデ、底体部回転ヘラケズリ 内: 回転ナデ	N8/0 灰白	第1面	II - c 区	S0034 上層		
64 121 31	須恵器	杆轆	古墳時代後期	口径 16.2 器高 6.1	外: 実井部回転ヘラケズリ、 口縁部回転ナデ 内: 回転ナデ	10Y8/1 灰白 N7/0 灰白	第1面	II - c 区	S0034 上層		
64 122 32	須恵器	杆轆	古墳時代後期	口径 (15.1) 器高 5.5	外: 実井部回転ヘラケズリ、 上半未調整、口縁部回転ナデ 内: ナデ	N6/0 灰	第1面	II - d 区	S0034		
64 123 31	須恵器	杆身	古墳時代後期	口径 9.2 器高 3.3	外: 口縁部回転ナデ、底部回転ヘラケ ズリ、粘土のかたまり多数残る(他 個体との重ね度が) 内: ナデ	10Y6/1 灰	第1面	II - c 区	S0034 上層		
64 124 33	弥生土器	鉢		口径 (13.2) 器高 (4.5)	内外: 摩耗のため調整不明	7.5YR8/6 淡黄褐	第1面	II - a 区	S0034 下層		
64 125 31	須恵器	甕	古墳時代中期	口径 (43.2) 器高 (15.3)	外: 口縁部回転ナデ、頭部ナデ 内: 口縁部上半回転ナデ、 下半ヘラケズリのちナデ	NS/0 灰	第1面	II - c 区	S0034 上層		
64 126	弥生土器	壺	弥生時代中期後 半	口径 (23.6) 器高 (4.8)	内外: 摩耗のため調整不明 外面部縁部端面凹面溝、円形浮文 内面部縁部端面凹面溝	10YR8/3 淡黄褐	第1面	II - d 区	S0034		
64 127	弥生土器	壺	弥生時代後期	口径 (17.2) 器高 (2.2)	内外: 調整不明 外面部縁部端面凹面浮文	7.5YR6/6 棕	第1面	II - d 区	S0034		

種別	器形	時期	法量 (cm)	調整等 ( ) は推定 ○は既存	外色調	調査面	報告書の 遺構番号・層
64 128 31 弁生土器	壺	弥生時代後期末	口径 [31.0] 器高 (5.2)	内: 調整不 外: 口部端部裏文の上に円形浮 文、口縁部下方に円形浮文	7.5YR6/6 棕	第1面	II - c 区 S0034 中層 灰色砂層
64 129 31 弁生土器	壺	弥生時代後期	口径 [7.5] 器高 8.2	内: 摩耗のため調整不 明	5YR7/8 棕	第1面	II - c 区 S0034 上層 砂層
64 130 31 弁生土器	壺		口径 [11.6] 器高 (7.8)	内: 調整不 明	2.5Y8/3 淡黄	第1面	II - c 区 S0034
64 131 31 弁生土器	長頸壺	弥生時代中期初 め	口径 8.1 器高 (11.6)	外: 口縁部端部直線文、一部波状文 残る。颈部上半ラミガキ、下半 部ラミガキの痕跡わずかに残る 内: 調整不 明	10YR7/4 に ぶい 黄橙	第1面	II - c 区 S0034 上層 砂層
64 132 33 土師器	二重口縁 壺	古墳時代前期	口径 [19.0] 器高 (5.8)	外: 口縁部上半ハグ、下半ヨコナデ 内: ヨココテ	7.5YR7/6 棕	第1面	II - a 区 S0034 下層
64 133 土師器	二重口縁 壺	古墳時代前期	口径 [17.4] 器高 (4.9)	内: 調整不 明	10YR7/4 に ぶい 黄橙	第1面	II - c 区 S0034 上層 砂層
64 134 弁生土器	壺	弥生時代後期	底径 3.4 器高 (4.4)	外: 板状工具によるナデ 内: 底部工具痕あり	2.5Y7/3 淡黄	第1面	II - a 区 S0034 下層
64 135 弁生土器	甕	弥生時代後期	底径 4.0 器高 (3.3)	外: タタキ 内: 赤色顔料付着、底部工具痕あり	2.5Y7/2 灰黄	第1面	II - c 区 S0034 上層 砂層
64 136 弁生土器	甕	弥生時代後期	底径 5.9 器高 (5.9)	外: タタキ 内: ハケ	10YR7/3 に ぶい 黄橙	第1面	II - c 区 S0034 下層
64 137 31 弁生土器	壺	弥生時代後期後 半	口径 [12.8] 底径 3.7 器高 21.9	外: タタキ、口縁部ヨコナデ 内: ナデ、口縁部ヨコナデ	7.5YR7/8 黄橙	第1面	II - c 区 S0034 上層
64 138 弁生土器	高杯	弥生時代後期	口径 [19.5] 器高 (4.0)	内: 摩耗のため調整不 明	2.5Y8/3 淡黄	第1面	II - d 区 S0034
64 139 33 弁生土器	高杯	弥生時代後期	口径 [15.6] 器高 (5.1)	内: 摩耗のため調整不 明	5YR6/8 棕	3 層 (東側溝)	II - a 区 S0034
64 140 弁生土器	高杯	弥生時代後期	底径 9.3 器高 (5.9)	内: 摩耗のため調整不 明 外: 工具痕あり 円形スカスカ 4 方向、焼成前の穿孔	2.5Y7/3 淡黄	第1面	II - c 区 S0034 上層 砂層
64 141 31 土師器	高杯	古墳時代前期	底径 8.8 器高 (6.9)	内: 摩耗のため調整不 明 外: 工具痕あり 円形スカスカ 3 方向、焼成前の穿孔	10YR7/4 に ぶい 黄橙	第1面	II - c 区 S0034 下層
64 142 弁生土器	広口壺	弥生時代後期	器高 (7.4)	内: 摩耗のため調整不 明 外: 表面わずかにラミガキの痕跡認めら れる	10YR7/4 に ぶい 黄橙	第1面	II - a 区 S0034 下層
64 143 37 壁輪	円筒埴輪	古墳時代中期	器高 (5.3)	外: ナデ、貼付突起 内: 刻離著しく調整不 明	2.5Y6/2 灰黄	第1面	II - c 区 S0034 下層 (赤色壁輪上層)
64 144 33 弁生土器	甕	弥生時代後期	口径 [11.8] 器高 (8.0)	外: タタキ 内: 調整不 明	2.5Y7/3 淡黄	第1面	II - a 区 S0034 下層
64 145 弁生土器	甕	弥生時代後期	口径 [14.6] 器高 (8.6)	外: タタキ 内: 調整不 明	2.5Y7/3 淡黄	第1面	II - a 区 S0034 下層 (赤褐色砂層)
64 146 33 弁生土器	甕	弥生時代後期	口径 [17.6] 器高 (7.2)	外: 摩耗のため調整不 明 外面タタキの痕跡あり	7.5YR8/6 浅黄橙	第1面	II - a 区 S0034 下層 (赤褐色砂層)
64 147 弁生土器	甕	弥生時代後期	口径 [18.1] 器高 (9.4)	外: タタキ 内: 板状工具によるナデ、 肩部擦オサツ	10YR7/4 に ぶい 黄橙	第1面	II - c 区 S0034 上層 砂層
64 148 31 弁生土器	甕	弥生時代後期	口径 [31.8] 器高 11.2	外: ハケ、口縁部ヨコナデ 内: ナデ、口縁部ヨコナデ	10YR7/4 に ぶい 黄橙	第1面	II - c 区 S0034 下層
65 149 須恵器	杯蓋	奈良時代	口径 [14.2] 器高 (2.3)	外: 回転ナデ、天井部ナデ 内: 回転ナデ、天井部ナデ	N7/0 白灰	II - a 区 (機械削削)	2 層
65 150 須恵器	杯蓋	古墳時代後期	口径 [13.4]	外: 回転ナデ、天井部ナデ 内: 回転ナデ、天井部ナデ	NS/0 灰	II - a 区 (機械削削)	2 层
65 151 瓦器	楕	中世 (13 世紀 後半)	口径 [14.4] 器高 (3.1)	外: 摩耗のため調整不 明 外面にラミガキの痕跡認められる	7.5Y2/1 黒	II - a 区 (第1面検査)	2 层
65 152 須恵器	杯蓋	奈良時代前半	器高 (1.4)	外: 回転ナデラケズリ、 ツマニ部回転ナデ、天井部ナデ 内: 一部表面剥離	N7/0 白灰	II - a 区	3 層
65 153 須恵器	壺	奈良時代後半	口径 [10.0] 器高 (4.2)	外: 回転ナデ 内: 回転ナデ	7.5Y7/1 灰白	II - a 区	3 層
65 154 須恵器	杯	奈良時代後半	底径 [10.0] 器高 (3.5)	外: 回転ナデ、底部回転ナデ、 天井部ナデ 内: 回転ナデ、底部ナデ	N7/0 白灰	II - a 区	3 層
65 155 須恵器	壺	奈良時代後半	底径 [10.0] 器高 (3.6)	外: 回転ナデ、底部回転ナデ、 高台回転ナデ 内: 回転ナデ、底部ナデ	N7/0 白灰	II - a 区	3 層
65 156 須恵器	壺	奈良時代	底径 [16.4] 器高 (2.2)	外: 回転ナデ、底部回転ナデラケズリ 内: ナデ	N6/0 灰	II - a 区	3 層

牌回 曲号	遺物 番号	図版 番号	種別	器形	時期	法量 (cm) ( ) は推定 ( ) は残存	調査等 (秒→はヘラケズリにより 砂が動いた方向を示す)	外面色調	調査面	調査区	報告書の 遺構番号・層
65	157	33	須恵器	円筒埴	奈良時代	口径 [11.5] 器高 (3.1)	内外：調整不明 長方形スカシ 8 方向か	NS/0 灰		II-a 区	3層
65	158	37	埴輪	円筒埴輪	古墳時代中期	器高 (4.2)	外：ナデ、貼付突帯 内：ナデ	7SYR6/6 棕		II-a 区	2層 (第1面積査)
65	159	37	埴輪	円筒埴輪	古墳時代後期	器高 (4.5)	外：ハケ、貼付突帯 内：ナデ	2SY7/6 明黄褐		II-a 区	3層
65	160	37	埴輪	円筒埴輪	古墳時代中期	器高 (6.0)	外：ナデ、貼付突帯 内：ナデ	7SYR6/6 棕		II-a 区	3層
66	161		弥生土器	甕	弥生時代後期	口径 [35.4] 器高 (9.2)	内外：剥離・摩耗著しく調整不明	10YRB2/4 浅黄橙	第2面	II-b 区	土器群 A
66	162	33	弥生土器	鉢	弥生時代後期	口径 18.0 底径 3.9 器高 9.0	外：底部上部縦方向ヘラミガキ、 下部横方向ヘラミガキ、底部ナデ 内：ハケ or 极ナデ	2SYB2/2 白灰～ 10YRS2/2 黄褐	第2面	II-b 区	土器群 A
66	163		弥生土器	高杯	弥生時代後期	口径 [28.4] 器高 (2.2)	内外：摩耗のため調整不明	10YRB2/3 浅黄橙	第2面	II-b 区	土器 B
66	164	33	弥生土器	壺	弥生時代後期前半	底径 5.3 器高 (11.3)	内外：摩耗のため調整不明 内面ヨコナデらしい痕跡残る 体部一部黒斑あり	10YRB2/2 灰白	第2面	II-b 区	土器 B
66	165		弥生土器	甕	弥生時代中期初め	口径 [29.8] 器高 (16.4)	内外：剥離・摩耗のため調整不明 口縁部ヨコナデ 外側ヘラミガキ 内面ナデか	10YR7/2 にぶい 黄橙	第2面	II-b 区	土器群 C 上層
66	166		弥生土器	甕	弥生時代中期初め	口径 22.2 器高 (14.5)	内外：ナデ、口縁部ヨコナデ	10YR6/2 黄褐	第2面	II-b 区	土器群 C
66	167		弥生土器	甕	弥生時代中期初め	底径 7.2 器高 (5.5)	内外：剥離・摩耗のため調整不明 外側ヘラミガキ、底部ナデか、 一部剥離あり 内面ナデか、底部工痕底あり	10YR7/2 にぶい 黄橙	第2面	II-b 区	土器群 C
66	168		弥生土器	甕	弥生時代中期初め	底径 7.1 器高 (6.0)	内外：剥離・摩耗のため調整不明 外側ヘラミガキ、底部ナデか 内面底工具痕あり	10YR6/2 黄褐	第2面	II-b 区	土器群 C 上層
66	169		弥生土器	甕	弥生時代中期初め	底径 6.8 器高 (5.4)	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 内面ナデか	10YR7/3 にぶい 黄橙	第2面	II-b 区	土器群 C
66	170		弥生土器	甕	弥生時代中期初め	底径 7.5 器高 (3.35)	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 内面ナデか	10YR6/3 にぶい 黄橙	第2面	II-b 区	土器群 C
66	171	33	弥生土器	甕	弥生時代中期初め	口径 23.0 底径 7.2 器高 (3.18)	外：ヘラミガキ、底部ナデ or 粗いヘ ラミガキか、口縁部ヨコナデ 内：ナデ、口縁部ヨコナデ	SYR6/6 棕～ 10YR6/2 黄褐	第2面	II-b 区	土器群 C 下層
66	172	33	土師器	高杯	古墳時代前期	口径 18.4 器高 (12.0)	内外：摩耗のため調整不明	7SYR8/6 浅黄橙	第1面	II-c 区	土器 S0135
66	173		土師器	甕	古墳時代前期	頭部縫 [18.4] 器高 (13.2)	内外：剥離・摩耗著しく調整不明	10YR7/3 にぶい 黄橙	第1面	II-c 区	土器 S0150
67	174		須恵器	杯身	古墳時代後期	口径 [13.0] 器高 3.8	外：全体部回転ヘラケズリ (砂++)、 口縁部ヨコナデ 内：底部ナデ、口縁部ヨコナデ	N7/0 灰白	第1面	II-d 区	S0030
67	175	32	須恵器	杯	奈良時代前半	口径 [16.0] 底径 (9.2) 器高 6.3	外：回転ナデ、底部回転ヘラケズリ 内：回転ナデ	N6/0 灰	第1面	II-d 区	S0023
67	176	32	弥生土器	甕	弥生時代後期末	口径 (17.8) 器高 (7.5)	外：タキ 内：調整不明	10YRB2/2 灰白	第1面	II-d 区	S0951
67	177	32	弥生土器	有段高杯	弥生時代後期末	口径 22.3 器高 (6.1)	内外：調整不明	2SYB2/2 灰白	第1面	II-d 区	S0928
67	178	32	土師器	高杯	飛鳥時代	口径 17.2 器高 (4.6)	内外：摩耗のため調整不明、 口縁部ヨコナデ 内面井筒部放射状暗紋 黒斑あり	7SYR7/6 棕	第1面	II-d 区	S0909
67	179		弥生土器	甕	弥生時代中期後半	口径 (14.8) 器高 (7.0)	内外：剥離・摩耗著しく調整不明 口縁部ヨコナデ 外側ヘラミガキ or ナデ、 内面ナデか、内面全体に煤付着	10YR5/3 にぶい 黄褐	第1面	II-d 区	S0959 西壁内
67	180		弥生土器	高杯	弥生時代後期末	器高 (6.2)	内外：摩耗のため調整不明 外側ナデハケか	10YR5/6 赤	第1面	II-d 区	S0958
67	181	32	縄文土器	深鉢	縄文時代晚期	器高 (14.6)	内外：調整不明 外側上部刻目突帯	10YR5/6 黄褐	第1面	II-d 区	S0926
67	182	32	縄文土器	深鉢	縄文時代晚期	器高 (6.0)	外：ヘラミガキ、口縁部刻目突帯 内：調整不明	10YR4/3 にぶい 黄褐	第1面	II-d 区	S0926

種別	遺物番号	出土地番号	種類	器形	時期	法量 (cm) ( ) は推定 ( ) は既存	調査等 (砂=へラケズリにより 砂が動いた方向を示す)	外面色調	調査面	調査区	報告書の 遺構番号・層
67	183	32	縄文土器	深鉢	縄文時代晚期	器高 (7.6) 底径 (3.6)	外: ヘラミガキ、口縁部刻目突帯、 工具あり 内: 調整不明	10YR4/3にぶい 黄褐色	第1面	II-d 区	S0926
67	184	32	縄文土器	深鉢	縄文時代晚期	器高 (3.5)	外: ヘラミガキ、口縁部刻目突帯 内: 調整不明	10YR5/4にぶい 黄褐色		II-d 区	3-3層
67	185	32	縄文土器	深鉢	縄文時代晚期	器高 (4.0)	内外: 刻溝・摩耗著しく調整不明 外面部口縁部刻目突帯	7.5YR5/4にぶい 黄褐色		II-d 区	3-3層
67	186	32	縄文土器	深鉢	縄文時代晚期	底径 (5.4) 器高 (3.4)	内外: 刻溝・摩耗著しく調整不明 かなりゆがみあり	5YR5/4にぶい赤褐色		II-d 区	3-3層
67	187	38	埴輪	円筒埴輪	古墳時代前期	底径 (27.0) 器高 (2.7)	内外: 調整不明 外面貼付安帶、黒斑あり	7.5YR6/6 棕	第1面	II-d 区	S0901
67	188	37	埴輪	円筒埴輪	古墳時代前期	器高 (6.0)	内外: 摩耗のため調整不明 外面/ハケ付 貼付突帯	2.5Y7/2 黄褐色		II-d 区	3-3層
67	189	37	弥生土器	鉢	弥生時代中期	器高 (5.0)	内外: 摩耗のため調整不明 外面部口縁部刻目突帯	7.5YR7/8 黄褐色		II-d 区	3-3層
67	190	37	弥生土器	甌	弥生時代中期	口径 (18.0) 器高 (5.1)	外: 口縁部ヨコナデ、指オサエ 内: 口縁部ヨコナデ、体部ナデ	10YR4/2 黄褐色		II-d 区	3-3層
200	33	赤色顔料 容器	壺	弥生時代後期			内外: 調整不明		第2面	II-b 区	土器群 A
201	32	縄文土器	深鉢	縄文時代晚期			内外: 調整不明		第1面	II-d 区	S0926 · S0927
202	38	土製品	焼土塊			長さ 7.0 幅 5.5	外: 白色砂礫付着	10YR4/1 褐灰		I-a 区	3層
203	38	土製品	焼土塊			上: 長さ 3.0 幅 1.0 左: 長さ 4.3 幅 2.8 右: 長さ 4.0 幅 3.2		10YR4/1 褐灰		II-b 区	機械削削 (3-1層)
204	38	土製品	焼土塊			左: 長さ 5.5 幅 4.0 右: 長さ 3.2 幅 2.5	外: 白色砂礫付着	10YR4/1 褐灰		II-b 区	第1面積度 (4層上面)
205	38	土製品	焼土塊			長さ 4.0 幅 2.8		10YR4/1 褐灰		II-b 区	機械削削 (3-1層)
206	38	土製品	焼土塊			長さ 7.0 幅 3.9	外: 工具状痕跡、赤色砂礫付着	7.5YR7/1 明褐色		II-a 区	3層
207	38	土製品	焼土塊			長さ 9.0 幅 1.9	外: 直径 5ミリ程度の気泡多い	7.5YR4/2 褐褐色		II-b 区	3-1層
208	38	土製品	焼土塊			長さ 5.2 幅 4.2		7.5YR6/2 褐褐色		II-b 区	北側溝
209	38	土製品	壁材か			長さ 8.8 幅 4.8 厚み 1.0	全体ナデによる成形、凹凸面が5ヶ所、 直径 5~10ミリの穿孔が5ヶ所あり	10YR8/3 浅黃橙	第1面	I-c 区	S0756
210	38	土製品	壁材か			左: 長さ 11.2 幅 8.5 厚み 5.0 右: 長さ 9.3 幅 6.5 厚み 5.1	全体ナデによる成形	10YR8/3 浅黃橙	第1面	I-c 区	S0490
211	38	土製品	壁材か			長さ 24.5 幅 6.5 厚み 7.1	全体ナデによる成形	10YR8/3 浅黃橙	第1面	I-c 区	S0756
212	38	土製品	壁材か			長さ 19.3 幅 10.5 厚み 10.0	全体ナデによる成形、直徑 10ミリと 15ミリの穿孔あり	10YR8/3 浅黃橙	第1面	I-c 区	S0756
225	37	埴輪	円筒埴輪	古墳時代中期		長さ 4.7 幅 7.0		7.5YR7/4 にぶい 橙		I-c 区	南東隅捲乱
226	32	縄文土器	深鉢	縄文時代晚期		長さ 18.5 幅 6.1		10YR4/3 にぶい 黄褐色	第1面	II-d 区	S0926

表6 石器・石製品観察表

拂回 番号	遺物 番号	図版 番号	種類	時期	長さ (cm)	幅 (cm)	厚み (cm)	重量 (g)	石材	調査面	調査区	報告書の 遺物番号・層	備考
41	105	34	石縫	弥生時代中期	2.7	1.4	0.6	1.7	サヌカイト	I-b区 拡張部	3-2層 (S0295 西拡幅部)	S0295	凸基有茎式
41	106	34	スクレイバー		6.7	4.2	0.65	22.6	サヌカイト	第1面	I-b区	S0298	
41	107	34	石縫	繩文時代～弥生時代初	3.6	1.8	0.35	1.6	サヌカイト		I-c区	3-3層	無茎
41	108	34	スクレイバー		6.8	3.8	1	22.3	サヌカイト	第1面	I-c区 拡張部	遺物集中部(脇穴建物4復土 S0678)	風化著しい
41	109	35	扁平 片打石斧	弥生時代前期 末～中期初	4.5	2.55	1.1	22	層灰岩	第1面	I-b区 拡張部	S0446	
41	110	34	打製石剣	弥生時代中期	10	3.3	1.3	59	サヌカイト		I-c区	3-3、3-4層	上半欠損
41	111	34	打製石剣	弥生時代中期	11	4.5	2.1	106.8	サヌカイト		I-c区	3-3層	未製品
41	112	34	ナイフ形石器	旧石器時代	4.5	1.3	0.7	3	サヌカイト	第1面	I-c区	遺物集中部 (S0721付近包 含72)	
42	113	35	石庖丁	弥生時代中期	13.7	3.9	0.7	57.5	綠泥片岩		I-c区	遺物集中部 (脇穴建物4 S0678)付近	直線刃半月形
42	114	36	砥石		7.8	3.9	3.6	123.4	砂岩		I-c区	3-3層	
42	115	36	砥石		8.7	4.4	4	163.2	砂岩	第1面	I-b区 拡張部	工具集中部(脇 穴建物2・3間 包73)	
43	116	36	砥石		9.2	4.3	1.7	75.9	砂岩か	第1面	I-c区	脇穴建物4内 S0777	凹溝状の擦痕あり
43	117	36	くぼみ石		11.7	9.4	4.1	690.5			I-b区	4層	裏面磨いでいる
43	118	36	ハマー ストーン		7.1	6.2	5.8	331.3	サヌカイト		I-c区	3-3層	摩耗
43	119	36	すり石		15.1	8	5.9	1048.3	安山岩	第1面	I-b区 拡張部	S0455	
68	191	35	石縫	繩文時代	2.8	1.7	0.4	1.7	サヌカイト		II-a区	第1面精査	
68	192	35	翼状(櫛長) 剣片	旧石器時代	5.5	2.1	1.1	11.4	サヌカイト		II-a区	3層	
68	193	35	ナイフ形石器	旧石器時代	4.4	2.3	0.7	6.4	サヌカイト		II-a区	3層	
68	194	37	楔形石器		5.4	2.7	1.1	21.1	サヌカイト	第1面	II-b区	6層以下流路	
68	195	35	不明		3.5	1.3	0.4	1.7	サヌカイト		II-b区	南側溝	
68	196	35	石縫	弥生時代中期	2.9	2.4	0.4	2.3	サヌカイト		II-d区	S0959 西壁内	
68	197	35	ドリル		3	2.7	0.45	3.8	サヌカイト	第1面	II-d区	S0926	
68	198	35	ドリル		4.5	1.5	0.25	2.5	サヌカイト	第1面	II-d区	S0959	
68	199	37	楔形石器		3.2	3.1	0.95	8.9	サヌカイト	第1面	II-d区	S0959 西壁内	
213	37		楔形石器		6.0	5.2	1.8	53.9	サヌカイト	第1面	I-c区	S0611	
214	37		楔形石器		3.8	2.4	0.55	10.2	サヌカイト		I-c区	3-2層 (機械削削)	
215	37		楔形石器		7.0	3.8	1.3	39.4	サヌカイト		I-c区	3-2・3層	
216	37		楔形石器		7.5	5.0	2.3	65.2	サヌカイト		I-c区	3-2・3層	
217	37		楔形石器		1.8	5.0	1.1	9.7	サヌカイト		II-d区	第1面精査	
218	37		楔形石器		2.6	1.8	0.7	2.8	サヌカイト		II-a区	3層	
219	37		楔形石器		3.0	2.5	1.2	10.8	サヌカイト		I-c区	3-3層	
220	37		楔形石器		3.3	3.8	0.5	11.9	サヌカイト		II-a区	3層	
221	37		楔形石器		2.2	3.8	0.6	5.0	サヌカイト	第1面	II-d区	S0959 西壁内	
222	37		楔形石器		4.1	6.0	1.4	30.9	サヌカイト	第1面	II-d区	S0959 西壁内	
223	37		楔形石器		3.8	6.9	1.1	28.3	サヌカイト	第1面	II-d区	S0959 西壁内	
224	37		楔形石器		8.9	10.0	3.5	325.4	サヌカイト		I-c区	3-3層	

# 写 真 図 版



写真図版1 遺構1



1. I-a区全景及びI区調査前風景  
(東南から)



2. I-a区全景（俯瞰）



3. I-a区全景（南から）

## 写真図版2 遺構2



1. I-b区用水路以東部全景（北西から）



2. I-b区用水路以西部全景（北から）

写真図版3 遺構3



1. I-b区竖穴建物1・2・3全景（北東から）



2. I-b区竖穴建物1・2・3全景（南から）

## 写真図版4 遺構4



1. 竪穴建物2検出状況（北東から）



2. 竪穴建物2検出状況（南東から）

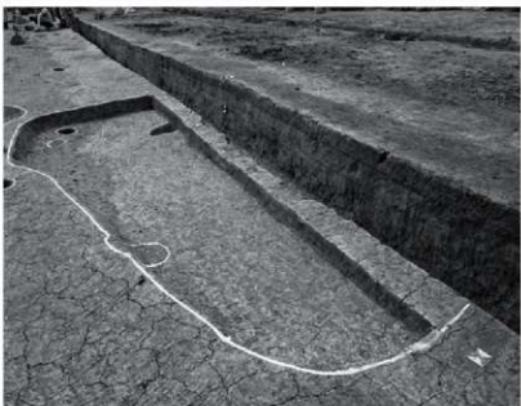


3. 竪穴建物2（南東から）

写真図版5 遺構5



1. 竪穴建物3検出状況（南西から）



2. 竪穴建物3検出状況（北東から）



3. 竪穴建物3（南から）

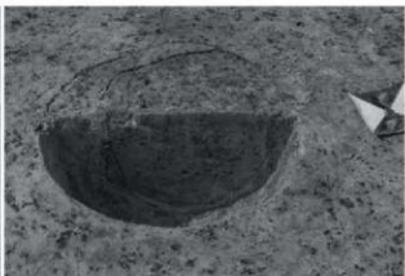
## 写真図版6 遺構6



写真図版7 遺構7



1. 井戸 S0155 断面（西から）



2. 掘立柱建物1柱穴 S0161 断面（東から）



3. 土器 S0409 出土状況（東から）



4. 土坑 S0369 内土器出土状況（南から）



5. 溝 S0455 内土器出土状況（南西から）



6. 竪穴建物3内炉 S0470（北から）



7. 井戸 S0447 断面（北東から）



8. 落ち込み S0153 断面（北西から）

写真図版8 遺構8



1. I-c 区用水路以西部全景（北から）

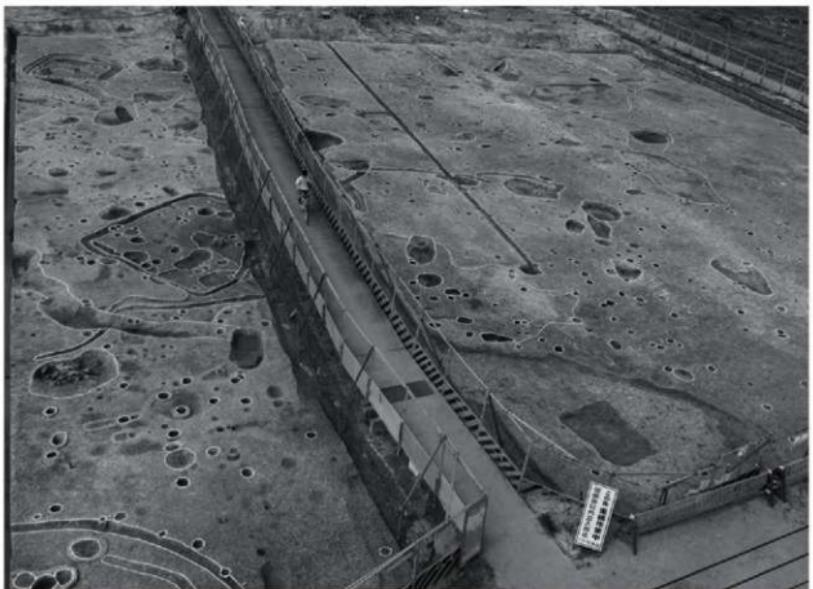


2. I-c 区用水路以西部全景（南から）

写真図版9 遺構9



1. I-c 区用水路以東部全景（北東から）



2. I-c 区用水路以東部全景（南西から）

## 写真図版 10 遺構 10



1. 竪穴建物 5（北から）



2. 竪穴建物 5 アセ断面（南東から）



3. 竪穴建物 6 検出状況（西から）

写真図版 11 遺構 11



1. 積穴建物 4 と土坑 S0756(北から)

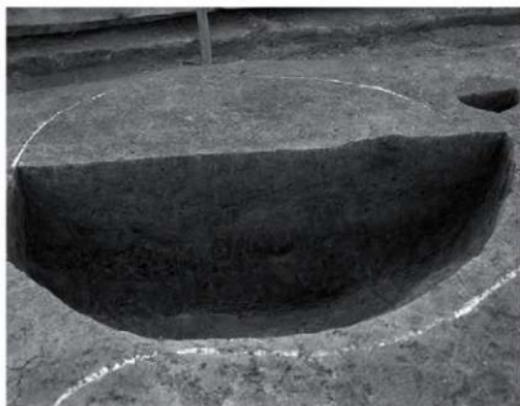


2. 積穴建物 4 アゼ断面(北から)



3. 積穴建物 6(俯瞰)

写真図版 12 遺構 12



1. 井戸 S0637 断面（東から）



2. 井戸 S0674 断面（北西から）

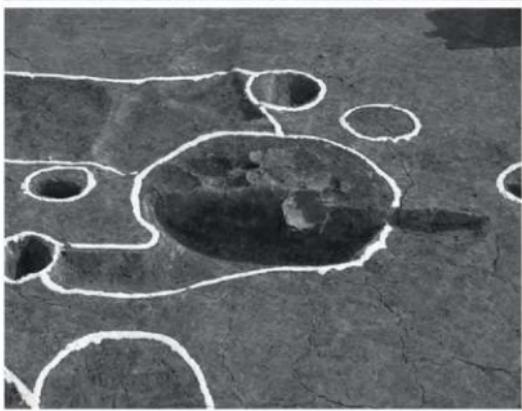


3. 土坑 S0638 断面（南から）

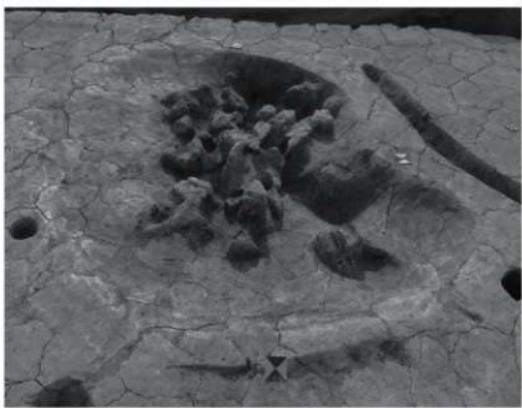
写真図版 13 遺構 13



1. 積穴建物 6 内炉 S0700 断面  
(東から)



2. 積穴建物 5 内炉 S0821 断面  
(南から)



3. 土坑 S0756 土製品出土状況  
(東から)

## 写真図版 14 遺構 14



1. 土坑 S0490 土製品出土状況（北東から）



2. 土坑 S0591 土器出土状況（北から）



3. 土坑 S0620 断面（東から）



4. 土坑 S0590 断面（北から）



5. 井戸 S0674 上層土器出土状況（北西から）



6. 溝 S0677 断面（北西から）



7. 土坑 S0611 土器出土状況（北西から）



8. 土坑 S0739 土器出土状況（北西から）

写真図版 15 遺構 15



1. II-a 区全景（南東から）



2. II-a 区全景（東から）

写真図版 16 遺構 16



1. II-a 区近景（南東から）



2. II-a 区近景（西から）



3. 溝 S0030 断面（北西から）

写真図版 17 遺構 17



1. 流路 S0034（北西から）



2. 流路 S0034（南東から）



3. 集石遺構 S0063（東から）

## 写真図版 18 遺構 18



1. II-b 区全景（北西から）



2. II-b 区全景（俯瞰）

写真図版 19 遺構 19



1. II-b 区北突出部近景(南東から)



2. 北突出部西壁断面(北東から)

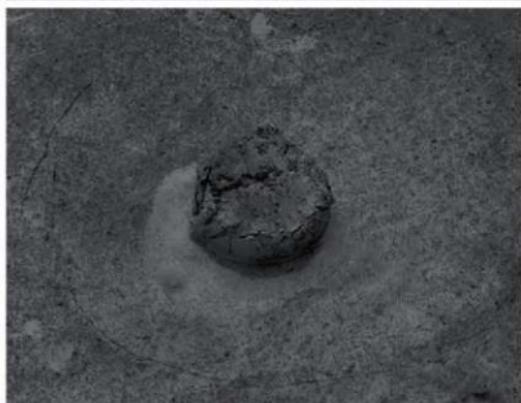


3. II-b 区深掘部(南から)

## 写真図版 20 遺構 20



1. 土器群A出土状況（南東から）



2. 土器群B出土状況（北東から）



3. 土器群C出土状況（南から）

写真図版 21 遺構 21



1. II-c 区全景（西北から）



2. II-c 区全景（南東から）

写真図版 22 遺構 22



1. 流路 S0034 近景（南東から）



2. 流路 S0034 内土器出土状況  
(東から)

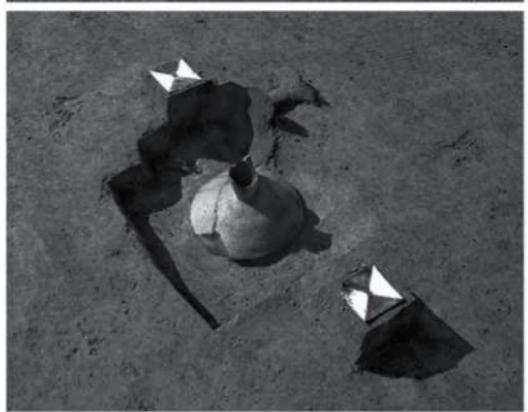


3. 流路 S0034 南岸土器出土状況  
(南から)

写真図版 23 遺構 23



1. 土器 S0134 出土状況（北から）



2. 土器 S0135 出土状況（北東から）



3. 土器 S0136 出土状況（東から）

写真図版 24 遺構 24



1. II-d 区全景（北西から）



2. II-d 区全景（南東から）

写真図版 25 遺構 25



1. 流路 S0034 (東南から)

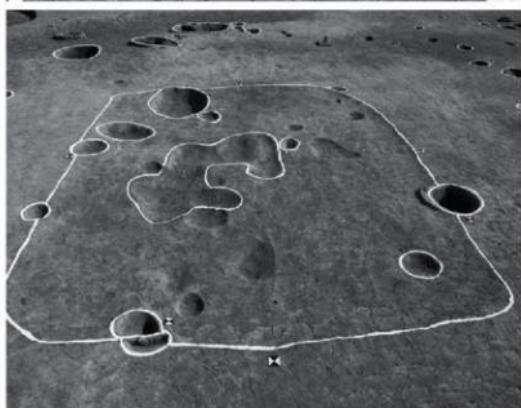
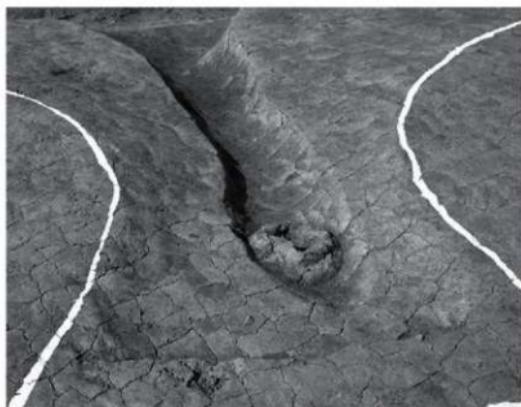


2. 流路 S0034 近景 (東南から)

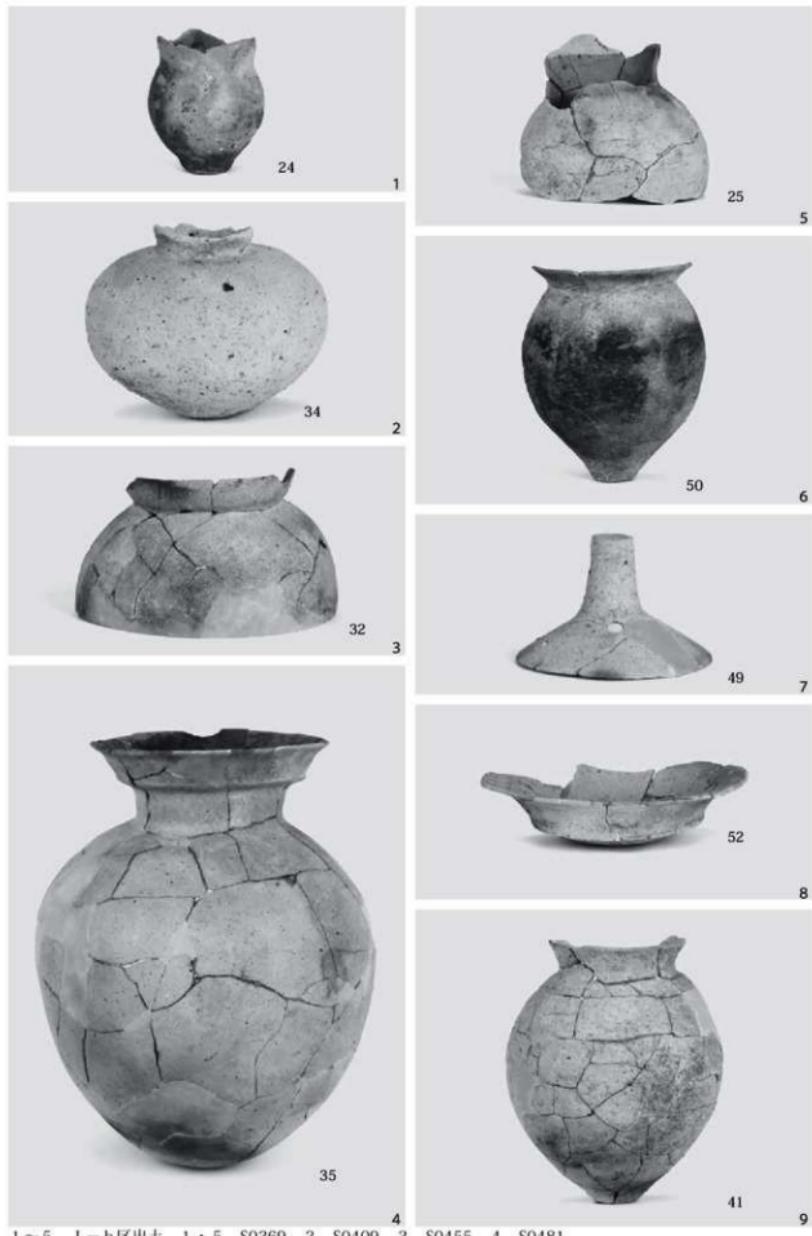


3. 流路 S0034 断面 (南東から)

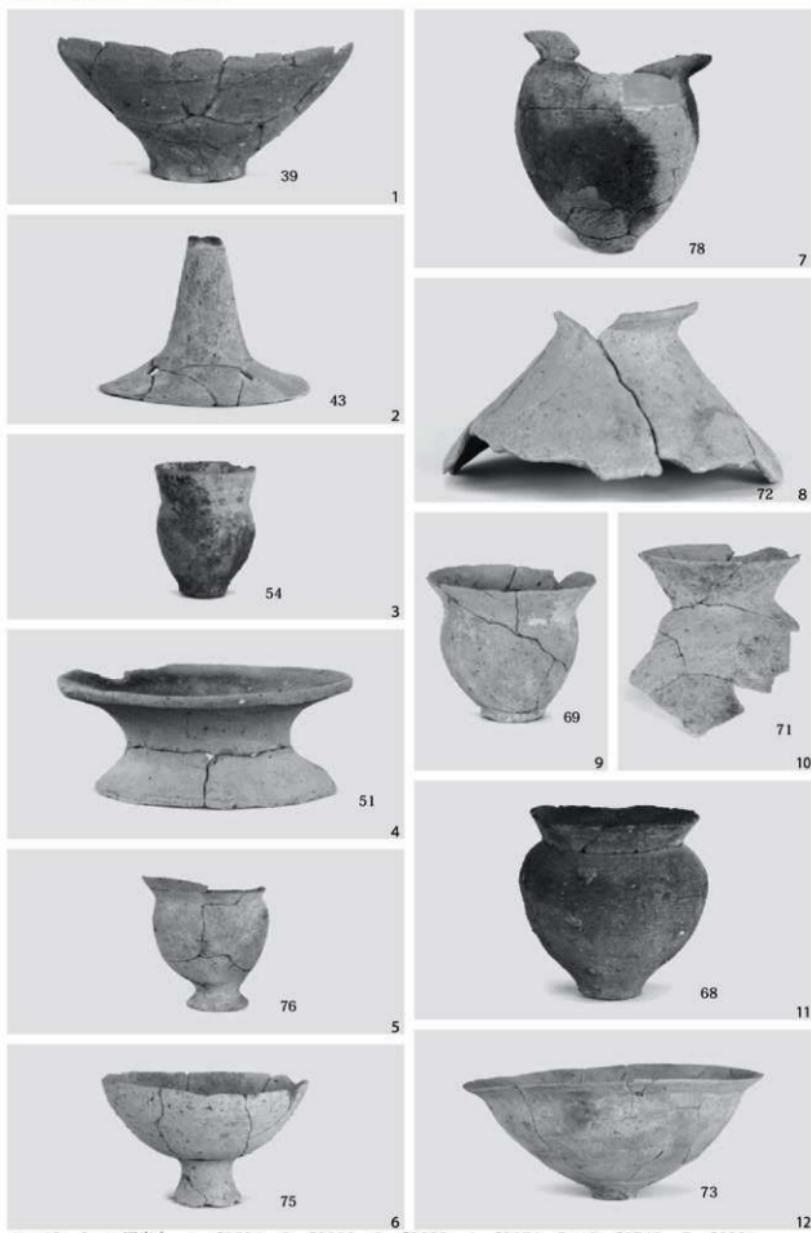
写真図版 26 遺構 26



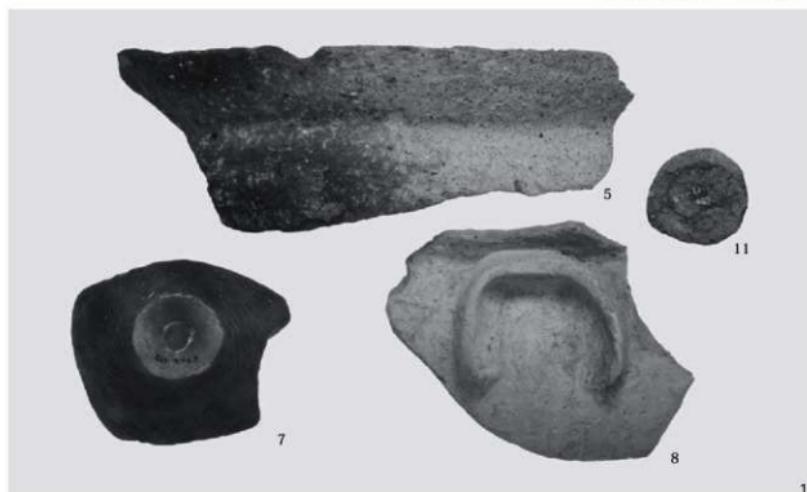
写真図版27 遺物 1



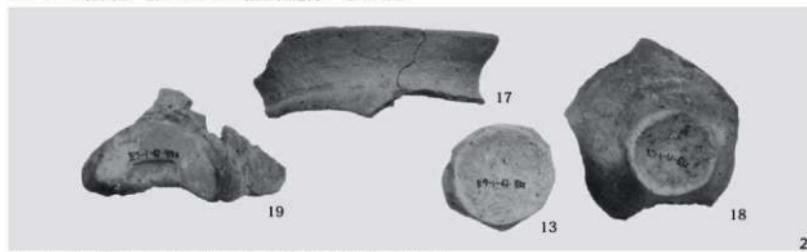
写真図版28 遺物2



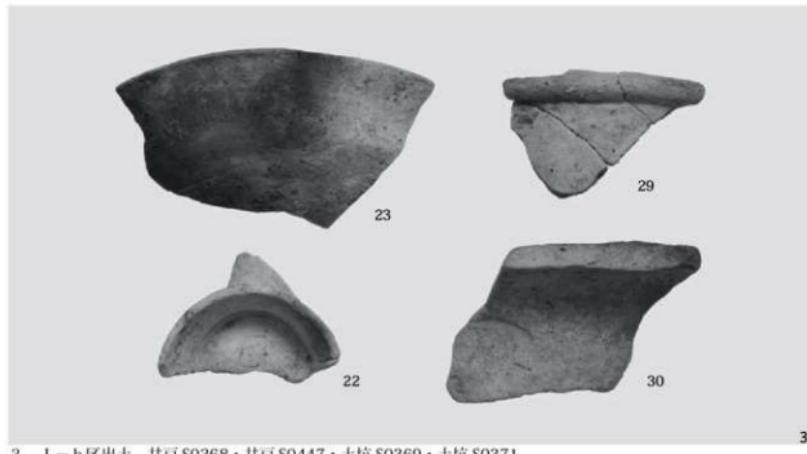
1~12 I-c区出土 1. S0584 2. S0600 3. S0638 4. S0674 5・6. S0740 7. S0821  
8~12. S0739



1. I-b区出土 井戸S0155・据立柱建物1 (S0162)

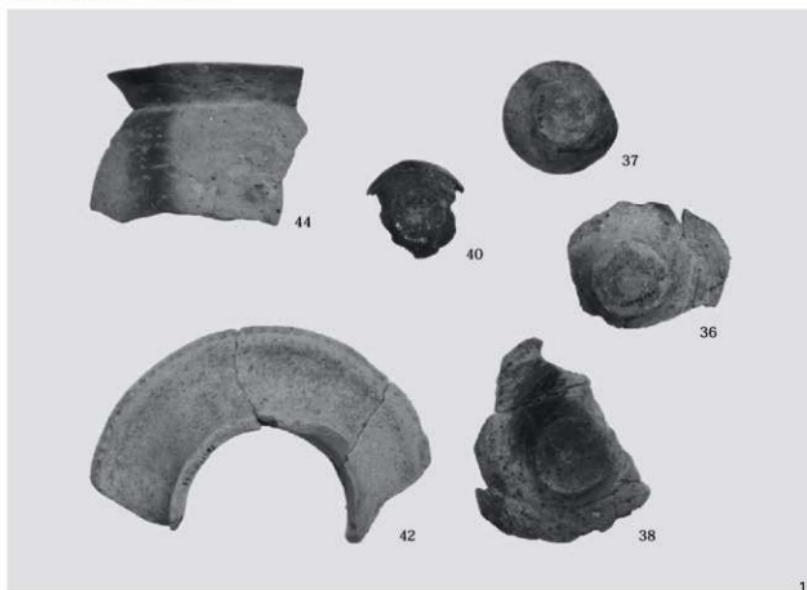


2. I-b区出土 壁穴建物1~3 (S0300・S0294・S0295)



3. I-b区出土 井戸S0368・井戸S0447・土坑S0369・土坑S0371

写真図版30 遺物 4

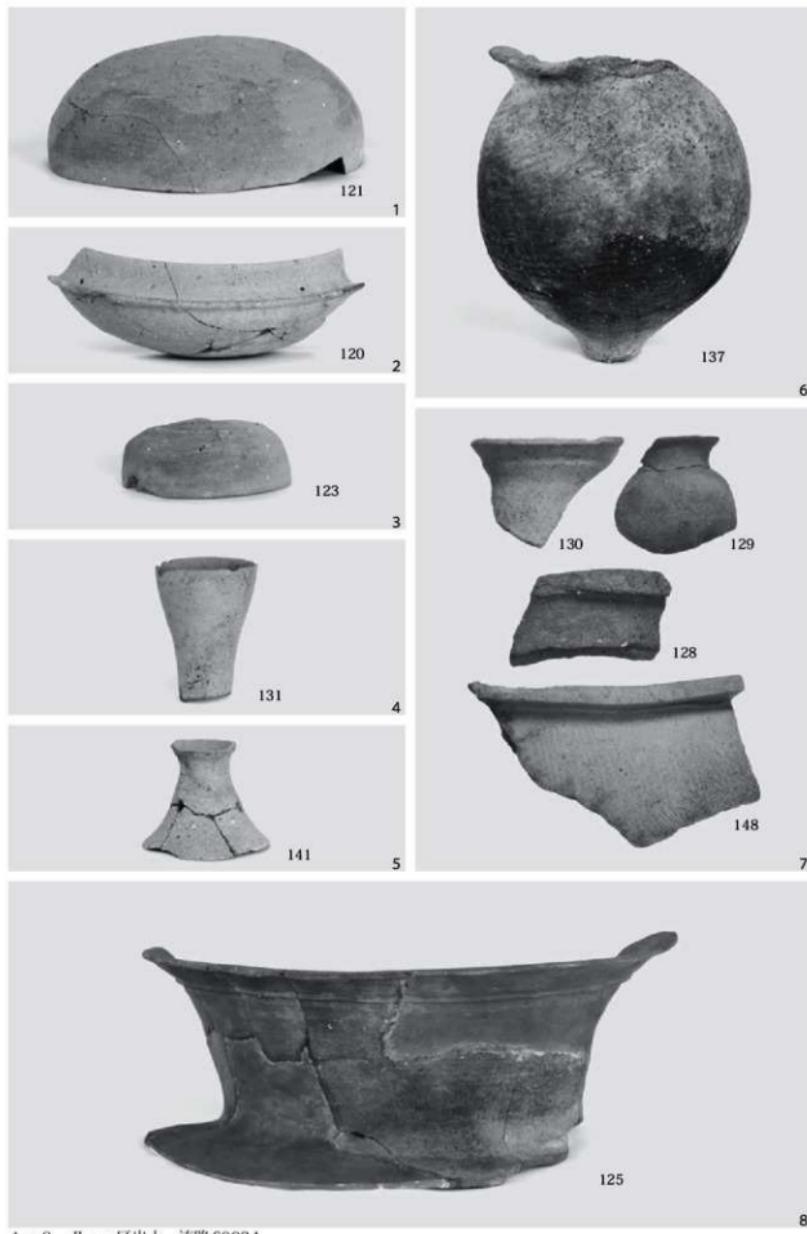


1. I-c区用水路以東部出土 S0611・S0585・S0495・S0489・S0591・S0580



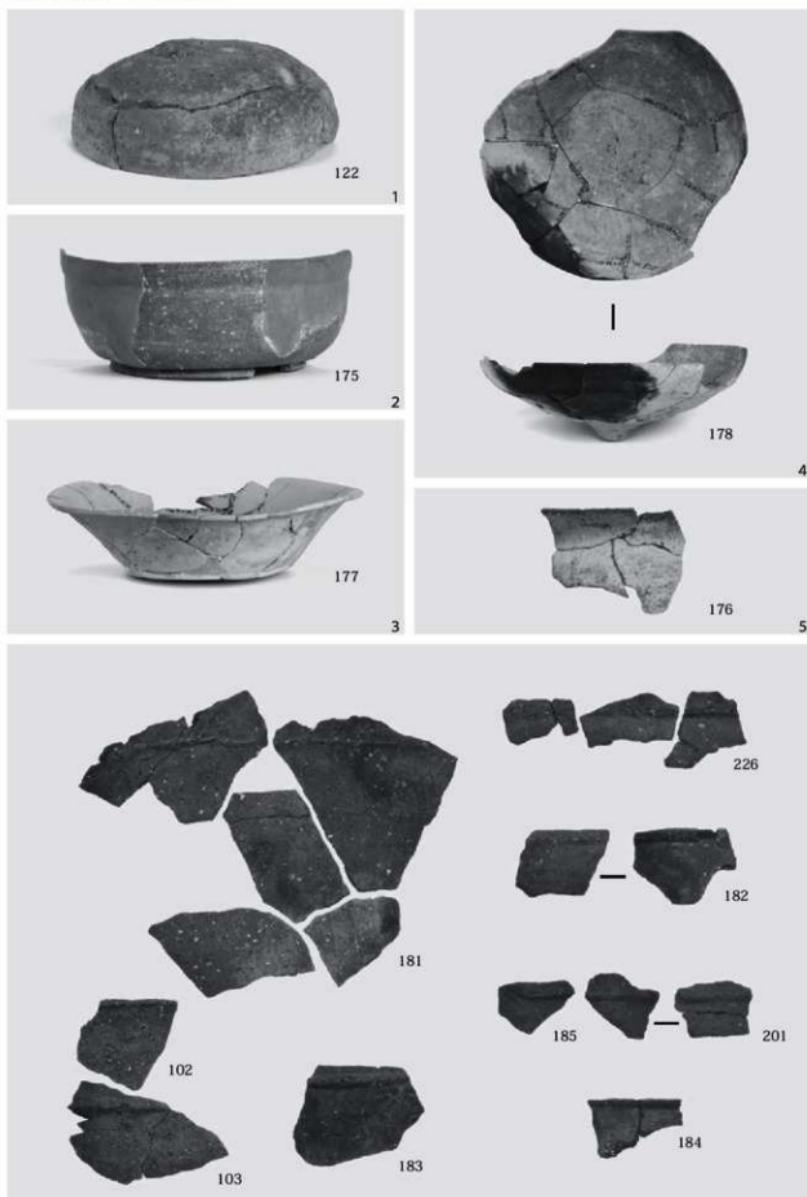
2. I-c区用水路以西部出土 S0721・S0701・S0705・S0677・S0678・S0680

写真図版31 遺物 5



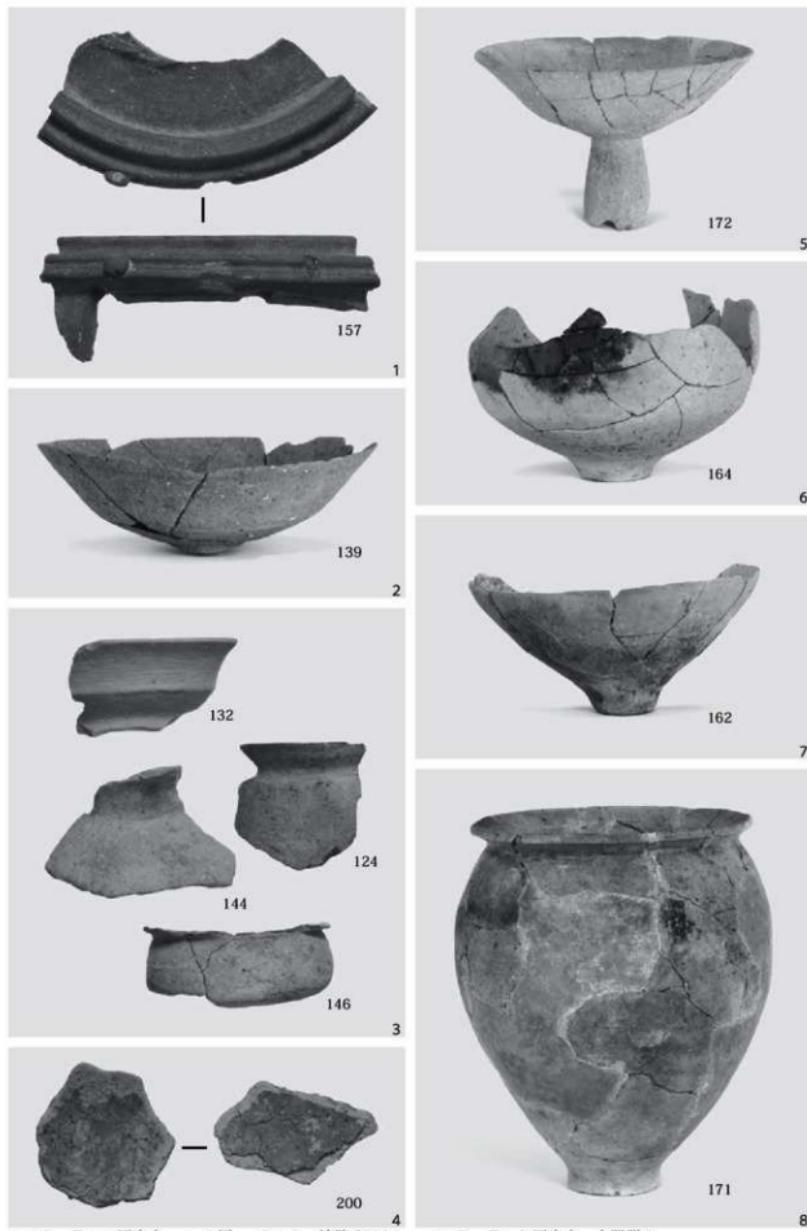
1~8. II-c区出土 流路S0034

写真図版32 遺物 6



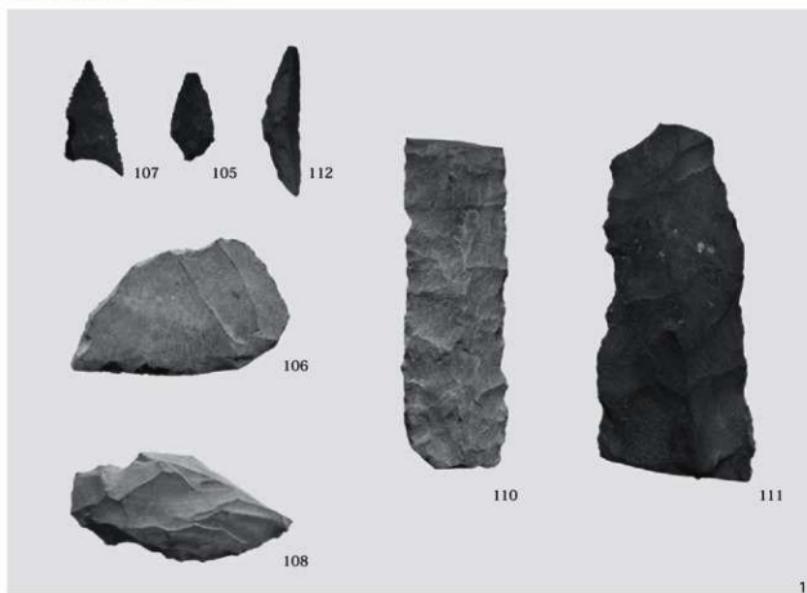
1～5. I-c・II-d区出土 1. 流路 S0034 2. S0023 3. S0928 4. S0909 5. S0951  
6. I-c・II-d区出土 S0926・S0927・包含層

写真図版33 遺物 7



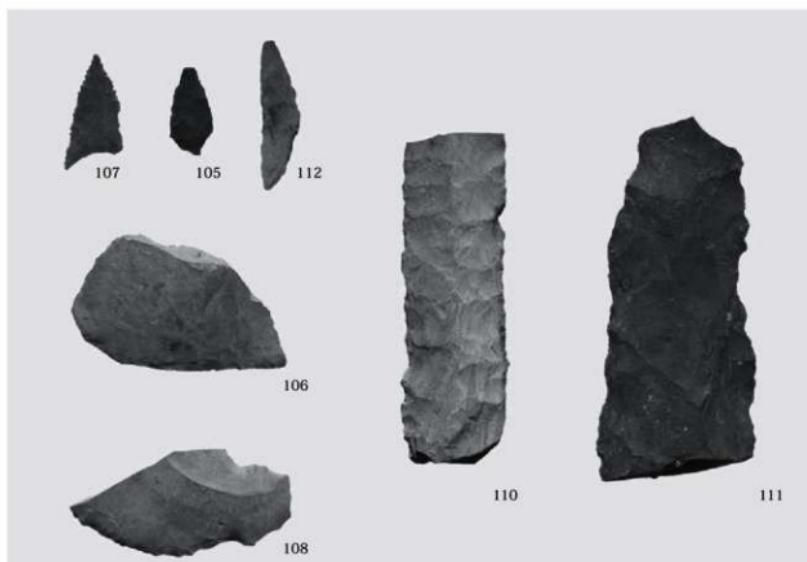
1～3 II-a区出土 1.3層 2・3. 流路S0034 4・7. II-b区出土 土器群A  
5. II-c区出土 土器S0135 6. II-b区出土 土器群B 8. II-b区出土 土器群C

写真図版34 遺物 8



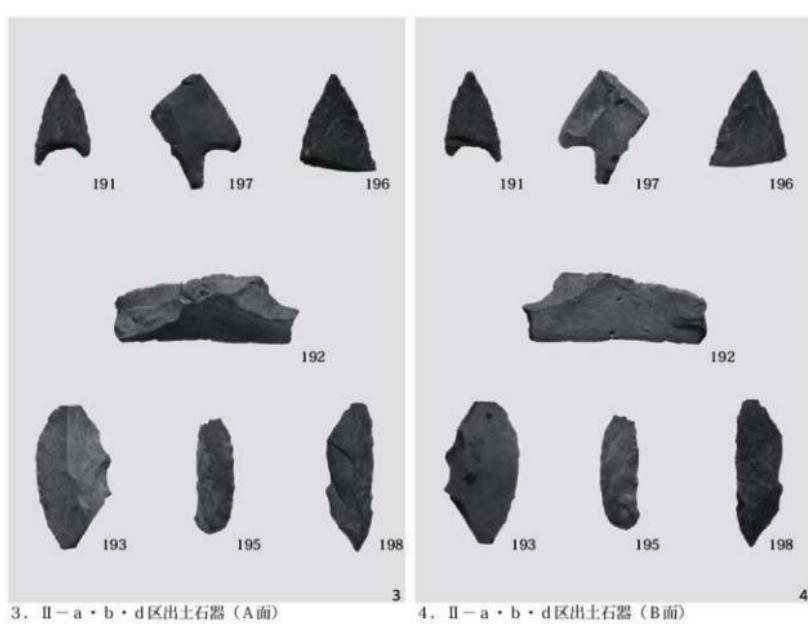
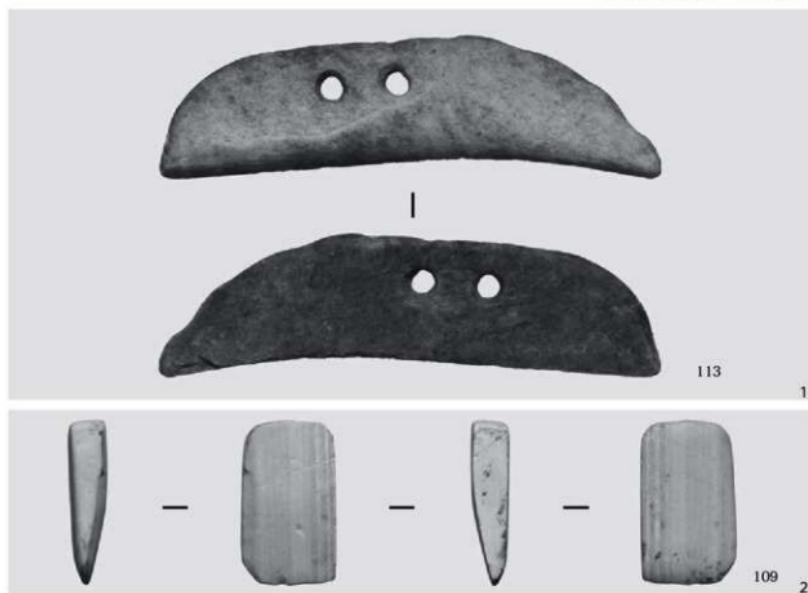
1. I - b + c 区出土石器 (A面)

1

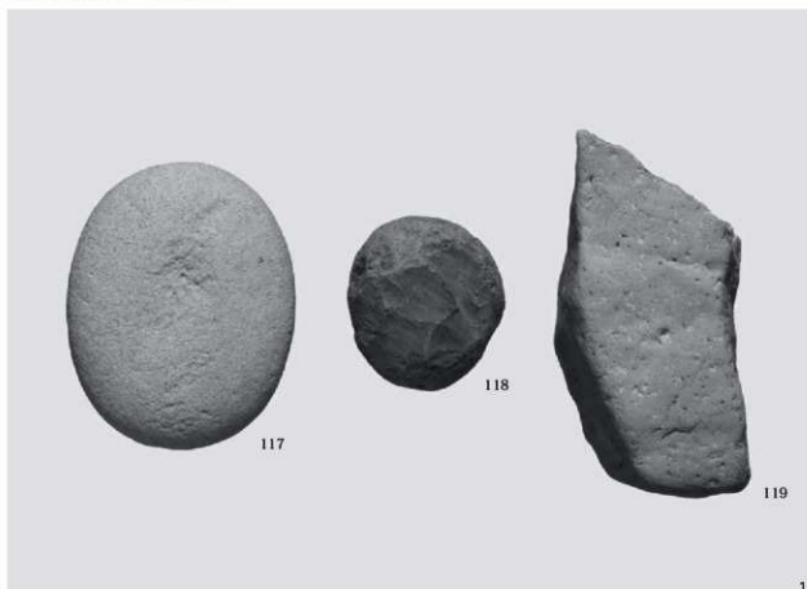


2. I - b + c 区出土石器 (B面)

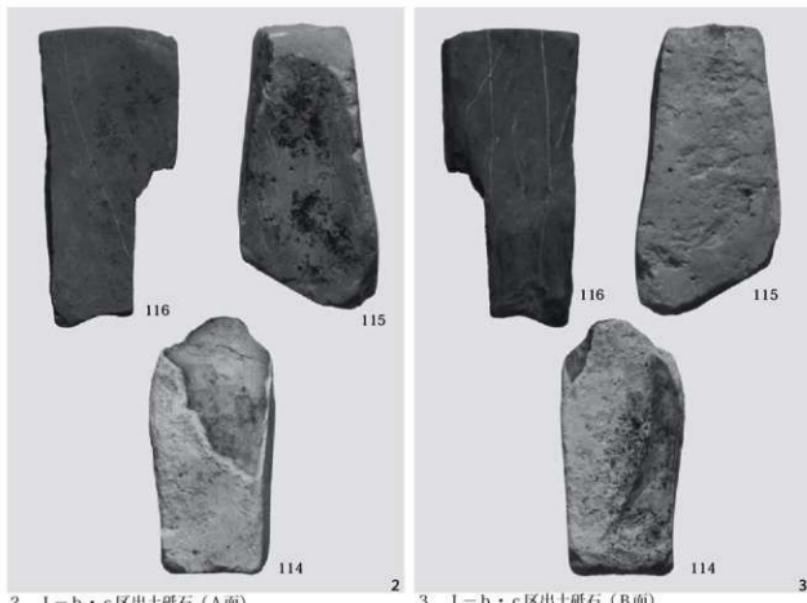
2



写真図版36 遺物10

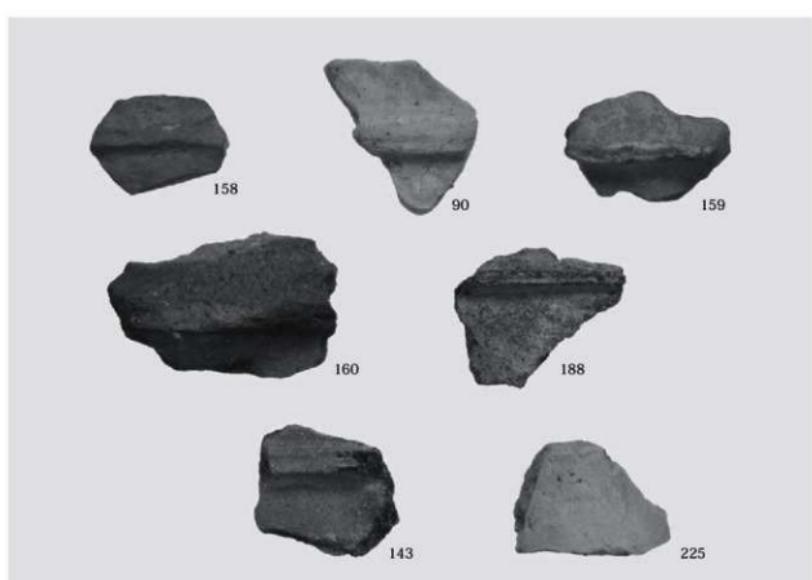
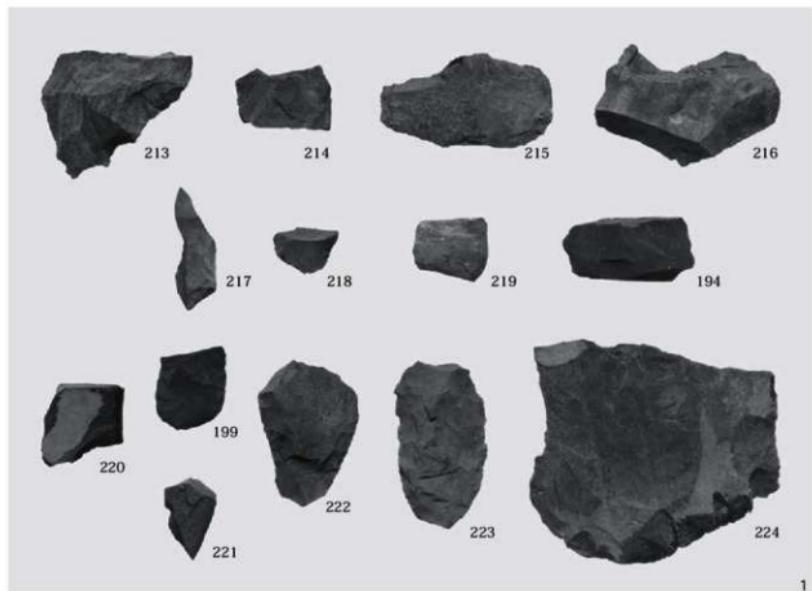


1. I-b・c区出土磨製石器



2. I-b・c区出土砥石 (A面)

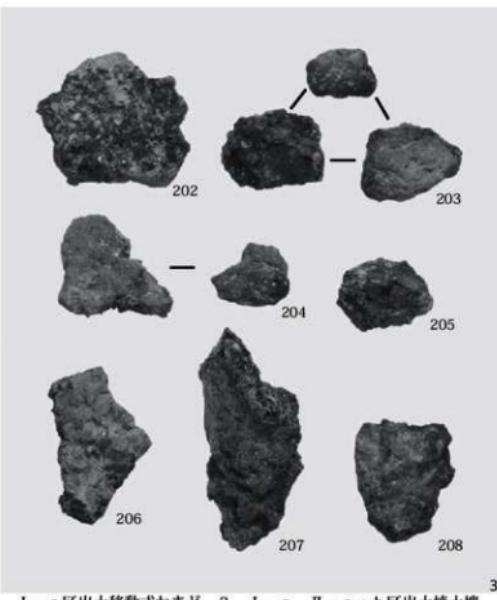
3. I-b・c区出土砥石 (B面)



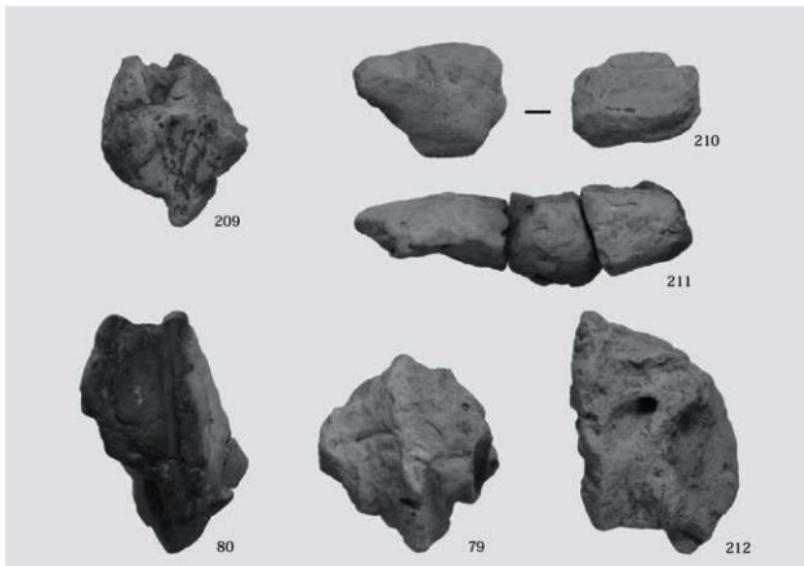
写真図版38 遺物12



1



1. II-d区土坑S0901出土円筒埴輪 2. I-c区出土移動式かまと 3. I-a、II-a+b区出土焼土塊



4. I-c区土坑S0490・土坑S0756出土土製品

## 報 告 書 抄 錄

松原市文化財報告 第8冊  
公益財團法人 大阪府文化財センター調査報告書 第303集

## 新 堂 遺 跡

松原市新堂4丁目土地区画整理事業に伴う  
新堂遺跡(E 7-1-61)発掘調査報告書

発行年月日	2020年6月30日
編集	公益財團法人 大阪府文化財センター
発行	松原市教育委員会 大阪府松原市阿保1丁目1番1号
印刷・製本	公益財團法人 大阪府文化財センター 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 株式会社 中島弘文堂印刷所 大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号